

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第106集

樋村遺跡群

ひ む ら  
樋村遺跡Ⅱ

長野県佐久市大字平賀樋村遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2003. 3

佐久建設事務所  
佐久市教育委員会

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第106集

樋村遺跡群

ひ む ら  
樋村遺跡Ⅱ

長野県佐久市大字平賀樋村遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2003. 3

佐久建設事務所  
佐久市教育委員会



樋村遺跡Ⅱ 航空写真（南から）



樋村遺跡Ⅱ 航空写真（東から）H12年度調査区



樋村遺跡Ⅱ周辺航空写真（垂直）



樋村遺跡Ⅱ航空写真（垂直）平成11年度調査区



H 4 号住居址出土遺物



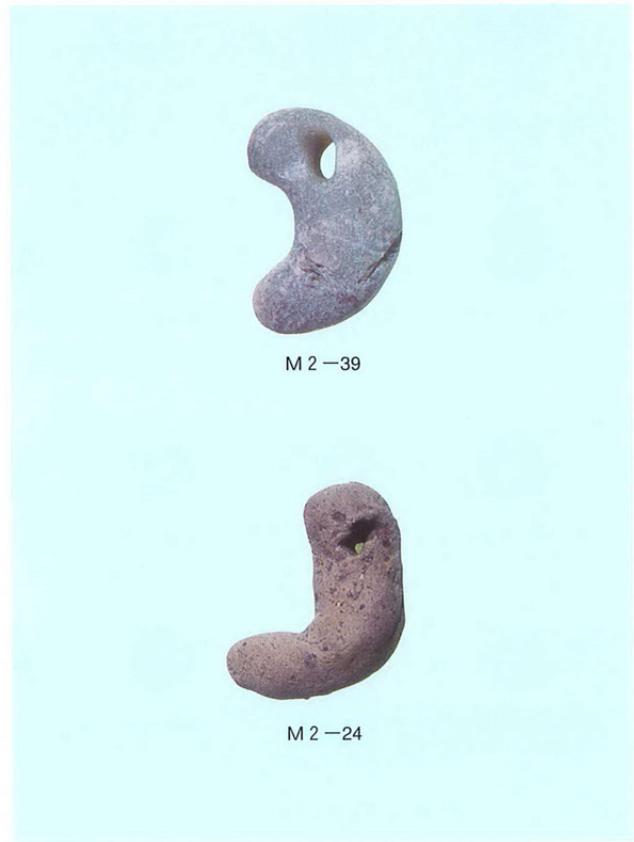
H 5 号住居址出土遺物



H 1 号住居址出土遺物



H 5 号住居址出土土製支脚



樋村遺跡Ⅱ出土勾玉



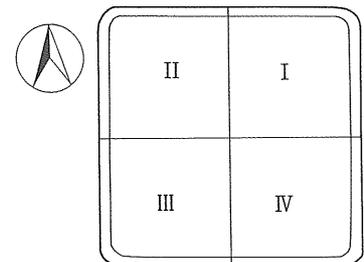
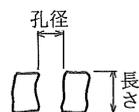
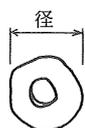
樋村遺跡Ⅱ出土玉類

## 例 言

- 1 本書は佐久建設事務所による道路改良事業に伴う樋村遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 佐久市大字跡部65-1  
佐久建設事務所
- 3 調査主体者 佐久市大字中込3056  
佐久市教育委員会 教育長 高柳 勉
- 4 遺跡名及び発掘調査所在地  
樋村遺跡Ⅱ（H H MⅡ）  
佐久市大字平賀字樋村2704-1. 2704-4. 2704-5. 2914-1. 2914-3
- 5 調査担当 現場作業 平成11年度 上原 学・出澤 力 平成12年度 上原 学  
整理作業 上原 学
- 6 編集・執筆は上原が行った。  
土器の所見は富沢一明、石器の所見は羽毛田卓也が行った。
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。  
H－竪穴住居址 F－掘立柱建物址 M－溝状遺構 D－土坑 P－ピット
- 2 スクリーン・トンによる表示は以下のとおりである。  
遺 構  
地山断面  焼 土  床下埋土   
遺 物  
須恵器断面  黒色処理  石器使用痕 
- 3 挿図の縮尺は以下のとおりである。  
遺 構 竪穴住居址－1/80 掘立柱建物址－1/80 溝状遺構－1/120・1/80 土坑－1/80  
遺 物 土師器－1/2・1/4 須恵器－1/4 石器－1/1・1/3 石製品－1/1 玉類－1/1 鉄製品－1/2
- 4 遺物の写真図版番号と実測図番号は一致する。
- 5 遺構の標高は各遺構ごとに統一し、水系高を標高とした。
- 6 土層・遺物の色調は「新版 標準土色帖」による。
- 7 調査グリッドは小グリッド4×4m、大グリッド40×40mである。
- 8 住居址の区割りは上を北とし、北東隅から逆時計回りである。
- 9 玉類の計測は図のとおりにある。



## 目 次

例言・凡例

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 立地と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 遺跡の概要	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 自然環境	3
第2節 周辺遺跡	5
第3節 基本層序	8
第Ⅲ章 遺構と遺物	11
第1節 竪穴住居址	11
H 1号住居址	11
H 2号住居址	16
H 3号住居址	20
H 4号住居址	21
H 5号住居址	26
H 6号住居址	30
H 7号住居址	30
H 8号住居址	31
H 9号住居址	32
H10号住居址	34
H11号住居址	36
H12号住居址	41
H13号住居址	42
H14号住居址	43
H15号住居址	46
H16号住居址	48
H17号住居址	49
H18号住居址	50
H19号住居址	51
H20号住居址	53
H21号住居址	55
H22号住居址	55
H23号住居址	56
H24号住居址	58
H25号住居址	59
H26号住居址	60
H27号住居址	60
H28号住居址	61
H29号住居址	62
H30号住居址	63
H31号住居址	65
H32号住居址	67
H33号住居址	69
H34号住居址	69
H35号住居址	70
第2節 掘立柱建物址	70
F 1号掘立柱建物址	71
F 2号掘立柱建物址	71
F 3号掘立柱建物址	72
F 4号掘立柱建物址	72
F 5号掘立柱建物址	72
F 6号掘立柱建物址	73
F 7号掘立柱建物址	73
F 8号掘立柱建物址	74
F 9号掘立柱建物址	74
F10号掘立柱建物址	75
第3節 溝状遺構	76
M 1号溝状遺構	76
M 2号溝状遺構	77
M 3号溝状遺構	77
M 4号溝状遺構	77
M 5号溝状遺構	83
第4節 土坑	83
D 1号土坑	83
第5節 遺構外遺物	84
まとめ	86

## 図 版

第1図	樋村遺跡Ⅱ位置図 (1:100,000) ……………1	第52図	H14号住居址カマド実測図……………44
第2図	樋村遺跡Ⅱ位置図 (1:10,000) ……………4	第53図	H14号住居址遺物実測図 (1) ……………44
第3図	樋村遺跡Ⅱ周辺遺跡位置図 (1:15,000) ……………7	第54図	H14号住居址遺物実測図 (2) ……………45
第4図	樋村遺跡Ⅱ基本層序模式図 ……………8	第55図	H14号住居址石器実測図……………45
第5図	樋村遺跡Ⅱ遺構配置図 (1:750) ……………9	第56図	H15号住居址実測図……………46
第6図	H1号住居址実測図 ……………11	第57図	H15号住居址遺物実測図……………47
第7図	H1号住居址遺物出土位置図 ……………12	第58図	H15号住居址丸玉・白玉実測図……………48
第8図	H1号住居址遺物実測図 (1) ……………13	第59図	H16号住居址・遺物実測図……………48
第9図	H1号住居址遺物実測図 (2) ……………14	第60図	H17号住居址実測図……………49
第10図	H1号住居址遺物実測図 (3) ……………15	第61図	H17号住居址遺物実測図……………50
第11図	H1号住居址丸玉・白玉実測図 ……………16	第62図	H18号住居址実測図……………50
第12図	H2号住居址実測図 ……………16	第63図	H18号住居址遺物実測図……………51
第13図	H2号住居址遺物出土位置図 ……………17	第64図	H19号住居址実測図……………51
第14図	H2号住居址遺物実測図 ……………18	第65図	H19号住居址遺物実測図……………52
第15図	H2号住居址石器実測図 ……………19	第66図	H19号住居址白玉実測図……………53
第16図	H3号住居址実測図 ……………20	第67図	H20号住居址実測図……………54
第17図	H3号住居址遺物実測図 ……………20	第68図	H20号住居址遺物実測図……………54
第18図	H3号住居址鉄器実測図 ……………20	第69図	H21号住居址実測図……………55
第19図	H4号住居址実測図 ……………21	第70図	H21号住居址遺物実測図……………55
第20図	H4号住居址遺物出土位置図 ……………22	第71図	H22号住居址実測図……………55
第21図	旧H4号住居址実測図 ……………22	第72図	H22号住居址遺物実測図……………56
第22図	H4号住居址遺物実測図 (1) ……………23	第73図	H23号住居址実測図……………57
第23図	H4号住居址遺物実測図 (2) ……………24	第74図	H23号住居址遺物実測図……………58
第24図	H4号住居址勾玉・白玉実測図 ……………25	第75図	H24号住居址実測図……………58
第25図	H5号住居址実測図 ……………26	第76図	H24号住居址遺物実測図……………59
第26図	H5号住居址遺物出土位置図 ……………27	第77図	H25号住居址実測図……………59
第27図	H5号住居址遺物実測図 (1) ……………27	第78図	H25号住居址遺物実測図……………59
第28図	H5号住居址遺物実測図 (2) ……………28	第79図	H26号住居址実測図……………60
第29図	H5号住居址遺物実測図 (3) ……………29	第80図	H27号住居址・遺物実測図……………60
第30図	H5号住居址玉類・石製模造品実測図 ……………29	第81図	H28号住居址実測図……………61
第31図	H6号住居址実測図 ……………30	第82図	H28号住居址遺物・石器実測図 ……………61
第32図	H7号住居址実測図 ……………30	第83図	H29号住居址実測図……………62
第33図	H7号住居址遺物実測図 ……………31	第84図	H29号住居址遺物実測図……………62
第34図	H8号住居址実測図 ……………31	第85図	H30号住居址実測図……………63
第35図	H8号住居址遺物実測図 ……………32	第86図	H30号住居址遺物実測図……………64
第36図	H9号住居址実測図 ……………33	第87図	H30号住居址石器実測図……………64
第37図	H9号住居址遺物実測図 ……………33	第88図	H31号住居址実測図……………65
第38図	H9号住居址石器実測図 ……………34	第89図	H31号住居址遺物出土位置図……………66
第39図	H10号住居址実測図 ……………34		・遺物実測図
第40図	H10号住居址遺物実測図 ……………35	第90図	H31号住居址石器実測図……………67
第41図	H10号住居址石器実測図 ……………36	第91図	H32号住居址実測図……………67
第42図	H10号住居址丸玉実測図 ……………36	第92図	H32号住居址カマド実測図……………68
第43図	H11号住居址実測図 ……………37	第93図	H32号住居址遺物実測図……………68
第44図	H11号住居址遺物実測図 (1) ……………38	第94図	H33号住居址実測図……………69
第45図	H11号住居址遺物実測図 (2) ……………39	第95図	H34号住居址・遺物実測図……………69
第46図	H11号住居址白玉実測図 ……………40	第96図	H35号住居址実測図……………70
第47図	H12号住居址実測図 ……………41	第97図	F1・2号掘立柱建物址実測図 ……………71
第48図	H12号住居址遺物実測図 ……………41	第98図	F3・4・5号掘立柱建物址実測図……………72
第49図	H13号住居址実測図 ……………42	第99図	F6・7号掘立柱建物址実測図 ……………73
第50図	H13号住居址遺物実測図 ……………42	第100図	F8・9号掘立柱建物址実測図 ……………74
第51図	H14号住居址実測図 ……………43	第101図	F10号掘立柱建物址実測図……………75

第102図	F 10号掘立柱建物址石器実測図	75	第113図	M 5号溝状遺構実測図	83
第103図	M 1号溝状遺構実測図	76	第114図	D 1号土坑実測図	83
第104図	M 2・3・4号溝状遺構実測図	77	第115図	遺構外遺物実測図	84
第105図	M 2号溝状遺構遺物実測図	78	第116図	遺構外石器実測図(1)	84
第106図	M 2号溝状遺構石器実測図	79	第117図	遺構外石器実測図(2)	85
第107図	M 2号溝状遺構白玉・勾玉実測図	80	第118図	土師器坏形態別分類図(1)	87~90
第108図	M 3号溝状遺構遺物実測図	80	第119図	土師器坏形態別分類図(2)	90
第109図	M 3号溝状遺構石器・白玉実測図	81	第120図	樋村遺跡Ⅱ土器編年表(1)	92
第110図	M 4号溝状遺構遺物実測図(1)	81	第121図	樋村遺跡Ⅱ土器編年表(2)	93
第111図	M 4号溝状遺構遺物実測図(2)	82	第122図	樋村遺跡Ⅱ土器編年表(3)	94
第112図	M 4号溝状遺構石器・丸玉・白玉実測図	82	第123図	樋村遺跡Ⅱ土器編年表(4)	95

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡表	6	第32表	H 19号住居址遺物観察表	53
第2表	H 1号住居址遺物観察表	15	第33表	H 19号住居址白玉観察表	53
第3表	H 1号住居址丸玉・白玉観察表	16	第34表	H 20号住居址遺物観察表	54
第4表	H 2号住居址遺物観察表	19	第35表	H 21号住居址遺物観察表	55
第5表	H 2号住居址石器観察表	19	第36表	H 22号住居址遺物観察表	56
第6表	H 3号住居址遺物観察表	20	第37表	H 23号住居址遺物観察表	58
第7表	H 3号住居址鉄器観察表	20	第38表	H 24号住居址遺物観察表	59
第8表	H 4号住居址遺物観察表(1)	24	第39表	H 25号住居址遺物観察表	59
第9表	H 4号住居址遺物観察表(2)	25	第40表	H 27号住居址遺物観察表	60
第10表	H 4号住居址勾玉・白玉観察表	25	第41表	H 28号住居址遺物観察表	61
第11表	H 5号住居址遺物観察表	29	第42表	H 28号住居址石器観察表	61
第12表	H 5号住居址玉類・石製模造品観察表	29	第43表	H 29号住居址遺物観察表	62
第13表	H 7号住居址遺物観察表	31	第44表	H 30号住居址遺物観察表	64
第14表	H 8号住居址遺物観察表	32	第45表	H 30号住居址石器観察表	64
第15表	H 9号住居址遺物観察表	33	第46表	H 31号住居址遺物観察表	66
第16表	H 9号住居址石器観察表	34	第47表	H 31号住居址石器観察表	67
第17表	H 10号住居址遺物観察表	36	第48表	H 32号住居址遺物観察表	68
第18表	H 10号住居址石器観察表	36	第49表	H 34号住居址遺物観察表	70
第19表	H 10号住居址丸玉観察表	36	第50表	F 10号掘立柱建物址石器観察表	75
第20表	H 11号住居址遺物観察表	40	第51表	M 2号溝状遺構遺物観察表	79
第21表	H 11号住居址白玉観察表	40	第52表	M 2号溝状遺構石器観察表	79
第22表	H 12号住居址遺物観察表	41	第53表	M 2号溝状遺構白玉・勾玉観察表	80
第23表	H 13号住居址遺物観察表	43	第54表	M 3号溝状遺構遺物観察表	81
第24表	H 14号住居址遺物観察表	45	第55表	M 3号溝状遺構石器観察表	81
第25表	H 14号住居址石器観察表	46	第56表	M 3号溝状遺構白玉観察表	81
第26表	H 15号住居址遺物観察表(1)	47	第57表	M 4号溝状遺構遺物観察表	82
第27表	H 15号住居址遺物観察表(2)	48	第58表	M 4号溝状遺構石器観察表	82
第28表	H 15号住居址丸玉・白玉観察表	48	第59表	M 4号溝状遺構丸玉・白玉観察表	83
第29表	H 16号住居址遺物観察表	49	第60表	遺構外遺物観察表	84
第30表	H 17号住居址遺物観察表	50	第61表	遺構外石器観察表	86
第31表	H 18号住居址遺物観察表	51	第62表	樋村遺跡Ⅱ土器形態別出土状況表	90

## 写真図版目次

図版 1	樋村遺跡Ⅱ全景(平成11年度調査区)	図版 3	H 1号住居址全景(西から)
	樋村遺跡Ⅱ全景(平成12年度調査区)		H 1号住居址カマド(西から)
図版 2	遺構確認作業(手前)及び廃土除去作業(奥)南から調査風景・西から(平成11年度調査区)	図版 4	H 1号住居址カマド東側遺物出土状況
			H 1号住居址カマド焚き口部遺物出土状況

	H 1号住居址カマド掘方 (西から)		H 10号住居址カマド掘方 (西から)
	H 1号住居址掘方 (西から)		H 10号住居址掘方 (北西から)
図版 5	H 2号住居址全景 (西から)	図版18	H 11号住居址全景 (南東から)
	H 2号住居址カマド遺物出土状況 (西から)		H 11号住居址カマド (南から)
図版 6	H 2号住居址カマド遺物除去状況 (南から)	図版19	H 11号住居址遺物出土状況 (1)
	H 2号住居址カマド遺物出土状況		H 11号住居址遺物出土状況 (2)
	H 2号住居址カマド掘方 (南西から)		H 11号住居址掘方 (南西から)
図版 7	H 2号住居址掘方 (西から)	図版20	H 12号住居址全景 (南から)
	H 3号住居址全景 (東から)		H 12号住居址掘方 (南から)
	H 3号住居址カマド (南西から)	図版21	H 13号住居址全景 (東から)
	H 3号住居址遺物出土状況		H 13号住居址掘方 (北西から)
	H 3号住居址カマド掘方 (南から)	図版22	H 14号住居址全景 (西から)
図版 8	H 3号住居址掘方 (南西から)		H 14号住居址遺物出土状況 (1)
	H 4号住居址全景 (南から)		H 14号住居址遺物出土状況 (2)
	H 4号住居址カマド (南西から)		H 14号住居址カマド (東から)
図版 9	H 4号住居址カマド (南から)		H 14号住居址カマド掘方 (西から)
	H 4号住居址カマド遺物除去後 (南から)	図版23	H 14号住居址掘方 (西から)
	H 4号住居址カマド焼き口天井石除去後		H 15号住居址全景 (東から)
	H 4号住居址カマド西側遺物出土状況	図版24	H 15号住居址カマド (東から)
図版10	H 4号住居址カマド掘方 (東から)		H 15号住居址カマド掘方 (東から)
	H 4号住居址掘方 (東から)		H 15号住居址掘方 (南から)
	旧H 4号住居址全景 (西から)	図版25	H 16号住居址全景 (北西から)
	旧H 4号住居址カマド (南から)		H 16号住居址炭化物出土状況 (北から)
	旧H 4号住居址掘方 (南から)		H 16号住居址炭化物出土状況 (北から)
図版11	H 5号住居址全景 (南から)		H 16号住居址遺物出土状況
	H 5号住居址遺物出土状況 (1)		H 16号住居址掘方 (北東から)
	H 5号住居址遺物出土状況 (2)	図版26	H 17号住居址全景 (南から)
	H 5号住居址遺物出土状況 (3)		H 17号住居址カマド
	H 5号住居址遺物出土状況 (4)	図版27	H 18号住居址全景 (南東から)
図版12	H 5号住居址カマド (南西から)		H 18号住居址全景 (南西から)
	H 5号住居址カマド (西から)	図版28	H 19号住居址全景 (南東から)
	H 5号住居址支脚		H 19号住居址白玉出土状況 (1)
	H 5号住居址カマド掘方 (西から)		H 19号住居址白玉出土状況 (2)
	H 5号住居址掘方 (南から)		H 19号住居址調査風景 (南東から)
図版13	H 6号住居址全景 (南から)		H 19号住居址掘方 (南西から)
	H 7号住居址全景 (西から)	図版29	H 20号住居址全景 (南東から)
図版14	H 7号住居址遺物出土状況 (1)		H 20号住居址カマド (南から)
	H 7号住居址遺物出土状況 (2)	図版30	H 20号住居址土坑
	H 7号住居址遺物出土状況 (3)		H 20号住居址掘方 (南東から)
	H 7号住居址掘方 (西から)	図版31	H 21号住居址全景 (南から)
図版15	H 8号住居址全景 (西から)		H 21号住居址カマド (南東から)
	H 8号住居址遺物出土状況 (1)	図版32	H 22号住居址全景 (南から)
	H 8号住居址遺物出土状況 (2)		H 22号住居址掘方 (南から)
	H 8号住居址掘方 (南東から)	図版33	H 23号住居址全景 (南から)
図版16	H 9号住居址全景 (西から)		H 23号住居址遺物出土状況
	H 9号住居址遺物出土状況 (西から)	図版34	H 23号住居址カマド掘方
	H 9号住居址調査状況 (南西から)		H 23号住居址掘方 (南から)
	H 9号住居址遺物出土状況	図版35	H 24号住居址全景 (西から)
	H 9号住居址掘方 (西から)		H 25号住居址全景 (北から)
図版17	H 10号住居址全景 (西から)	図版36	H 26号住居址全景 (北西から)
	H 10号住居址カマド (西から)		H 27号住居址全景 (西から)
	H 10号住居址遺物出土状況	図版37	H 28号住居址全景 (東から)

	H28号住居址カマド（東から）		H1・2・3・29号住居址垂直ラジコン写真
図版38	H28号住居址掘方（南から）	図版56	H1号住居址遺物
	H29号住居址全景（南西から）	図版57	H1号住居址遺物
図版39	H30号住居址炭化材・遺物出土状況（南から）	図版58	H1号住居址遺物
	H30号住居址全景（南から）	図版59	H1号住居址遺物
図版40	H30号住居址カマド（南から）	図版60	H1・H2号住居址遺物
	H30号住居址カマド（南西から）	図版61	H2号住居址遺物
	H30号住居址カマド遺物除去後（南から）	図版62	H2・H3号住居址遺物
	H30号住居址カマド掘方（南から）	図版63	H3・H4号住居址遺物
	H30号住居址掘方（南から）	図版64	H4号住居址遺物
図版41	H31号住居址全景（南から）	図版65	H4号住居址遺物
	H31号住居址カマド（南東から）	図版66	H4・H5号住居址遺物
図版42	H31号住居址遺物出土状況（1）	図版67	H5号住居址遺物
	H31号住居址遺物出土状況（2）	図版68	H5号住居址遺物
	H31号住居址カマド掘方（南から）	図版69	H5・H7号住居址遺物
	H31号住居址掘方（南から）	図版70	H7・H8号住居址遺物
図版43	H32号住居址全景（南西から）	図版71	H8・H9号住居址遺物
	H32号住居址カマド（南西から）	図版72	H9・H10号住居址遺物
図版44	H32号住居址カマド遺物出土状況	図版73	H10・H11号住居址遺物
	H32号住居址カマド（南から）	図版74	H11号住居址遺物
	H32号住居址カマド掘方（南から）	図版75	H11号住居址遺物
	H32号住居址掘方（南から）	図版76	H11号住居址遺物
	H33号住居址全景（南から）	図版77	H11・H12号住居址遺物
図版45	H34号住居址全景（南から）	図版78	H13号住居址遺物
	H34号住居址掘方（南から）	図版79	H14号住居址遺物
図版46	H35号住居址全景（西から）	図版80	H14・H15号住居址遺物
	H35号住居址掘方（西から）	図版81	H15号住居址遺物
図版47	H35号住居址炉跡確認状況	図版82	H15・H16・H17号住居址遺物
	H35号住居址炉跡	図版83	H17・H18・H19号住居址遺物
	F1号掘立柱建物址全景（西から）	図版84	H19号住居址遺物
	F2号掘立柱建物址全景（北から）	図版85	H19・H20号住居址遺物
図版48	F3・4・5号掘立柱建物址全景（西から）	図版86	H21・H22・H23号住居址遺物
	F3・5号掘立柱建物址全景（垂直）	図版87	H23・H24号住居址遺物
図版49	F6号掘立柱建物址全景（西から）	図版88	H24・H25・H27号住居址遺物
	F7号掘立柱建物址全景（南から）	図版89	H27・H28・H29号住居址遺物
図版50	F8号掘立柱建物址全景（南から）	図版90	H29・H30号住居址遺物
	F9号掘立柱建物址全景（南から）	図版91	H30・H31号住居址遺物
図版51	F10号掘立柱建物址全景（南西から）	図版92	H31号住居址遺物
	M1号溝状遺構全景（南東から）	図版93	H32・H34号住居址・ M2号溝状遺構遺物
図版52	M1号溝状遺構土層断面（北東から）	図版94	M2号溝状遺構遺物
	M1号溝状遺構南部分（南西から）	図版95	M2号溝状遺構遺物
図版53	M2・3・4号溝状遺構全景（南から）	図版96	M3号溝状遺構遺物
	M2・3・4号溝状遺構調査風景（南から）	図版97	M3・M4号溝状遺構遺物
	M5号溝状遺構全景（西から）	図版98	M4号溝状遺構・遺構外遺物
図版54	D1号土坑全景（東から）	図版99	樋村遺跡Ⅱ石器
	樋村遺跡Ⅱ垂直ラジコン写真 （平成11年度調査区西側）	図版100	樋村遺跡Ⅱ石器
図版55	H4・5号住居址垂直ラジコン写真		

# 第 I 章 発掘調査の経緯

## 第 1 節 立地と経過

樋村遺跡群は、千曲川右岸の平賀地積にあり、付近は現在も広く水田として利用されている。標高は680 m内外を測り、東に東部山地から舌状に張り出した後家山、北は志賀川、南及び西は滑津川という山地と河川に囲まれた複合扇状地及び河川の氾濫源に展開する。遺跡群付近では、昭和49年に遺跡の北東に位置する後家山丘陵西端の後家山古墳の調査が行われ、石室の一部及び副葬品と考えられる玉類・鉄製品・土師器・須恵器といった遺物が出土した。また本遺跡群内では、今回調査区の南に接する地域において、昭和57・58年に土地改良事業に係わる発掘調査が行われ、水田下より弥生時代から平安時代に至る住居址が300軒以上発見されている。

今回、佐久建設事務所により、遺跡群を東西方向に横切る道路改良事業が行われることとなり、遺構の存在を確認するため試掘調査を行った。その結果、古墳時代の竪穴住居址が多数認められたことから、佐久建設事務所と協議の結果、遺跡の記録保存を目的として佐久建設事務所から委託を受けた佐久市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施する運びとなった。



第 1 図 樋村遺跡 II 位置図 (1 : 100,000)

## 第2節 調査体制

教 育 長	依田 英夫 (平成11・12・13年6月退任) 高柳 勉 (平成13年7月着任・14年度)
教 育 次 長	小林 宏造 (平成11・12・13年5月転任) 黒沢 俊彦 (平成13年5月着任・14年度)
文 化 財 課 長	草間 芳行 (平成11・12・13年度) 嶋崎 節夫 (平成14年度)
文 化 財 係 長	荻原 一馬 (平成11・12・13年5月転任) 森角 吉晴 (平成13年5月着任・14年度)
文 化 財 係 調 査 主 任	林 幸彦、三石 宗一 (平成14年度)、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田卓也 (平成11・12・13年度)、冨沢 一明、上原 学、山本 秀典、出澤 力 佐々木宗昭、森泉かよ子
調 査 担 当 者	上原 学、出澤 力
調 査 員	浅沼ノブ江、阿部 和人、岩崎 重子、碓氷 知子、内堀 団、荻原千鶴子、 小幡 弘子、小野沢健二、柏木 貞夫、柏木 三郎、柏木 義雄、木内 明美、 木内 節夫、菊池 康一、小林 裕、小林よしみ、小山 功、斉藤 真理、 桜井 牧子、佐々木 正、佐々木久子、佐藤 剛、清水佐知子、田中 章雄、 中嶋 照夫、中嶋とも子、中嶋フクジ、林 幸男、比田井久美子、平林 泰、 細萱ミスズ、堀籠みさと、武者 幸彦、山村 容子、山浦 豊子、渡辺久美子

## 第3節 遺跡の概要

遺 跡 名	樋村遺跡群 樋村遺跡Ⅱ (HHMⅡ)
所 在 地	長野県佐久市大字平賀字樋村
調 査 期 間	平成11年10月25日～平成11年12月15日 (現場) 重機のみ稼働除く 平成12年6月1日～平成12年7月3日 (現場) 重機のみ稼働除く 平成11年12月16日～平成15年3月15日 (整理)
調 査 面 積	6,880 m <sup>2</sup> (本調査面積)
調 査 遺 構	竪穴住居址 35軒 掘立柱建物址 10棟 土坑 1基 溝状遺構 5条
出 土 遺 物	土師器 (坏・甕・壺・甑・台付甕・高坏) 須恵器 (坏・蓋・甕) 手づくね土器 玉類 (滑石製白玉・滑石製勾玉・土製勾玉・丸玉・管玉) 土製支脚 砥石 鉄製品 石製模造品 石器 (石鏃・打製石斧・敲石・磨石・石棒・石匙・スクレイパー)

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

佐久地域は、周囲を山地・台地に囲まれた盆地状を呈し、一般に佐久平と呼ばれ、北には現在も時折白煙をのぞかせる雄大な浅間山が聳え、南には蓼科山が存在する。東には浅間山と蓼科山をつなぐように北関東山地の北端がのび、群馬県との県境をなし、西は御牧ヶ原・八重原といった台地が広がり、蓼科山北端の裾野と接している。

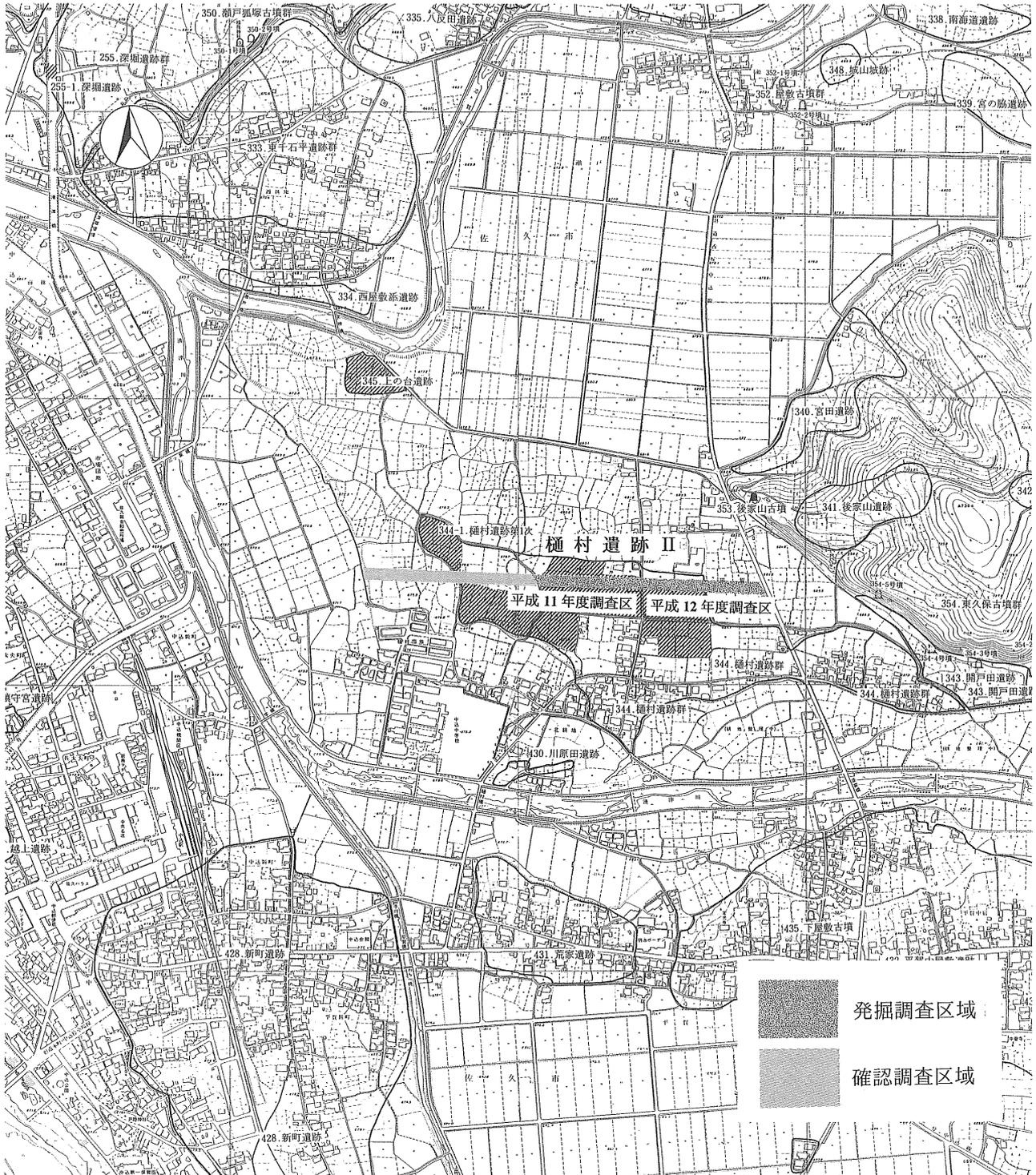
佐久平における水系の代表は千曲川で、源は南の川上谷に発し、南佐久から北流しながら途中、沢筋からの支流を集めつつ水量を増し佐久平に入る。その後、野沢付近まで北流し、そこから流れを北西に変え、蓼科山麓の支流を集めた片貝川、浅間山の東麓に源を発す湯川、関東山地からの支流である田子川・志賀川等を集める滑津川といった河川と合流する。その後は、上田、長野方面へ北流し、長野において松本方向からの犀川と合流する。

このように佐久地域は周囲を山地に囲まれ、水にも恵まれた一つの盆地であり、総称して佐久平と称しているが、地質学的には南北に大きく二分される。この境界は、佐久平のほぼ中央である志賀川が滑津川と合流して千曲川に注ぐ東西線を境とし、河川の北側段丘上は680m、南側は660mを測り、20m内外の比高差の断崖を認めることができる。北部地域は、北に聳える浅間山（黒班山・前掛山・中央釜山からなる三重式成層火山）の山麓末端部の平坦な台地である。これは新世代四期洪積末期に活動を開始し、最盛期には現在



佐久平航空写真（南から）

の浅間山より高い標高2,800mを測った黒班山が、噴火口の半分以上を吹き飛ばす程の大噴火に伴い噴出溶岩熱水泥流が現在の中佐都付近まで押し出された上に、黒班山の再活動から前掛山を形成する過程によって噴出した火砕流軽石流と降下火山灰砂が2度（第一、第二軽石流＝P1、P2）にわたり堆積したことによって形成された。この軽石流は一時湯川を埋め、一部に湖沼状態を作り、それまで凹凸の激しかった泥流の表面を平坦化した。また、台地に堆積した第一軽石流（P1）は雨水による浸食に弱く、長い年月の間に深く削り取られ、浅間の麓から放射状に幾筋にも浸食谷（田切り地形）を形成し、その切り立った断崖により



第2図 樋村遺跡II位置図 (1:10,000)

台地を細長く分断している。

これに対し南部地域は千曲川の氾濫源沖積地と滑津川の谷口扇状地で、川床礫層と沖積粘土層地帯で地下水位も高く、安定した土地である。このため南部一帯は広く水田として利用されていた。

今回調査が行われた樋村遺跡群は、佐久平の南部地域の沖積地に所在し、東を東部山地、南及び西は遺跡群の南西にて田子川と合流し川筋を北に向けた滑津川、北は蛇行しながら流れ遺跡の北西で滑津川と合流する志賀川といった山地と河川に囲まれた複合扇状地上に位置する。地層は、現地表下は強粘性で粒子の密な黒色土層・暗褐色土層・黄褐色土層が認められ、その直下に河川の氾濫によって堆積したと思われる砂礫層が確認された。(北佐久郡志 第一巻 自然編参考)

## 第2節 周辺遺跡

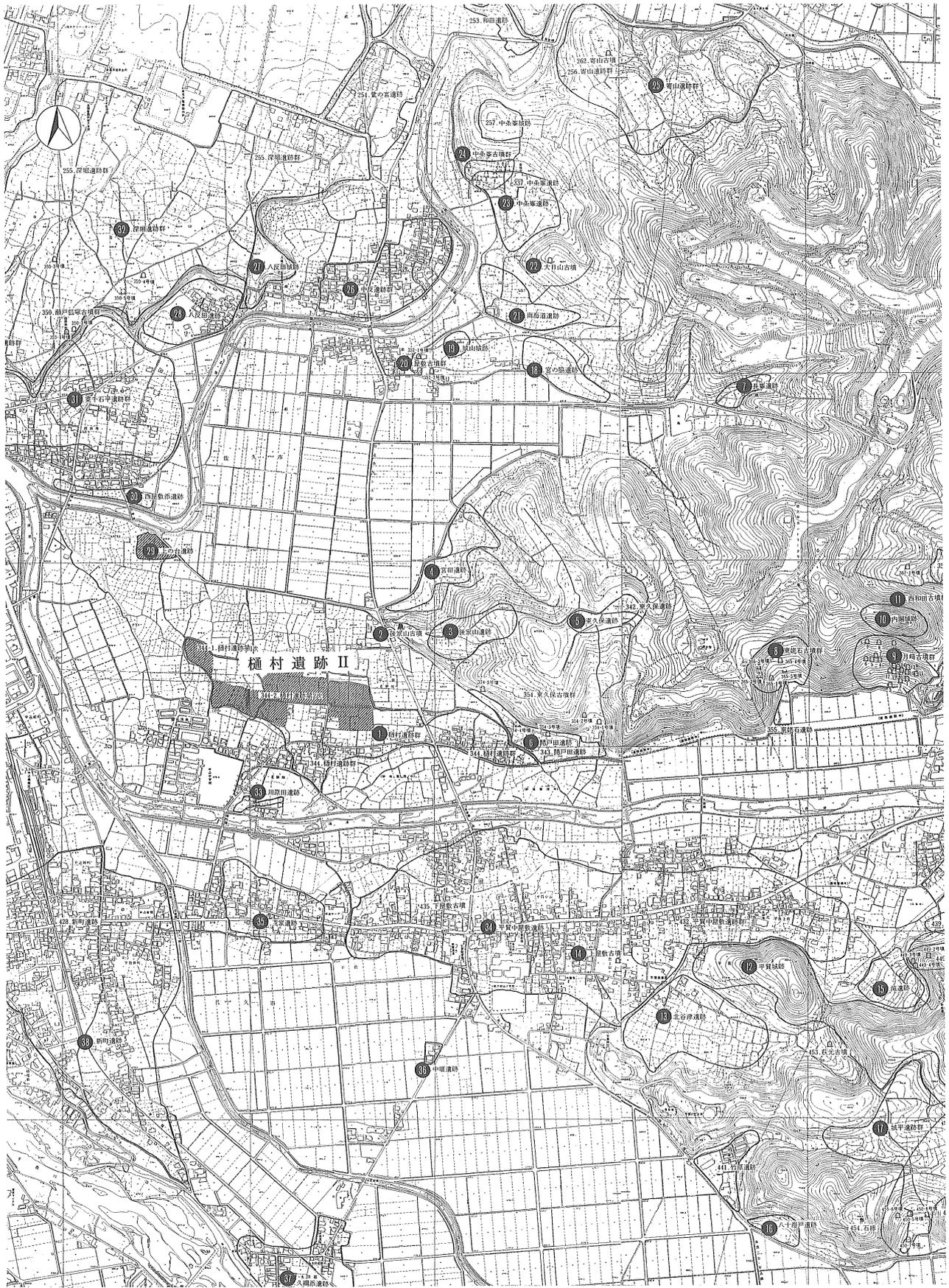
樋村遺跡群周辺の地形は、東に丘陵地、西、南、北の三方を志賀川、滑津川といった河川に囲まれた複合扇状地であり、河川の氾濫源でもある。遺跡は、この河川沿いの微高地及び東部山地の山麓、北方の瀬戸地積に広がる台地上に存在を認めることができる。樋村遺跡の北西に上の台遺跡、志賀川の北に西屋敷添遺跡、東千石平遺跡群、八反田遺跡、八反田城跡、中反遺跡、深堀遺跡、北東の志賀川左岸の山麓に宮の脇遺跡、屋敷古墳群、南海道遺跡、中條峯遺跡、寄山遺跡など、東の山麓・山腹に後家山遺跡、宮田遺跡、東久保遺跡、開戸田遺跡、長峰遺跡、南には滑津川、田子川、千曲川の氾濫源である沖積地に荒家遺跡、平賀中屋敷遺跡、中堰遺跡、やや南方に久禰添遺跡が所在する。

また内山地籍の滑津川右岸から、樋村遺跡の東に位置する後家山に至る山地縁辺部には、数多くの古墳が所在し、後家山古墳、東久保古墳群、東姥石古墳群、月崎古墳群、西和田古墳群など、一部を除き現在もその姿をとどめている。

樋村遺跡周辺の発掘調査は、東では昭和49年後家山古墳の調査が行われ、横穴式石室の最下段の石列及びかまち石が確認され、石室内から水晶製切子玉8、管玉7、ガラス小玉14、小型白玉12、鉄族12、直刀片5、刀子2、土師器、須恵器が出土した。また、平成8年度には宅地進入路造成工事に伴い坪の内遺跡の調査が行われ、中世と思われる竪穴状遺構が検出された。南では昭和57・58年に圃場整備に伴う樋村遺跡の調査が行われ、竪穴住居址310軒(弥生時代～平安時代)、掘立柱建物址19棟、土坑46基、竪穴状遺構11など多数の遺構に加え、住居址からは土師器・須恵器・白玉といった遺物が数多く出土した。特に古墳時代後期の住居址の比率が非常に高いことから、樋村遺跡には古墳時代後期に大規模な集落が存在していたと考えられる。遺跡の東の丘陵地には、ほぼ同時期と思われる古墳の存在が知られていることから、集落と古墳とは深い関わりがあったように感じられる。この他小規模であるが平成6・7年度に道路改良事業に伴う平賀中屋敷遺跡の調査によって、古墳時代後期、平安時代の竪穴住居址が検出されている。北方面では平成元年から平成4年にかけてリサーチパーク造成事業に伴い北西の山麓部に位置する寄山・中条峯・勝負沢・寄山古墳の調査が行われ、縄文時代、平安時代の遺構が認められた。特に縄文時代は多量の土器、石器が出土している。東から迫る東部山地の縁辺部には以前から古墳の存在は知られていたが、寄山遺跡等の調査からこれほどの縄文時代の遺構が認められることを考えると、同地域には縄文時代の遺跡が数多く眠っている可能性が推察できる。近年に至っては北の瀬戸地籍に広がる台地上において深堀遺跡、千石平遺跡の大規模な調査が行われ、古墳時代前期から平安時代に至る住居址、古墳址及び中世に関係すると思われる堀跡などの遺構が確認されている。遺物は土師器・須恵器等が多数出土し、中には「蛙」の線刻画、墨書を施す土師器、青銅製の帯金具、三累環頭太刀柄頭といった特徴的な物も多数認められた。

No	遺 跡 名	所 在 地	縄	弥	古	奈	平	中	備 考
1	樋村遺跡群	平賀字樋村・上吉田・山崎外		○	○	○	○		S57・58年度1・2次発掘調査
2	後家山古墳	平賀字後家山			○				S49年度発掘調査 消滅
3	後家山遺跡	平賀字後家山		○			○		
4	宮田遺跡	瀬戸字宮田	○		○	○	○		
5	東久保遺跡	平賀字東久保、瀬戸字宮田			○	○	○		
6	開戸田遺跡	平賀字開戸田・後家					○		
7	長峯遺跡	瀬戸字長峯	○						S62年度調査
8	東姥石古墳群	平賀字東姥石			○				
9	月崎古墳群	平賀字月崎			○				
10	内堀城跡	平賀字月崎						○	
11	西和田古墳群	内山字西山			○				
12	平賀城跡	平賀字城平・滝・北谷津・滝平外						○	
13	北谷津遺跡	平賀字北谷津・南谷津				○	○		
14	上屋敷古墳	平賀字上屋敷			○				
15	滝遺跡	平賀字滝	○		○	○	○	○	
16	八十海戸遺跡	常和字八十海戸			○				
17	城平遺跡群	平賀字城平・筒井、常和字八十海戸外	○	○	○	○	○		
18	宮の脇遺跡	瀬戸字宮の脇	○		○	○	○		
19	城山城跡	瀬戸字城						○	
20	屋敷古墳群	瀬戸字屋敷			○				
21	南海道遺跡	瀬戸字南海道			○	○	○		
22	大日山古墳	瀬戸字中条平			○				
23	中条峯遺跡	瀬戸字中条峯・中条平	○		○	○	○		H元・2・3年度調査
24	中条峯古墳群	瀬戸字中条峯			○				
25	寄山遺跡	瀬戸字菖蒲沢、志賀字寄山・勝負沢・町田	○				○	○	H元・2・3・4年度調査
26	中反遺跡群	瀬戸字中反・中屋敷					○		
27	八反田城跡	瀬戸字八反田						○	
28	八反田遺跡	瀬戸字八反田					○		
29	上の台遺跡	瀬戸字上の台・天神前		○					S57年度発掘調査
30	西屋敷添遺跡	瀬戸字西屋敷添					○		
31	東千石平遺跡	瀬戸字千石平・西千石平・西屋敷添			○	○	○	○	
32	深堀遺跡群	瀬戸字深堀・狐塚・残塚・下原・西原外	○	○	○	○	○	○	H11・12年度調査
33	川原田遺跡	平賀字川原田					○	○	
34	平賀中屋敷遺跡	平賀字中屋敷・下屋敷・上屋敷		○	○	○	○		H7年度調査
35	荒屋遺跡	平賀字荒家			○	○	○		
36	中堰遺跡	平賀字中堰					○		
37	久瀬添遺跡	太田部字久瀬添・飛越・飯塚		○	○	○	○		H11・12年度調査
38	新町遺跡	中込字新町・横道・狐塚・南畑				○	○		

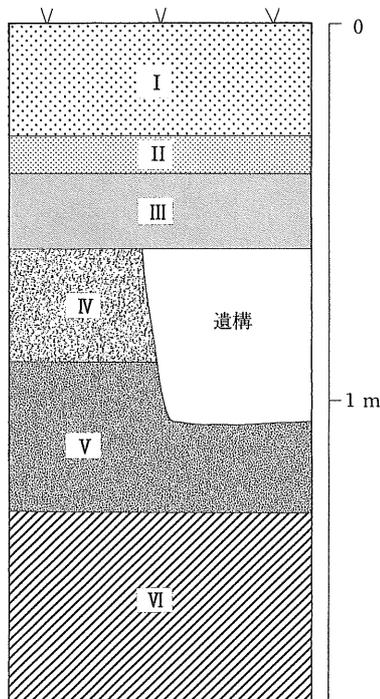
第1表 周辺遺跡表



第3図 樋村遺跡Ⅱ周辺遺跡位置図 (1:15,000)

### 第3節 基本層序

樋村遺跡が所在する地域は、東に東部山地の端部、北に志賀川、南及び西には滑津川、さらに滑津川の西には一級河川である千曲川が流れ、遺跡一帯は東からの複合扇状地及び河川による氾濫源によって構成されている。今回の調査区の土層は、Ⅰ層は表土で近年重機によって動かされた土層である。Ⅱ層は田んぼの床土である赤褐色土層が薄く堆積している。Ⅲ層は強粘性の黒色土層で分布は調査区中央付近に限られ、東西両方向に行くに従って薄くなり、次第に消滅する。土層中には多数の遺物（土師器片）が含まれていたが遺構の確認はできなかった。包含層と思われる。Ⅳ層は強粘性の暗褐色土層で層厚のばらつきはあるが、調査区のほぼ全域で認められた。遺構はこの上面から認められるが、検出は非常に困難であった。Ⅴ層は強粘性の黄褐色土層で調査区のほぼ全域にわたって堆積していた。この上面における遺構の検出は明確であったが、浅い遺構は消滅する危険性がある。Ⅵ層は付近の河川の氾濫によって堆積したと思われる砂礫層で多量の礫を含む。本地域の堆積土はいずれも強粘性の強固な土で、遺構掘り下げ作業にあたって非常に苦勞を強いられた。

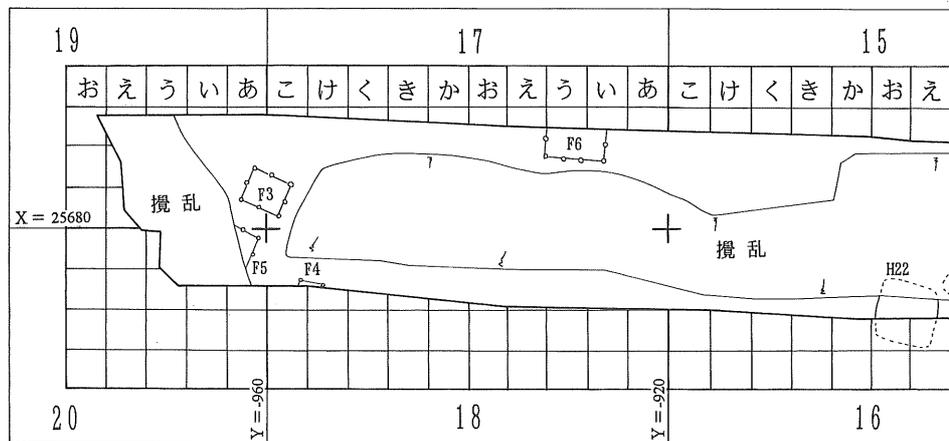


第4図 樋村遺跡Ⅱ基本層序模式図

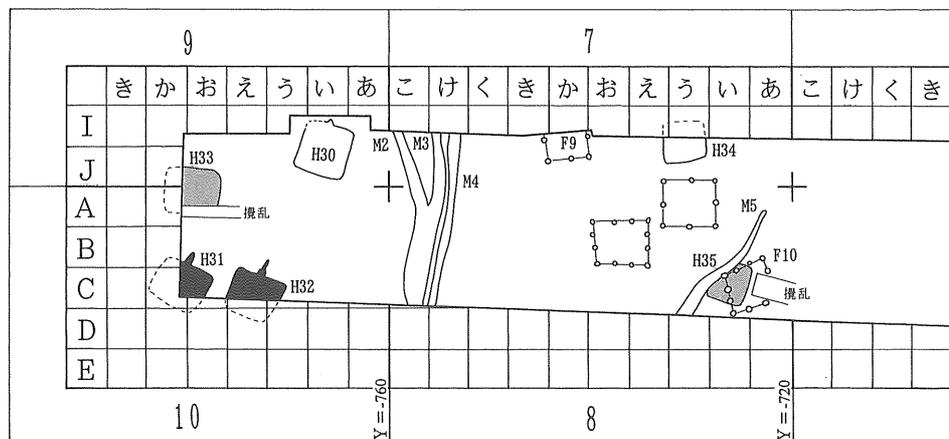
- I 表 土 表面は重機による土の移動及び土取りした後整地され、耕作土は存在しない。
- II 赤褐色土層 水酸化鉄を含んだ田の床土。粒子の細かい強粘性で固い。
- III 黒色土層 粒子の細かい強粘性。調査区の中央付近一帯に堆積し、東西の端部に向かって消滅してゆく。遺物は出土するが遺構のプラン確認はできない。包含層と考えられる。
- IV 暗褐色土層 粒子の細かい強粘性土層。黒色土層直下に堆積し、この上面が遺構検出面となる。
- V 黄褐色土層 粒子の細かい安定した強粘性土。遺跡のほぼ全域に認められるが、遺跡の中央一帯では暗褐色土層下、東西端部地域の黒色土層、暗褐色土層の認められない地域においては赤褐色土層下に位置する。IV層の暗褐色土層の認められない地域においてはこの上面が遺構検出面となる。
- VI 砂 礫 層 洪水など、河川の氾濫によって堆積したと思われる砂礫層。



平成



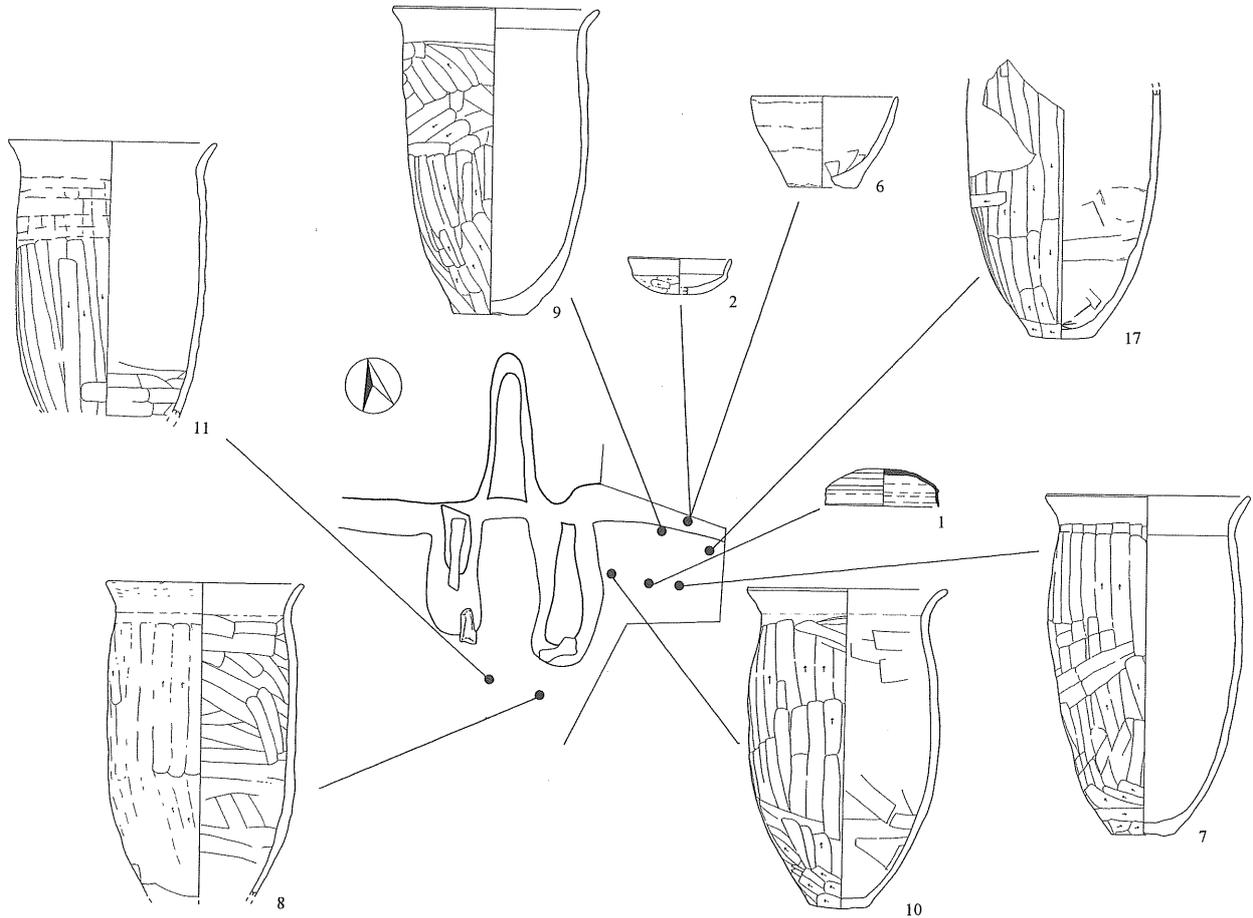
平成 12 年度 調査





- 18層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土。炭化物・焼土多。
- 19層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒、炭化物。強粘性。
- 20層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土。やや粘性。(柱痕)
- 21層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒。炭化物・焼土多。
- 22層 灰赤色土・赤褐色土 (2.5YR4/2・4/8) 焼土層。灰。粒子やや粗い。(火床)
- 23層 黒褐色土 (10YR3/2) 灰、焼土、炭化物。粘性あり。
- 24層 黒褐色土 (10YR2/3) 灰、焼土炭化物。(袖)
- 25層 灰黄褐色土 (10YR4/2) 灰多量。焼土、炭化物。やや強粘性。

- 26層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 火を受け固い。(袖)
- 27層 黒褐色土 (10YR2/3) 周溝。
- 28層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・灰・炭化物少量。
- 29層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。硬質、床面
- 30層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。暗褐色土。(床下)
- 31層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土・炭化物・焼土少量。
- 32層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。

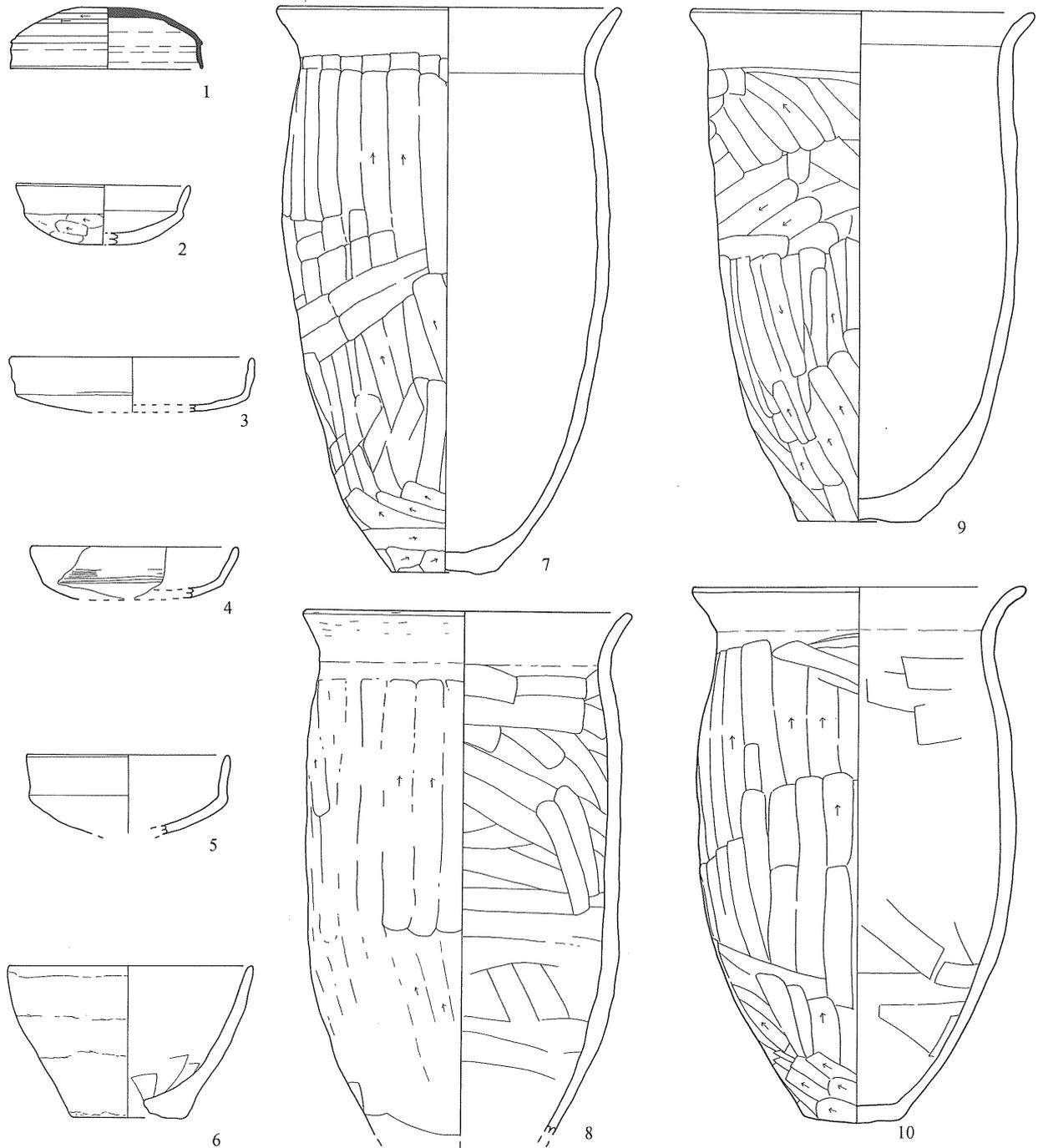


第7図 H1号住居址遺物出土位置図

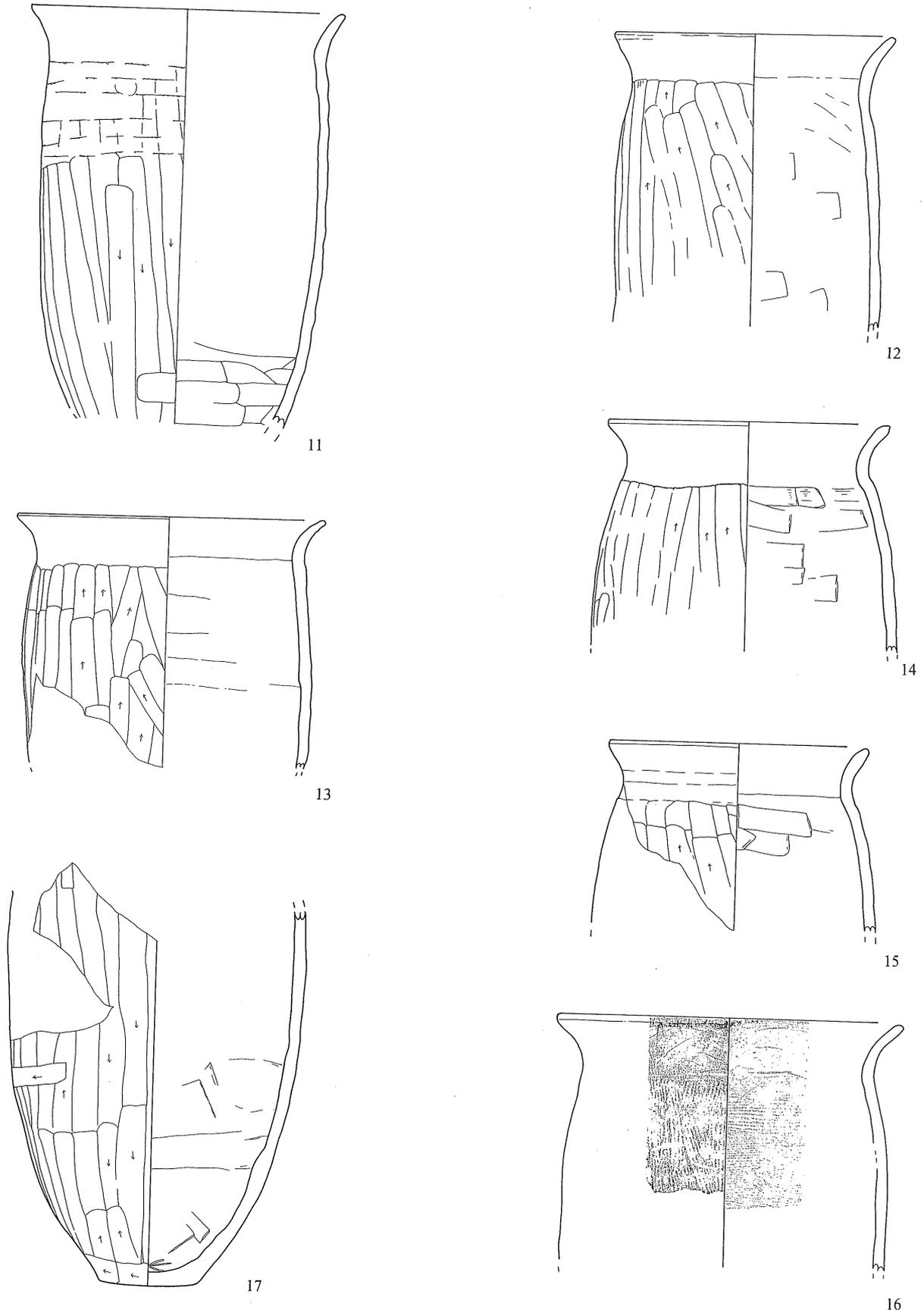
遺構は調査区のほぼ中央10-く-Aグリッドに位置し、東側は生活道路のため西半分の調査となった。H2、H3号住居址と重複関係にあり、H2、H3号住居址を切る。覆土は強粘性の黒色土・暗褐色土・黄褐色土の自然堆積と思われる。規模は確認規模で西壁7.6m、北壁5.4m、南壁3.2mを測り、深さは44cm(床面)である。平面形はやや隅丸の方形で、西壁の規模から一辺7mを越す大型の住居址と思われる。壁は垂直に近く、床との境に周溝が存在し、床面は固く平坦である。ピットは床面上にて4個確認され、このうちP1、P2が主柱穴である。カマドは北壁にあり、粘土及び扁平な石材で構築され、袖が北壁から住居内に火床を挟み込むように80cmほどのびていた。火床には焼土が8cmの厚さで堆積し、煙道は北壁付近で急激に立ち上がった後、緩やかな傾斜で住居外70cmの地点に立ち上がる。床下は15~20cmの厚みで上層に床と思われる黒色土が存在し、下層に黄褐色土が埋め込まれていた。

遺物は住居址覆土、カマド周辺から土師器・須恵器・白玉・丸玉が出土した。特にカマド東の北壁沿いからは重なり合うように並んだ多数の土師器甕が出土した。図示したのは須恵器1点、土師器21点、玉類5点である。1は須恵器の蓋で天井部は回転ヘラ削りを施す。2~5は稜を有する坏で丸底の底部から立ち

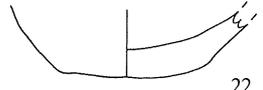
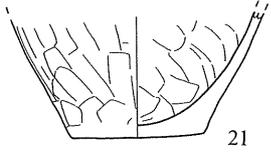
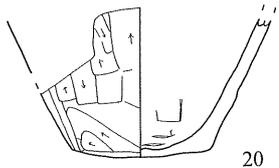
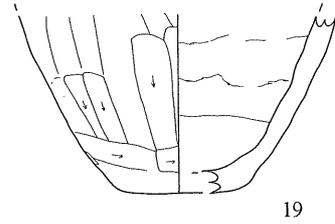
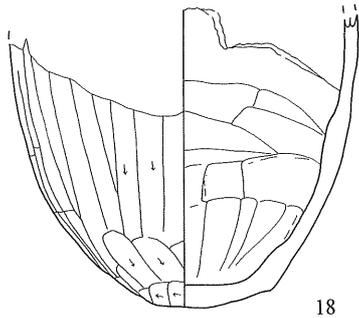
上がり稜を境に僅か外傾気味に立ち上がる。口縁横ナデ、外面ヘラ削り、内面ミガキを施す。坏の内面は摩耗が激しく調整痕は不鮮明である。3の底部付近は他に比べて丸みが少なく平らである。6は揺り鉢状の甕で単孔の大きく口を開いた底部からやや内彎気味に立ち上がる。7～16は口縁に最大径がくる長胴甕で7、9、10はほぼ完形で8、11は底部を欠損する。12、13は胴部下半が欠損し、14、15、16は口縁から胴部にかけての破片で16の外面にはハケ目が残る。9、11は出土位置からカマド焼き口の天井に使用されていた可能性が考えられる。17～21は底部から胴部にかけての破損品である。甕の調整はすべて外面縦方向のヘラ削りを基本とし、口縁横ナデ、内面ヘラナデを施す。22は甕の底部である。23は黒色の丸玉で24は碧玉、25～27は滑石製の白玉である。本住居址は6世紀中葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲa期)



第8図 H1号住居址遺物実測図(1)



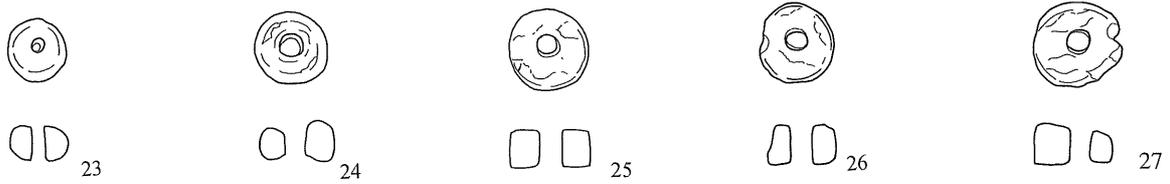
第9图 H1号住居址遺物実測图(2)



第10図 H1号住居址遺物実測図(3)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	須恵器	蓋	12.1	—	3.8	口クロナデ	80	良好	7.5YR6/1 褐灰色
2	土師器	坏	[11]	丸底	3.8	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	5YR5/4 鈍い赤褐色
3	土師器	坏	[15.4]	丸底	2.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	[13]	丸底	3.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
5	土師器	坏	[12.8]	丸底	—	口縁横ナデ	40	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
6	土師器	甗	15.2	7	9.6	外面ヘラ削り 内面横ナデ 底部半孔	90	良	10YR8/3 浅黄橙色
7	土師器	甗	21.8	6.6	36	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	95	良	7.5YR5/4 鈍い褐色
8	土師器	甗	20.2	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	90	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
9	土師器	甗	21.8	7.8	32.5	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	90	良	10YR7/4 鈍い黄橙色
10	土師器	甗	20.7	7.6	34.4	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	90	良	10YR8/4 浅黄褐色
11	土師器	甗	21.8	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	70	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
12	土師器	甗	19.1	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	70	良	10YR8/3 浅黄褐色
13	土師器	甗	21.2	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	10YR8/4 浅黄褐色
14	土師器	甗	[19.4]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
15	土師器	甗	[18]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	10	良	7.5YR8/4 浅黄褐色
16	土師器	甗	[24.3]	—	—	口縁横ナデ 内外面ハケ目	20	良	7.5YR6/3 鈍い褐色
17	土師器	甗	—	7.2	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
18	土師器	甗	—	6.6	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	10YR8/4 浅黄褐色
19	土師器	甗	—	9.5	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	10YR8/3 浅黄褐色
20	土師器	甗	—	7.4	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	5YR5/4 鈍い赤褐色
21	土師器	甗	—	6.1	—	外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	5YR5/6 明赤褐色
22	土師器	甗	—	7.6	—	表面剥離	底部破片	良	5YR8/4 淡橙色

第2表 H1号住居址遺物観察表

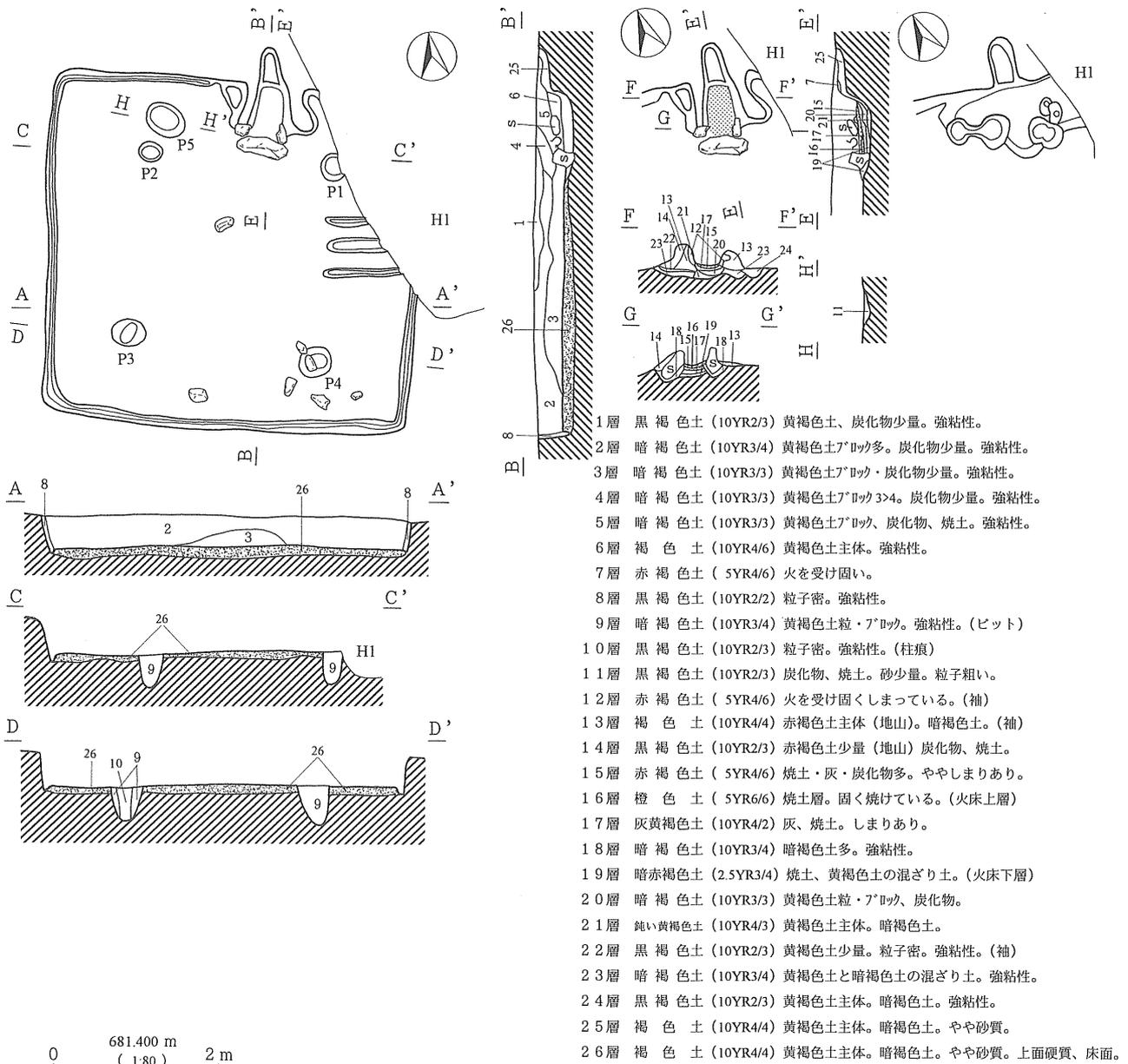


第11図 H1号住居址丸玉・白玉実測図

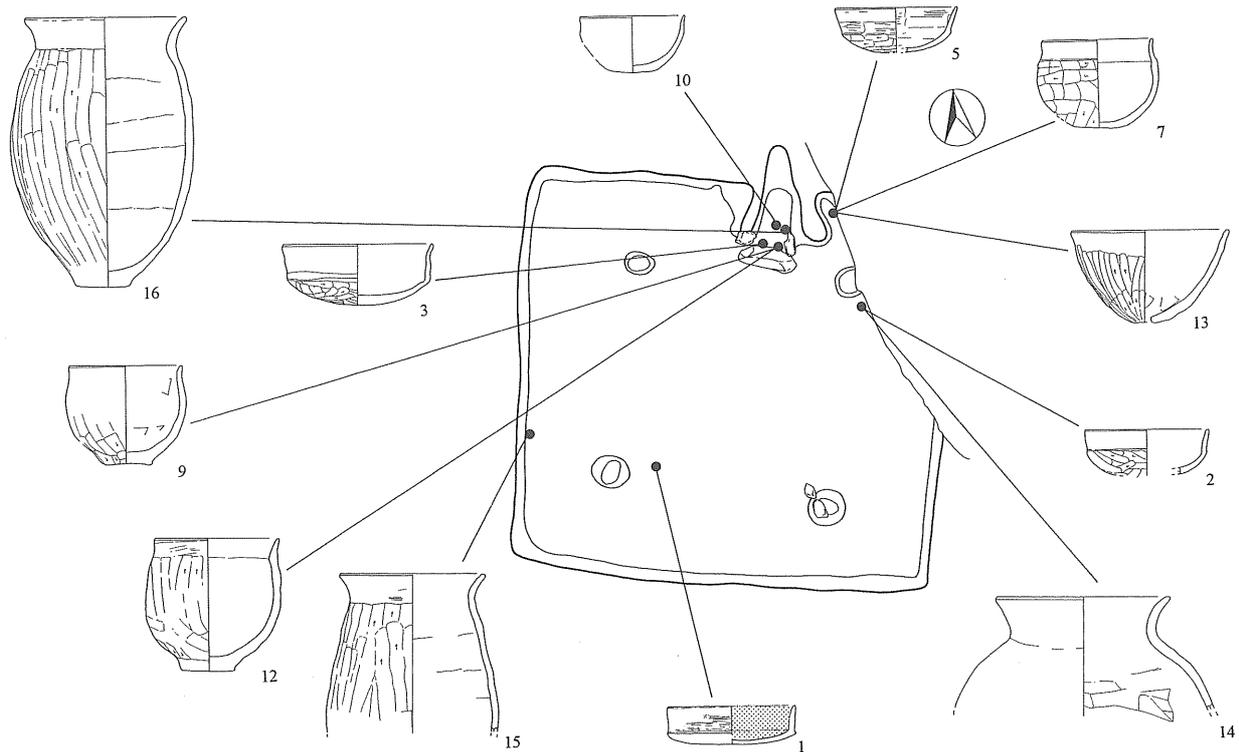
番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
23	Ⅱ区	丸玉	4.1	6.8	1.5	0.37	多孔質安山岩	黒色
24	Ⅲ区	白玉	4.5	9.85	2.3	0.69	碧玉	灰オリーブ色
25	Ⅱ区	白玉	5.15	10	2.7	0.91	滑石	橙・灰色
26	Ⅱ区	白玉	5.5	11	2.8	1.03	滑石	灰白色
27	Ⅱ区	白玉	4.8	10.5	2.6	1.04	滑石	浅黄橙色

第3表 H1号住居址丸玉・白玉観察表

H2号住居址



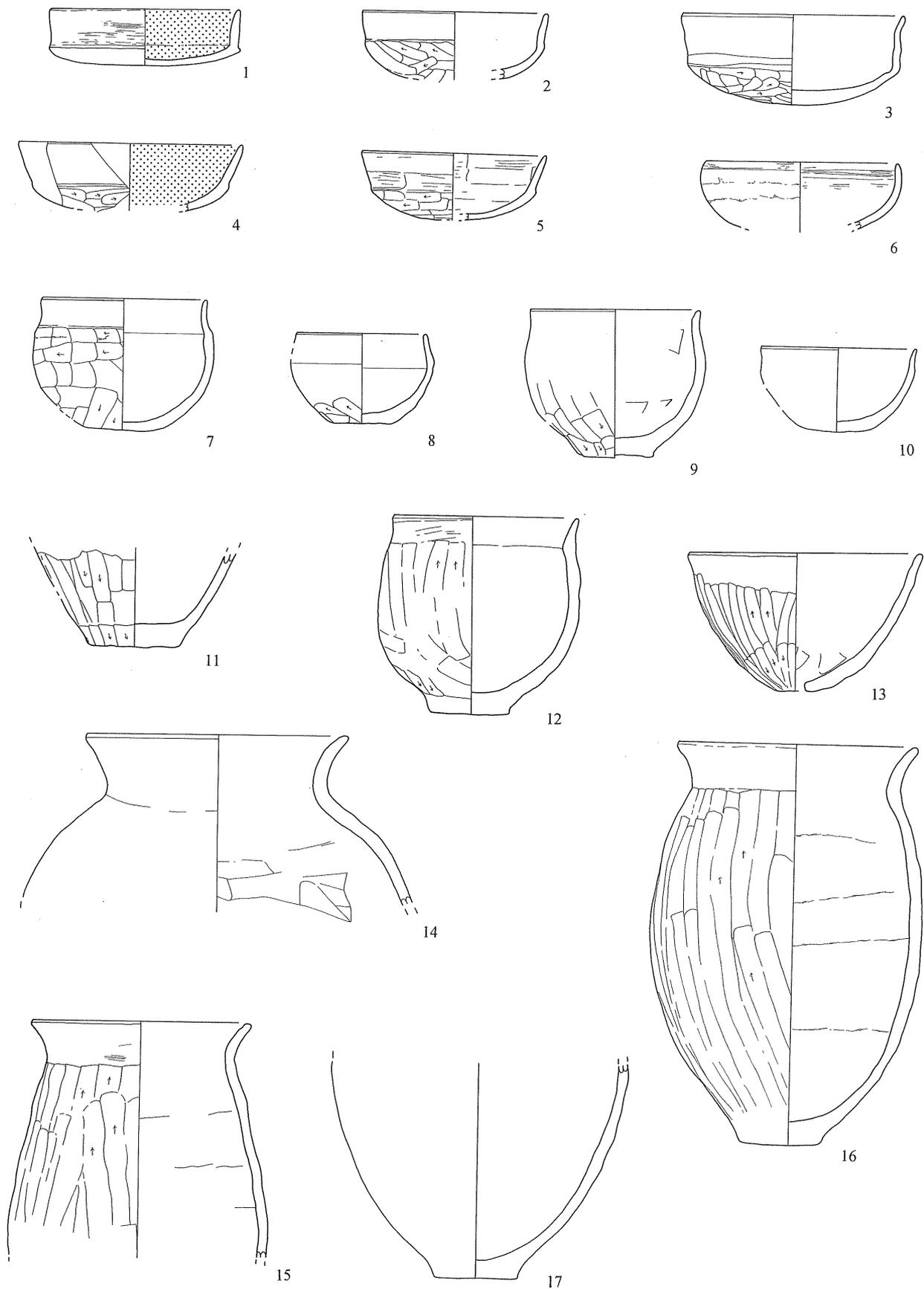
第12図 H2号住居址実測図



第13図 H2号住居址遺物出土位置図

遺構は調査区ほぼ中央の10-け-Bグリッドに位置し、H1号住居址に切られる。覆土は強粘性の黒褐色土、暗褐色土である。規模は西壁4.2m、南壁4.4m、北東壁はH1に切られ不明で、深さは40cm(床面)を測る。平面形は残存状況から方形と考えられる。壁は垂直に近く、壁に張り付くように厚さ3cm程の黒褐色土層が認められ、この土層直下に周溝が存在した。床面は固くほぼ平坦で、ピットは5個確認できた。P1~P4が支柱穴である。P5は浅くカマドに近接し、灰が認められることから灰だめと思われる。カマドは北壁に構築され、粘土を主な構築材とし焚き口付近の袖先端には補強の石材を使用し、手前には焚き口部の天井石と思われる細長い石材が横たわっていた。火床には多量の焼土が認められ、カマド内から土師器の甕、小型甕、坏、鉢が出土した他、カマド東袖に接して甑が出土した。床下は12~20cmの厚みで褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

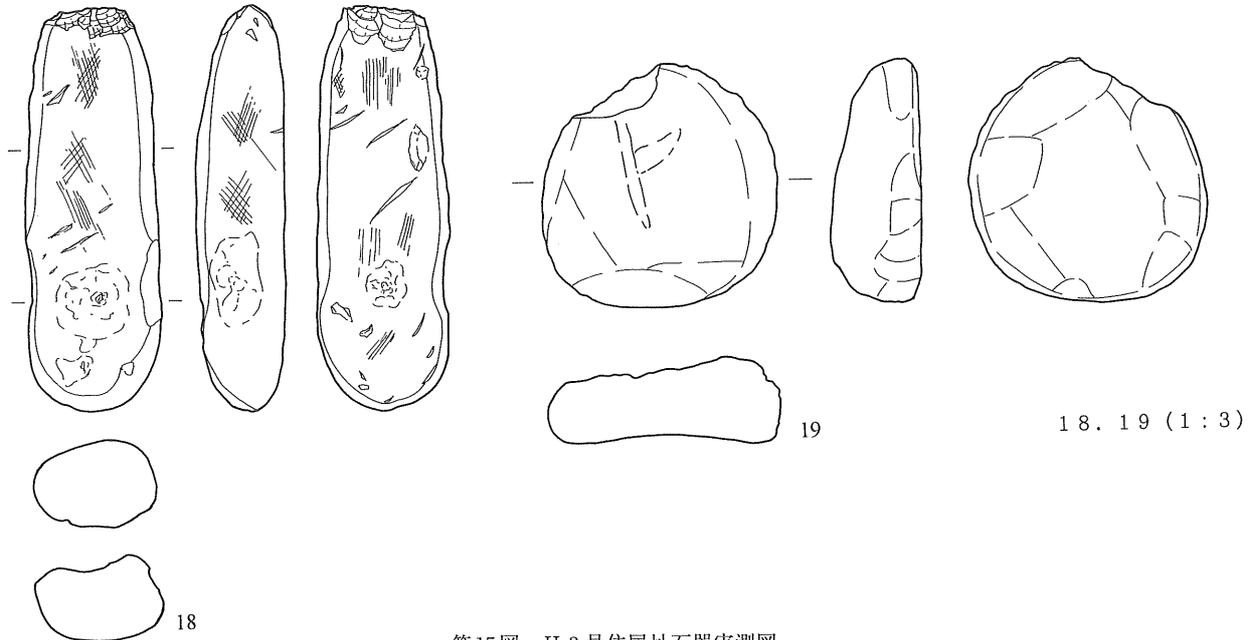
遺物は土師器・石製品が出土した。図示できたのは土師器17点、砥石2点である。1~5は稜を有する坏で、口縁ナデ、外面ヘラ削りを施す。1は底部が他の坏に比してやや平らで、内面は黒色である。2、3は丸底の底部で口縁付近はほぼ垂直に立ち上がり、3は大型である。4、5は丸底の底部で口縁付近はやや外傾気味に立ち上がり、4は内面黒色である。6は丸底の稜を持たない坏である。坏の内面は摩耗が激しく調整痕は不鮮明である。7~10は鉢で口縁端部をナデ、外面ヘラ削りを施す。9は底部周辺を削り、底部を造りだしている。11は甕の底部周辺の破片で外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。12は口縁部がやや外反する口の広い小型の甕で口縁ナデ、外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。13は揺り鉢状の甑で底部からやや丸みを持って立ち上がり、やや開き気味に口縁部に至る。外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。14は胴丸の甕と思われ、口縁ナデ、外面ミガキ、内面ヘラナデを施す。15、16は長胴の甕で、胴部中央付近に最大径がくる。16はほぼ完形である。ともに口縁ナデ、外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。17は甕の胴下半部である。18は溶結凝灰岩性の砥石、19は軽石製の砥石である。本住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅱ期)



第14图 H 2号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	13.6	丸底	3.9	□縁横ナデ 外面へラ削り 内面黒色処理・ミガキ	80	良	10YR8/3 浅黄橙色
2	土師器	坏	[13.2]	丸底	—	□縁横ナデ 外面へラ削り・ナデ 内面ミガキ	35	良	5YR6/4 鈍い橙色
3	土師器	坏	15.8	丸底	6.4	□縁横ナデ 外面へラ削り	80	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	[15.9]	丸底	—	□縁横ナデ 外面へラ削り 内面黒色処理	40	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
5	土師器	坏	[13.1]	丸底	—	□縁横ナデ 外面へラ削り 内面ナデ	45	良	7.5YR6/6 橙色
6	土師器	坏	[13.8]	丸底	—	□縁横ナデ 外面へラ削り 輪積み痕	35	良	7.5YR6/2 灰褐色
7	土師器	鉢	[11.7]	5.4	9.4	□縁横ナデ 外面横へラ削り・輪積み痕 内面へラナデ	55	良	7.5YR7/6 橙色
8	土師器	鉢	[9.4]	4.4	6.3	□縁横ナデ 外面へラ削り	70	良	7.5YR7/6 橙色
9	土師器	鉢	[12]	5.4	10.5	外面縦へラ削り 内面へラナデ	30	良	10YR6/4 鈍い黄橙色
10	土師器	鉢	11	4.7	6	□縁横ナデ 外面へラ削り 内面へラナデ	50	良	5YR6/4 鈍い橙色
11	土師器	甕	—	6.5	—	外面縦へラ削り 内面へラナデ	35	良	2.5YR5/3 鈍い赤褐色
12	土師器	小型甕	13.1	5.8	14.1	□縁横ナデ 外面縦へラ削り 内面へラナデ	95	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
13	土師器	甕	16.7	2.5	9.9	外面縦へラ削り 内面へラナデ	95	良	10YR8/4 浅黄橙色
14	土師器	甕	18.5	—	—	□縁横ナデ 外面縦へラ削り・ナデ 内面へラナデ	□縁胴部破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
15	土師器	甕	[15.2]	—	—	□縁横ナデ 外面縦へラ削り 内面へラナデ	□縁胴部破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
16	土師器	甕	17.7	5.8	28.7	□縁横ナデ 外面縦へラ削り 内面へラナデ	100	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
17	土師器	甕	—	5.9	—	外面縦へラ削り 内面へラナデ	底部胴部破片	良	5YR6/6 橙色

第4表 H2号住居址遺物観察表

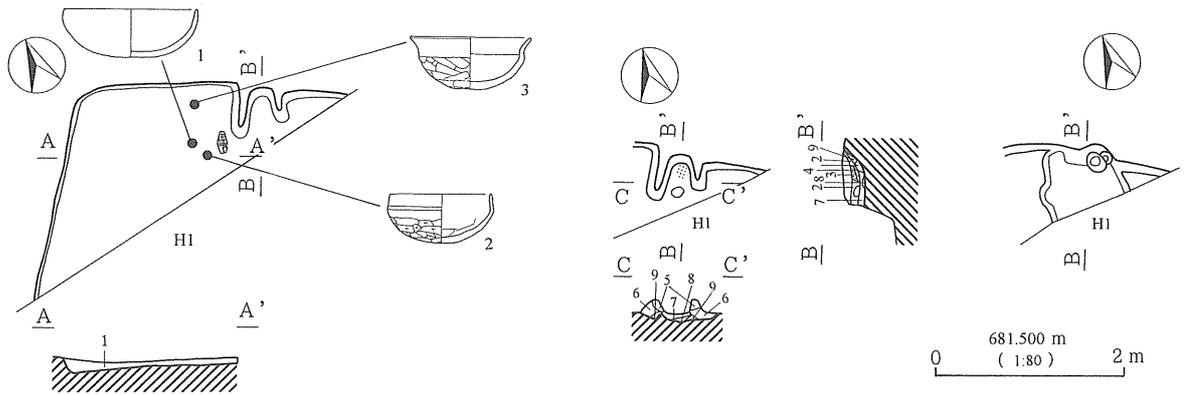


第15図 H2号住居址石器実測図

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
18	床上	砥石	溶結凝灰岩	16.1	5.6	3.5	372.13
19	床上	砥石	軽石	9.6	9.4	3.6	151.09

第5表 H2号住居址石器観察表

H 3 号住居址



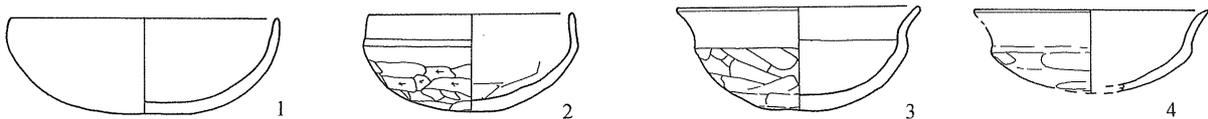
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒、炭化物。強粘性。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒、炭化物。強粘性。
- 3層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 焼土層。灰、炭化物。粒子粗く強粘性。(火床)
- 4層 明赤褐色土 (5YR5/6) 焼土層。灰、炭化物。粒子粗く強粘性。(火床)
- 5層 明赤褐色土 (5YR5/6) 火を受け固く焼けている。(袖内壁)
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土、焼土、炭化物。しまりあり。(袖)
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土多。焼土・炭化物微量。
- 8層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。焼土微量。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土・炭化物微量。強粘性。

第16図 H 3号住居址実測図

遺構は調査区中央の10-く-Aグリッド付近に位置し、住居の半分以上をH1に切られる。覆土は強粘性の暗褐色土である。規模は残存規模で北壁2.8m、西壁2.3m、深さ15cm(床面)を測る。床面は固く平坦である。カマドは北壁にあり、袖は粘土によって構築されていた。火床には焼土の堆積が見られ、焼土の手前10cmに支脚と思われる石が認められた。床下の掘方は認められなかった。

遺物はカマド西側の床直上から土師器坏が数個出土した。図示できたのは土師器の坏4点、鉄製品1点である。1は丸底の底部から湾曲しながら口縁に至る、2~4は稜を有する坏で、内面は摩耗が激しく調整痕は不鮮明である。2は丸底の底部から立ち上がり口縁付近の稜からやや内傾し立ち上がる。3、4は丸底の底部から立ち上がり、稜から大きく外反し口縁に至る。5は鉄製品で小型の鎌と考えられる。

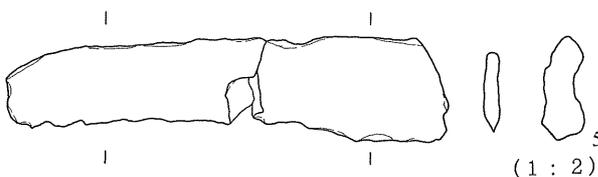
本住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられる。(II期)



第17図 H 3号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	14.2	丸底	5.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	70	良	7.5YR7/6 橙色
2	土師器	坏	10.8	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ・ミガキ	90	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
3	土師器	坏	13	丸底	5.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	100	良	2.5YR6/6 橙色
4	土師器	坏	[12.4]	丸底	4.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面剥離	50	良	5YR6/6 橙色

第6表 H 3号住居址遺物観察表



第18図 H 3号住居址鉄器実測図

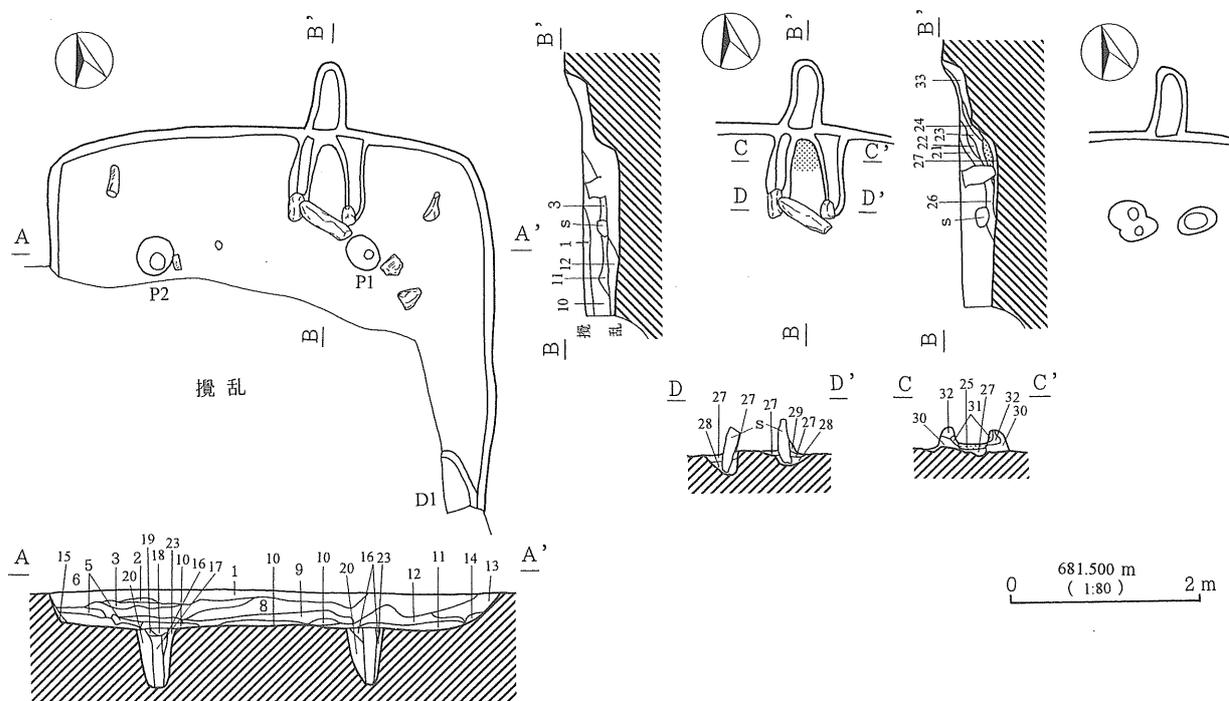
器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)
鎌	11.6	1.3~2.6	2.5~4.5	33.1

第7表 H 3号住居址鉄器観察表

## H 4 号住居址

遺構は調査区中央の北9 - こ - I グリッドに位置し、住居の南半分は近年の攪乱によって破壊されていた。本住居址は調査の結果、旧住居上にやや規模を拡大して、新たな住居を構築していたことが確認された。

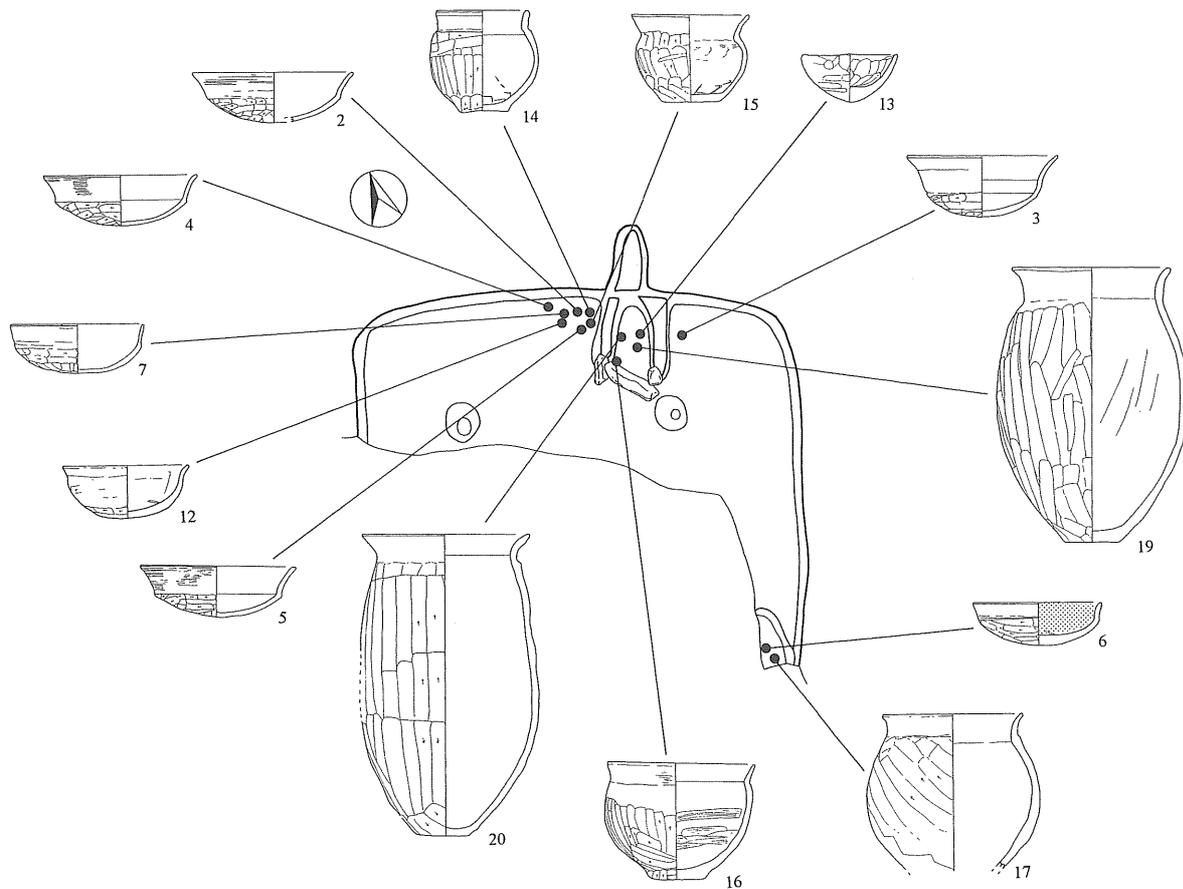
新H 4 号住居址は、旧H 4 号住居址の直上に僅かに拡張され存在する。南側半分は近年の攪乱によって破壊されている。規模は北壁4.6m、東壁3.6m以上、深さ40cm（床面）を測る。壁はやや外傾し、床面は焼土・炭化物の散った固い平坦面である。ピットは支柱穴が2個確認され、床面の南東隅に土坑が1基認められた。カマドは北壁のやや東寄りにあり、粘土で構築された両袖の先端に石材が埋め込まれ、その上に細長い天井石が横たわっていた。煙道は火床から北壁付近くで急激に立ち上がった後、緩やかな傾斜で住居外75cmに立ち上がる。またカマドからの遺物出土状況は良好で、火床上部には横並びの長胴甕が2個、手前に広口の小型甕、西袖の脇には重なり合う坏、鉢が多数出土し、当時の生活を伺い知ることができた。床面調査終了後、掘方調査を行った結果、床下から新たなカマドの袖、火床及び本住居址内に別遺構と思われる壁の



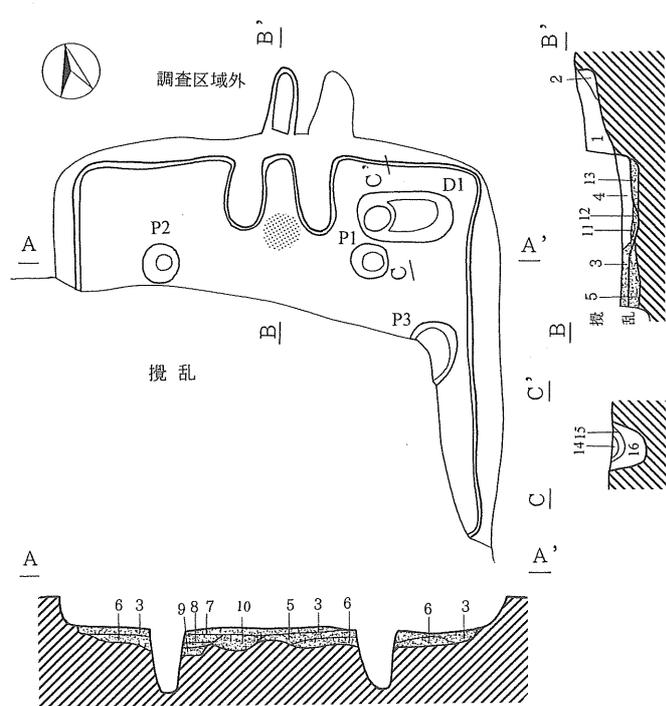
- |  |   |
|--|---|
| <p>1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土・焼土フワック多。強粘性。</p> <p>2層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土フワック、炭化物。強粘性。</p> <p>3層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土フワック多量。焼土フワック。強粘性。</p> <p>4層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土フワック多。黄褐色土・炭化物少。強粘性。</p> <p>5層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土フワック多量。炭化物・焼土フワック少。<br/>層との境に炭化物下層が存在。</p> <p>6層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土フワック多。焼土・炭化物少。強粘性。</p> <p>7層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土、炭化物、焼土。強粘性。</p> <p>8層 暗褐色土 (10YR3/3) 大粒黄褐色土フワック。強粘性。</p> <p>9層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土フワック。焼土・炭化物多。</p> <p>10層 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土多量。炭化物多。強粘性。</p> <p>11層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土フワック多量。炭化物多。上層との境に炭化物。強粘性。</p> <p>12層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土フワック。炭化物・焼土多量。強粘性。</p> <p>13層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土フワック少量。強粘性。</p> <p>14層 暗褐色土 (10YR3/3) 強粘性。</p> <p>15層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土フワック・炭化物少量。強粘性。</p> <p>16層 黒褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土・炭化物・焼土多。(ピット)</p> | <p>17層 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土。粒子密。強粘性。(柱痕)</p> <p>18層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土多。灰炭化物。</p> <p>19層 黒褐色土 (10YR3/1) 焼土層。炭化物。強粘性。</p> <p>20層 暗褐色土 (10YR3/4) 炭化物少量。強粘性。(ピット)</p> <p>21層 黒褐色土 (10YR2/3) カマド覆土。焼土少量。強粘性。</p> <p>22層 明褐色土 (7.5YR5/6) 焼土。強粘性。</p> <p>23層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土多量。炭化物。ややしまりあり。</p> <p>24層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土多量。炭化物。ややしまりあり。</p> <p>25層 赤褐色土 (2.5YR4/8) 焼土層。粒子粗い。しまりなし。(火床)</p> <p>26層 暗赤褐色土 (5YR3/4) 焼土、暗褐色土の混ざり土。粒子粗い。しまりなし。</p> <p>27層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・炭化物多。強粘性。</p> <p>28層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土多。炭化物。粒子粗い。</p> <p>29層 明赤褐色土 (5YR5/6) 火を受け固い。炭化物。</p> <p>30層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒。(袖)</p> <p>31層 橙褐色土 (5YR6/8) 火を受け固い。粒子やや粗い。(袖)</p> <p>32層 暗赤褐色土 (5YR3/6) 火を受け固い。粒子やや粗い。(袖)</p> <p>33層 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土・炭化物少量。強粘性。</p> |
|--|---|

第19図 H 4 号住居址実測図

立ち上がりが認められた。このことからH 4号住居址は新、旧2軒の住居が存在することが判明し、引き続き調査を行った。



第20図 H 4号住居址遺物出土位置図



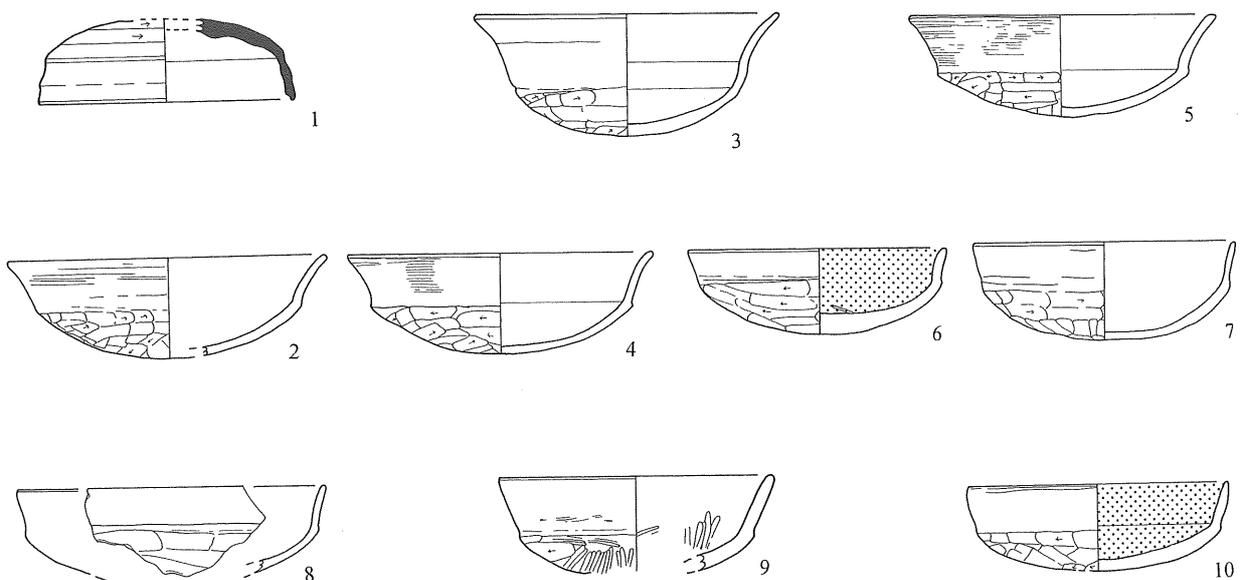
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土粒、炭化物。強粘性。
- 2層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 焼土粒、炭化物、灰、小石。強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土・灰・炭化物多。旧H 4の張り床。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・灰・炭化物多。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。強粘性。
- 6層 鈍い黄褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。(床下)
- 7層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。暗褐色土多。強粘性。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土主体。炭化物多。強粘性。
- 9層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。暗褐色土多。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土・炭化物・焼土多。強粘性。
- 11層 橙 色 土 (5YR6/6) 焼土層。火を受け固い。(火床)
- 12層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 焼土と灰の混ざり土。強粘性。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/3) 灰多。焼土・炭化物微量。強粘性。
- 14層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土・炭化物・灰多。
- 15層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土多量。炭化物、灰。
- 16層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土多。強粘性。

0 681.500 m (1:80) 2 m

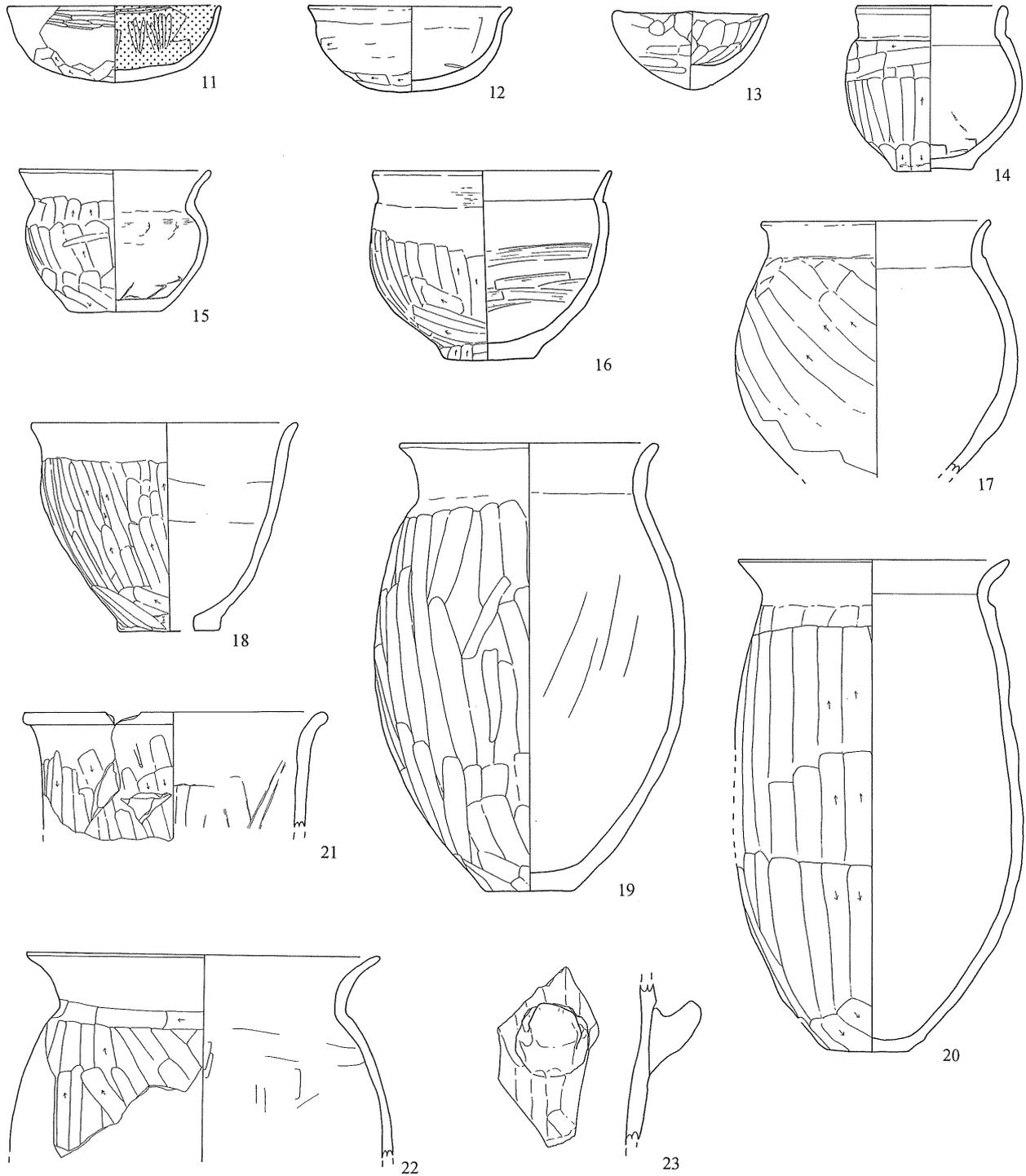
第21図 旧H 4号住居址実測図

旧住居の規模は、北壁4.3m、東壁4.0mを測る方形で、壁高は新住居の床面下に僅か5cm程度の立ち上がりが認められた。床面は黒褐色土で固く平坦で表面に細かい焼土、灰、炭化物が散っていた。床面上からは3個のピット、土坑1基が認められた。支柱穴と思われるピットはP1、P2だが、新住居の床面から認められ、この他に支柱穴らしきピットが存在しないことから、立て替え時の柱位置の移動がなかった可能性が考えられる。カマドは新住居のやや西に寄った北壁中央に位置し、粘土で構築された袖が北壁から住居内に70cmほど入り込み、両袖先端付近の間に火床と思われる焼土の堆積が認められた。煙道は旧住居の北壁付近で急激に立ち上がり、その後緩やかな傾斜で住居外1m地点に立ち上がる。床下は10～20cmの厚みで床面と思われる黒色土、その直下に黄褐色土が埋め込まれていた。

遺物は大半が新住居址の遺物と考えられ、カマド周辺を中心に床面上から多数出土した。旧住居址のものは僅かで、いずれも小破片であった。新住居出土遺物中、図示できたのは須恵器1点、土師器22点、土製勾玉2点、白玉7点である。1は須恵器の蓋で天井部回転ヘラ削りを施す。2～10は稜を有する坏で内面は摩耗が激しく調整痕の不鮮明なものが多かった。2～5は丸底の底部から立ち上がり稜から大きく外反し口縁部に至る。口縁横ナデ、外面ヘラ削りを施す。5～10は丸底の底部から立ち上がり稜からやや外傾し、口縁部に至る。口縁ヘラナデ、外面ヘラ削りを施し、6、10は内面黒色で7にはヘラによる調整痕が認められる。9は内外面ともにミガキを施す。11は丸底の稜を持たない坏である。12は坏で丸底の底部から立ち上がり口縁端部で外反する。13は手づくね土器である。14は小型の壺で口縁ナデ、外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施し口縁部は直上する。15～17は小型の甕で口縁横ナデ、外面ヘラ削りを施す。16はやや広口で、最大径が口縁部にくる。18は播り鉢状の甑で、底部中央に2.5cmの孔がありその周囲にクシを通した程度の孔が5個認められる。器形はやや削り出された底部から内彎気味に立ち上がり口縁端部で僅かに外反する。口縁横ナデ、体部縦方向のヘラ削り、底部付近は斜め方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。19～22は長胴の甕で19の最大径は胴部中央付近に、20は胴部中央のやや下に最大径がくる。21、22は口縁から胴部にかけての破片である。23は取っ手付きの甑破片と思われる。24、25は土製の勾玉で24はいびつだが完形で、25は先端部のみ残存していた。26～32は滑石製の白玉で径7mm、厚さ2.5～4.5mmを測る。新4号住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられ、(Ⅱ期)旧住居址は僅か先行するものと思われる。



第22図 H4号住居址遺物実測図(1)



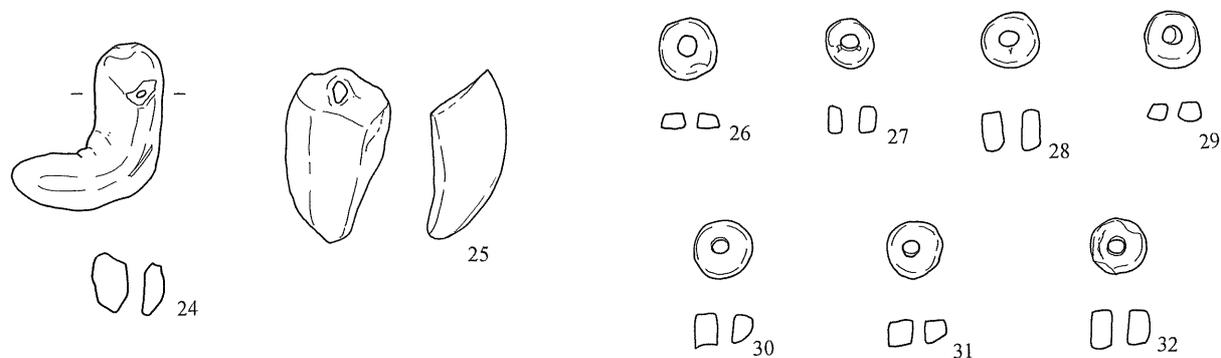
第23図 H4号住居址遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	須恵器	蓋	13.5	—	—	ロクロナデ 天井部回転ヘラ削り	40	良好	5BG3/1 暗青灰色
2	土師器	坏	16.9	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削リ・ナデ 内面ミガキ	40	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
3	土師器	坏	16.2	丸底	6.5	外面ヘラ削り 内面口縁横ナデ	95	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	16.2	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削リ・ナデ	95	良	7.5YR6/6 橙色

第8表 H4号住居址遺物観察表(1)

5	土師器	坏	16.4	丸底	5.5	□縁ミガキ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ミガキ	40	良	7.5YR7/6 橙色
6	土師器	坏	13.8	丸底	4.6	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ 黒色処理	100	良	5YR5/3 鈍い赤褐色
7	土師器	坏	14	丸底	5.2	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラミガキ	90	良	7.5YR8/6 浅黄橙色
8	土師器	坏	[16.3]	丸底	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	□縁破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
9	土師器	坏	[14.4]	丸底	—	□縁横ナデ・ミガキ 外面ヘラ削り 内外面ミガキ	□縁破片	良	7.5YR6/6 橙色
10	土師器	坏	[14]	丸底	4.5	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ・黒色処理	45	良	5YR6/6 橙色
11	土師器	坏	[13.8]	丸底	5	□縁ミガキ 外面ヘラ削り 内面ミガキ・黒色処理	40	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
12	土師器	坏	13.2	丸底	5.6	□縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ミガキ	100	良	7.5YR8/6 浅黄褐色
13	手づくね	坏型	10	丸底	5.1	外面指圧痕・ヘラ削り 内面指圧痕・ヘラナデ	100	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
14	土師器	壺	10	5	10.7	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	80	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
15	土師器	小型甕	12.5	6.1	9.3	□縁横ナデ 外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	95	良	10YR6/6 明黄褐色
16	土師器	小型甕	15.7	6	12.3	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ハケ目ナデ	100	良	5YR5/4 鈍い赤褐色
17	土師器	甕	[14.9]	—	—	□縁横ナデ 外面斜めヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
18	土師器	甕	17.3	6.4	13.5	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	70	良	5YR7/3 鈍い橙色
19	土師器	甕	16.4	5.6	28.9	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	100	良	10YR8/3 浅黄褐色
20	土師器	甕	17.8	5.5	31.8	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	75	良	10YR7/2 鈍い黄褐色
21	土師器	甕	[18.8]	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁破片	良	7.5YR7/6 橙色
22	土師器	甕	[24]	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁破片	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
23	土師器	甕	—	—	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 取って張り付け	胸部破片	良	7.5YR8/3 浅黄褐色

第9表 H4号住居址遺物観察表(2)



第24図 H4号住居址勾玉・白玉実測図

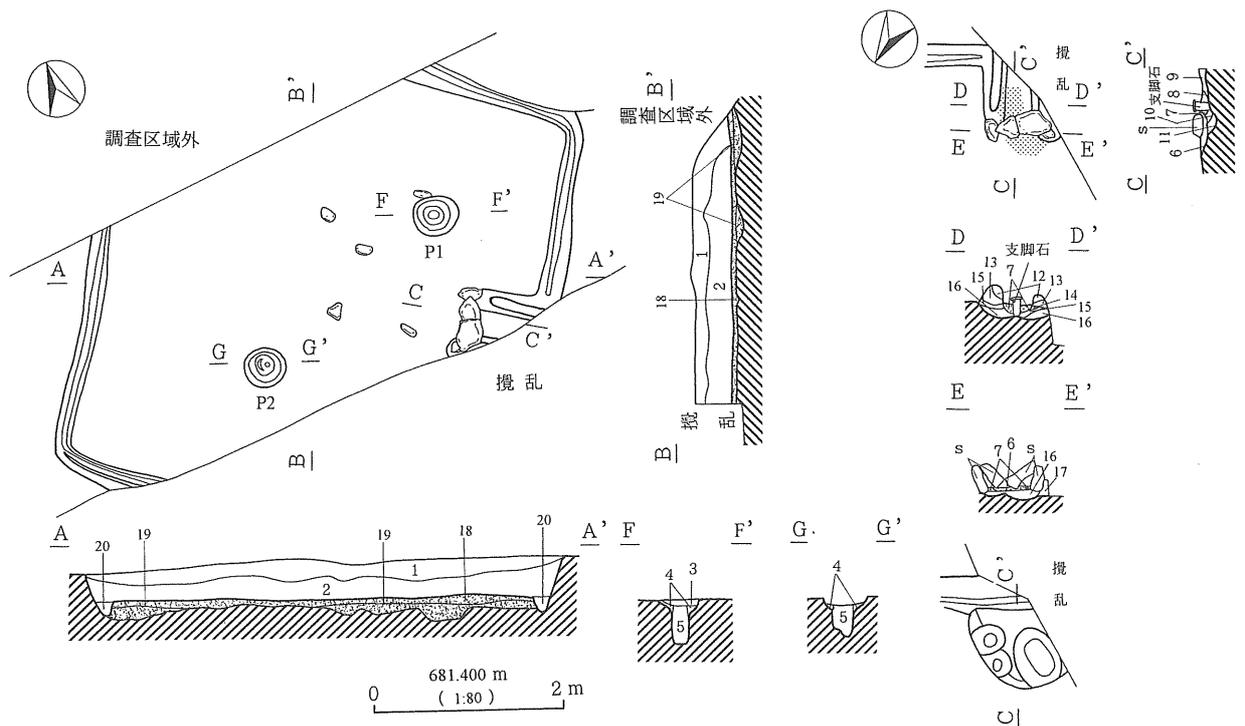
番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
24	I区	勾玉	22	9.95	3.3~3.6	2.76	土製	橙色
25	I区	勾玉	[23.4]	[10]	—	2.49	土製	灰白色
26	IV区	白玉	1.4	7.5	1.8	0.17	滑石	灰色
27	III区	白玉	3.05	6	2.2	0.22	滑石	鈍い黄褐色
28	IV区	白玉	3.9	7.3	1.8	0.43	滑石	黄灰色
29	I区	白玉	2	7.6	2.5	0.2	滑石	黄灰色
30	I区	白玉	4.6	7.05	2.1	0.4	滑石	灰黄褐色
31	I区	白玉	3.4	7.3	2.4	0.27	滑石	灰黄褐色
32	II区	白玉	5.2	7.5	2.35	0.43	滑石	鈍い黄褐色

第10表 H4号住居址勾玉・白玉観察表

## H 5 号住居址

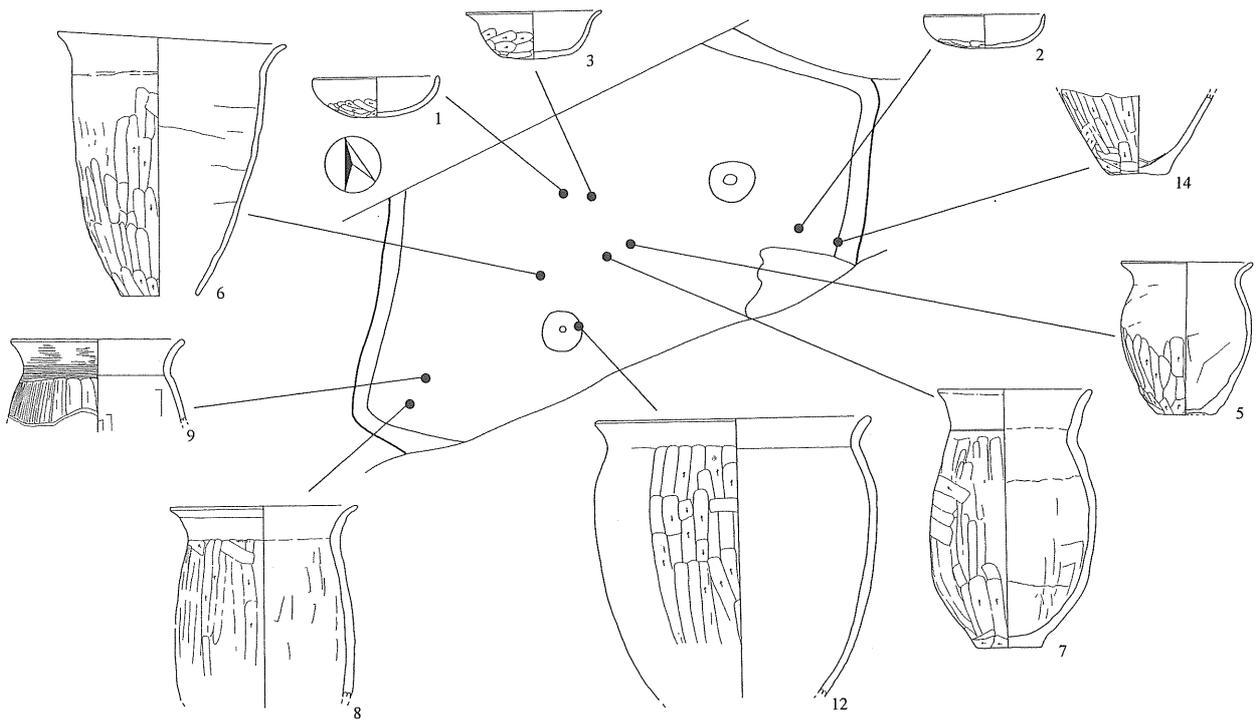
遺構は調査区中央の11-Iグリッドに位置し、北西、南東コーナーを大きく攪乱、水路によって破壊されている。覆土は強粘性の黒褐色土、黄褐色土が水平に堆積している。規模は東西5.0m、南北は推測で5.2m、深さ45cm内外を測る。平面形は方形で、壁に沿って周溝が認められた。床面は固く平坦で、床面上から多数の土器が出土した。ピットは主柱穴が2個確認できた。P1の上部には集石が認められ、P2上には破損した甕が蓋をするように落ち込んでいた。カマドは東壁中央付近にあり、北袖、僅かな南袖先端部分及び火床が残存していたが、カマド南東部は攪乱によって完全に破壊されていた。しかし、残存部の状態は比較的良好で、粘土で構築された袖は東壁から住居内に100cmのび、先端部には焼き口部補強用の石材が埋め込まれ、その上に天井石が認められた。火床には焼土が厚く堆積し、細長い山形土製の支脚が細い部分を埋め込み、上部先端には笠状に土器片がかぶせられていた。床下は6~18cmの厚みがあり、上層に床と思われる黒褐色土、下層に鈍い黄褐色土が埋め込まれていた。

遺物は床面直上から土師器が多数出土し、石製品も若干出土した。図示できたのは土師器15点、手づくね土器1点、土製支脚1、玉類3、石製模造品1(幣)である。1~3は坏で、1、2は丸底の底部から内彎気味に立ち上がり口縁に至る。3はヘラ削りされた平らな底部から立ち上がり、口縁付近で大きく外反する。坏の底部及び外面はヘラ削りを施す。内面はいずれも摩耗が激しく調整は不鮮明であった。4は台付甕



- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土多。強粘性。         | 11層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。      |
| 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土・アツク。強粘性。      | 12層 橙色土 (5YR6/6) 焼土層。火を受け固い。(袖)         |
| 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物少量。             | 13層 鈍い黄褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土主体。固い。(袖)      |
| 4層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。(ピット)        | 14層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 暗褐色土、炭化物。強粘性。      |
| 5層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土。炭化物少。(柱痕)     | 15層 黒褐色土 (10YR2/3) 粒子密。強粘性。(袖)          |
| 6層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土層。粒子細かい。(火床)   | 16層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 暗褐色土、小石。強粘性。       |
| 7層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 焼土層。粒子密。強粘性。(火床) | 17層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土、炭化物、焼土。強粘性。     |
| 8層 黒褐色土 (10YR3/2) 黄褐色土、焼土、炭化物。       | 18層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土。土間状で固い。床。       |
| 9層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土微量。強粘性。          | 19層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。暗褐色土、砂。(床下) |
| 10層 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土・炭化物少。強粘性。      | 20層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土、炭化物。しまりあり。周溝。   |

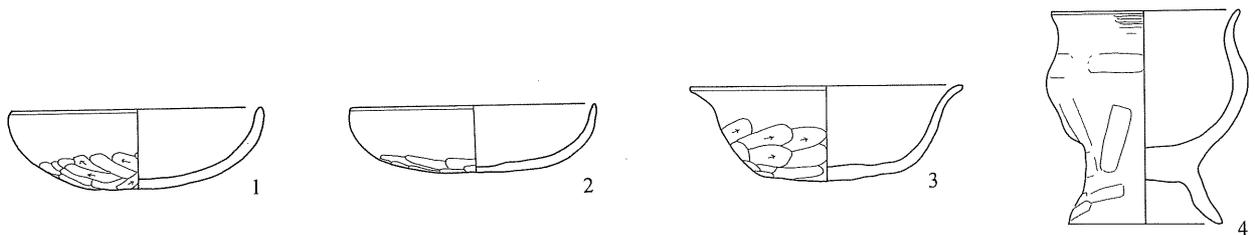
第25図 H 5 号住居址実測図



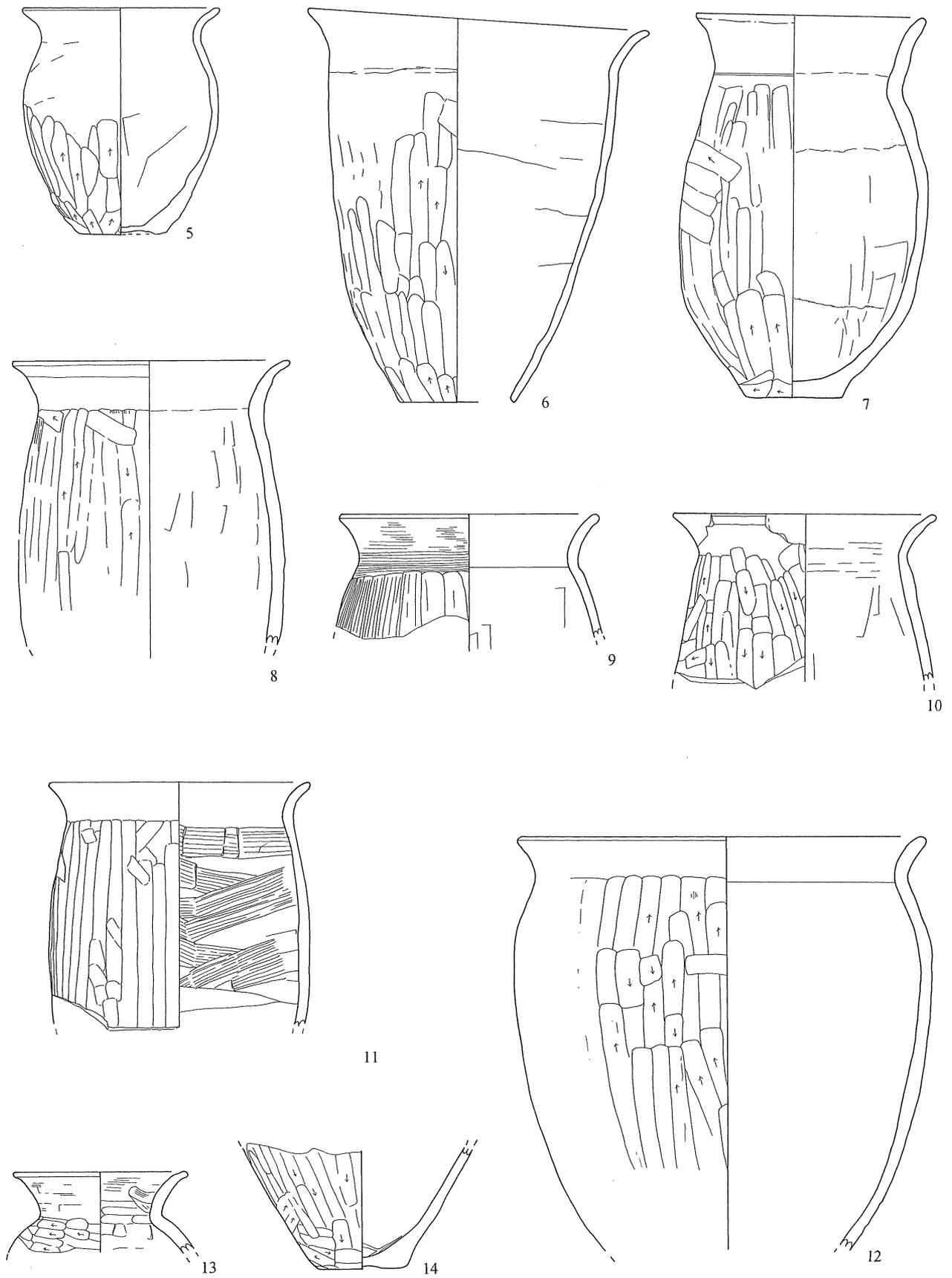
第26図 H5号住居址遺物出土位置図

で台状の低い脚部から内彎気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。5は小型甕で底部及び体部から口縁にかけて3分の1破損している。底部から体部中央付近にかけて縦方向の明瞭なヘラ削り痕が残る。6は甑で底の抜けた底部からやや外傾気味に立ちあがり、口縁付近で僅かに外反する。外面縦方向のヘラ削り、内面はヘラナデ、輪積み痕が認められる。7～11は長胴甕で7は一部破損しているがほぼ原型を保ち、胴部中央付近に最大径がくる。8は口縁から胴中央部にかけて残存する。外面は縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。9は口縁から胴上部にかけて残存し、外面ハケ目が残り、内面ヘラナデを施す。10、11は口縁から胴部にかけての破片である。外面縦方向のヘラ削り、内面は10はヘラナデ、11はハケ目を施す。12は広口の甕である。13は胴部の膨らんだ甕の口縁から胴部にかけての破片で、外面ヘラ削り後ミガキ、内面ヘラナデを施す。14は甕の底部で外面ヘラ削りを施す。15は胴部のやや下方部に最大径がくる甕で、底部から胴下半部にかけての破損品である。胴部最大径の上部は縦方向のハケ目、下部は縦、横方向のヘラ削り、内面はハケ目を施す。16は非常に小型の手づくね土器で、胴部に径4mmの孔が開けられている。土笛の可能性が考えられる。床面直上から出土した。17は細長い山形の土製支脚で土師器片と組合わせて利用されていた。18、19は滑石製の白玉、20は緑色凝灰岩製の管玉である。21は扁平な滑石のほぼ中央に孔が穿たれている石製模造品（幣）と考えられる。

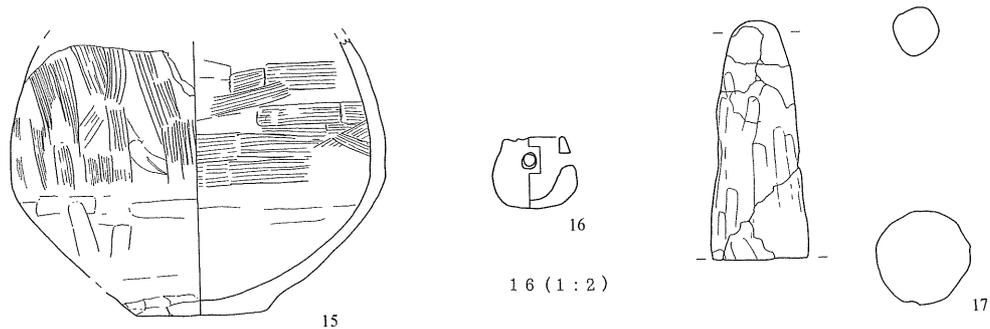
本住居址は5世紀末～6世紀初頭、古墳時代中期終末から後期初頭と考えられる。(I期)



第27図 H5号住居址遺物実測図(1)



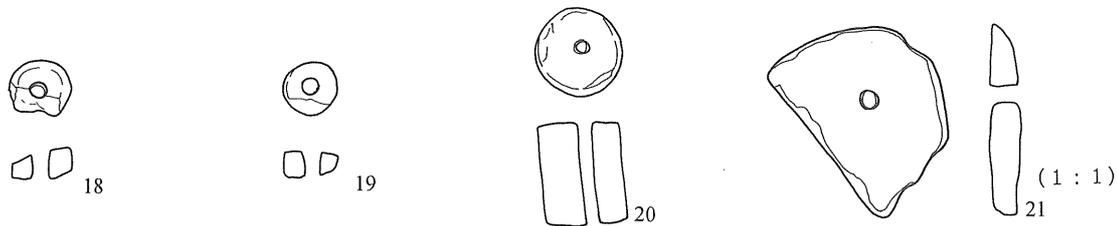
第28图 H5号住居址遺物実測図(2)



第29図 H5号住居址遺物実測図(3)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	13.4	丸底	4.3	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	80	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
2	土師器	坏	13	丸底	3.5	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	95	良	5YR8/3 淡橙色
3	土師器	坏	14.2	8.2	5	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	90	良	7.5YR6/6 橙色
4	土師器	台付甕	10	8.2	11.3	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	90	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
5	土師器	甕	14.2	6	16.1	□縁横ナデ 外面下半縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	5YR8/4 淡橙色
6	土師器	甕	24.5	8.2	27.5	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部単孔	100	良	7.5YR6/3 鈍い褐色
7	土師器	甕	16.9	6.8	28.2	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	80	良	7.5YR8/2 灰白色
8	土師器	甕	19.8	—	—	□縁横ナデ 外面縦ハケ目・ヘラ削り 内面ヘラナデ	60	良	10YR8/3 浅黄橙色
9	土師器	甕	18.5	—	—	□縁横ナデ 外面ハケ目・ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁100	良	5YR7/4 鈍い橙色
10	土師器	甕	[18.9]	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁胴部破片	良	7.5YR5/4 鈍い褐色
11	土師器	甕	[18.6]	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ハケ目	□縁胴部破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
12	土師器	甕	29.3	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	40	良	7.5YR6/4 鈍い褐色
13	土師器	甕	[12.4]	—	—	□縁横ナデ 外面横ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁頸部破片	良	10YR6/1 褐灰色
14	土師器	甕	—	6	—	外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部胴部破片	良	7.5YR4/4 褐色
15	土師器	甕	—	9	—	外面ハケ目・ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部胴部破片	良	5YR6/8 橙色
16	手づくね	土笛?	1.8	1.6	2.3	□縁直下5mmに径5mmの孔	100	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
17	土師器	土製支脚	—	6.2	15.9	外面ヘラ削り・ナデ	90	良	7.5YR8/2 灰白色

第11表 H5号住居址遺物観察表



第30図 H5号住居址玉類・石製模造品実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
18	Ⅱ区	白玉	2.85	7.9	2.35	0.25	滑石	灰白色
19	I区	白玉	3	7.3	2.6	0.28	滑石	灰白色
20	Ⅳ区	管玉	13.4	11.4	1.65	2.17	緑色凝灰岩	明緑灰色
21	Ⅱ区	石製模造品	3.85	25	2.5	3.11	滑石	灰オリープ色

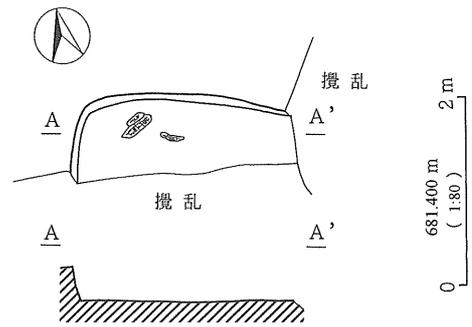
第12表 H5号住居址玉類・石製模造品観察表

## H 6 号住居址

遺構は調査区中央付近の11-え-Iグリッドに位置し、住居址の大半は攪乱によって破壊され、確認できたのは北西コーナーの一部である。壁高は40cm内外を測り、床面は平坦である。

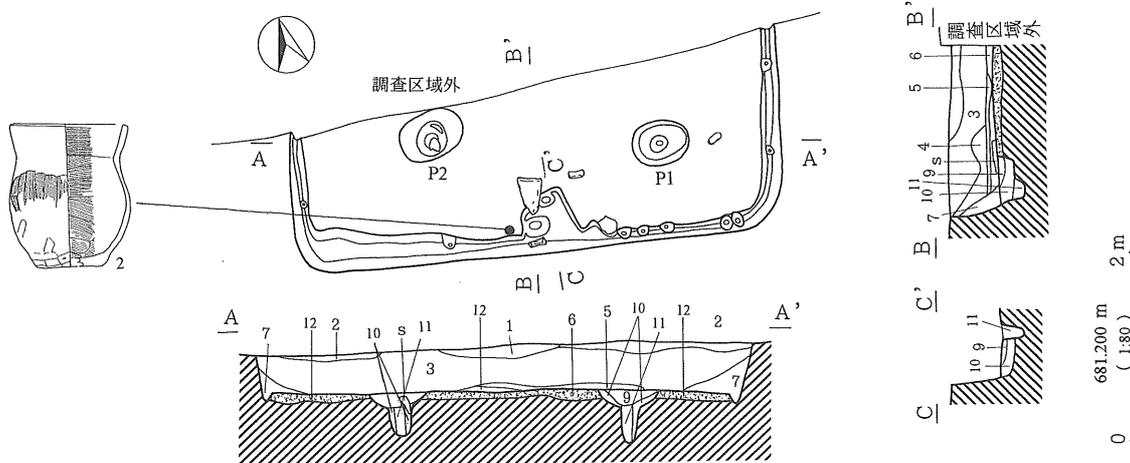
遺物は土師器片が僅かに出土したが、いずれも小破片で図示できるものは存在しなかった。

時期は不明である。



第31図 H 6号住居址実測図

## H 7 号住居址



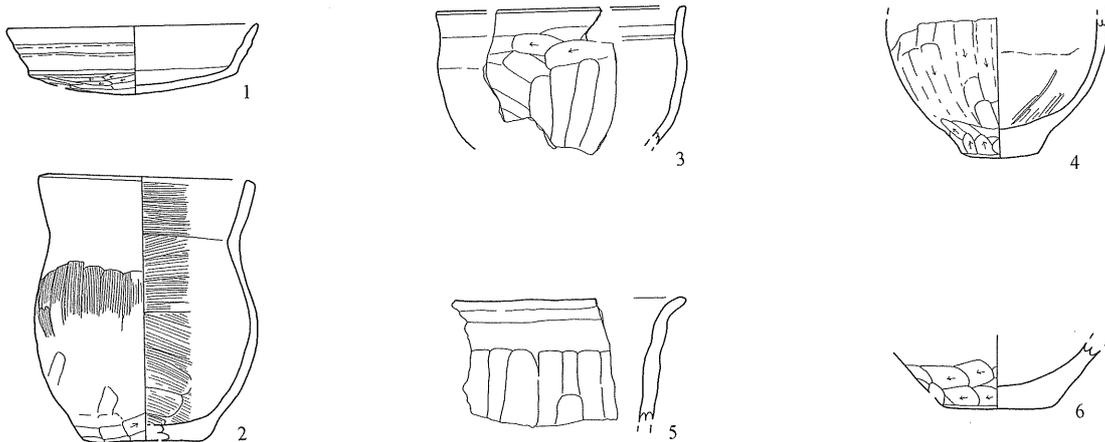
- |                                   |  |
|-----------------------------------|--|
| 1層 黒褐色土(10YR2/2)黄褐色土粒・フロック少量。強粘性。 | 7層 黒褐色土(10YR2/2)他の層より強粘性。                |
| 2層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土粒・フロック少量。強粘性。 | 8層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土粒少量。他の層より強粘性。        |
| 3層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土フロック多量。強粘性。   | 9層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土フロック、炭化物。強粘性。(ピット)   |
| 4層 暗褐色土(10YR3/4)黄褐色土フロック多量。強粘性。   | 10層 暗褐色土(10YR3/4)黄褐色土フロック多。強粘性。(ピット)     |
| 5層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土フロック少量。強粘性。   | 11層 褐色土(10YR4/4)黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。(柱痕)     |
| 6層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土フロック多量。強粘性。   | 12層 褐色土(10YR4/6)黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。上面強固、床面。 |

第32図 H 7号住居址実測図

遺構は調査区のやや西よりの11-く-Iグリッドに位置し、北3分の2は調査区外となるが、すでに水路となっているため住居址はすでに破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒色土、暗褐色土である。規模は南壁5.2m、西・東壁は残存規模で西壁1.4m、東壁2.1mを測り、深さは50cm(床面)である。平面形は残存部の形態から方形と考えられる。壁はほぼ垂直で、壁際に周溝が認められた。床は平坦で固いが、南壁中央付近は床面がやや窪み、小ピットが認められた。位置的に出入り口であった可能性が考えられる。支柱穴は南側の2本が確認でき、P1は60cm、P2は50cmの深さを測る。残存部にカマドは存在しなかった。床下には3~8cmの褐色土が埋め込まれ、その上面を床面として利用していた。

遺物は覆土及び、床直上から土師器が出土した。図示したのは土師器6点である。1は坏で口縁横ナデ、外面へラ削りを施す。内面の調整痕は摩耗のため不明である。2は小型甕で口縁横ナデ、内外面にハケ目を施す。3、4は鉢で3は口縁破片、4は底部から体部にかけての破片である。5は甕又は甑の口縁破片と思われる。6は甕の底部で、外面へラ削りを施す。

本住居址は、古墳時代後期、6世紀代と考えられる。

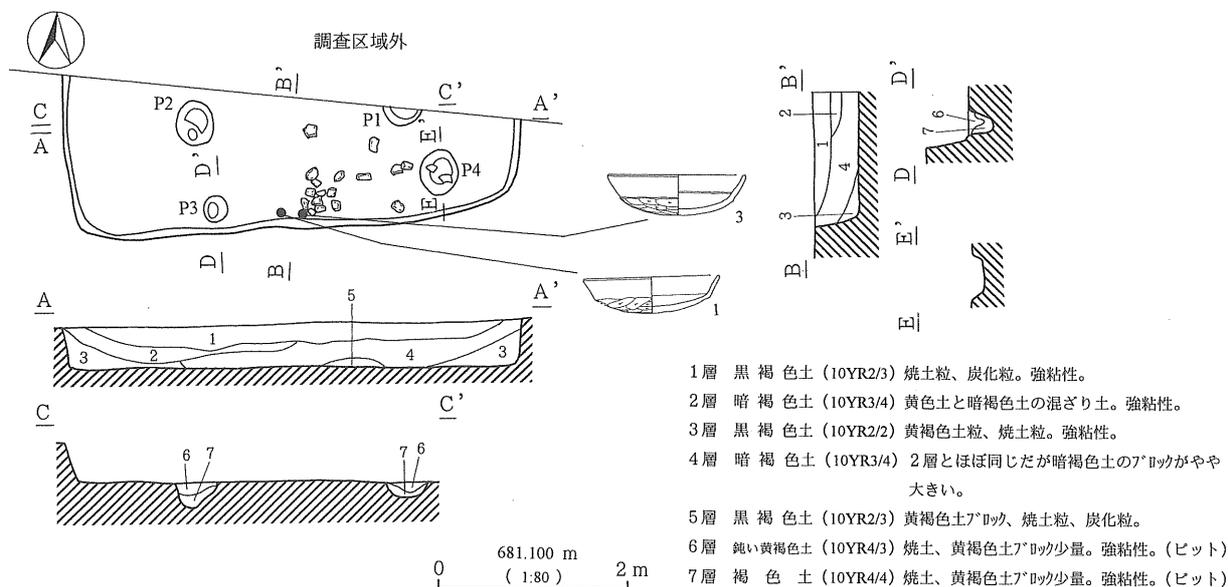


第33図 H7号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[14.2]	丸底	3.9	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	40	良	5YR6/4 鈍い橙色
2	土師器	小型甕	12.4	6.8	15.5	口縁横ナデ 外面縦ハケ目・ヘラ削り 内面ハケ目	80	良	10YR6/4 鈍い黄橙色
3	土師器	鉢	[14.4]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁体部破片	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
4	土師器	鉢?	—	5	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ 内面黒色	底部体部破片	良	10YR8/3 浅黄橙色
5	土師器	甕?	—	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	10YR8/2 灰白色
6	土師器	甕	—	6.4	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部体部破片	良	5YR6/6 橙色

第13表 H7号住居址遺物観察表

### H8号住居址



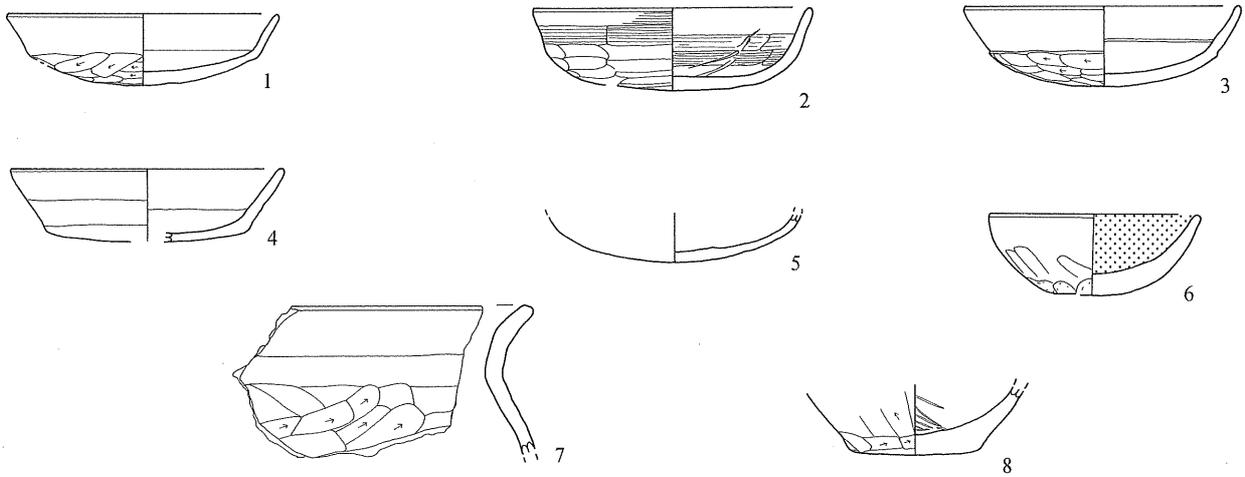
第34図 H8号住居址実測図

遺構は調査区中央のやや西11-こ-Iグリッドに位置し、北側の3分の2以上は調査区外となるが、北には水路が存在することから遺構はすでに破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒褐色土、暗褐色土である。規模は南壁4.7m、西、東壁は残存規模で西壁1.6m、東壁0.8mを測り、深さは60cm(床面)である。平面形は残存部の形態から方形と考えられる。壁はほぼ垂直、床は固く平坦で、直上に石の散布が

認められた。ピットは4個確認でき、P1、P2が支柱穴と思われるが、深さは20cm程度と比較的浅い。床下の掘方はなく、黄褐色の強粘性土を直接床面として利用していた。

遺物は土師器が覆土内及び、南壁中央付近の床直上から出土した。図示できたのは土師器8点である。1～5は稜を有する坏で、丸底の底部から立ち上がり、稜から1～4はやや外傾気味に立ち上がる。口縁横ナデ、外面ヘラ削りを施す。5は底部から稜直前付近の破片である。6は雑に製作された厚手の坏で底部付近に粗く削った工具痕が残り凹凸が激しい。底部は平底気味で、内面は黒色である。これらの坏内面は全体に摩耗が激しく調整痕が不鮮明で不明なものが多い。7、8は甕で7は口縁の破片、8は底部付近の破片である。

本住居址は6世紀後葉から7世紀初頭、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲb期)



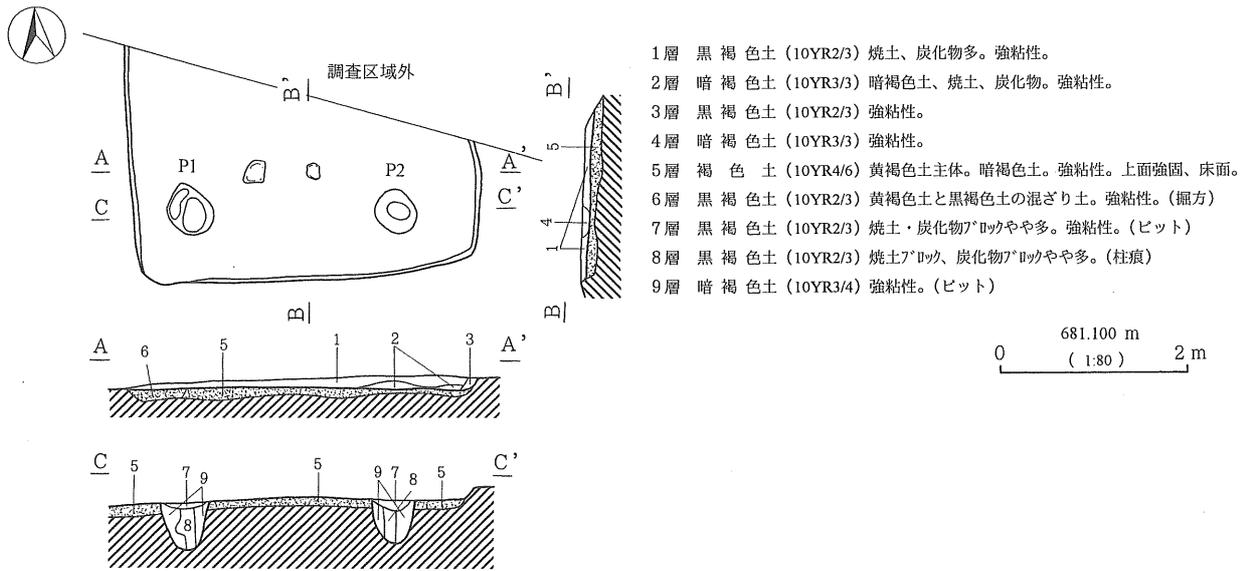
第35図 H8号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	14.8	丸底	4.3	口縁横ナデ 外面底部ヘラ削り 内面ミガキ	70	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	坏	[14.8]	丸底	4.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ 十字状暗文	40	良	7.5YR8/1 灰白色
3	土師器	坏	[14.4]	丸底	3.8	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	50	良	5YR6/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	[14.3]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	20	良	7.5YR8/2 灰白色
5	土師器	坏	—	丸底	—	外面ヘラ削り	底部破片	良	2.5YR4/6 赤褐色
6	土師器	坏	11.2	丸底	4.3	外面ヘラ削り 内面黒色処理	70	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
7	土師器	甕	—	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	7.5YR7/6 橙色
8	土師器	甕	—	6.9	—	外面底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	5YR5/4 鈍い赤褐色

第14表 H8号住居址遺物観察表

### H9号住居址

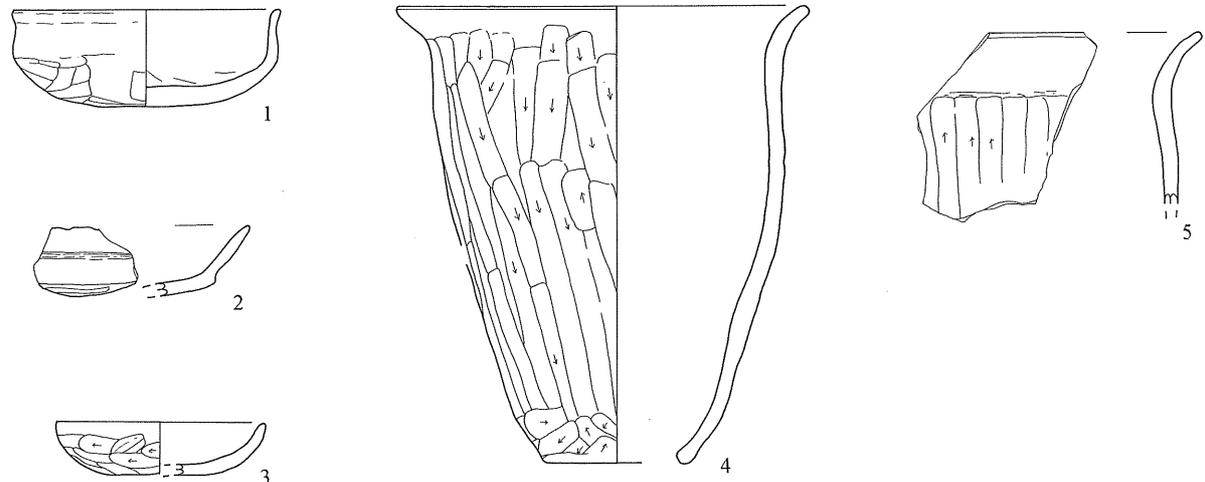
遺構は調査区やや西13-あ-Hグリッドに位置し、北側半分は調査区外となるが、北には水路が存在することから、遺構はすでに破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒褐色土である。規模は南壁3.6m、西・東壁は残存規模で西壁2.6m、東壁1.3mを測り、深さは5～10cm(床面)と浅い。平面形は残存状態から方形と思われる。壁際に周溝は存在せず、床面は強粘性の黄褐色土で固く平坦である。ピットは支柱穴が2個認められ、ともに45cmの深さを測る。床下は10cm内外の厚みで強粘性の黄褐色土が埋め込まれており、この上面を床面として利用していた。



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土、炭化物多。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 暗褐色土、焼土、炭化物。強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 強粘性。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 強粘性。
- 5層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。上面強固、床面。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土と黒褐色土の混ざり土。強粘性。(掘方)
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土・炭化物7割やや多。強粘性。(ピット)
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土7割、炭化物7割やや多。(柱痕)
- 9層 暗褐色土 (10YR3/4) 強粘性。(ピット)

第36図 H9号住居址実測図

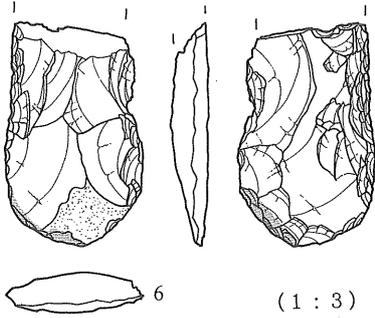
遺物は床の直上付近から土師器、覆土から石器が出土した。図示できたのは6点である。1～3は坏で1、2は稜を有し、丸底の底部から立ち上がり稜から1はほぼ直上し口縁端部で外反する。2はやや外傾気味に口縁に至る。3は丸底の坏である。坏の内面は摩耗が激しく調整痕は不鮮明である。4は甑で底を抜いた底部からやや外傾気味に立ち上がり、口縁端部で外反する。5は甕口縁部破片と思われる。6は混入品の打製石斧である。本住居址は、古墳時代後期、6世紀代から7世紀初頭と考えられる。



第37図 H9号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	14	丸底	5.1	口縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ・ミガキ	50	良	5YR8/3 淡橙色
2	土師器	坏	—	—	—	口縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ・ミガキ	体部～底部	良	5YR7/4 鈍い橙色
3	土師器	坏	[11.1]	丸底	2.8	外面へら削り	30	良	7.5YR5/6 明褐色
4	土師器	甑	21.9	7.7	24.1	口縁横ナデ 外面縦へら削り 内面へらナデ	60	良	10YR7/4 鈍い黄橙色
5	土師器	甕	—	—	—	口縁横ナデ 外面縦へら削り 内面へらナデ	口縁～体部破片	良	7.5YR6/6 橙色

第15表 H9号住居址遺物観察表

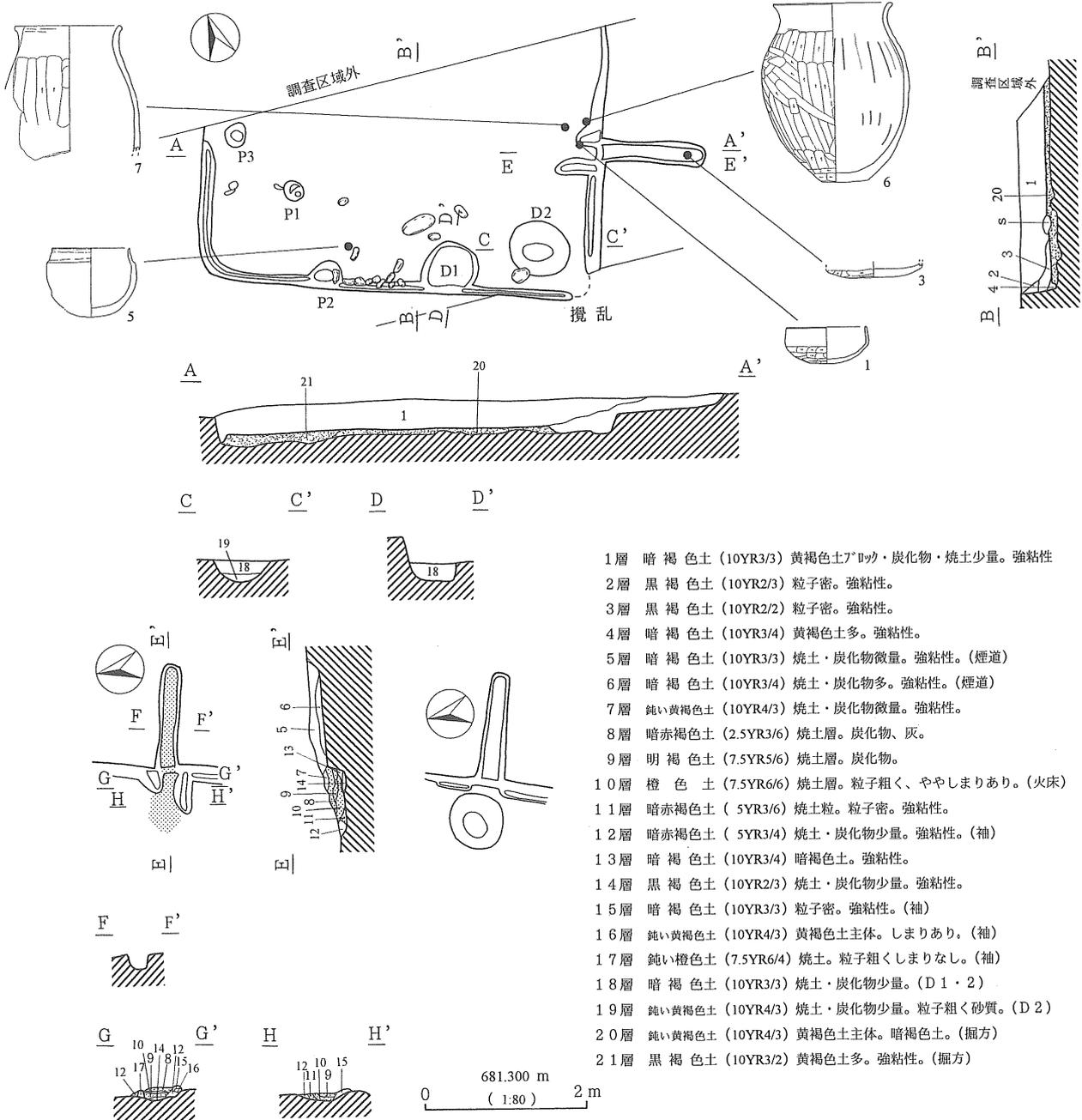


番号	出土位置	器種	石材	
	6	Ⅳ区	打製石斧	硬質砂岩
6	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
	8.9	5.5	1.5	73.25

第16表 H 9号住居址石器観察表

(1:3) 第38図 H 9号住居址石器実測図

H 10号住居址

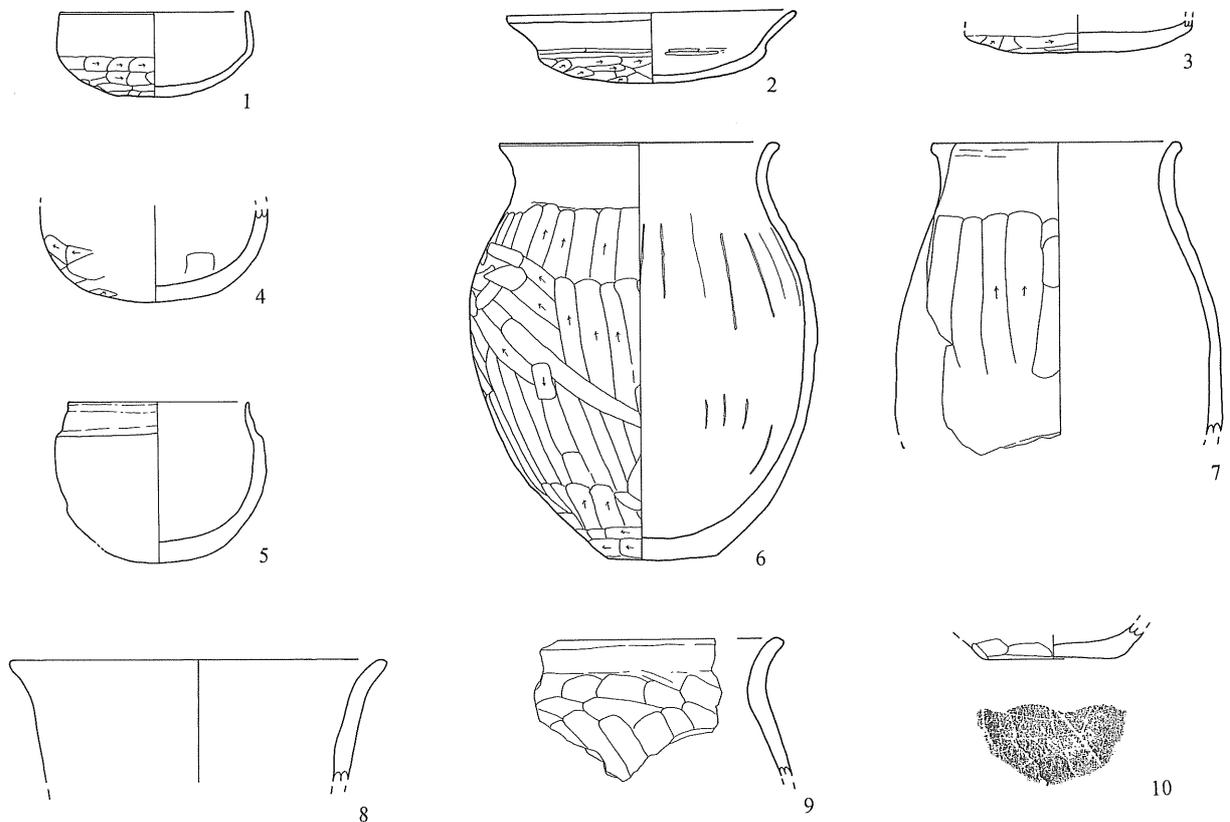


第39図 H 10号住居址実測図

遺構は調査区中央のやや西Ⅱ-Ⅰ-Ⅰグリッドに位置し、北側3分の1は調査区外となるが、北には水

路が存在することから、遺構はすでに破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の暗褐色土である。規模は南壁5.0m、西、東壁は残存規模で西壁1.8m、東壁3.4mを測り、深さ40cm(床面)である。平面形は残存状況から方形と考えられる。壁はほぼ垂直で壁際には東壁の北側を除き周溝が認められた。床面は固くほぼ平坦でピットは小ピットが3個認められたが、いずれも支柱穴とは考えられなかった。南東コーナーには径70cm、深さ30cm、南壁際中央には径60cm、深さ30cmの土坑が存在した。また、南壁際の周溝直上に編み物石らしき多数の石の散布が見られた。カマドは東壁にあり、袖は粘土で構築され、住居内に北袖30cm、南袖50cmのびていた。両袖に挟まれた火床には多量の焼土が堆積し、更に袖先端から住居中央に向かって40cm付近にまで焼土が堆積または散布していた。煙道は東壁付近から急激に立ち上がった後、確認面から深さ15cm程の溝状を呈し、住居外130cmに至る。煙道の底は熱によって赤く焼けていた。床下は3~8cmの厚さで黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

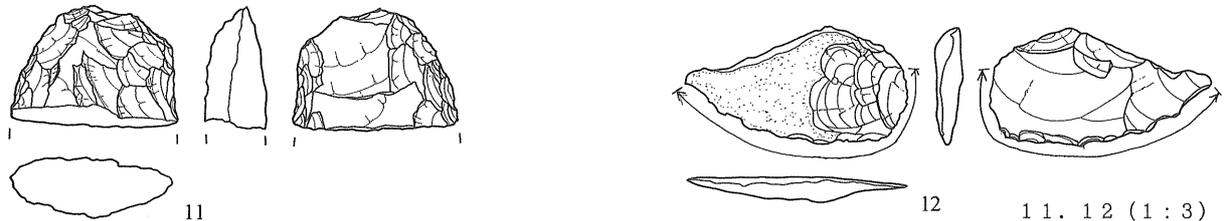
遺物は床上及び覆土内から多数の土師器が出土したが、図示できたのは土師器10点、丸玉1点、石器2点である。1~3は稜を有する坏で丸底の底部から立ち上がり稜から1はやや内傾し、2は大きく外反し口縁部に至る。3は底部付近のみ残存し、1、2に比べ底部の丸みが緩やかである。4、5は鉢で、4は底部から体部にかけての破損品、5は一部破損しているが器形の全体像は伺い知ることができる。ともに丸底の底部から丸みを持って立ち上がり、5は口辺下部で明瞭な稜を持った後、やや内傾し口縁端部で僅かに外反する。6、7、9、10は甕で6はやや胴の張った小型の甕で、ほぼ完形である。最大径は胴部のやや上方にくる。7、9は甕の口縁から胴部にかけての破損品で口縁部は僅かに外反する。8は甕又は甑の口縁破片と思われる。10は底部の破損品である。11は打製石斧、12はスクレーパーで南東コーナー付近のD2から出土した混入遺物である。本住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅱ期)



第40図 H10号住居址実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	10	丸底	4.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	95	良	10YR8/4 浅黄褐色
2	土師器	坏	[15.4]	丸底	3.7	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	10	良	5YR5/4 鈍い赤褐色
3	土師器	坏	—	丸底	—	外面横ナデ 内面ミガキ	底部周辺破片	良	2.5YR5/8 明赤褐色
4	土師器	鉢	—	丸底	—	外面ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	40	良	5YR6/6 橙色
5	土師器	鉢	9.5	丸底	8.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	70	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
6	土師器	甕	14.9	8	22.1	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	95	良	5YR7/6 橙色
7	土師器	甕	[13]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁胴部破片	良	5YR7/4 鈍い橙色
8	土師器	甕or甗	[20]	—	—	口縁横ナデ	口縁破片	良	10YR8/4 浅黄褐色
9	土師器	甕	—	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
10	土師器	甕	—	7.2	—	外面ヘラ削り 底部木葉痕	底部破片	良	7.5YR4/2 灰褐色

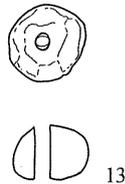
第17表 H10号住居址遺物観察表



第41図 H10号住居址石器実測図

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	D2	打製石斧	輝石安山岩	4.8	6.6	2.5	81.69
12	D2	スクレイパー	黒色緻密安山岩	4.6	8.8	1.1	30.84

第18表 H10号住居址石器観察表



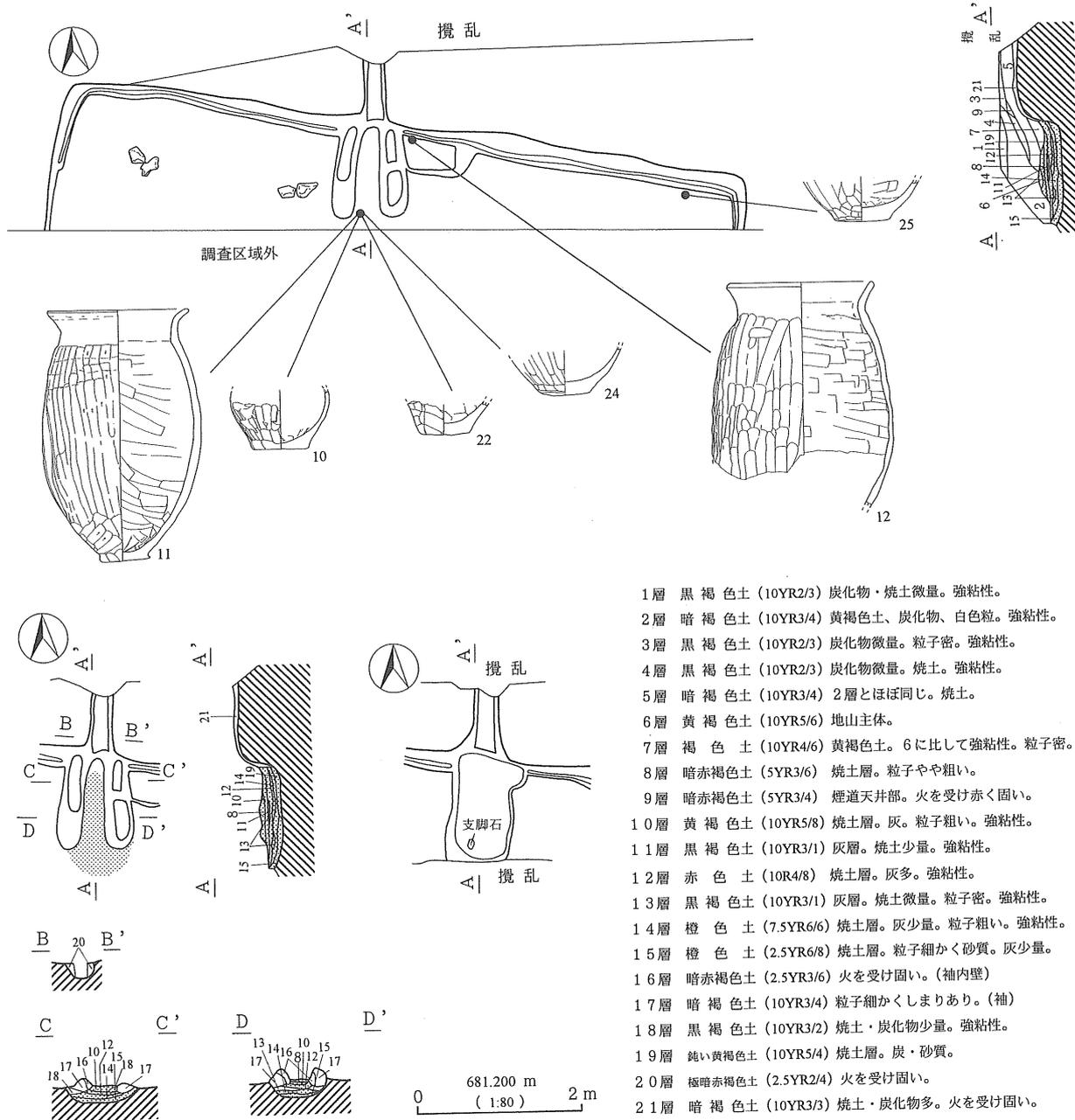
第42図 H10号住居址丸玉実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)
	pit2	丸玉	7.9	10.6
13	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
	1.9	1.17	滑石	緑色

第19表 H10号住居址丸玉観察表

### H11号住居址

遺構は調査区中央付近の南際、12-う-Cグリッドに位置し、南側の大半は調査区外となるが、南には側溝が存在することからすでに破壊された部分も多いと思われる。覆土の大半は強粘性の暗褐色土である。規模は北壁8.4m、西、東壁は残存規模で、西壁1.8m、東壁0.6mを測り、深さは60~70cm(床面)である。確かな平面形は不明だが、周辺集落の住居址形態及び、北壁の規模からして、一辺8.0mを越す方形の大型住居と考えられる。壁はほぼ垂直で壁際に周溝が認められた。床面は固くほぼ平坦である。主柱穴をはじめピットは認められなかった。カマドは北壁中央にあり、袖は粘土で構築され、北壁から住居内に1.3mと非常に長いもので、両袖の間及び先端付近には多量の焼土の堆積、散布が認められ、北壁から1.2m地点に存在した支脚石をほぼ埋め尽くしていた。煙道は北壁付近で急激に立ち上がった後、深さ20cmほどの溝状を呈し、住居外に長くのびていたが、住居址北60cm付近からの攪乱によって途切れているため、その正確な規模を確認することはできなかった。カマドの東部分は、袖に接して床面より一段高い台状遺構が存在し、



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物・焼土微量。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土、炭化物、白色粒。強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物微量。粒子密。強粘性。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物微量。焼土。強粘性。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/4) 2層とほぼ同じ。焼土。
- 6層 黄褐色土 (10YR5/6) 地山主体。
- 7層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土。6に比して強粘性。粒子密。
- 8層 暗赤褐色土 (5YR3/6) 焼土層。粒子やや粗い。
- 9層 暗赤褐色土 (5YR3/4) 煙道天井部。火を受け赤く固い。
- 10層 黄褐色土 (10YR5/8) 焼土層。灰。粒子粗い。強粘性。
- 11層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰層。焼土少量。強粘性。
- 12層 赤色土 (10R4/8) 焼土層。灰多。強粘性。
- 13層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰層。焼土微量。粒子密。強粘性。
- 14層 橙色土 (7.5YR6/6) 焼土層。灰少量。粒子粗い。強粘性。
- 15層 橙色土 (2.5YR6/8) 焼土層。粒子細かく砂質。灰少量。
- 16層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 火を受け固い。(袖内壁)
- 17層 暗褐色土 (10YR3/4) 粒子細かくしまりあり。(袖)
- 18層 黒褐色土 (10YR3/2) 焼土・炭化物少量。強粘性。
- 19層 鈍い黄褐色土 (10YR5/4) 焼土層。炭・砂質。
- 20層 極暗赤褐色土 (2.5YR2/4) 火を受け固い。
- 21層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・炭化物多。火を受け固い。

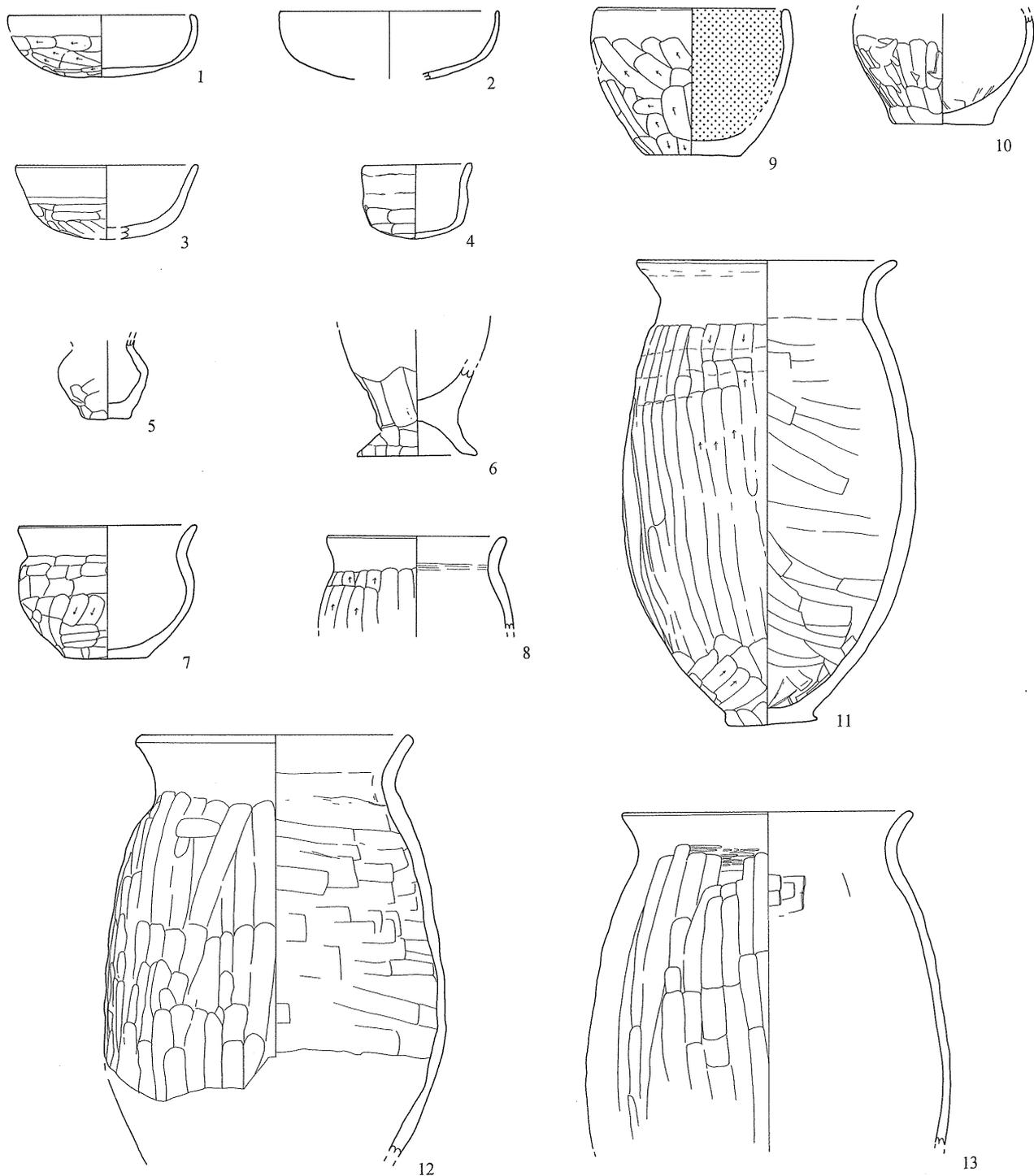
第43図 H 11号住居址実測図

台上の袖と北壁に接する位置に底のない甕が埋め込まれていた。床下は強粘性の黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として利用していた。

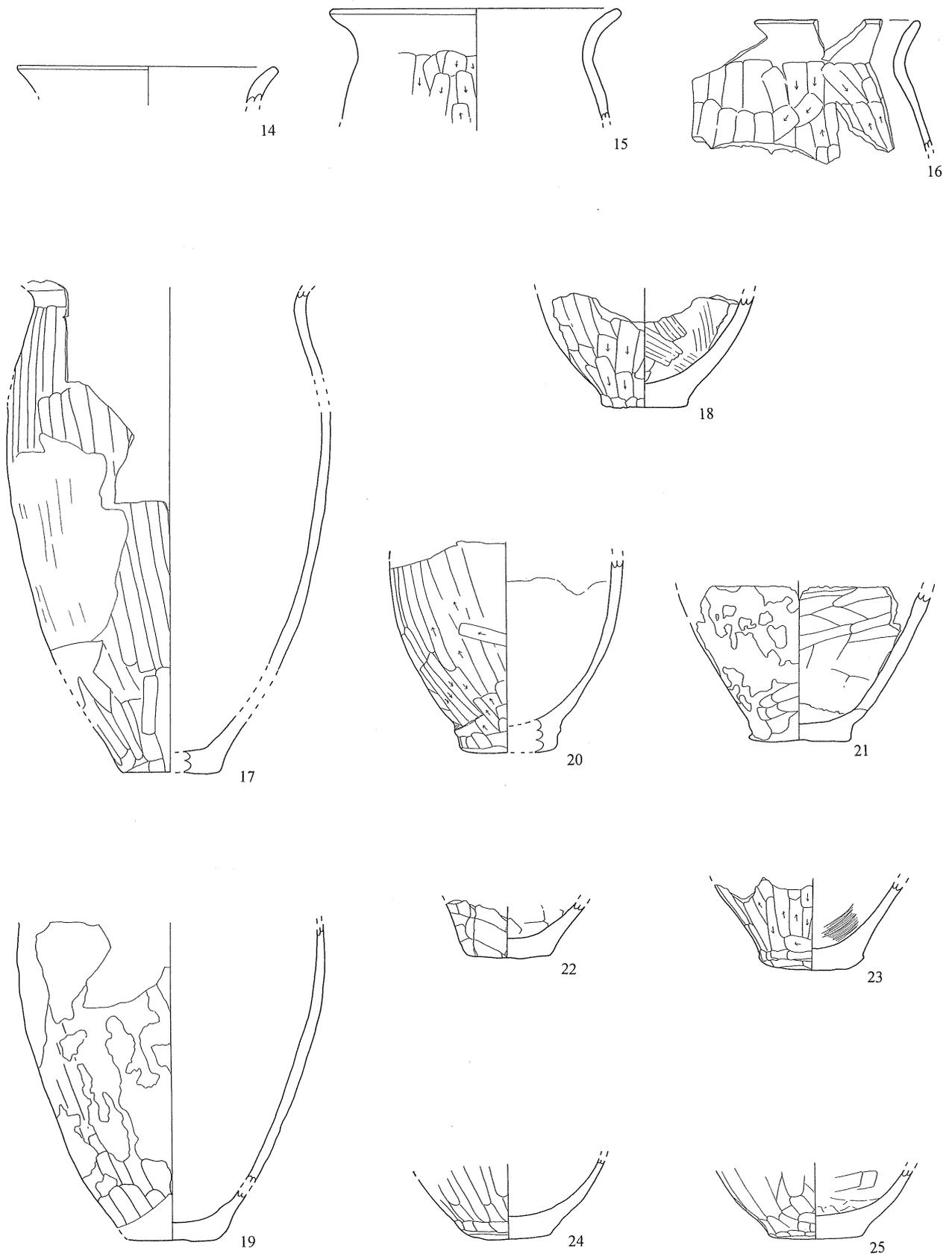
遺物は覆土内及びカマド周辺、床直上から土師器が多数出土した。図示できたのは土師器25点、白玉4点である。1～3は坏で、1、2は丸底の底部からやや内彎気味に立ち上がり口縁に至る。3は稜を有する坏で丸底の底部から立ち上がり、稜から外傾気味に口縁部に至る。口縁横ナデ、外面ヘラ削りを施す。坏の内面は摩耗が激しく調整痕は不鮮明である。4、5は手づくね土器で4は浅い湯飲み形、5は壺形である。ともに外面ヘラ削りを施す。6は小型の台付き甕の台部である。7、8は小型甕で7はほぼ完形で8は口縁付近の破片である。口縁横ナデ、外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。9は鉢で器形の半分が残存し、体部からやや内彎気味に立ち上がり、口縁部に至る。口辺部横ナデ、外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。10は鉢の口縁から胴部にかけての破損品と考えられる。11～25は甕である。11は完形品で、12、13は胴部下

半のみ破損する。いずれも最大径が胴部中央付近にある。12はカマド東に据え置かれていた。14～16は口縁付近の破片である。14は口縁端部付近の破片である。15は口縁3分の1及び僅かな胴部の破片である。16は僅かな口縁部と胴部の破片である。17は甕で口縁から底部にかけての破片で胴部中央付近に最大径のくる器形である。18～25は底部から胴部にかけての破片である。甕はすべて口縁横ナデ、外面ヘラナデ、内面ヘラナデを施す。

本住居址は5世紀末～6世紀初頭、古墳時代中期終末から古墳時代後期初頭と考えられる。(I期)



第44図 H11号住居址遺物実測図(1)



第45图 H11号住居址遗物实测图(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[12.4]	丸底	4	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	40	良	5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	坏	[14.4]	丸底	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	25	良	2.5YR6/6 橙色
3	土師器	坏	[12]	丸底	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ミガキ	30	良	7.5YR5/6 明褐色
4	手づくね	鉢型	7.3	丸底	4.9	外面横ヘラ削り 内面ヘラナデ	60	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
5	手づくね	壺型	—	3.1	—	外面ヘラ削り	80	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
6	土師器	小型 台付甕	—	8	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	台体部破片	良	5YR7/6 橙色
7	土師器	小型甕	11.7	5.4	8.7	□縁横ナデ 外面横・縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	100	良	10R5/6 赤色
8	土師器	小型甕	[11.9]	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ・黒色	□縁体部破片	良	10R4/6 赤色
9	土師器	鉢	[12.2]	6.2	9.6	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	50	良	2.5YR7/4 淡赤褐色
10	土師器	鉢or甕	—	6.6	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	5YR6/6 橙色
11	土師器	甕	17	5.8	30.3	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積み痕	90	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
12	土師器	甕	18.2	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	7.5YR6/2 灰褐色
13	土師器	甕	[19.2]	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	20	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
14	土師器	甕	18.8	—	—	□縁横ナデ	□縁のみ	良	7.5YR8/2 灰白色
15	土師器	甕	[21]	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
16	土師器	甕	—	—	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁体部破片	良	5YR7/4 鈍い橙色
17	土師器	甕	—	[7.2]	—	□縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁体部破片	良	10YR6/4 鈍い黄橙色
18	土師器	甕	—	6.3	—	外面ヘラ削り・ナデ 内面ハケ目	底部、周辺破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
19	土師器	甕	—	[6.6]	—	外面ヘラ削り・吹きこぼれ 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
20	土師器	甕	—	[7]	—	外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	25	良	5YR7/4 鈍い橙色
21	土師器	甕	—	7.3	—	外面ヘラ削り・吹きこぼれ 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	5YR6/4 鈍い橙色
22	土師器	甕	—	6.2	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
23	土師器	甕	—	6.4	—	外面ヘラ削り 内面ハケ目	底部、周辺破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
24	土師器	甕	—	6	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	10R5/8 赤色
25	土師器	甕	—	6.8	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	7.5YR6/4 鈍い橙色

第20表 H11号住居址遺物観察表

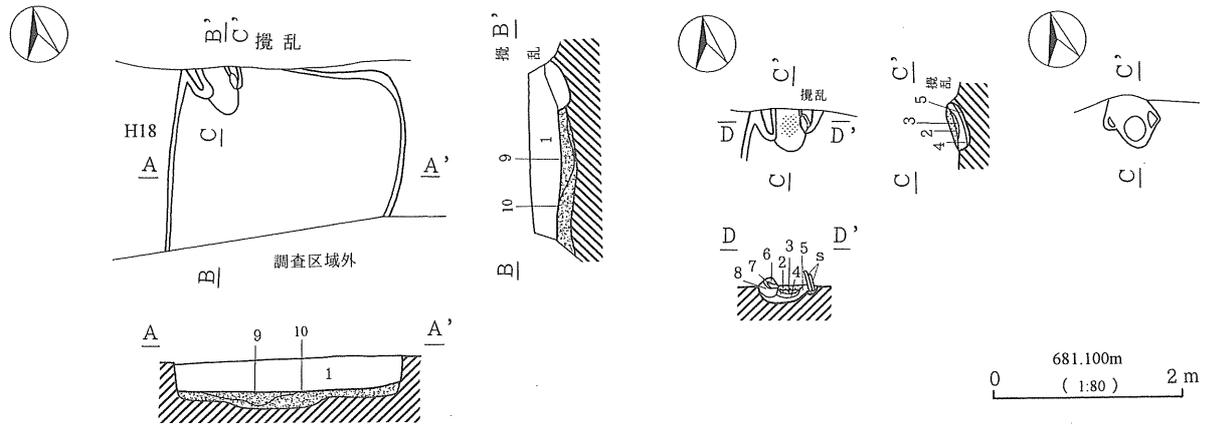


第46図 H11号住居址白玉実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
26	I区	白玉	4.25	7.4	2.6	0.33	滑石	灰黄色
27	I区	白玉	2.5	7.4	2.4	0.21	滑石	灰色
28	I区	白玉	1.75	7.5	2.5	0.16	滑石	灰色
29	I区	白玉	4.1	7.3	2.6	0.4	滑石	灰白色

第21表 H11号住居址白玉観察表

## H 12号住居址



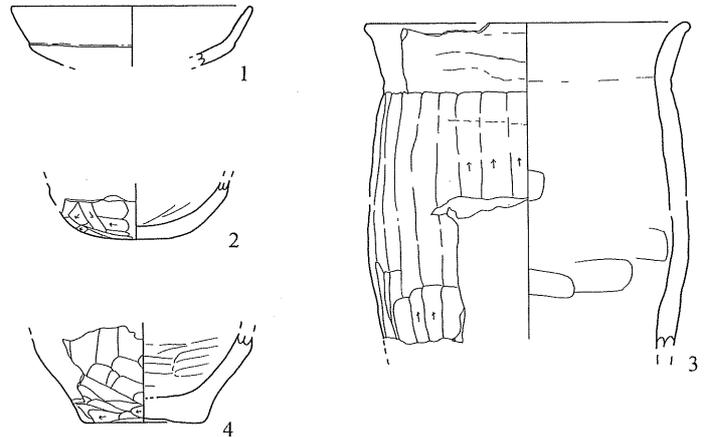
- |   |   |
|---|---|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土 <sup>7</sup> の塊、炭化物。強粘性。 | 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 火を受け固い。(袖)                    |
| 2層 明赤褐色土 (5YR5/8) 焼土層。粒子粗い。灰、炭化物。(火床上層)         | 7層 鈍い赤褐色土 (2.5YR4/3) 火を受け固い。(袖)                 |
| 3層 鈍い赤褐色土 (2.5YR4/3) 焼土層。灰、炭化物。(火床)             | 8層 黒褐色土 (10YR2/3) 炭化物・焼土多量。強粘性。(袖)              |
| 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土 <sup>7</sup> の塊。強粘性。     | 9層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。強粘性。上面強固、床面。 |
| 5層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。暗褐色土。                   | 10層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土主体。暗褐色土少量。強粘性。上面強固、床面。    |

第47図 H 12号住居址実測図

遺構は調査区中央付近の南際12-き-Cグリッドに位置し、H 18号住居址を切り、北は攪乱に破壊されている。南は調査区外だが側溝が存在するため遺構は既に破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒褐色土の単層である。規模は東西2.5m、南北は最大で1.9m、深さ36cmを測る。壁はほぼ垂直で周溝は認められない。床面は固く平坦である。ピットは認められなかった。カマドは北西コーナーにあり、粘土で構築された袖及び火床が確認できた。東袖には扁平な石材が内壁に2枚使用され、火床には厚さ5cm程度の焼土が堆積していた。床下は北西付近は黄褐色土、他は褐色土が埋め込まれ、この上面を床として利用していた。

遺物は土師器が出土し、図示できたのは4点である。1は坏の破片である。2は鉢の底部と思われる。3は甕の口縁から胴部にかけての破損品である。口縁との径の差は僅かだが、胴部に最大径がくる。4は甕底部の破片である。甕は口縁横ナデ、外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。

本住居址は、出土坏及び、6世紀前葉のH 18を切ることから、6世紀代以降、古墳時代後期と考えられる。



第48図 H 12号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[12.6]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁~体部破片	良	5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	鉢?	—	丸底	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
3	土師器	甕	[17]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
4	土師器	甕	—	[6.2]	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部、周辺破片	良	5YR6/6 橙色

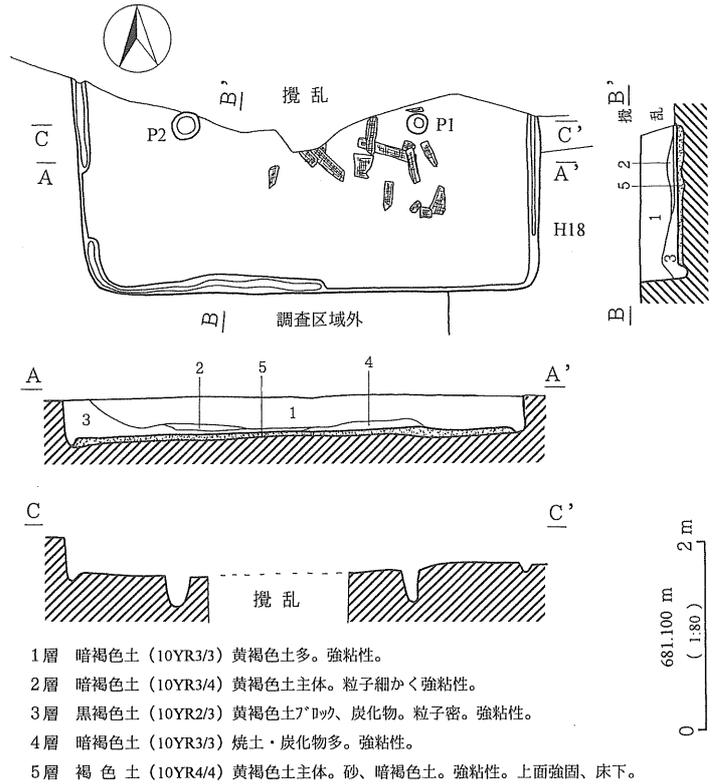
第22表 H 12号住居址遺物観察表

### H 13号住居址

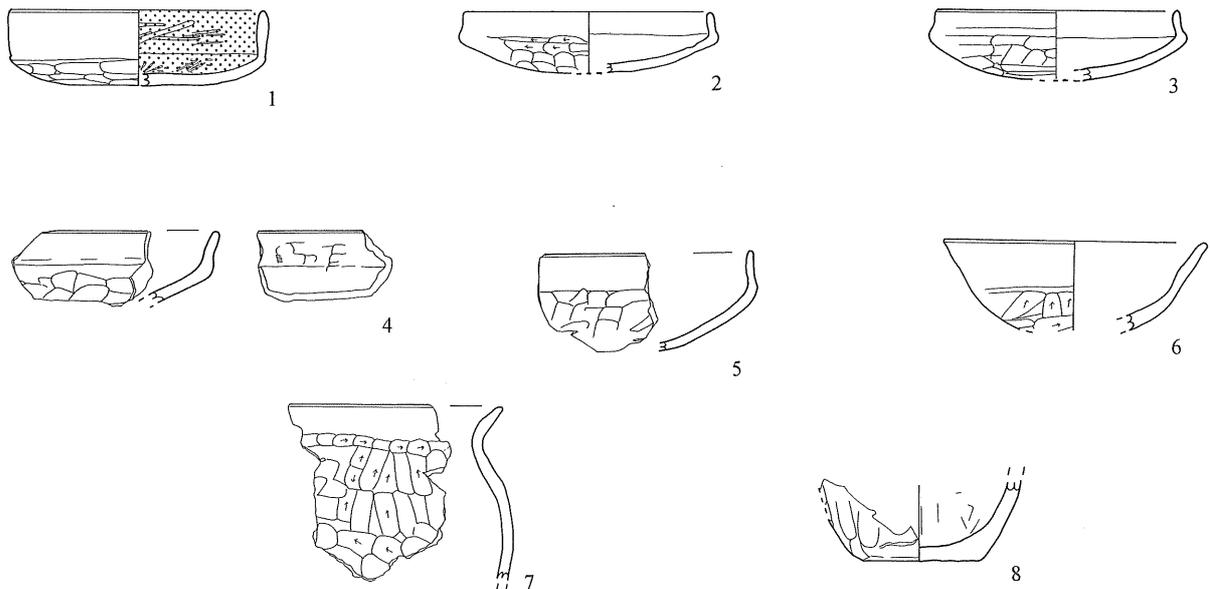
遺構は調査区中央のやや西12-け-Cグリッドに位置し、H 18号住居址を切る。北側の半分は攪乱によって破壊されている。覆土は暗褐色土及び黒褐色土の自然堆積である。規模は南壁4.8m、西、東壁は残存規模で西壁2.2m、東壁1.8mを測り、深さは40cm内外である。壁はほぼ垂直で、西壁の一部及び南東コーナー付近を除き周溝が認められた。床面は強粘性で固く平坦で、北側の攪乱際に支柱穴と思われるピットが2個認められた。深さはともに約40cmである。住居址床面直上からは炭化材が多数検出された。カマドは認められなかった。床下は褐色土が5~8cmの厚さで埋め込まれ、この上面を床面として使用していた。

遺物は土師器が出土した。図示できたのは8点である。1~6は稜を有する坏で、丸底だが平坦に近い底部から僅かに立ち上がった位置に稜を持ち、ここから1は2cmほど直上し、2、3、5は1cmほど内傾気味に、4は外傾気味に、6は大きく開き口縁部に至る。口縁横ナデ、外面ヘラ削り、内面は摩耗が激しく調整痕の不鮮明なものが多いが、1は内面黒色処理、ミガキ、4はミガキを施した痕跡が認められた。7は小型甕の口縁付近の破片である。8は甕の底部と思われる。

本住居址は6世紀中葉~7世紀初頭、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲb期)



- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土多。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土主体。粒子細かく強粘性。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土7'ロツク、炭化物。粒子密。強粘性。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・炭化物多。強粘性。
- 5層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。砂、暗褐色土。強粘性。上面強固、床下。

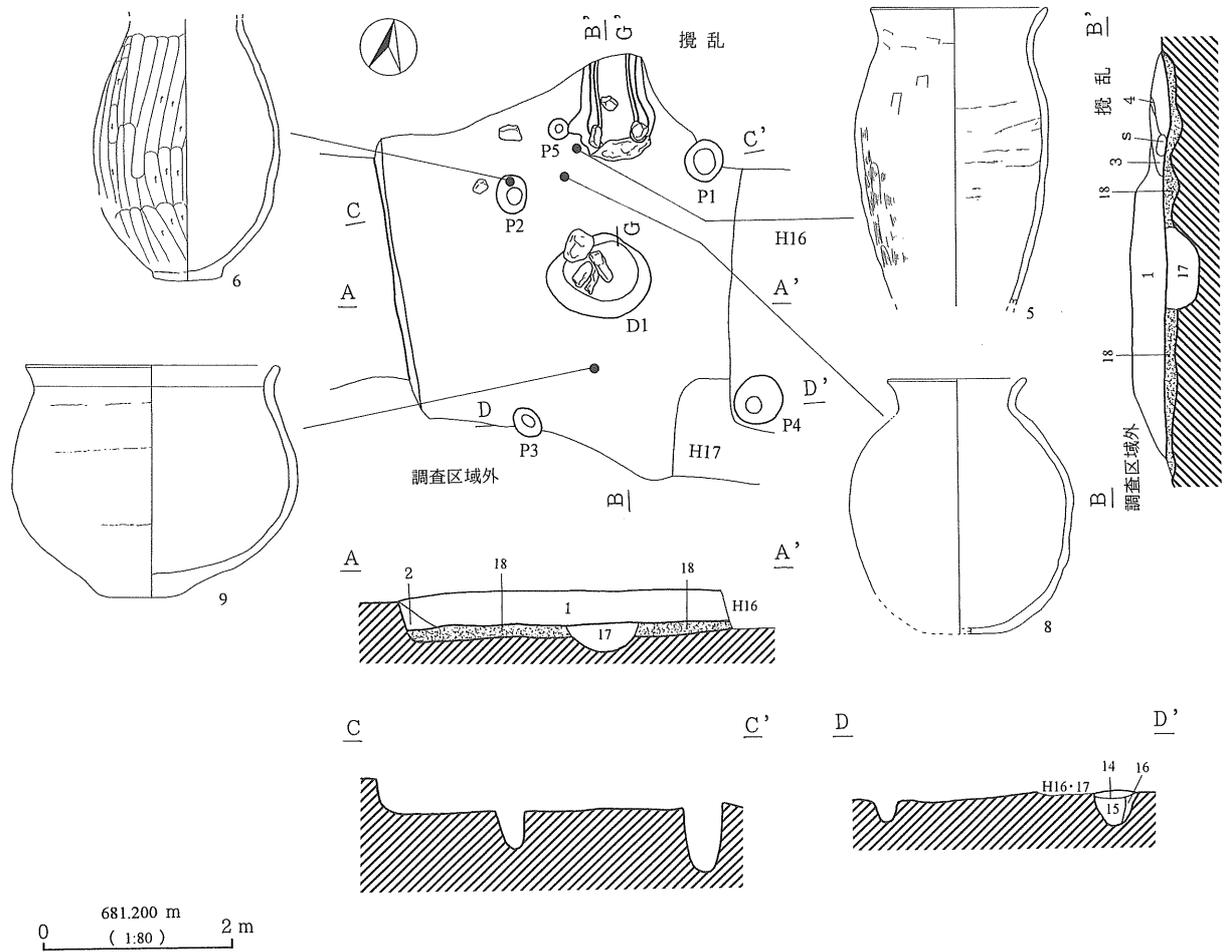


第50図 H 13号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[13.8]	丸底	4	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面黒色処理・ミガキ	25	良	7.5YR8/2 灰白色
2	土師器	坏	[13.2]	丸底	[3.2]	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	7.5YR6/3 鈍い褐色
3	土師器	坏	[13]	丸底	[3.7]	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	—	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
5	土師器	坏	—	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁破片	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
6	土師器	坏	[14]	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁体部破片	良	5YR7/3 鈍い橙色
7	土師器	小型甕	—	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁体部破片	良	2.5YR5/6 明赤褐色
8	土師器	甕	—	6.1	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	7.5YR7/6 橙色

第23表 H 13号住居址遺物観察表

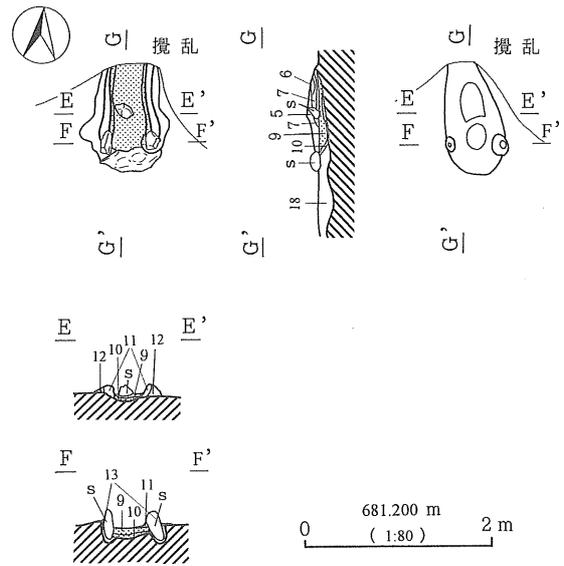
H 14号住居址



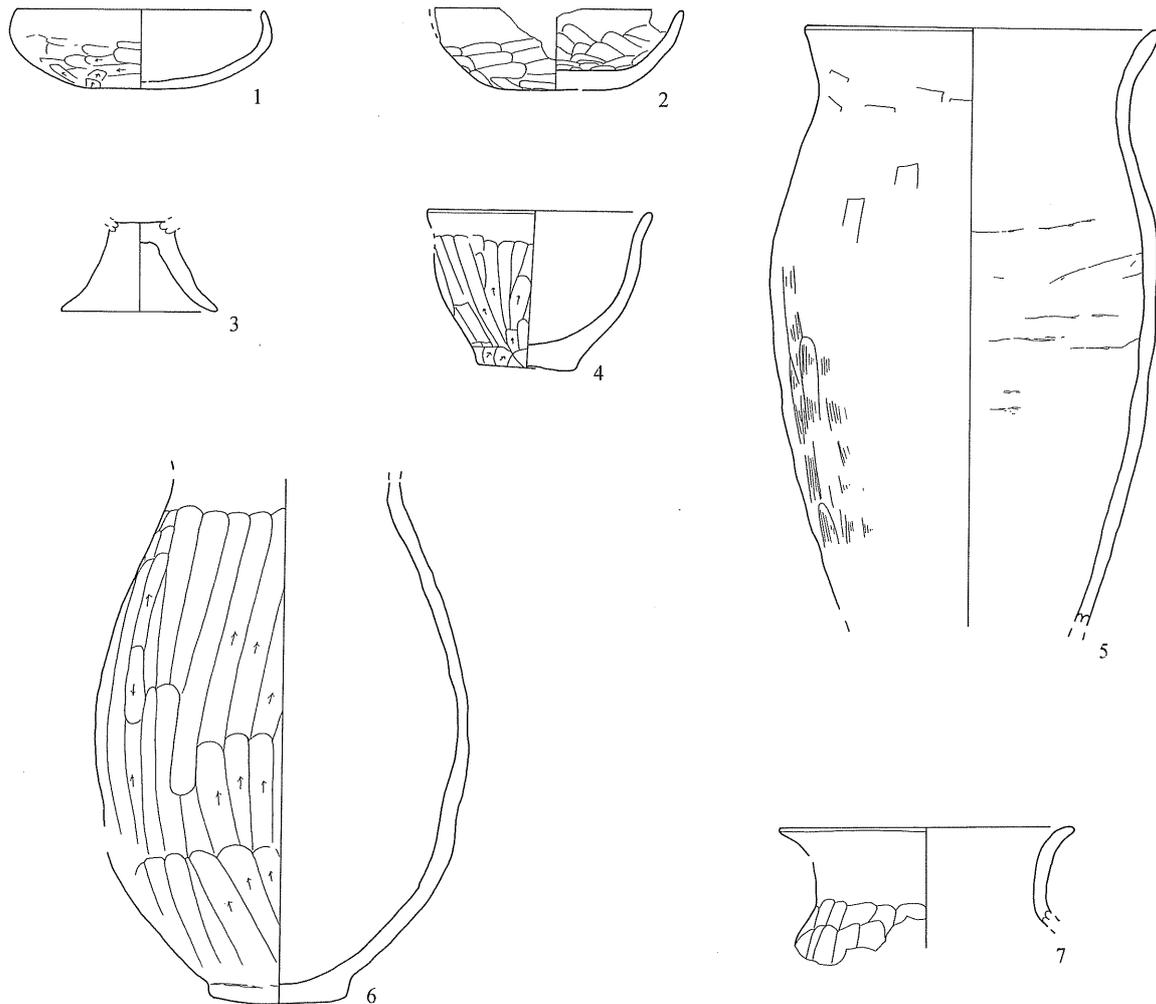
- |  |  |
|--|--|
| 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒、炭化物。強粘性。         | 10層 極暗赤褐色土 (2.5YR2/4) 焼土層。粒子細かく強粘性。            |
| 2層 黒褐色土 (10YR2/3) 粒子密。強粘性。               | 11層 明赤褐色土 (5YR5/6) 火を受け固い。(カマド内壁)              |
| 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土。焼土・炭化物微量。強粘性。     | 12層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土主体。炭化物。しまりあり。(袖)        |
| 4層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土、灰、炭化物。強粘性。         | 13層 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黄褐色土、灰。強粘性。                |
| 5層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 焼土層。灰炭化物。             | 14層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土7'のく、炭化物、焼土。粒子粗い。(P4)   |
| 6層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 焼土層。灰、炭化物、暗褐色土。       | 15層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土主体。暗褐色土、炭化物、砂含む。(P4)    |
| 7層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰層。焼土多。粒子密。強粘性。        | 16層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。暗褐色土少量。(P4)           |
| 8層 赤褐色土 (5YR4/6) 焼土・灰多量。砂。粒子粗い。          | 17層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。(D1)      |
| 9層 赤褐色土 (2.5YR4/6) 焼土層。粒子細かい。火を受け固い。(火床) | 18層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。強粘性。上面強固、床面。 |

第51図 H 14号住居址実測図

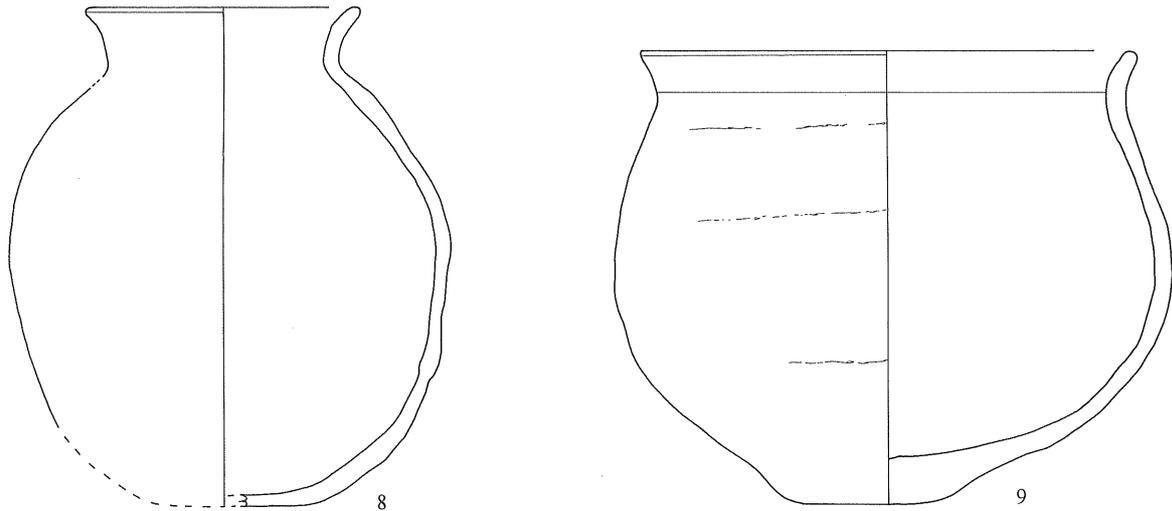
遺構は調査区西よりの南14-あ-Bグリッドに位置し、H16、H17号住居址に切られる。西壁の一部が認められたが他の壁は攪乱及び住居址に切られ既に破壊されていた。残存していたのはカマドの一部及び住居中央付近の生活面である。よって住居址の規模及び平面形態は不明である。覆土は強粘性の暗褐色土と壁際の黒褐色土で自然堆積と思われる。西壁の壁高は36cm内外(床面)を測り、周溝は認められなかった。床面はほぼ平坦で中央に径1.1m、深さ36cmの土坑が存在し、上部に集石が認められた。主柱穴は深さ25~70cmのピットが4個確認できた。カマドは北壁にあり、煙道部は攪乱によって破壊されていた。袖は粘土で構築され、住居内に長くのび、両袖の先端には石材が埋め込まれ、その手前には焼き口部の天井石と思われる細長い石材が横たわっていた。床下には鈍い黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床として利用していた。



第52図 H14号住居址カマド実測図



第53図 H14号住居址遺物実測図(1)

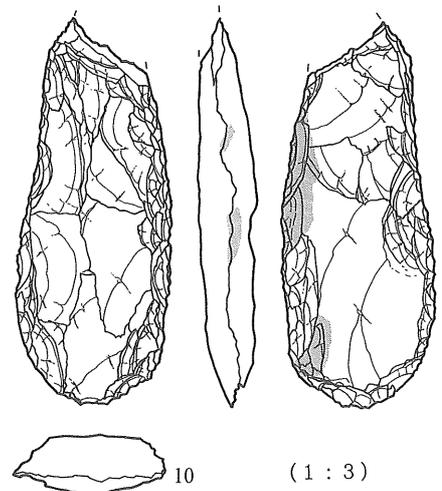


第54図 H 14号住居址遺物実測図 (2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[13.1]	丸底	4.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	25	良	7.5YR7/6 橙色
2	土師器	坏	[13.6]	6	4.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
3	土師器	高坏	—	8.2	—	脚部外面ミガキ	脚部90	良	7.5YR8/2 灰白色
4	土師器	鉢	12	5.2	8.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ ミガキ	90	良	2.5YR5/4 鈍い赤褐色
5	土師器	甕	18.9	—	—	口縁横ナデ 外面ハケ目・ヘラ削り 内面ヘラナデ	80	良	5YR7/4 鈍い橙色
6	土師器	甕	—	7.2	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	5YR6/6 橙色
7	土師器	甕	15.4	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁破片	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
8	土師器	甕	14.9	[8.2]	26.9	口縁横ナデ 外面ヘラ削り後ミガキ 内面ハケナデ	80	良	2.5YR5/4 鈍い赤褐色
9	土師器	甕	26.8	9.4	24.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	70	良	5YR8/2 灰白色

第24表 H 14号住居址遺物観察表

遺物は、押しつぶされた土師器の甕などが出土した。図示できたのは10点である。1～2は丸底の土師器坏で1は4分の1程度の残存である。2は破片である。外面ヘラ削りを施す。3は高坏の脚部である。外面にわずかミガキを施した痕跡が伺われるが表裏ともに摩耗が激しい。4は鉢で底部周辺を強く削り、底部をつくり出している。口縁部に最大径がくる。5、6は長胴甕で、5は底部以外は原型をとどめ、外面ヘラ削り（ハケ目残る）内面ヘラナデを施し、胴部下半に吹きこぼれによる付着物が認められる。6は底部から頸部にかけての破損品で外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施す。最大径は5、6ともに胴部中央付近にくる。7は甕の口縁部である。8は甕で部分的に破損しているが、器形の全体は何い知ることができる。外面は削り後ミガキを施すが、摩耗が激しい。内面はハケ目状工具によるナデを施し、胴部中央のやや上に最大径がくる。9は広口の甕で小径の底部から大きく開き立ち上がり、胴部中央下で最大径となった後、丸みを持ってやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は「く」の字に外反する。外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施すが摩耗が激しい。10は打製石斧である。6世紀代、古墳時代後期と考えられる。

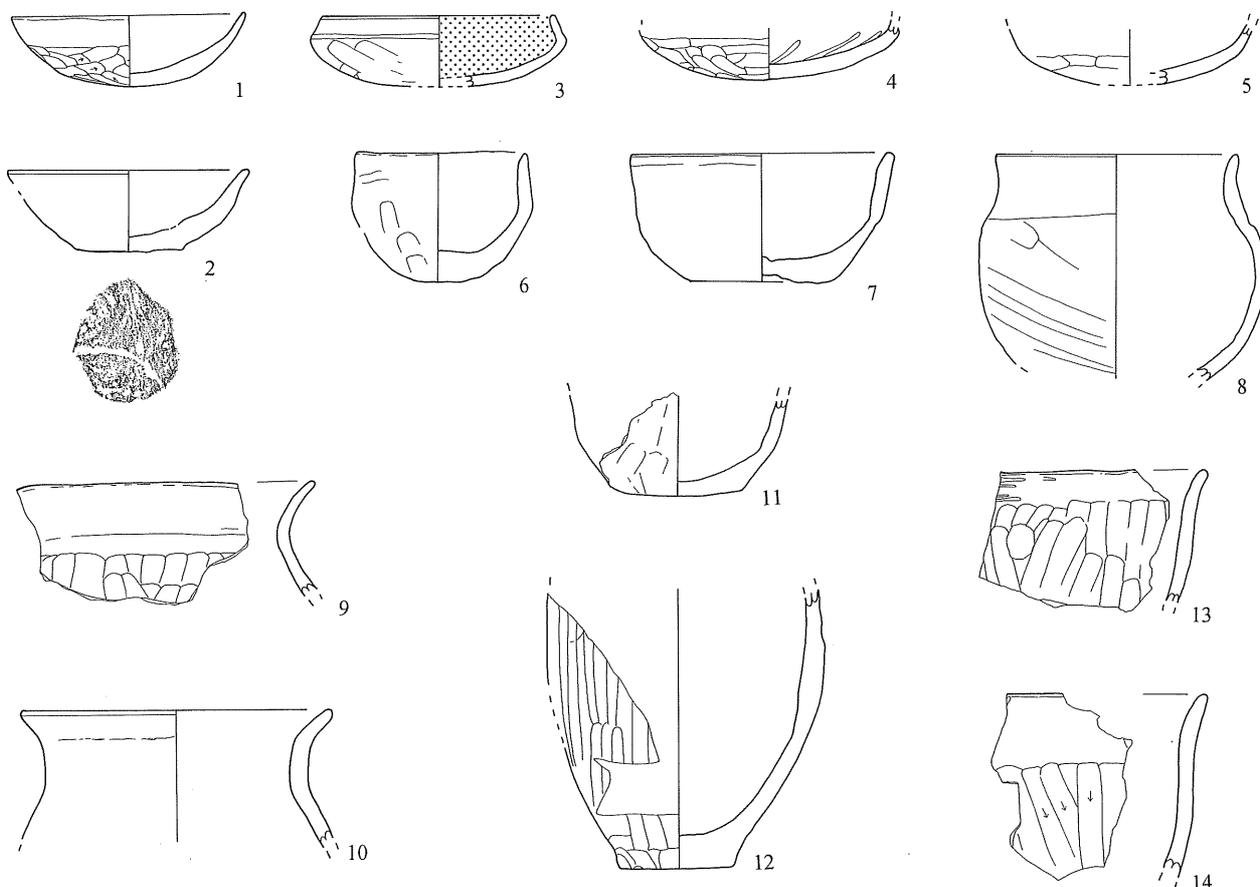


第55図 H 14号住居址石器実測図



2付近においてやや内彎した後、口縁端部で外反する。内面にミガキが施されるが、摩耗が激しい。3～5は稜を有する坏の破損品である。3は丸底の底部からわずかに立ち上がった地点で明瞭な稜を持ち、その後内傾し口縁部に至る。4、5は緩やかな丸みを持った底部のみ残存した破片である。4、5ともに外面ヘラ削りを施し、4の内面には放射状のミガキを施す。6は小型の鉢でほぼ丸底の底部からやや丸みを持って立ち上がり、体部3分の2付近にて内傾した後、口縁端部にてわずかに外反する。外面ヘラ削り、口縁横ナデを施す。7、8は鉢で7は中央部が窪んだ底部から丸みを持って立ち上がり口縁部に至る。8は底部は欠損している。体部は丸みを持ち、内彎気味に立ち上がり、口縁付近に明瞭な稜を持った後外反し口縁部に至る。外面はヘラ削り後ミガキと思われるが摩耗が激しい。9、10は甕の口縁部の破片である。11は鉢、12は甕の底部から胴部にかけての破片である。13、14は甕または甕の口縁破片である。

本住居址は6世紀中葉～7世紀初頭、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲb期)



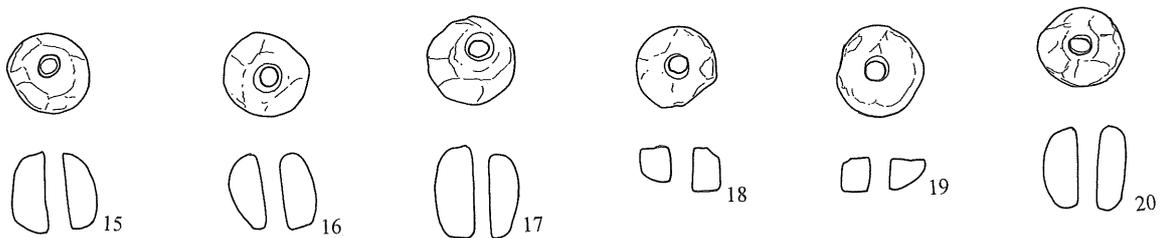
第57図 H 15号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	12.4	丸底	3.8	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ナデ・ミガキ	98	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
2	土師器	坏	[12.8]	5.5	4.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 底部静止糸切り	55	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
3	土師器	坏	12.2	丸底	[3.4]	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面黒色処理	20	良	7.5YR7/6 橙色
4	土師器	坏	—	丸底	—	外面ヘラ削り 内面ミガキ・放射状暗文	50	良	7.5YR8/2 灰白色
5	土師器	坏	—	—	—	外面ヘラ削り 内面ミガキ	40	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
6	土師器	鉢	[9]	丸底	6.8	口縁横ナデ 外面ヘラ削り・ナデ 内面ヘラナデ	70	良	7.5YR8/3 浅黄橙色

第26表 H 15号住居址遺物観察表(1)

7	土師器	鉢	13.9	7.4	6.8	□縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ	80	良	10R4/4 赤褐色
8	土師器	鉢	[13]	—	—	□縁横ナデ 外面斜へら削り 内面へらナデ	80	良	7.5YR7/6 橙色
9	土師器	甕	—	—	—	□縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ	□縁破片	良	10YR8/1 灰白色
10	土師器	甕	[16]	—	—	□縁横ナデ	□縁破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
11	土師器	鉢	—	6.8	—	外面へら削り 内面へらナデ	底部体部破片	良	5YR6/6 橙色
12	土師器	甕	—	[6]	—	外面へら削り 内面へらナデ	底部体部破片	良	5YR6/6 橙色
13	土師器	甕or甔	—	—	—	□縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ	□縁破片	良	5YR6/3 鈍い橙色
14	土師器	甕or甔	—	—	—	□縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ・黒色	□縁破片	良	10YR8/4 浅黄橙色

第27表 H15号住居址遺物観察表(2)

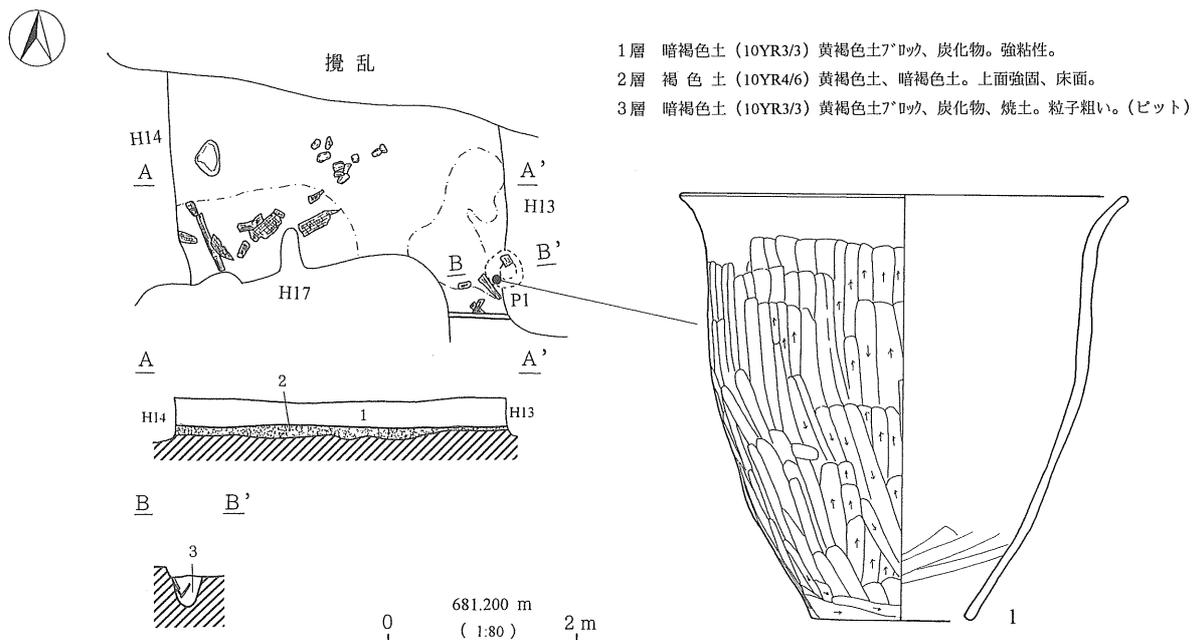


第58図 H15号住居址丸玉・白玉実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
15	N区	丸玉	11.1	11.1	2.5	1.35	土製	灰黄褐色
16	I区	丸玉	11.8	10.2	2.8	1.21	土製	灰黄色
17	N区	丸玉	11.9	11.25	2.55	1.48	土製	褐灰色
18	N区	白玉	7.05	10.95	3.2	1.03	滑石	灰黄色
19	N区	白玉	5.1	12	2.7	1.1	滑石	灰白色
20	N区	丸玉	11.7	10.35	3	1.32	土製	鈍い黄褐色

第28表 H15号住居址丸玉・白玉観察表

### H16号住居址



第59図 H16号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	甑	23.8	8.7	22.6	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	95	良	10YR8/3 浅黄橙色

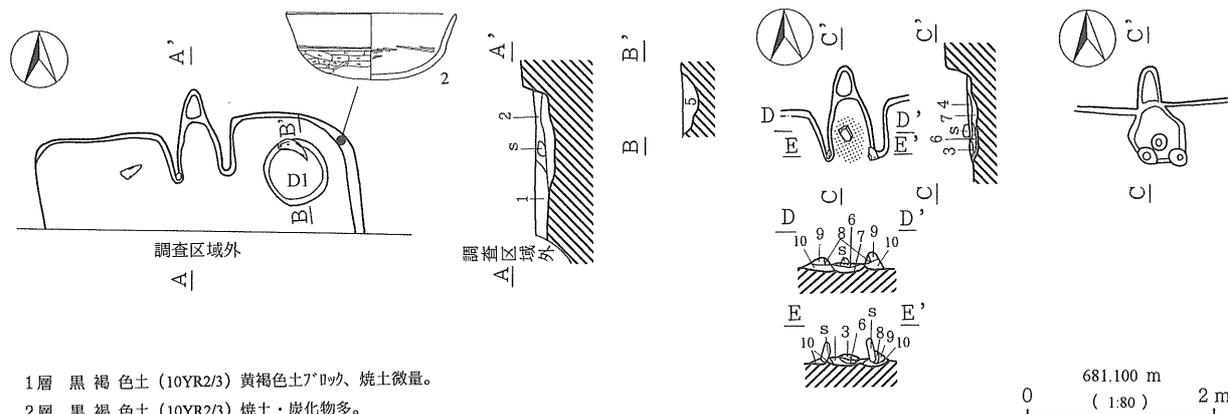
第29表 H16号住居址遺物観察表

遺構は調査区西よりの南際12-こ-Bグリッドに位置し、H13、14、17に切られる。規模は西壁、南壁が僅かに残るだけで、大半は住居址、攪乱によって破壊され不明である。深さは西壁で35cm内外(床面)を測る。床面は固くほぼ平坦で、床面直上に炭化粒を多量に含む層が部分的に広がり、炭化材も多数存在した。このことから本住居址は焼失住居と考えられる。ピットは南東隅から1個確認できた。床下は強粘性の黄褐色土が埋め込まれ、この上面を床面として使用していた。

遺物は覆土内から土師器片が出土したが、図示できたものは掘方ピットから出土した土師器の甑1点である。径7.8cmと大きく開いた単孔の底部からやや開き、丸みをおびながら立ち上がり、口縁端部でやや外反する。外面縦方向のヘラ削り、内面ヘラナデを施す。

本住居址は、やや資料に乏しい面もあるが、甑及び小破片との総合的観察から、古墳時代後期と考えられる。

### H17号住居址



- 1層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土7'ロツク、焼土微量。
- 2層 黒褐色土(10YR2/3)焼土・炭化物多。
- 3層 赤褐色土(5YR4/6)焼土層。灰、炭化物。粒子粗い。
- 4層 黒褐色土(10YR2/2)灰層。粒子密。強粘性。
- 5層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土粒、砂。
- 6層 明赤褐色土(2.5YR5/8)焼土層。粒子やや粗い。(袖)
- 7層 灰黄褐色土(10YR4/2)焼土、灰、炭化物。強粘性。

- 8層 暗赤褐色土(2.5YR3/4)カマド内壁。火を受け強い。(袖内壁)
- 9層 黒褐色土(10YR2/3)炭化物、焼土。(袖)
- 10層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土多。焼土、炭化物。(袖)

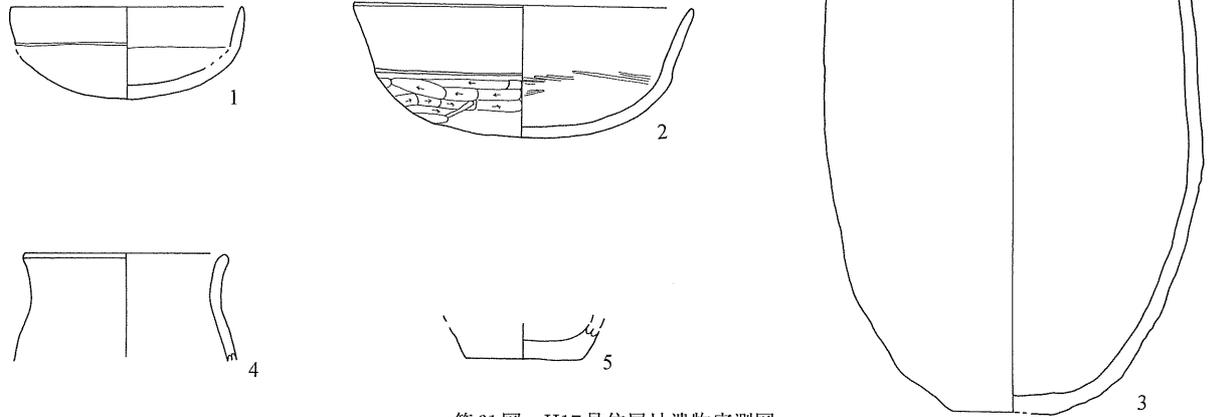
第60図 H17号住居址実測図

遺構は調査区西よりの南際12-こ-Cグリッドに位置し、H16、H14を切る。南は調査区外となるが、側溝が存在することから遺構は既に破壊されているものと思われる。規模は北壁3.4m、西、東壁は残存規模で西壁1.0m、東壁1.2mを測り、深さは20cm内外である。壁際に周溝はなく、床面はほぼ平坦である。北東コーナー付近に径70cm、深さ20cmの土坑が存在する。カマドは北壁のほぼ中央に位置し、粘土で構築された袖が住居内に火床を挟むように50cm程のび、焚き口部と思われる先端に石が「ハ」の字状に埋め込まれていた。火床には焼土が7cmほどの厚さで堆積し、焼土の中央付近に支脚として使用されたと思われる石が置かれていた。床下は黒褐色土でこの上面を床として利用していた。

遺物は床面及び覆土内から土師器片が多数出土した。図示できたのは5点である。1は稜を有する坏で丸底の底部から立ち上がり稜から、ほぼ垂直に口縁部に至る。2は坏でヘラ削りされた丸底の底部から立ち上がり途中明瞭な稜を持った後、やや外傾気味に口縁部に至る。3~4は甕である。3は長胴甕で、底部から丸みを持って立ち上がり、胴部はほぼ垂直で口縁間近で大きく外反する。外面ヘラ削り、内面ヘラナデを施

し、最大径は口縁部にある。4は小型甕の口縁部と思われ、5は甕の底部である。

本住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅱ期)

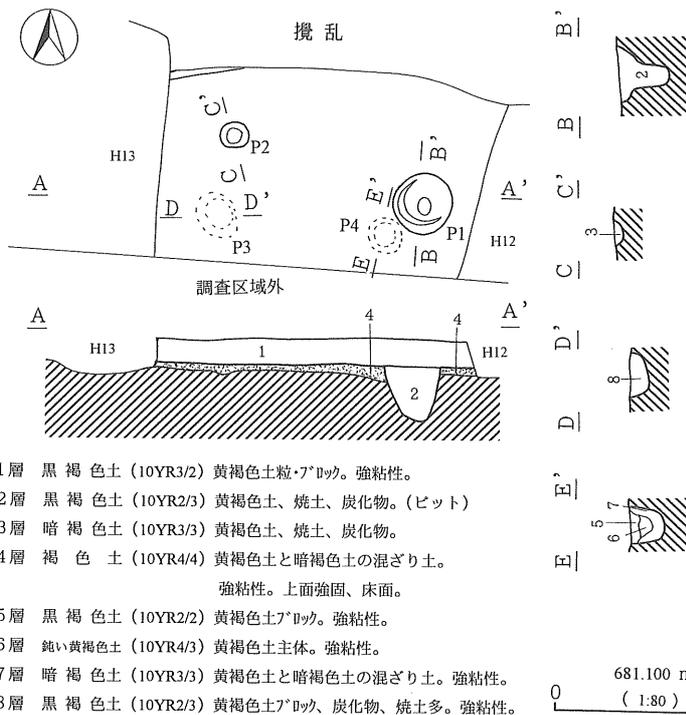


第61図 H17号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	12.3	丸底	4.9	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	60	良	5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	坏	18	丸底	7	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	95	良	5YR7/6 橙色
3	土師器	甕	21.8	5.5	31.2	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	70	良	2.5YR6/4 鈍い橙色
4	土師器	甕	11	—	—	□縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	□縁破片	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
5	土師器	甕	—	6.1	—	外面ヘラナデ 内面ナデ	底部破片	良	2.5YR7/4 淡赤橙色

第30表 H17号住居址遺物観察表

H 18号住居址



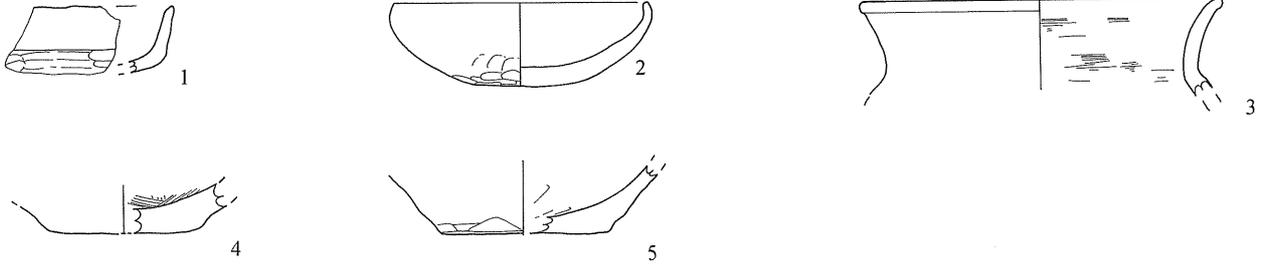
- 1層 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土粒・7°ブロック。強粘性。
- 2層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土、焼土、炭化物。(ピット)
- 3層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土、焼土、炭化物。
- 4層 褐色土(10YR4/4)黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。  
強粘性。上面強固、床面。
- 5層 黒褐色土(10YR2/2)黄褐色土7°ブロック。強粘性。
- 6層 鈍い黄褐色土(10YR4/3)黄褐色土主体。強粘性。
- 7層 暗褐色土(10YR3/3)黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。強粘性。
- 8層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土7°ブロック、炭化物、焼土多。強粘性。

第62図 H 18号住居址実測図

遺構は調査区中央のやや西よりの南際12-く-Cグリッドに位置し、西はH13に切られ、東はH12に切られる。南側は調査区外となるが側溝が存在することから遺構はすでに破壊されているものと思われる。正確な遺構の規模は周囲を住居址、攪乱等によって破壊されていることから不明である。確認できた規模は北壁3.6m、西壁2.0mを測る。深さは30cm内外(床面)である。ピットは床面上から2個、床下から2個確認されたが主柱穴かは不明である。床面はほぼ平坦である。カマドは認められなかった。床下には4~8cmの厚さで褐色土が埋め込まれ、この上面が床面となる。

遺物は土師器の破片が多数出土した。図示できたのは5点である。1は坏で口縁付近の破片である。2は丸底の坏の破片で、やや強めにヘラ削りされた底部から丸みを持ち、内彎しながら口縁部に至る。3は甕の口縁破片である。4、5は甕の底部破片である。

本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。

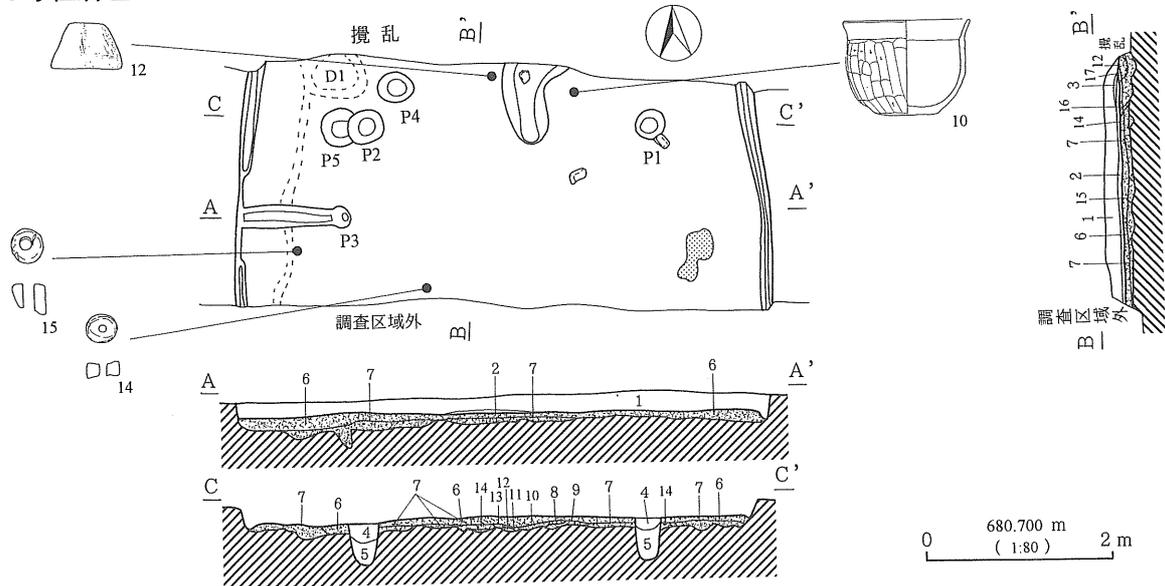


第63図 H 18号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	—	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁破片	良	2.5YR7/4 淡赤橙色
2	土師器	坏	[13.4]	丸底	4.4	口縁横ナデ 底部ヘラ削り	30	良	5YR8/2 灰白色
3	土師器	甕	[19.4]	—	—	口縁横ナデ	口縁破片	良	5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	甕	—	[8]	—	内面ハケ目	底部破片	良	5YR6/6 橙色
5	土師器	甕	—	[9]	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部破片	良	7.5YR8/1 灰白色

第31表 H 18号住居址遺物観察表

H 19号住居址



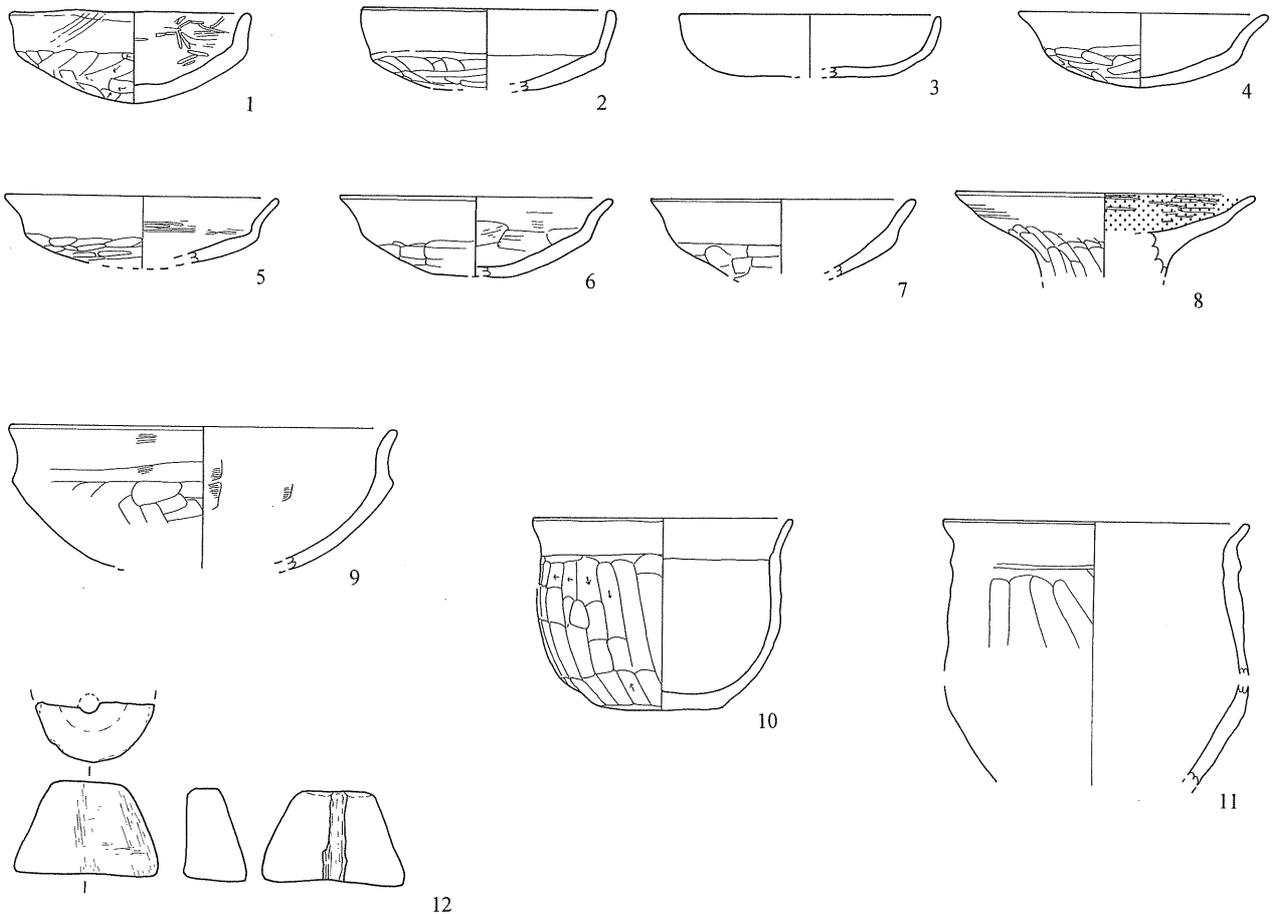
- |   |                                      |
|---|--------------------------------------|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒・フロック。強粘性。             | 10層 暗褐色土 (10YR3/4) やや砂質黄褐色土。炭化物、焼土多。 |
| 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒。炭化物多量。焼土少量。           | 11層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土多。強粘性。          |
| 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・炭化物多。砂。粒子密。              | 12層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物。              |
| 4層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土、炭化物、砂。粒子密。(ピット)          | 13層 暗褐色土 (10YR3/4) 10層とほぼ同じ。         |
| 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 粒子やや粗い。砂。(ピット)              | 14層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。   |
| 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土、砂。炭化物・焼土多。強粘性。上面強固、床面。 | 15層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。    |
| 7層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。やや砂質。(床下)    | 16層 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土・炭化物フロック多。      |
| 8層 黄褐色土 (10YR5/8) 炭化物、焼土、黄褐色砂。                | 17層 暗褐色土 (7.5YR3/4) 焼土・炭化物多。         |
| 9層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土、炭化物少量。                 |                                      |

第64図 H 19号住居址実測図

遺構は調査区西の南側14-カ-Bグリッドに位置し、北は攪乱に破壊され、南は調査区外となるが、側溝が存在するため遺構は既に破壊されているものと思われる。規模は東西5.7m、西、東壁は残存規模で西壁2.6m、東壁2.4mを測り、深さは18cm内外である。西、東壁の残存部の際には周溝が認められる。床面は南東隅の一部に多少凹凸があるもののほぼ平坦で、ピットは床面上で5個、北西隅に土坑が1基存在した。P1、P2は主柱穴と思われる。北側の中央付近はやや小高くなった部分があり、周囲に焼土の散布が多く認められることから、カマドの袖と火床である可能性が考えられる。床下は黒色土、暗褐色土が薄く埋め込まれ、上面を床として利用していた。

遺物は土師器が多数出土し、図示できたのは12点、滑石製白玉3点である。1～7は稜を有する坏で1～3は丸底の底部から立ち上がり、稜からやや外傾し口縁部に至る。4～7は丸底の底部から立ち上がり、稜から大きく外反し口縁部に至る。8は高坏の坏部を主とする破片で、坏部は口辺下部で屈曲し、口縁端部は外反する。内面黒色処理を施す。9は鉢で口縁付近の破片である。口辺下部の明瞭な稜から湾曲しながら口縁部に立ち上がる。10は小型甕でヘラ削りされた底部縁辺から丸みを持って立ち上がり、頸部は「く」の字に折れ口縁部に至る。最大径は口縁部にある。11は広口の甕で体部は凹凸が多く器のゆがみが大きい。頸部付近で明瞭な稜を持った後「く」の字を呈し口縁部に至る。12は土製の紡錘車で約半分が欠損している。底径7.6cmを測る大型品である。

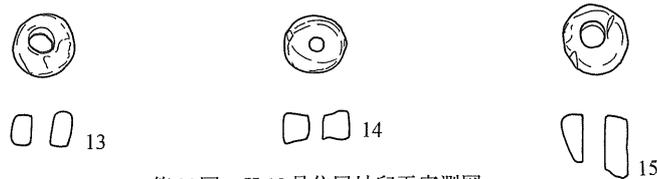
本住居址は6世紀後葉～7世紀初頭、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲb期)



第65図 H19号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	12.5	丸底	4.8	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	90	良	5YR8/4 淡橙色
2	土師器	坏	[13.5]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	50	良	5YR6/4 鈍い橙色
3	土師器	坏	[14]	丸底	[3.3]	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	20	良	5YR4/3 鈍い赤褐色
4	土師器	坏	[13.3]	丸底	3.9	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	30	良	7.5YR6/2 灰褐色
5	土師器	坏	[14.6]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	30	良	5YR8/4 淡橙色
6	土師器	坏	[14.5]	丸底	4.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ナデ	40	良	5YR7/4 鈍い橙色
7	土師器	坏	[14]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	口縁部破片	良	2.5YR5/4 鈍い赤褐色
8	土師器	高坏	[8]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面黒色処理・ミガキ	坏部破片	良	7.5YR5/4 鈍い褐色
9	土師器	鉢	[20.6]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁部破片	良	5YR3/2 暗赤褐色
10	土師器	小型甕	[13.8]	6.5	10.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	2.5YR5/6 明赤褐色
11	土師器	甕	[16.3]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	25	良	7.5YR7/4 鈍い褐色
番号	品名	上部	下部	高さ	特徴		残存率	焼成	色調
12	土製紡錘車	4	7.7	4.9	中央に径8mm内外の孔		50	良	5YR7/4 鈍い橙色

第32表 H 19号住居址遺物観察表



第66図 H 19号住居址白玉実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
13	Ⅳ区	白玉	4.3	8.2	3.5	0.44	滑石	灰黄色
14	Ⅲ区	白玉	3.6	8.3	2.3	0.37	滑石	灰白色
15	Ⅲ区	白玉	7.9	8.9	3.2	0.88	滑石	鈍い黄褐色

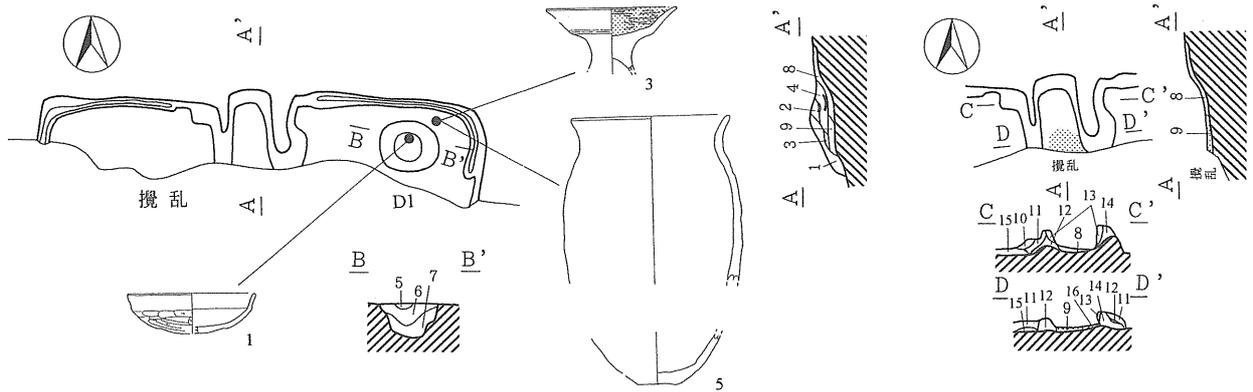
第33表 H 19号住居址白玉観察表

## H 20号住居址

遺構は調査区西の北13-え-Iグリッドに位置し、南側の大半は攪乱によって破壊されている。規模は北壁4.7m、西、東壁は残存規模で西壁60cm、東壁1.0mを測り、深さは20cm内外である。残存形態から平面形は方形と考えられる。壁はほぼ垂直で壁際に周溝が認められる。床面は固くほぼ平坦で、北東隅に径64cm、深さ40cmの土坑が1基存在する。ピットは認められなかった。カマドは北壁中央に位置し、粘土で構築された袖が火床を挟み込むように住居址内にのびていた。径40cm程の円形の火床には最深で5cmの焼土が堆積していた。床下は黄褐色と褐色土の混合土が埋め込まれ、この上面を床として利用していた。

遺物は覆土内及び床面上、土坑内から土師器の甕・坏等が出土した。図示できたのは土師器5点である。1、2は稜を有する坏で、丸底の底部から立ち上がり、稜から1は短くやや外傾し口縁部に至り、2は長く直線的に外傾し口縁部に至る。3は高坏で口縁部及び脚部を損失した破損品である。坏部は有稜で大きく開きながら立ち上がり内面黒色である。4は土師器甕の底部で外面に吹きこぼれ痕が認められる。5は口縁から底部にかけての破片で1個体と思われるが部分的な接合にとどまる。口縁部の反りは僅かで、最大径は胴部にあり、底部は小型である。

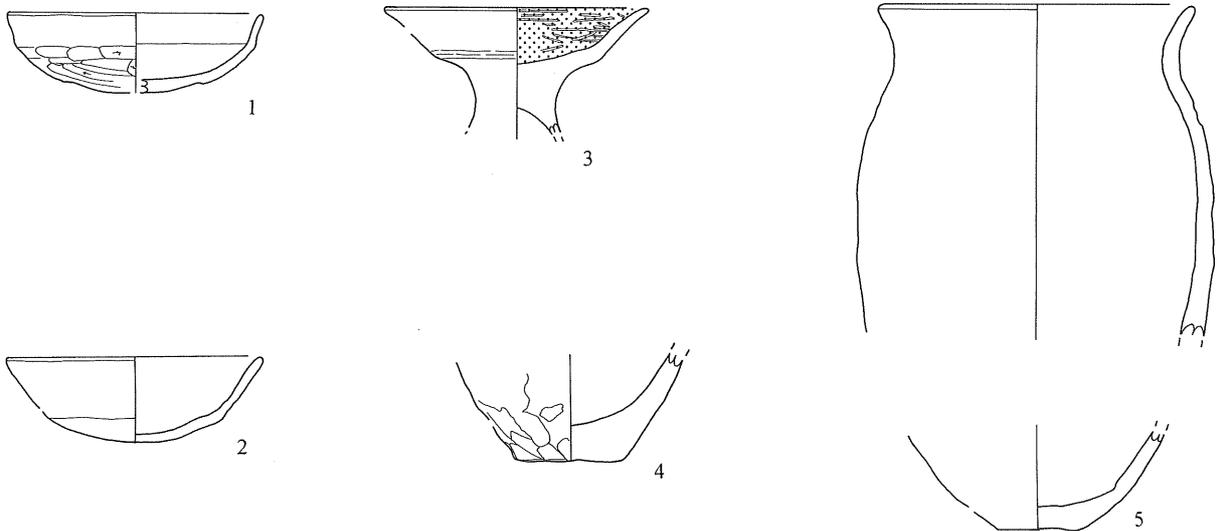
本住居址は6世紀中葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲa期)



- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒。炭化物・焼土少量。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒。炭化物・焼土多。強粘性。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土粒。炭化物・炭化物フワック多。強粘性。
- 4層 明赤褐色土 (2.5YR5/8) 黄褐色土粒、焼土フワック・灰・炭化物多量。
- 5層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 焼土、灰、炭化物の混ざり土。強粘性。(D 1)
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土、焼土、炭化物。強粘性。(D 1)
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土、焼土、炭化物。強粘性。(D 1)
- 8層 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土、炭化物フワック多。強粘性。
- 9層 赤褐色土 (5YR4/8) 焼土、炭化物フワック。強粘性。(火床)
- 10層 明黄褐色土 (10YR6/6) シト粒多。強粘性。
- 11層 暗褐色土 (10YR3/3) 炭化物少量。強粘性。(袖)
- 12層 褐色土 (10YR4/6) カト袖。強粘性。(袖)
- 13層 橙色土 (7.5YR6/6) 火を受け固い。(カマド内壁)

- 14層 黄褐色土 (10YR5/8) 強粘性。(袖)
- 15層 褐色土 (10YR4/6) 暗褐色土フワック。強粘性。
- 16層 鈍い黄褐色土 (10YR7/4) 強粘性。

第67図 H 20号住居址実測図

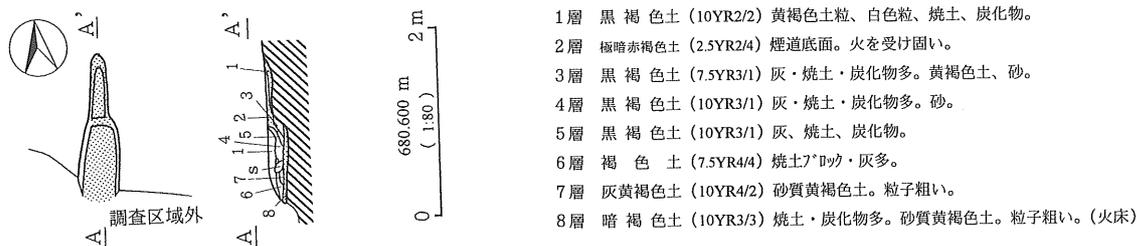


第68図 H 20号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[13.6]	丸底	4.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	50	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
2	土師器	坏	13.6	丸底	4.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	50	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
3	土師器	高坏	[14.2]	—	—	口縁横ナデ 外面ミガキ 内面黒色処理・ミガキ	30	良	2.5YR6/6 橙色
4	土師器	甕	—	5.8	—	外面ヘラ削り ふきこぼれ 内面ナデ	底部100	良	5YR5/6 明赤褐色
5	土師器	甕	[17]	4.3	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面横ナデ	口縁~底部破片	良	7.5YR6/4 鈍い橙色

第34表 H 20号住居址遺物観察表

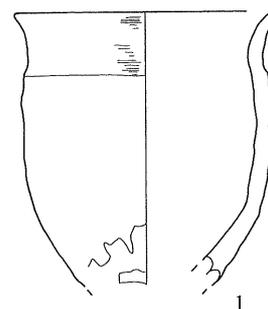
## H 21号住居址



第69図 H 21号住居址実測図

遺構は調査区西側の南際14-け-Cグリッドに位置し、住居の南側の大部分は調査区外となり、南には側溝が存在することから、遺構の大半は破壊されている可能性が高い。今回確認されたのは僅かな北壁と、そこからのびるカマドの一部である。本住居跡のカマドは住居内に袖を持たず、北壁外に火床部分をつくり出す形態で、火床上部の覆土には土師器甕の破片が多く含まれ、この層と火床直上には灰、炭化物、焼土を含む土が堆積していた。火床付近は熱を受け赤く焼け、焼土の堆積が認められた。煙道は火床の北側で急激に立ち上がった後、幅を狭め、ほぼ平坦な溝状を呈し、70cm張り出した地点で立ち上がる。

遺物はカマドの火床付近から土師器甕の破片が多数出土した。図示できたのは土師器の小型の甕1点である。本住居址は古墳時代後期と思われる。



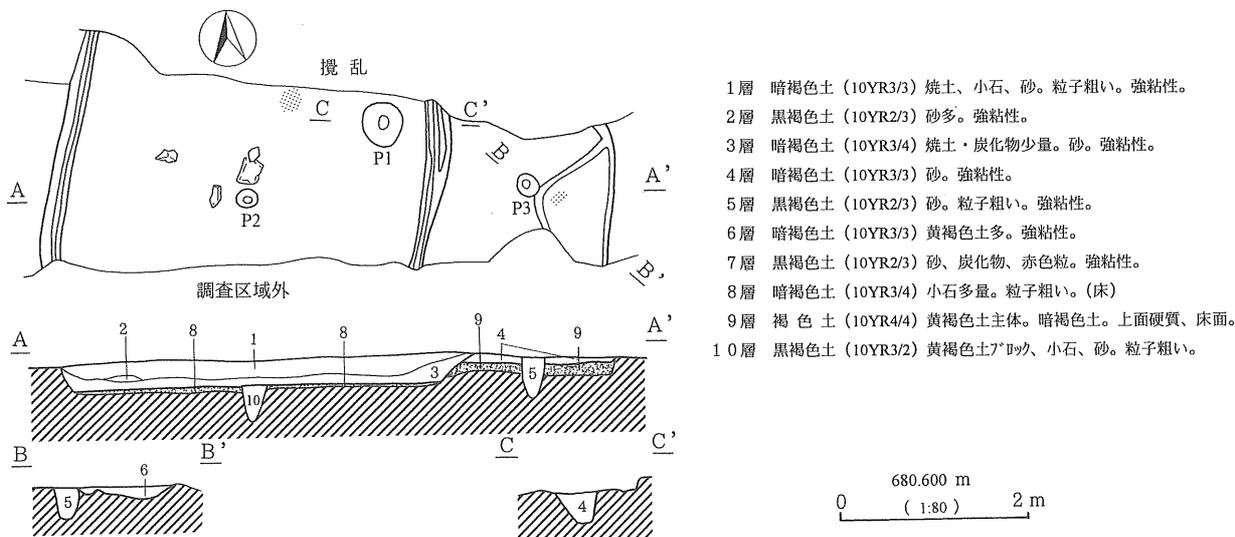
第70図 H 21号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	甕	[14]	-	-	口縁横ナデ 外面へら削り・ふきこぼれ 内面へらナデ	30	良	2.5YR5/6 明赤褐色

第35表 H 21号住居址遺物観察表

## H 22号住居址

遺構は調査区西の南際16-え-Cグリッドに位置し、北は攪乱によって破壊され、南は調査区外だが、側溝が存在することから遺構は既に破壊されているものと思われる。規模は東西6.0m、西、東壁は残存規模で西壁2.5m、東壁1.5mを測るが、床面まで掘り下げた結果、西壁から東4.0m付近にて、南北方向の周

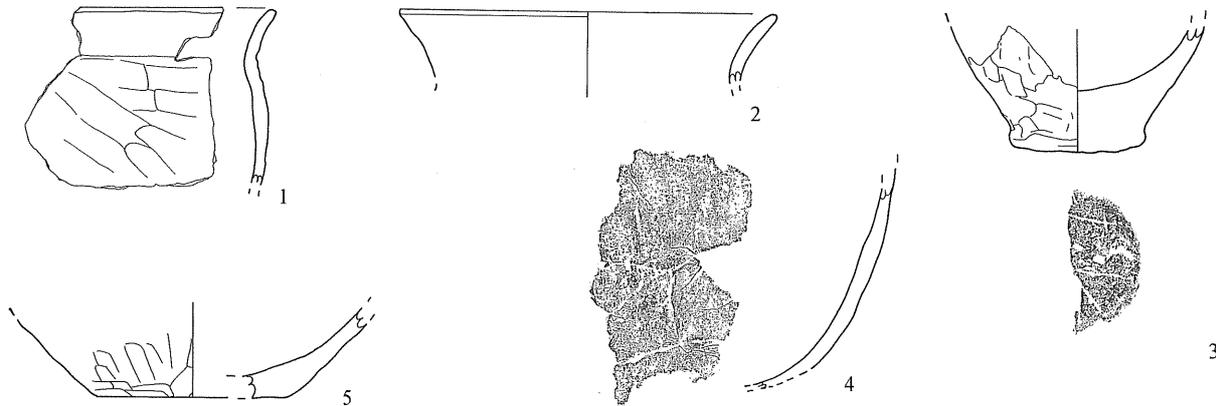


第71図 H 22号住居址実測図

溝らしき溝が確認され、溝の西は一段高くなり、覆土も変わることから、2軒存在する可能性が考えられるが、この時期には大型でベッド状遺構を伴う住居址も存在するため断定はできない。深さは西側が20cm（床面）、東側が10cm（床面）を測る。床面はやや小礫が含まれていることから、やや凹凸感がある。西側のピットは2個だが、支柱穴かは不明である。また北側の中央付近には僅かだが焼土が認められた。床下は薄く小石混じりの暗褐色土が埋め込まれ床としていた。東側の床下は褐色土が埋め込まれ床としていた。掘方状態では、東側は一段落ち込み、一部に焼土が認められた。

出土遺物は覆土及び床面上から土師器が出土した。図示できたのは5点である。1は小型甕の口縁から胴部にかけての破片と思われる。やや丸みを持った胴部から「く」の字状に口縁部に至る。2は甕の口縁破片である。3、5は甕の底部破片で、3には木葉痕が認められる。4は甕で胴部破片である。

本住居址は、5世紀末～6世紀代、古墳時代中期終末から古墳時代後期と考えられる。



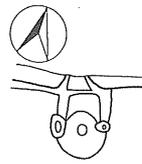
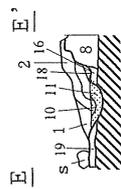
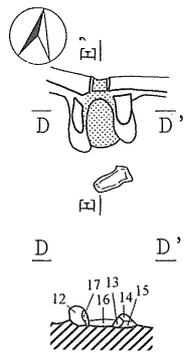
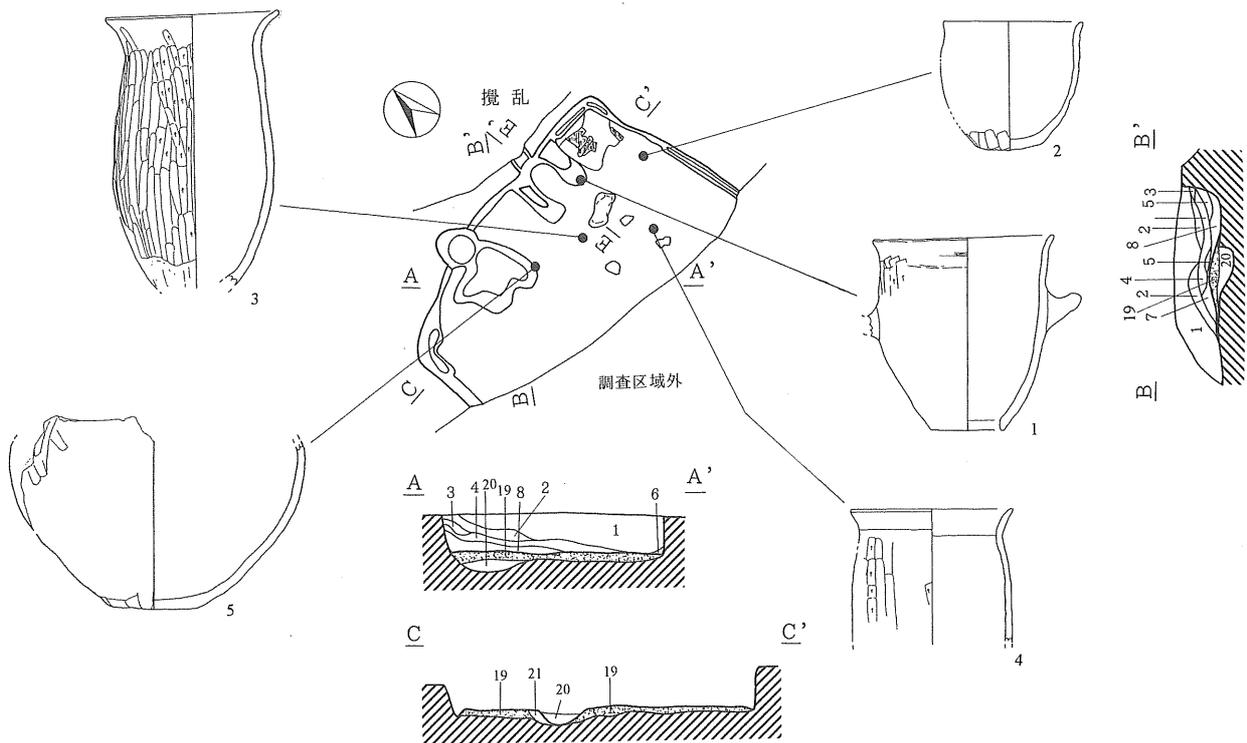
第72図 H 22号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	甕	—	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁体部破片	良	5YR4/3 鈍い赤褐色
2	土師器	甕	[20.2]	—	—	口縁横ナデ	口縁破片	良	5YR7/6 橙色
3	土師器	甕	—	7.2	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ 底部木葉痕	底部破片	良	5YR4/4 鈍い赤褐色
4	土師器	甕	—	—	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	体部破片	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
5	土師器	甕	—	[9.9]	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部・周辺破片	良	5YR7/6 橙色

第36表 H 22号住居址遺物観察表

### H 23号住居址

遺構は調査区西の南際16-い-Cグリッドに位置し、H 24の東に近接する。南は調査区外となるが、側溝が存在することから、遺構は既に破壊されていると思われる。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積である。規模は北壁3.4m、西、東壁は残存規模で西壁90cm、東壁2.0mを測り、深さは45cm内外である。平面形は残存状態から小型の方形と考えられる。壁はほぼ垂直で、一部の壁際に周溝が認められた。床面はカマド周辺がやや高いものの、他はほぼ平坦で北東隅に炭化層が存在した。ピットは北壁の西よりに1個認められたが支柱穴かは不明である。カマドは北壁の東よりに位置し、粘土で構築された袖が火床を挟み込み、住居内に64cmのびていた。袖のやや南の床面上には長さ40cmの石が横たわっており、袖先端の焚き口部に使用された天井石と考えられた。火床には多量の焼土が認められ、中心部は厚さ12cmの焼土が堆積していた。煙道部は北壁付近で急激に立ち上がり住居外にのびるが、大半は攪乱によって破壊され、立ち上がり部までの長さは不明である。床下は強粘性の褐色土が主として埋め込まれ、この上面を床として利用していた。



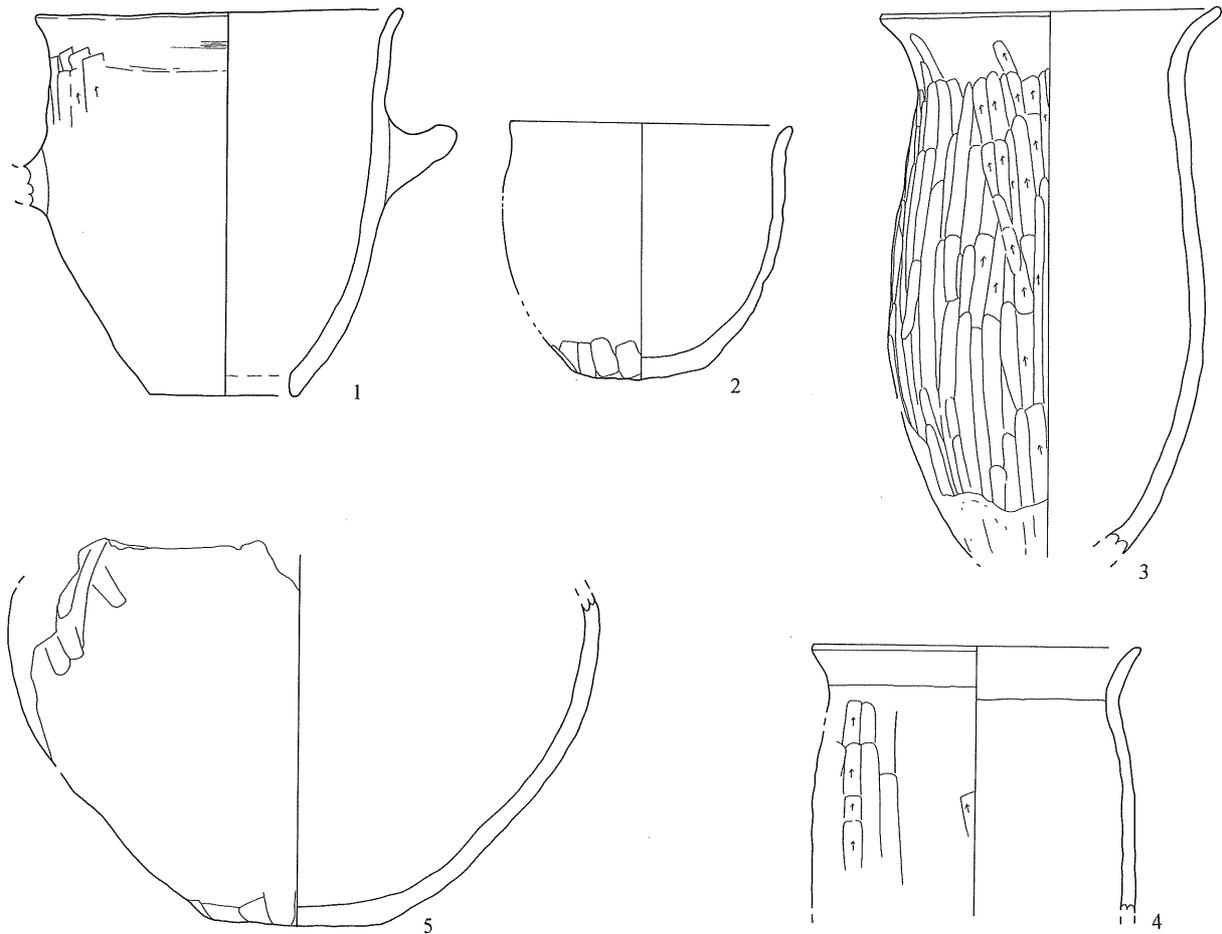
- 1層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒・ブツ多。炭化物。強粘性。
- 2層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土粒・ブツ多。炭化物。強粘性。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土粒・ブツ多。炭化物、焼土。強粘性。
- 4層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土粒・炭化物・焼土少量。強粘性。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土粒少量。粒子密。強粘性。

- 6層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土粒、砂含む。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒・砂・炭化物・焼土少量。強粘性。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒・ブツ多。炭化物・焼土少量。強粘性。
- 9層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。焼土、灰、炭化物。強粘性。
- 10層 鈍い赤褐色土 (5YR4/4) 焼土層。火を受け固い。(火床上層)
- 11層 鈍い赤褐色土 (2.5YR4/4) 焼土層。砂質。(火床)
- 12層 鈍い黄褐色土 (10YR5/4) 黄褐色土主体。(袖)
- 13層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土ブツ。灰多量。(カマド内壁)
- 14層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。炭化物 (袖)
- 15層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。炭化物 (袖)
- 16層 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土、灰、炭化物。
- 17層 暗赤褐色土 (2.5YR3/3) 火を受け固い。(カマド内壁)
- 18層 赤灰色土 (2.5YR4/1) 焼土ブツ、暗褐色土。一部火を受けて固い。
- 19層 褐色土 (10YR4/4) 黄褐色土主体。暗褐色土。強粘性。上面硬質、床面。
- 20層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。
- 21層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土主体。褐色土。

第73図 H 23号住居址実測図

遺物は覆土内、カマド周辺及び床面直上から多数の土師器が出土した。図示できたのは土師器5点である。1は甗で大きく開いた単孔の底部から開き気味に立ち上がり、口縁付近で僅かに外反する。胴部を取っ手を有する。2は小型で広口の鉢である。3、4は長胴甕で、3は底部破損品で最大径は口縁部にあり、胴部の最大径は中央やや下に来る。4は口縁から胴部にかけての破損品である。5は胴の張った甕の胴部破片である。

本住居址は5世紀末～6世紀前葉、古墳時代中期終末から古墳時代後期と考えられる。(I期)



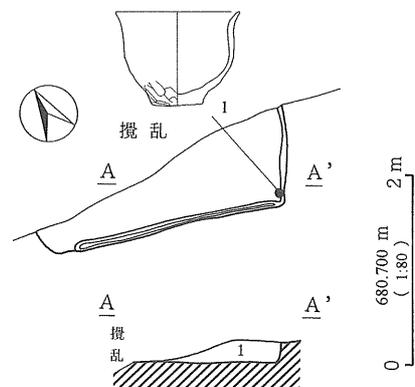
第74図 H 23号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	甑	19.2	7.6	20.3	口縁横ナデ 外面へら削り 内面横ナデ 取って張り付け 単乳	95	良	10YR8/4 浅黄橙色
2	土師器	鉢	15	7.2	13.5	口縁横ナデ 外面へら削り 内面横ナデ	60	良	5YR6/3 鈍い橙色
3	土師器	甕	18.4	—	—	口縁横ナデ 外面縦へら削り 内面横ナデ	70	良	5YR5/4 鈍い赤褐色
4	土師器	甕	[17.6]	—	—	口縁横ナデ 外面縦へら削り 内面横ナデ	口縁部破片	良	10YR5/1 褐灰色
5	土師器	甕	—	9.6	—	外面へら削り 内面へらナデ	40	良	7.5YR8/3 浅黄橙色

第37表 H 23号住居址遺物観察表

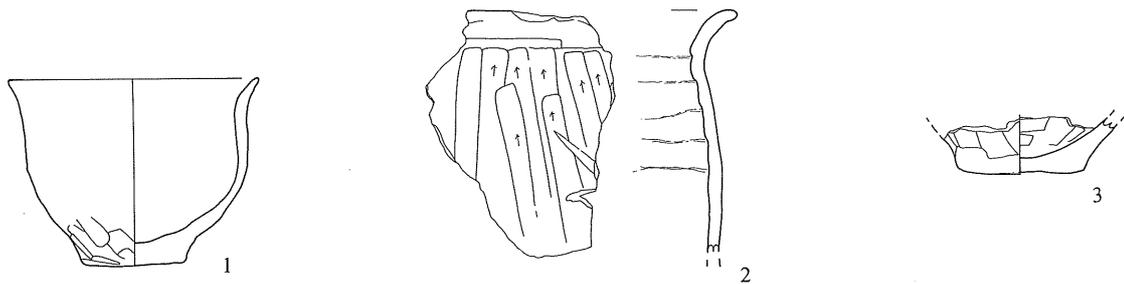
### H 24号住居址

遺構は調査区西の南16-う-Cグリッドに位置し、H 23の西に近接する。北側の大半は攪乱によって破壊され、確認できたのは南東コーナー付近の南壁、東壁の一部である。確認された遺構の深さは南壁の再深部で15cmを測り、東壁は8cmと浅い。床は平坦でピット、床下の掘方は認められなかった。遺物は土師器が出土し、図示できたのは3点である。1は小型甕で、削り出された小さめの底部から立ち上がり、口縁間近で僅かに外反する。最大径は口縁部にある。2は口縁付近の破片で、内面に輪積み痕が鮮明に認められる。3は甕の底部である。5世紀末～6世紀代、古墳時代中期終末から後期と考えられる。



1層 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土粒多。強粘性。

第75図 H 24号住居址実測図



第76図 H 24号住居址遺物実測図

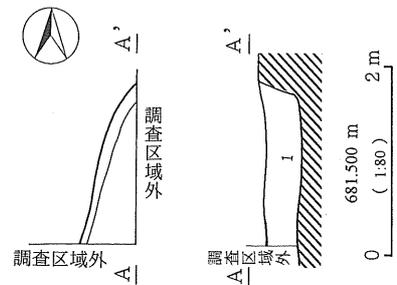
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	小型甕	13.2	5.5	9.9	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	90	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
2	土師器	甕	—	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ 輪積み痕	口縁体部破片	良	5YR7/4 鈍い橙色
3	土師器	甕	—	6.2	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部・体部破片	良	7.5YR8/2 灰白色

第38表 H 24号住居址遺物観察表

### H 25号住居址

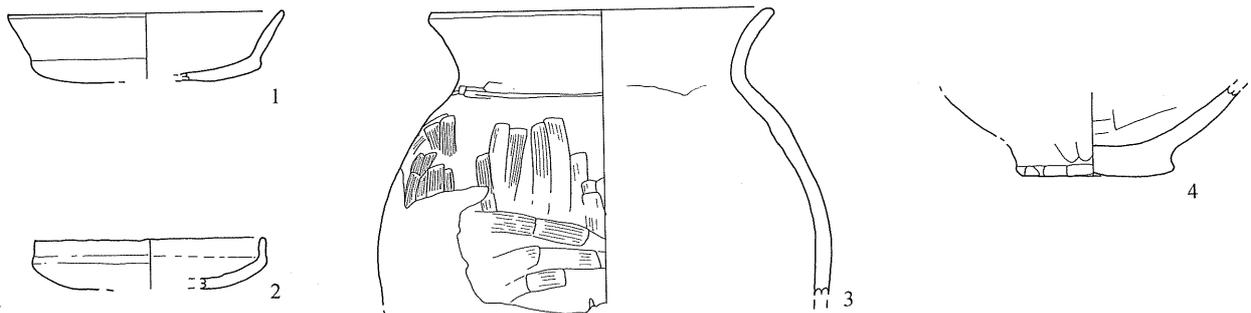
遺構は調査区中央の生活道路付近の10-く-Cグリッドに位置し、東側及び南側は調査区外となり確認されたのは西壁の一部と僅かな床面である。壁高は35cm内外を測り、覆土内から土師器の小破片が出土した。図示できたのは4点である。1、2は稜を有する坏で、1は平坦に近い丸底の底部を持ち、明瞭な稜に至った後、やや外傾気味に口縁部に至る。2は丸底の底部から、明瞭な稜を持った後、僅かに直上し口縁部に至る。3、4は甕で、3は口縁から胴部にかけての破片で、外面にハケ目状工具による調整痕が残る。4は底部である。

本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。



1層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土粒。  
焼土、炭化物。強粘性。

第77図 H 25号住居址実測図

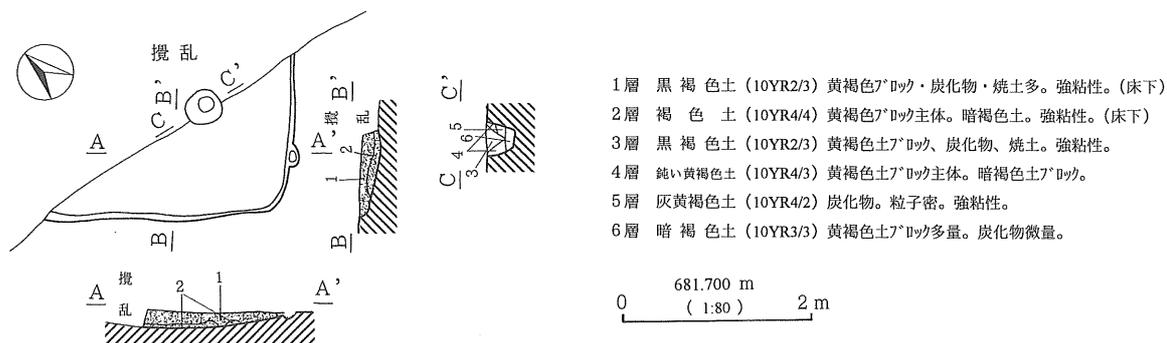


第78図 H 25号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[14.6]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	30	良	7.5YR7/6 橙色
2	土師器	坏	[10]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	20	良	5YR6/6 橙色
3	土師器	甕	[18]	—	—	口縁横ナデ 外面ハケ目 内面ヘラナデ	口縁体部破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
4	土師器	甕	—	8.3	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ・黒色	底部・体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色

第39表 H 25号住居址遺物観察表

## H 26号住居址



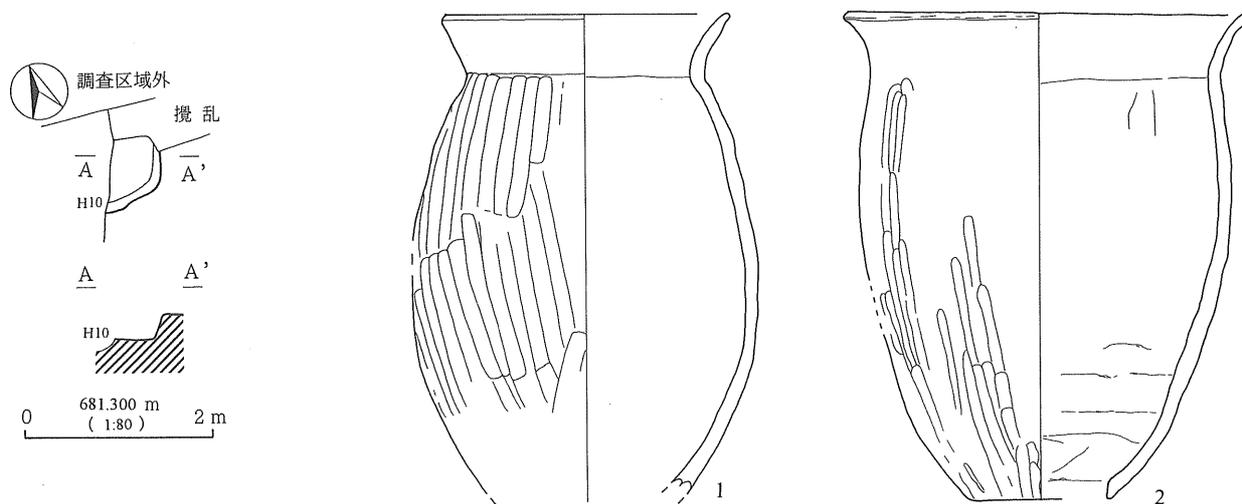
第79図 H 26号住居址実測図

遺構は調査区西よりの南12-こ-Cグリッドに位置し、遺構の北3分の2は攪乱によって破壊されている。また本住居址上部にはH 16号住居址が存在し切られていることから、遺構は掘方のみの確認となった。遺構の規模は目安となる壁長がいずれも完存しないため不明であるが、平面形は南東隅の形状から方形と考えられる。ピットは深さ30cmのものが1個認められ、位置的に支柱穴である可能性が考えられた。

遺物は土師器の甕片が僅かに出土した。時期は不明である。

## H 27号住居址

遺構は調査区中央のやや西11-お-Iグリッドに位置し、西をH 10に切られ、北は調査区外となるが、水路が存在することから遺構は既に破壊されていると考えられる。確認された規模は北東コーナーの極僅かな部分である。残存規模は東壁40cm、南壁70cm、深さ30cmを測る。遺物は土師器が出土し、図示できたのは2点である。1はやや胴の張る甕で、2は底部単孔の甌である。本住居址は6世紀中葉に位置付けたH 10に切られることから、これより若干古い6世紀前葉～中葉、古墳時代後期と考えられる。



第80図 H 27号住居址・遺物実測図

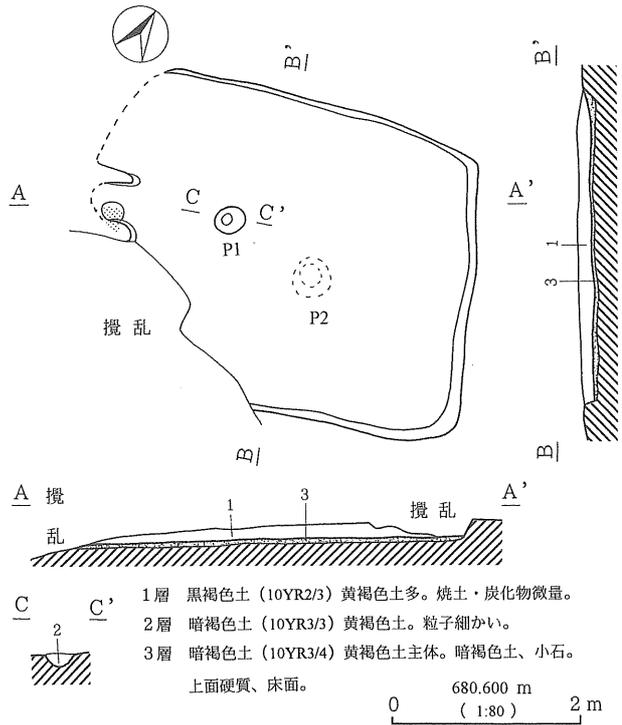
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	甕	15.4	—	—	□縁横ナデ 外面縦へら削り・ナデ 内面へらナデ	60	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	甌	21.1	7.5	25.9	□縁横ナデ 外面縦へら削り・ナデ 内面へらナデ	80	良	7.5YR8/1 灰白色

第40表 H 27号住居址遺物観察表

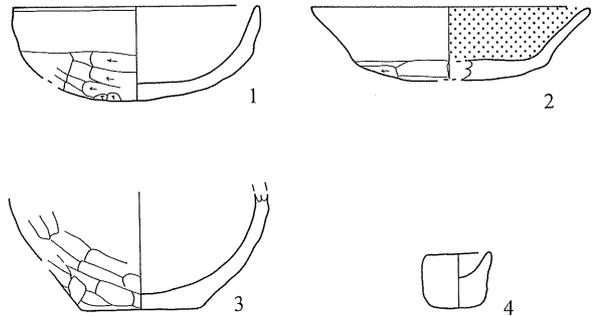
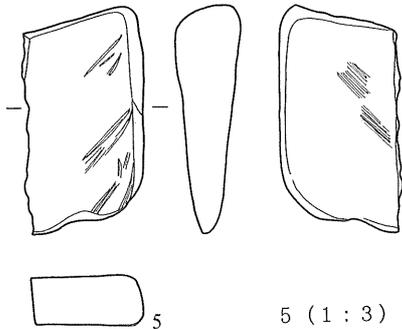
H 28号住居址

遺構は調査区西の北13-く-Iグリッドに位置し、南西隅は攪乱によって破壊されている。規模は東壁3.2m、北壁3.8mを測り、深さは最深で16cmを測る。平面形は残存形態からやや東西に長い長方形と考えられる。床面は強粘性の黄褐色だが、所々地山の砂礫層が認められ、さらに上部からの攪乱の影響が多いことから凹凸感が激しい。ピットは床面上から1個認められたが支柱穴かは不明である。カマドは佐久市内でもまれな西カマドである。上部は大半が削り取られているため、袖位置と火床の確認にとどまった。床下は浅く小石混じりの暗褐色土層が認められ、上面を床として利用していた。

遺物は土師器、砥石が出土し、図示できたのは5点である。1、2は稜を有する坏で、丸底の底部から立ち上がり、稜から1はやや内彎気味に、2は大きく開き口縁部に至る。2は内面黒色処理を施す。3は小型甕の底部から胴部にかけての破損品である。4はミニチュア土器で底部が厚く作られている。5は覆土内出土の硬質砂岩性の砥石だが本住居址に伴うかは不明である。本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第81図 H 28号住居址実測図



第82図 H 28号住居址遺物・石器実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[13.1]	丸底	5	口縁横ナデ 外面へら削り	60	良	2.5YR6/6 橙色
2	土師器	坏	[14.8]	丸底	-	口縁横ナデ 外面へら削り 内面黒色処理	口縁体部破片	良	5YR6/6 橙色
3	土師器	小型甕	-	6.3	-	外面へら削り 内面へらナデ	20	良	2.5YR5/6 明赤褐色
4	手づくね	ミニチュア	3.5	3	2.9	ナデ	100	良	7.5YR7/4 鈍い橙色

第41表 H 28号住居址遺物観察表

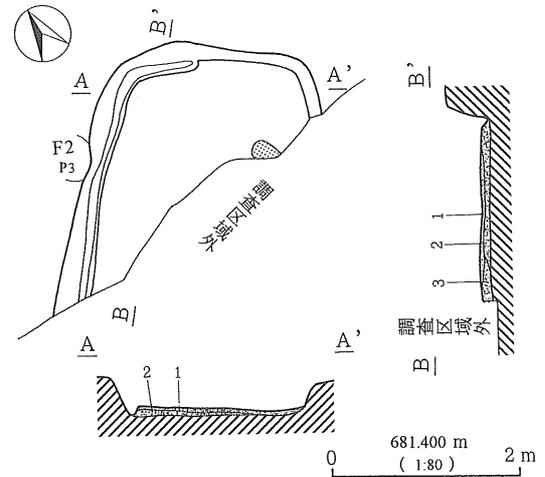
番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
5	Ⅱ区	砥石	硬質砂岩	9	4.8	2.6	147.26

第42表 H 28号住居址石器観察表

## H 29号住居址

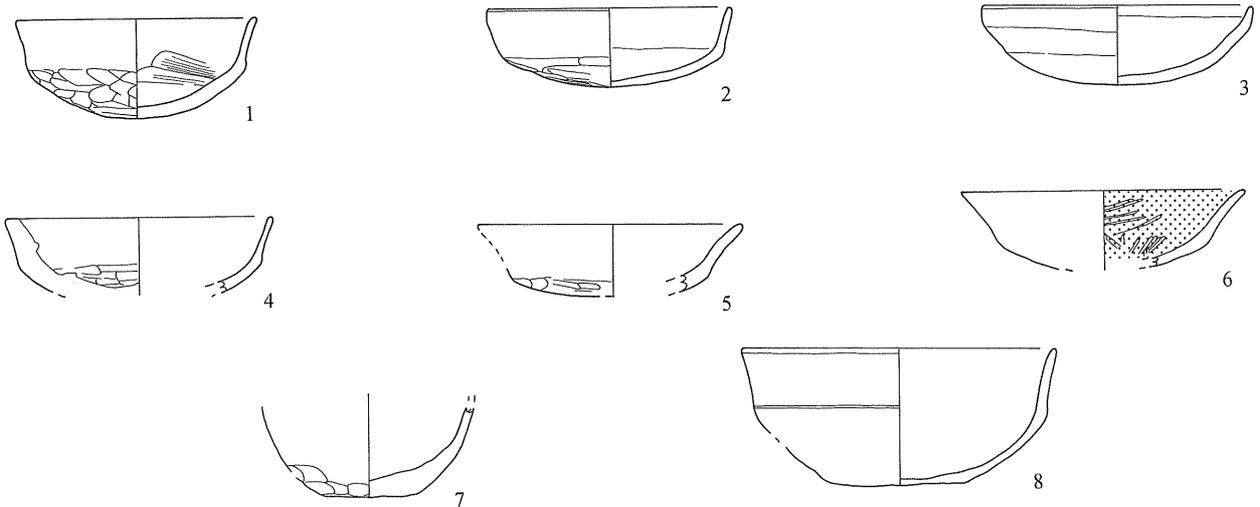
遺構は調査区中央の南際10-Cグリットに位置し、南側の大半は調査区外となるが、側溝が存在することから遺構は既に破壊されているものと思われる。規模は北壁2.4m、東西壁は残存規模で西壁2.7m、東壁80cmを測り、深さは36cm(床面)を測る。平面形は残存形態から南北に長い長方形と考えられる。壁はやや外傾し、北西隅から西壁際に周溝が認められた。床面は強粘性で固く平坦で、住居址北よりの攪乱境に一部焼土の散布が認められた。床下は浅く暗褐色土が埋め込まれていた。

遺物は土師器が多数出土した。図示できたのは土師器8点である。1～6は稜を有する坏で丸底の底部から立ち上がり稜から1はやや開き、2、3は内彎気味に、4、5、6は大きく開き口縁部に至る。7、8は鉢で7は底部から体部にかけての破損品である。本住居址は6世紀前葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅱ期)



- 1層 暗褐色土(10YR3/4)白色粒、砂。(床面)
- 2層 暗褐色土(10YR3/4)暗褐色土、白色粒砂、小石。粒子粗い。(床下)
- 3層 暗褐色土(10YR3/4)黄褐色土主体。暗褐色土、小石少量。

第83図 H 29号住居址実測図



第84図 H 29号住居址遺物実測図

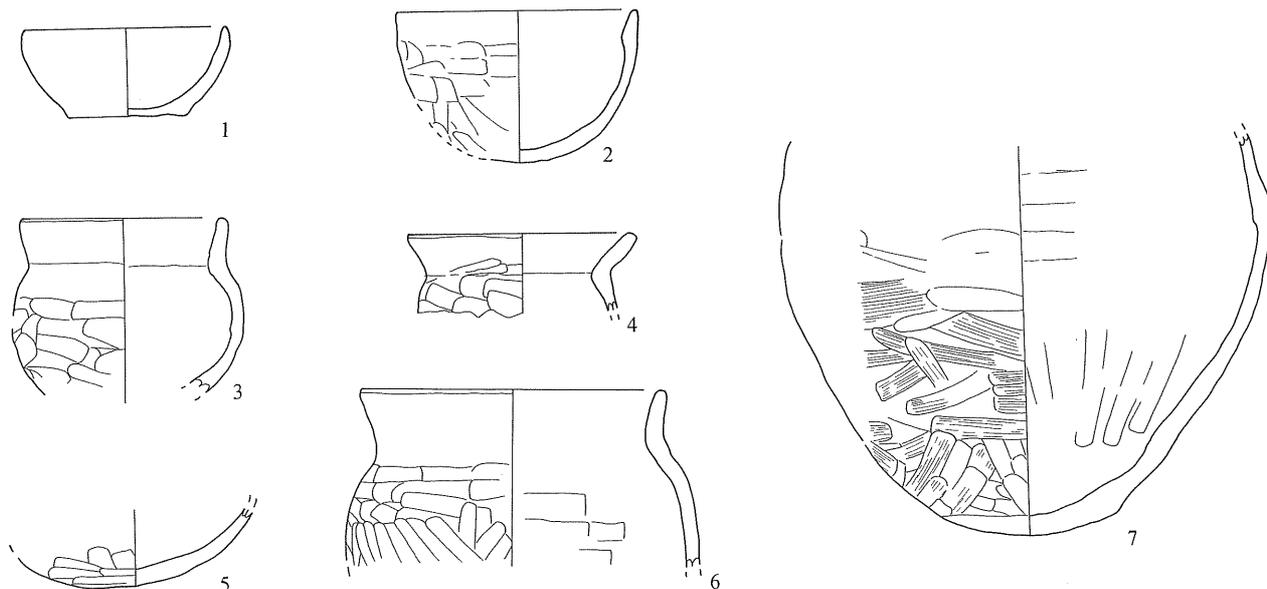
番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	12.8	丸底	5.3	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ハケ目	98	良	5YR8/3 淡橙色
2	土師器	坏	12.9	丸底	4.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	70	良	7.5YR4/1 褐灰色
3	土師器	坏	15.5	丸底	4.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	70	良	7.5YR5/1 褐灰色
4	土師器	坏	[14.2]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
5	土師器	坏	[14]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	40	良	7.5YR5/1 褐灰色
6	土師器	坏	[15.2]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ・黒色処理	口縁体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
7	土師器	鉢	—	5.3	—	外面・底部ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部・体部破片	良	5YR6/8 橙色
8	土師器	鉢	[16.9]	7.1	7.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	40	良	10YR7/1 灰白色

第43表 H 29号住居址遺物観察表



やや北によった上部には、当時使用されたとと思われる胴丸の土師器甕が残存していた。火床部分には焼土の堆積が認められた。床下には強粘性の暗褐色土が5cm前後と薄く埋め込まれ、この上面を床として利用していた。

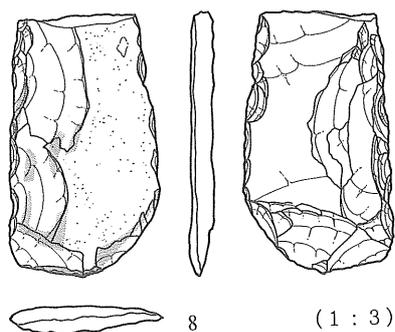
遺物は土師器が中心で、図示できたのは8点である。1、2は鉢で1は平底の底部からやや内彎気味に口縁に至る。2は丸底の底部から丸みをもって立ち上がり口縁付近は直上する。3は壺の胴部から口縁にかけての破損品で、4は小型甕の口縁と思われる。5は鉢または坏の底部と考えられる。6は中型の甕の胴部から口縁にかけての破損品である。7は甕の底部から胴中央部にかけての破損品である。8は泥岩性の打製石斧である。本住居址は6世紀代、古墳時代後期と考えられる。



第86図 H 30号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	鉢	10.7	6.2	4.7	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	鉢	12.9	丸底	8.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	60	良	5YR6/6 橙色
3	土師器	小型壺	10.8	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	40	良	2.5YR5/6 明赤褐色
4	土師器	小型甕	11.7	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	20	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
5	土師器	坏?	—	丸底	—	外面ヘラ削り	底部破片	良	7.5YR7/6 橙色
6	土師器	甕	16.1	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	5YR6/8 橙色
7	土師器	甕	—	9.6	—	外面ハケ目・ヘラ削り 内面ヘラナデ	50	良	10YR7/4 鈍い黄橙色

第44表 H 30号住居址遺物観察表



番号	出土位置	器種	石材	
	覆土	打製石斧	泥岩	
8	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
	10.4	6	1	67.81

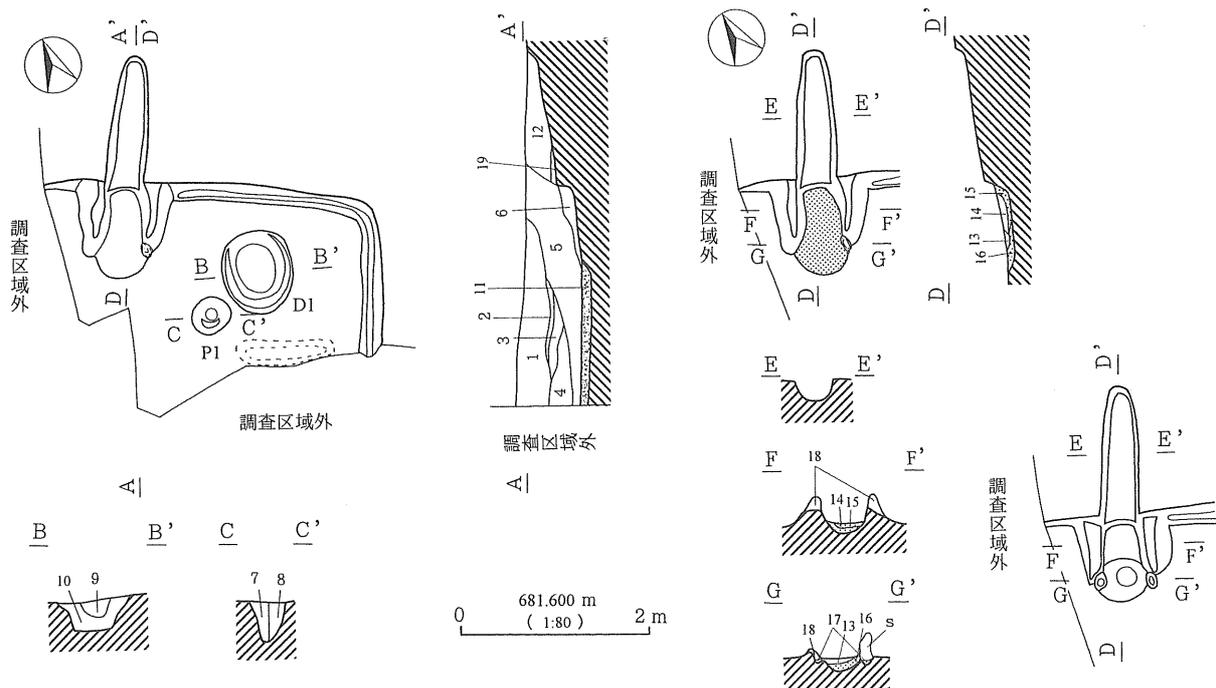
第45表 H 30号住居址石器観察表

第87図 H 30号住居址石器実測図

### H 31号住居址

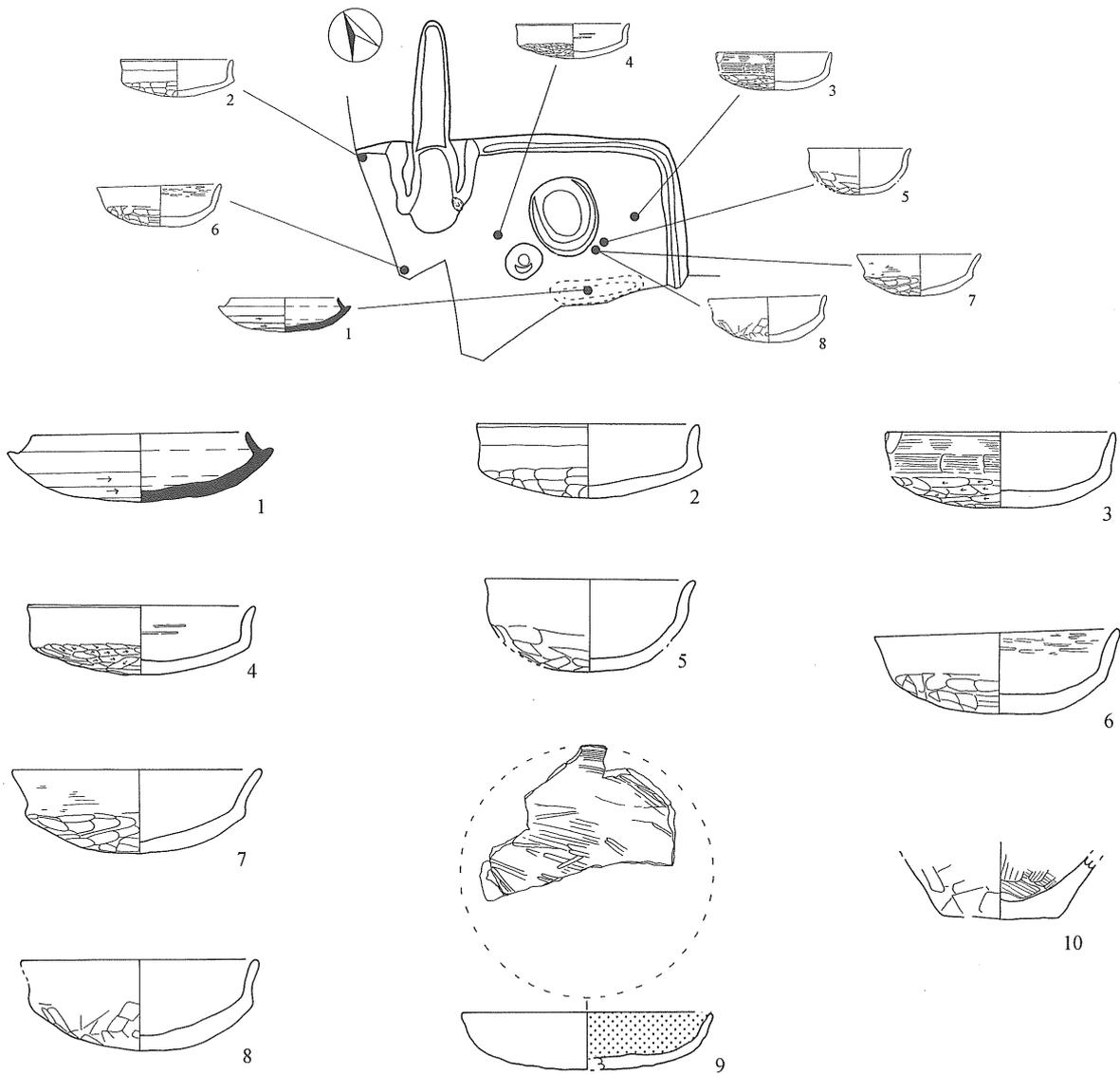
遺構は調査区中央の南際10-お-Cグリッドに位置し、西は生活道路となる。南は調査区外だが側溝が存在することから既に破壊されているものと思われる。確認された範囲は北東コーナー付近のみで、住居址全体の4分の1弱と考えられる。覆土は強粘性の黒褐色、暗褐色土が主体で壁方向から流れ込むように堆積していた。自然堆積と考えられる。規模は残存規模で北壁3.5m、東壁1.6m、深さ60cmを測る。平面形は残存部の状況から方形と思われる。壁はほぼ垂直で、壁際に沿って周溝が存在する。床面は強粘性で固くやや凹凸感がありピット1個、土坑1基が認められた。P1は支柱穴と思われ、深さ40cmを測る。カマドは北壁の調査区外際に位置し、全体が調査可能であった。カマドの状態は良好で、袖は強粘性の地山である黄褐色土によって構築され、火床を挟み込むように住居内に80cmほどのび、東袖先端には細長い隅丸柱状の石が縦に埋め込まれていた。火床付近には灰、炭化物、焼土混じりの土が多く堆積していた。煙道は北壁付近から急激に立ち上がった後、緩やかな傾斜で住居外1.4m付近に立ち上がる。床下は強粘性の褐色土が薄く埋め込まれ、上面を床として利用していた。

遺物は覆土内及び床面直上から、須恵器、土師器坏・甕、石器などが出土した。図示できたのは12点である。1は須恵器坏、2~9は丸底の稜を有する土師器坏で外面はヘラ削りを施し、内面は摩耗が激しいが僅かにミガキを施した痕跡が認められる。10は甕の底部破片である。11は輝石安山岩製の打製石斧、12は粘板岩性の石棒である。本住居址は6世紀中葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲa期)



- |  |  |
|--|--|
| 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土、炭化物。強粘性。          | 11層 褐色土 (10YR4/6) 地山黄褐色土主体。強粘性。上面強固、床面。  |
| 2層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物多量。炭化層。           | 12層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土・炭化物多。煙道覆土。         |
| 3層 黒褐色土 (10YR2/2) 焼土、炭化物、黄褐色土7"ドロ。強粘性。 | 13層 明褐色土 (7.5YR5/6) 焼土層。(火床)             |
| 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土7"ドロ。強粘性。        | 14層 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 焼土・灰・炭化物多。(火床)      |
| 5層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土多量。強粘性。          | 15層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物、灰。強粘性。(火床)        |
| 6層 鈍い黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土主体。強粘性。        | 16層 暗赤褐色土 (2.5YR3/4) 焼土・炭化物少量。(火床)       |
| 7層 黒褐色土 (10YR2/3) 柱痕。粒子密。強粘性。(ピット)     | 17層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土・炭化物多。              |
| 8層 暗褐色土 (10YR2/3) 粒子密。炭化物。強粘性。(ピット)    | 18層 暗褐色土 (10YR3/4) 焼土層。火を受け固い。(袖)        |
| 9層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土、炭化物。強粘性。(D1)      | 19層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土層。火を受け焼けている。煙道底面。 |
| 10層 暗褐色土 (10YR3/3) 粒子密。炭化物。強粘性。(D1)    |  |

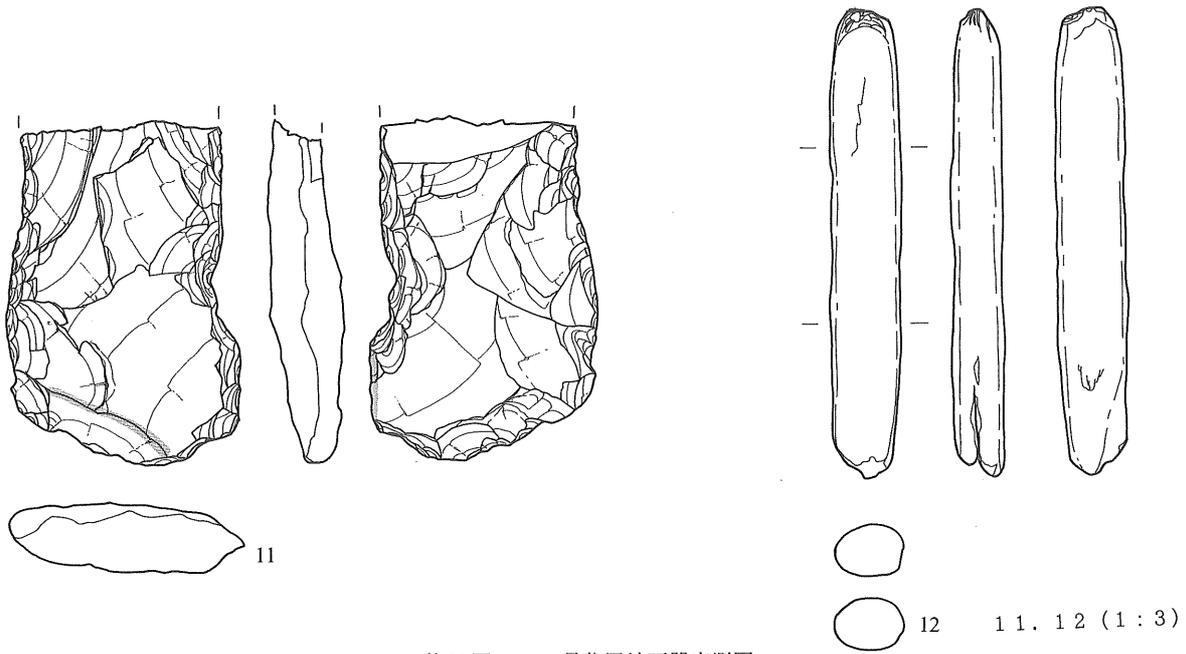
第88図 H 31号住居址実測図



第89図 H 31号住居址遺物出土位置図・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	須恵器	坏	12	丸底	3.8	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	50	良好	N7/0 灰白色
2	土師器	坏	12.3	丸底	4.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	95	良	5YR7/6 橙色
3	土師器	坏	[13]	丸底	4.2	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	60	良	2.5YR5/6 明赤褐色
4	土師器	坏	12.7	丸底	3.9	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	90	良	7.5YR5/3 鈍い褐色
5	土師器	坏	11.7	丸底	5.1	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	70	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
6	土師器	坏	13.8	丸底	4.5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	100	良	7.5YR7/2 明褐色
7	土師器	坏	13.8	丸底	4.7	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	90	良	5YR6/6 褐色
8	土師器	坏	13.3	丸底	5	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ミガキ	35	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
9	土師器	坏	[14]	丸底	[3.1]	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面黒色処理 ミガキ	30	良	7.5YR5/4 鈍い褐色
10	土師器	甕	—	[6.4]	—	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部体部破片	良	5YR6/6 褐色

第46表 H 31号住居址遺物観察表

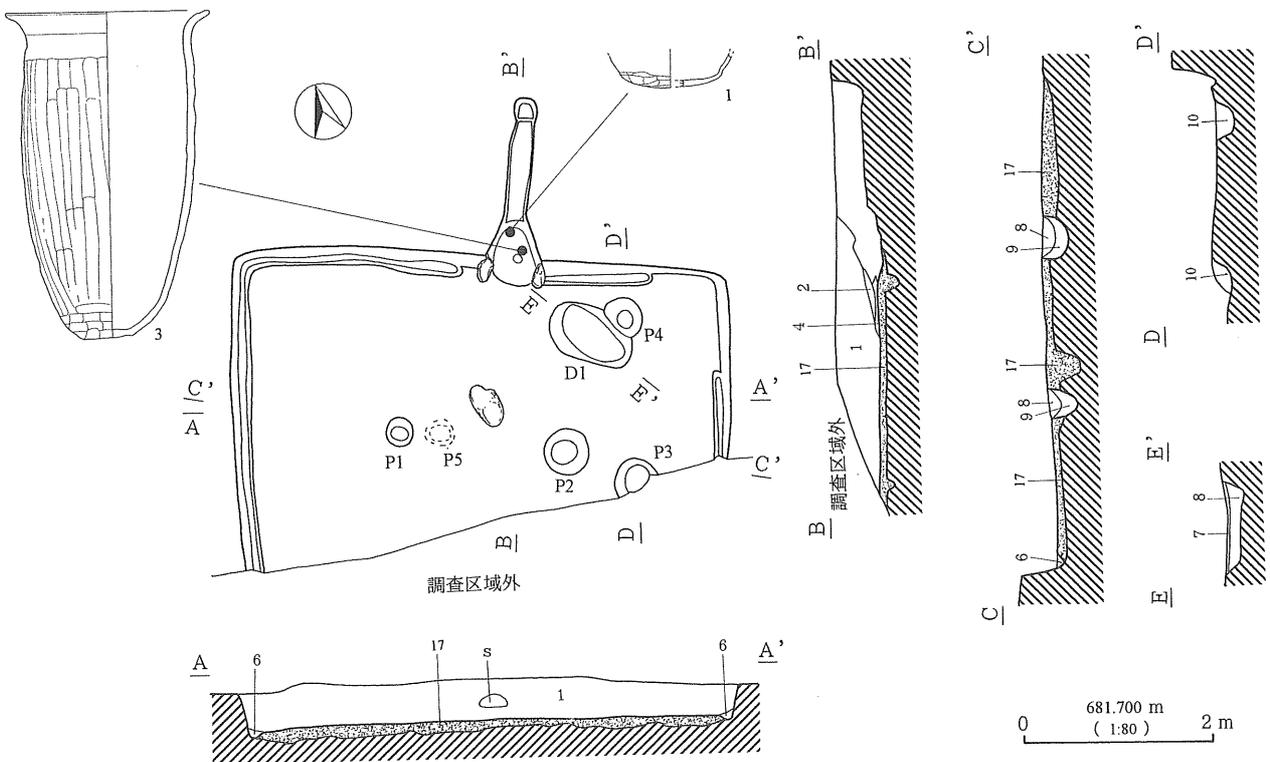


第90図 H 31号住居址石器実測図

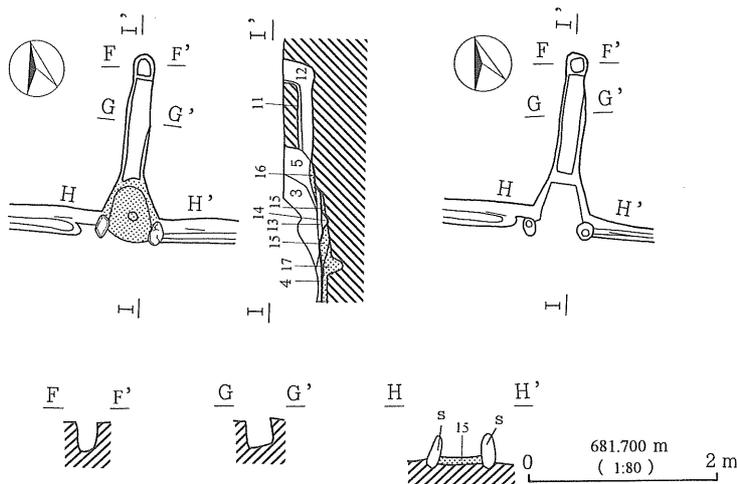
番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
11	覆土	打製石斧	輝石安山岩	13.6	9.2	2.9	408.28
12	上層	石棒	粘板岩	18.5	2.9	2.1	189.15

第47表 H 31号住居址石器観察表

H 32号住居址



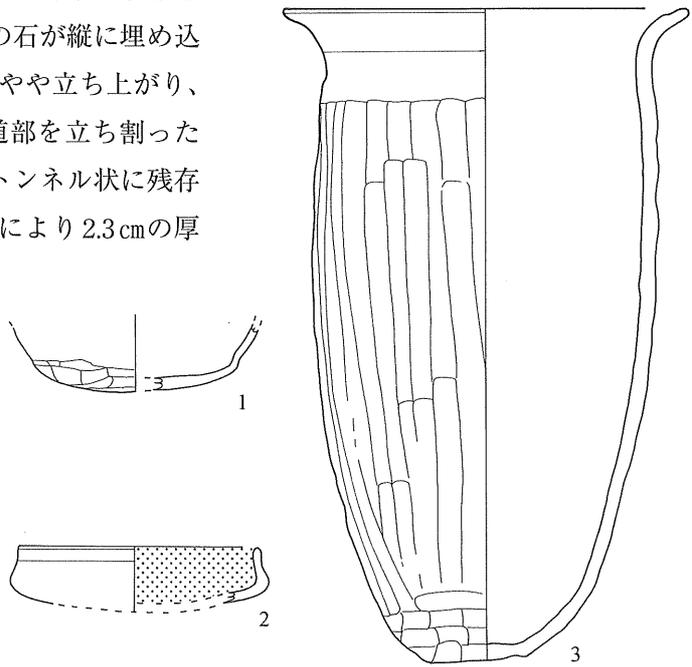
第91図 H 32号住居址実測図



- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒・フロック、強粘性。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土。焼土少量。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒・フロック。強粘性。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土多。強粘性。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土少量。粒子密。強粘性。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土。粒子密。強粘性。(周溝)
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3) 焼土・炭化物・灰多量。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。(ピット)
- 9層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。(ピット)
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土フロック、炭化物。強粘性。(ピット)
- 11層 極暗赤褐色土 (2.5YR2/3) 火を受け固い。(煙道土壁)
- 12層 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 焼土、炭化物。(煙道)
- 13層 暗赤褐色土 (2.5YR3/6) 焼土、灰多量。
- 14層 暗褐色土 (10YR3/3) 焼土、炭化物。
- 15層 暗赤褐色土 (5YR3/6) 焼土層。灰、炭化物。(火床)
- 16層 黒褐色土 (10YR2/2) 炭化物主体。焼土、灰。
- 17層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土主体。強粘性。上面強固、床面。

第92図 H 32号住居址カマド実測図

遺構は調査区やや東の南際10-え-Cグリッドに位置し、南側半分は調査区外だが、側溝が存在するため遺構は既に破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒褐色土の単層である。規模は北壁5.2m、西、東壁は残存規模で西壁3.4m、東壁2.0mを測り、深さは45cm内外である。平面形は残存形態から方形と考えられる。壁はほぼ垂直で北東隅を除き、壁際に周溝が存在している。床面は固く平坦で床面上からピット4個が認められたが、いずれも浅く主柱穴であるかは不明である。カマドは北壁の中央やや東よりに構築され住居内に袖を持たず、北壁外に火床部分をつくり出す形態で焚き口部と思われる北壁際に細長い隅丸柱状の石が縦に埋め込まれていた。煙道は北壁外40cmにて火床部からやや立ち上がり、その後はほぼ平坦に1.3mのび立ち上がる。煙道部を立ち割った結果、やや押しつぶされているものの煙道部がトンネル状に残存していたことが確認でき、トンネル天井部は熱により2.3cmの厚さで赤く焼けしまっていた。床下は5~8cmの厚さで強粘性の暗褐色土が埋め込まれ、特に上面は硬質でこの面を床として利用していた。遺物は覆土内から土師器、カマドから土師器甕などが出土した。図示できたのは3点である。1、2は稜を有する坏の破片で、1は稜から開きぎみに、2は内傾し立ち上がる。3はほぼ原型をとどめる長胴甕で口縁部に最大径がくる。本住居址は6世紀中葉、古墳時代後期と考えられる。(Ⅲa期)



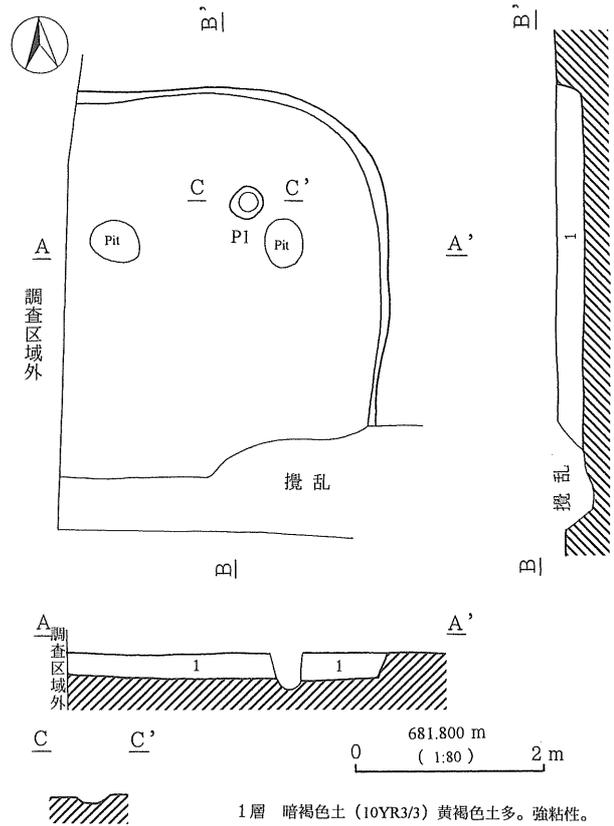
第93図 H 32号住居址遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	-	丸底	-	外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	30	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
2	土師器	坏	[12.8]	-	-	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面黒色処理	口縁破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
3	土師器	甕	21.5	5.3	34.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	98	良	5YR7/6 橙色

第48表 H 32号住居址遺物観察表

### H 33号住居址

遺構は調査区中央付近の10-お-Aグリッドに位置し、西側は生活道路のため調査区外となる。覆土は強粘性の暗褐色土である。規模は残存規模で東西3.5m、南北4.2m、深さ25cm内外を測る。平面形は残存状況から隅丸方形と考えられる。床面は固く平坦で、ピットが1個認められた。カマドは認められず堅穴状遺構的要素が高い。本住居址からの遺物出土は他の住居址に比べ非常に少なく、形態も他と異なることから堅穴状遺構である可能性が考えられる。時期は不明である。

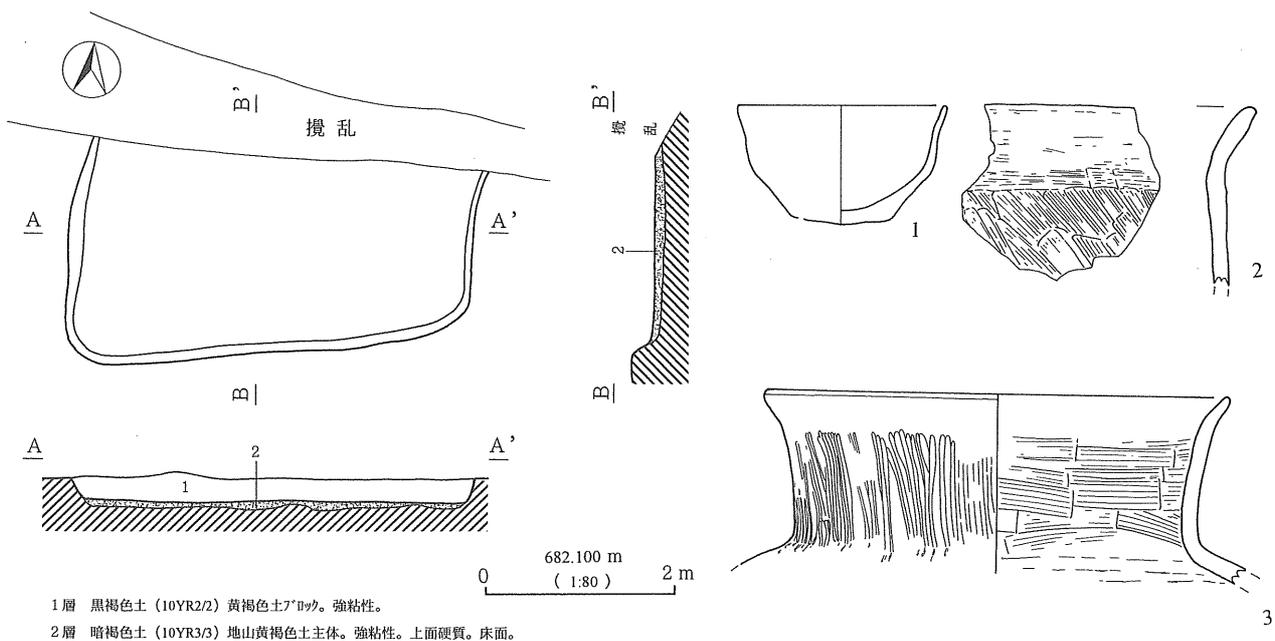


第94図 H 33号住居址実測図

### H 34号住居址

遺構は調査区東の北際7-う-Jグリッドに位置し、北は調査区外だが、水路が存在することから既に破壊されているものと思われる。覆土は強粘性の黒褐色土の単層である。規模は南壁4.3m、西、東壁は残存規模で西壁2.4m、東壁1.8mを測り、深さは25cm内外である。平面形は残存状況から方形と思われる。床面は固く平坦だが、ピットは認められなかった。カマドも確認できなかった。床下は薄く暗褐色土が埋め込まれ、特に上面は硬質でこの面を床として利用していた。

遺物は土師器が僅かに出土した。図示できたのは3点である。1は土師器の鉢で、2、3は甕の口縁破片である。本住居址は出土遺物の特徴から古墳時代中期終末から後期と考えられる。



第95図 H 34号住居址・遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	鉢	[11]	5.3	6.3	□縁横ナデ 外面ヘラ削り	30	良	10YR8/3 浅黄橙色
2	土師器	甕	—	—	—	□縁横ナデ 外面ハケ目・ヘラ削り	□縁部破片	良	10YR6/4 鈍い黄橙色
3	土師器	甕	[24.8]	—	—	□縁外面縦ミガキ 内面横ナデ	□縁破片	良	10YR7/4 鈍い黄橙色

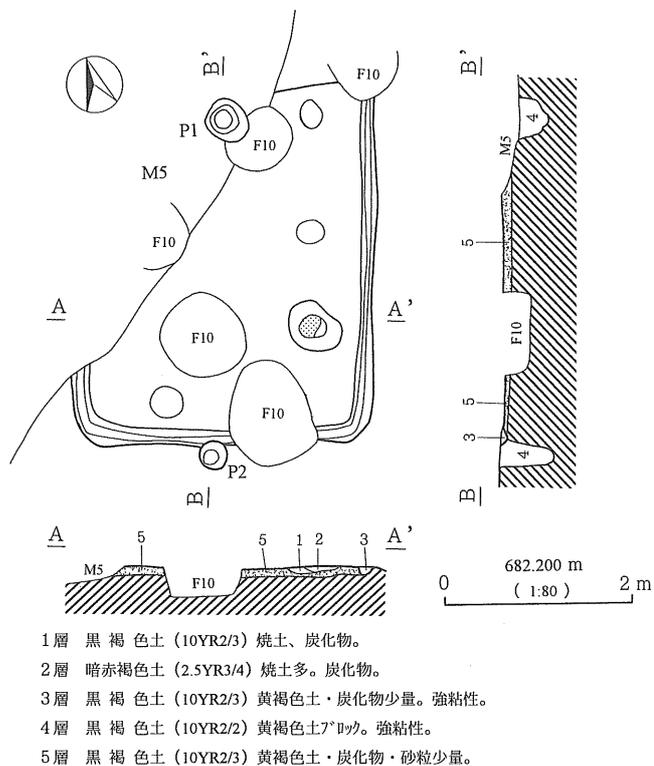
第49表 H34号住居址遺物観察表

### H35号住居址

遺構は調査区東の南際8-い-Cグリッドに位置し、北西隅の住居址3分の1をM5に切られ、部分的にF10のピットに切られる。検出状態ですでに床面であったため、覆土の状況は不明である。遺構の規模は壁際に巡らされていたと考えられる周溝が存在したことから、南北3.8m、東西3.2mのやや隅丸の長方形と思われる。ピットは2個確認できたが、本住居址の柱穴とは断言できない。南東隅付近に焼土が堆積する円形の窪みが認められた。炉址と考えられる。床下は5~8cm程度の厚さで強粘性の黒褐色土が埋め込まれ、この上面を床として利用していた。

遺物は検出時、床面上から土師器片が僅かに出土した。

遺物が僅かなため、正確な年代は不明である。



第96図 H35号住居址実測図

## 第2節 掘立柱建物址

### F1号掘立柱建物址

遺構は13-う-Iに位置する。確認されたピットは2個である。東西方向にピットが展開しないことから、北あるいは南に展開すると思われるが、南北方向は調査区外、攪乱によってピットの展開は確認できなかった。ピット形態はほぼ円形で、ピット間2.8m、径44~48cm、深さ20~28cmを測る。

### F2号掘立柱建物址

遺構は12-あ-Cに位置する。確認されたピットは東西方向に並んだ3個である。南北方向では調査区外、攪乱によってピットの展開は確認できなかった。ピットの形態はP1、P3は円形、P2はピットの重複が認められ不整形である。ピット間は1.2~1.4m、径40~100cm、深さ16~30cmを測る。

### F3号掘立柱建物址

遺構は19-あ-J周辺に位置する。2間×2間の側柱である。ピットの形態はほぼ円形である。ピット間は1.0~1.8m、径40~60cm、深さ45cm内外を測る。

### F4号掘立柱建物址

遺構は18-こ-Bに位置する。確認されたピットは2個で、展開すると考えられる南側は調査区外となる。確認されたピットの形態は円形で、ピット間1.7m、径52~60cm、深さ40cm内外を測る。

F 5号掘立柱建物址

遺構は20-あ-Aに位置する。西は攪乱、南は調査区外であるため確認できたのは遺構の北東付近のピット3個である。形態はP1、P2は一片がやや膨らんだ楕円形で、P1は円形である。ピット間は130cm内外、径40~60cm、深さは36~55cmを測る。

F 6号掘立柱建物址

遺構は17-う-I周辺に位置する。北は調査区外のため確認できたのは遺構の南1間×3間である。平面形は円形である。ピット間は1.0~1.4m、径60~80cm、深さ20~40cmを測る。

F 7号掘立柱建物址

遺構は調査区東8-う-A周辺に位置する。2間×2間の側柱である。形態は円形で、ピット間は1.5m内外、径65~100cm、深さ60~90cmを測る。

F 8号掘立柱建物址

遺構は調査区東の8-お-B周辺に位置する。東西に長い3間×3間の側柱である。ピットの形態は円形である。ピット間は70~120cm、径44~84cm、深さ20~50cmを測る。

P1、2、12の底面からは柱のすわった「あたり」と思われる周囲がやや褐色に変色した径15~25cmを測る硬質の窪みが存在した。

F 9号掘立柱建物址

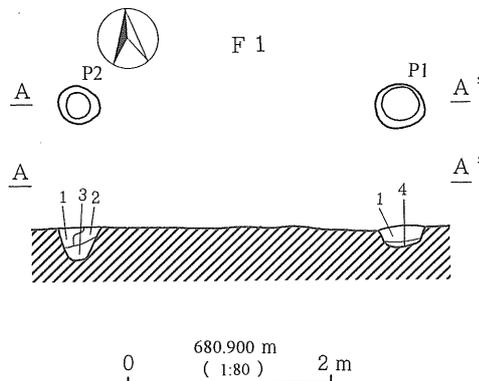
遺構は調査区東の7-か-Jに位置する。北は調査区外となる。確認できたのは2間×1間である。ピットの配列状況から確認できたのは遺構の南側柱付近と思われ、ピットは北側調査区外に展開してゆくとと思われる。確認できたピットの形態は円形、楕円形でピット間は1.0~1.5m、径60~100cm、深さ45~70cmを測る。

F 10号掘立柱建物址

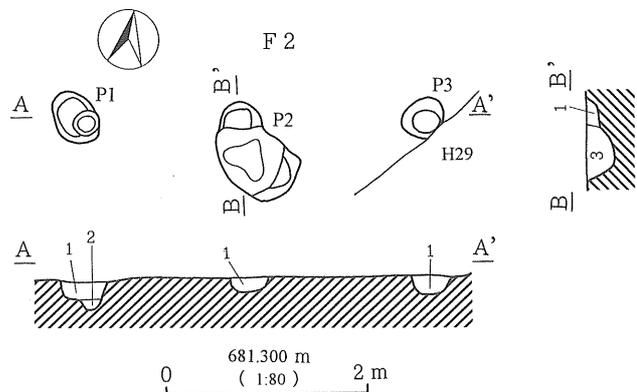
遺構は調査区東8-い-C周辺に位置する。M5に切られ、H35を切る。南東コーナー付近は攪乱によって破壊されているが、残存状況からやや東西に長い3間×3間の側柱と思われる。形態は円形で、ピット間は30~80cm、径45~90cm、深さ20~45cmを測る。

F 1号掘立柱建物址

F 2号掘立柱建物址



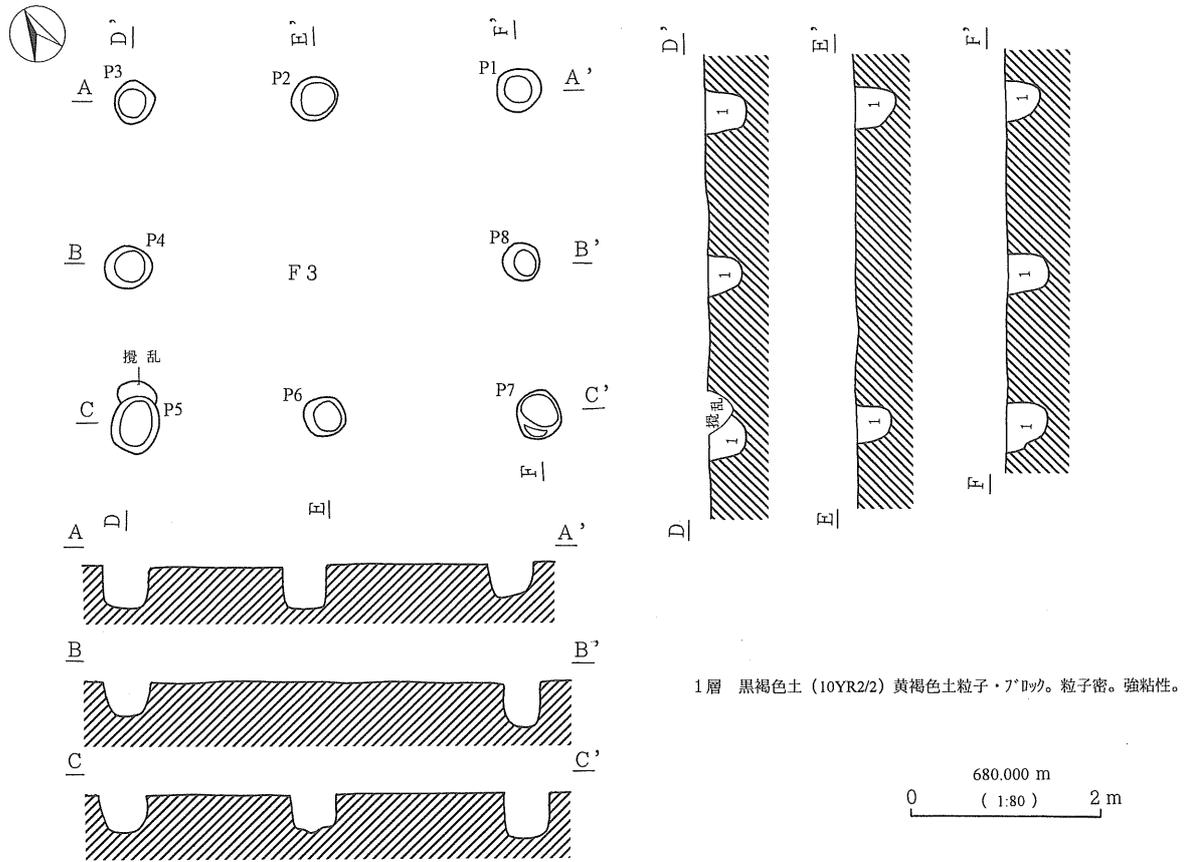
- 1層 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色土7%。炭化物少量。
- 2層 灰黄褐色土(10YR4/2)黄褐色土多。強粘性。
- 3層 暗褐色土(10YR3/4)黒褐色土7%。強粘性。
- 4層 褐色土(10YR4/6)暗褐色土7%。強粘性。



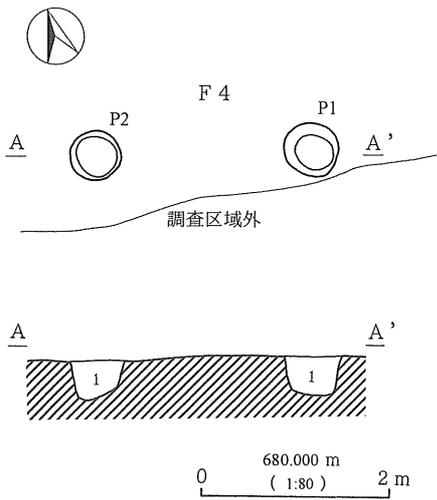
- 1層 黒褐色土(10YR2/3)炭化物・焼土少量。強粘性。
- 2層 黒褐色土(10YR2/3)黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。
- 3層 黒褐色土(10YR3/2)粒子細かい。砂。強粘性。

第97図 F1・2号掘立柱建物址実測図

F 3号掘立柱建物址

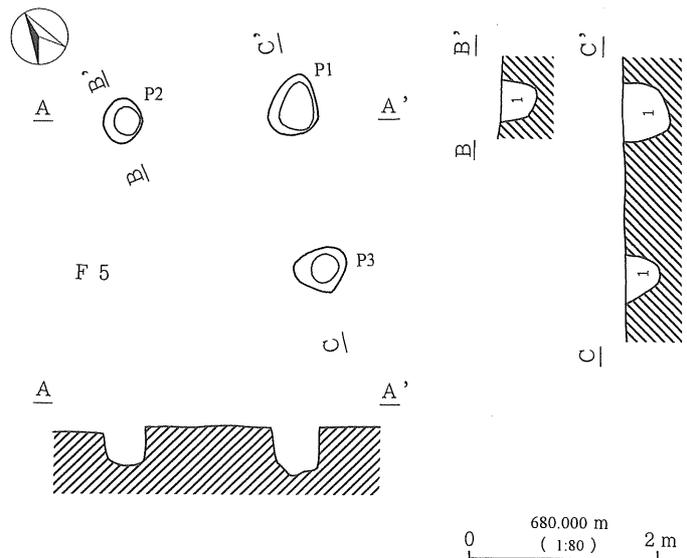


F 4号掘立柱建物址



1層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土粒子・7<sup>+</sup>ブロック。  
粒子密。強粘性。

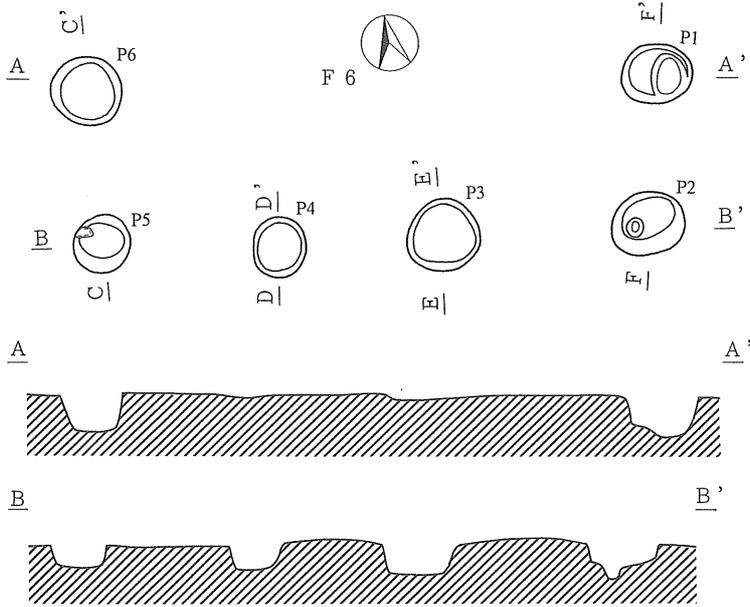
F 5号掘立柱建物址



1層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒子。粒子細い。強粘性。

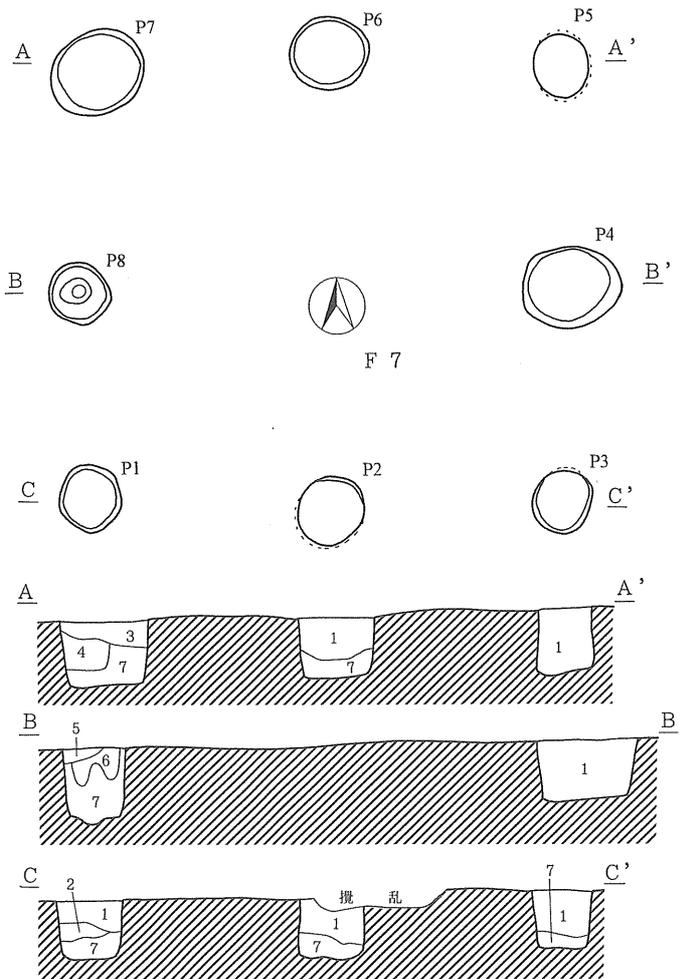
第98図 F 3・4・5号掘立柱建物址実測図

F 6号掘立柱建物址



- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 黄褐色土粒微量。粒子密。強粘性。
- 2層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土<sup>7</sup>の少量。強粘性。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土粒<sup>7</sup>の多。強粘性。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土 (砂質) 多量。粒子粗い。
- 5層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土<sup>7</sup>の。粒子細かい。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土粒、白色粒。強粘性。

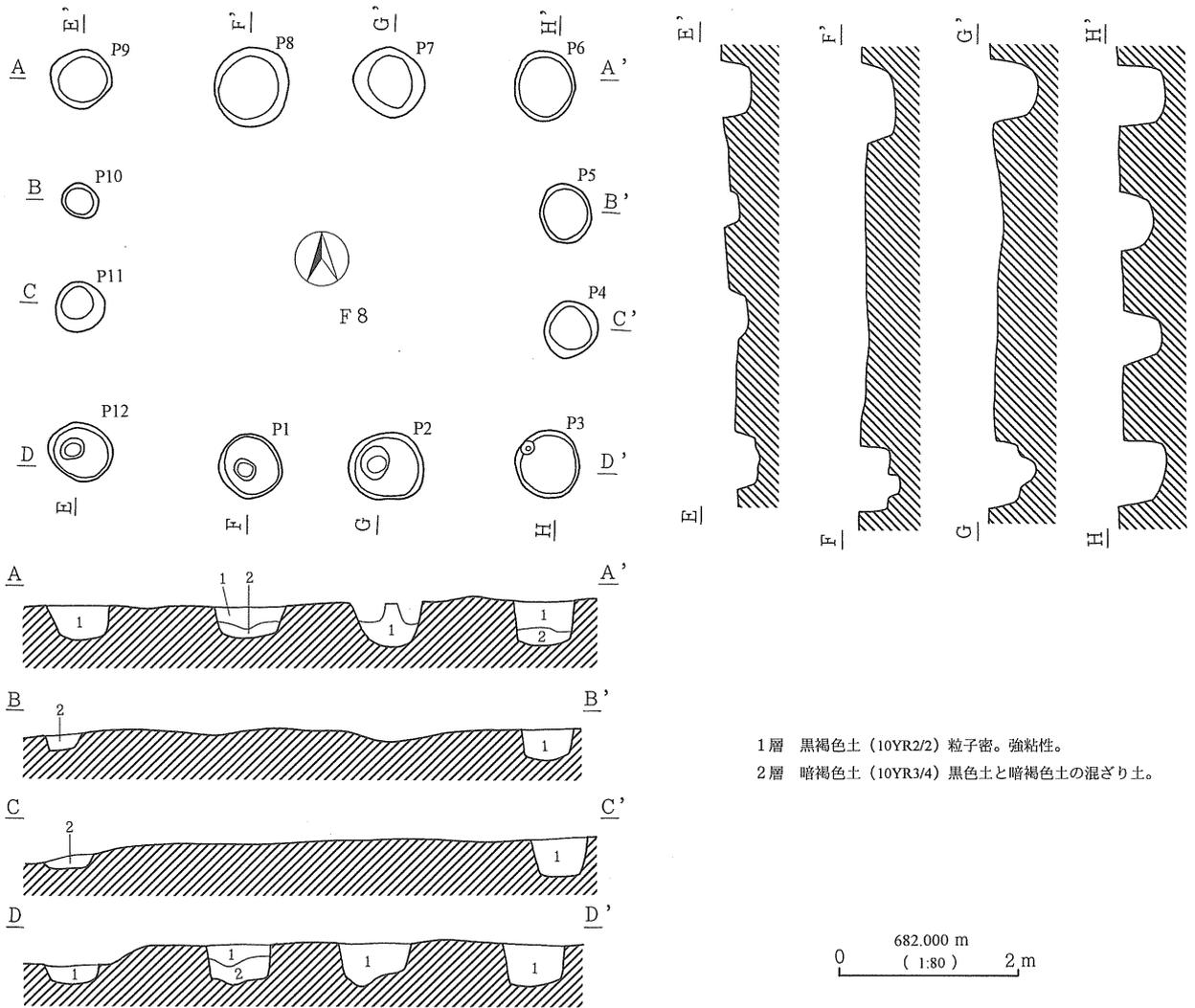
F 7号掘立柱建物址



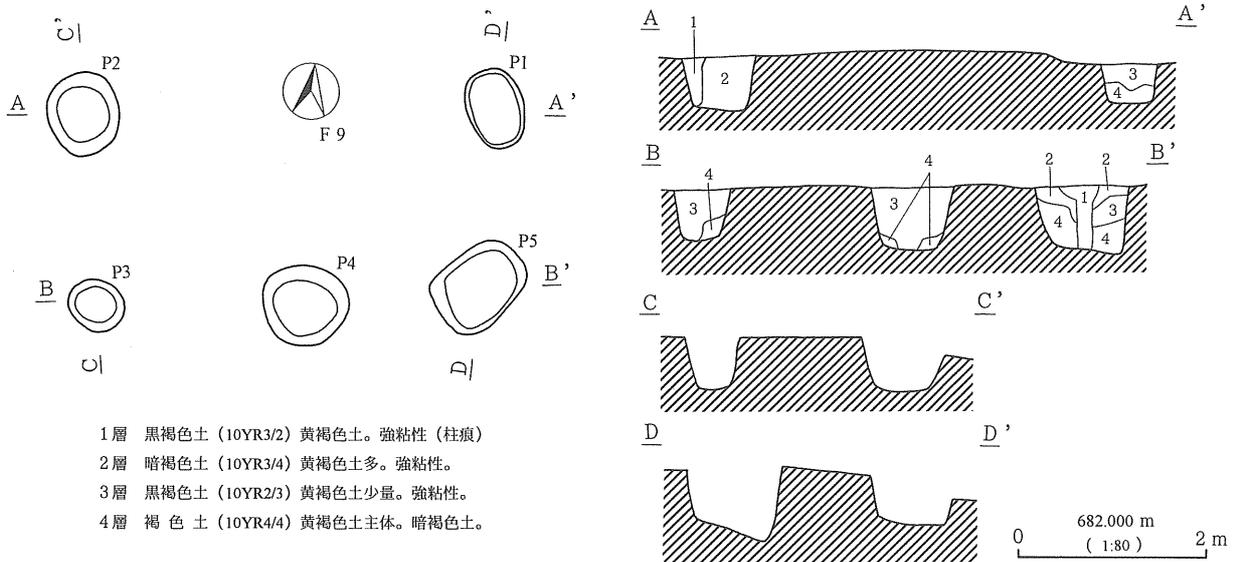
- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子密。強粘性。
- 2層 褐色土 (10YR4/6) 黄褐色土主体  
暗褐色土。強粘性。
- 3層 暗褐色土 (10YR3/4) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。  
強粘性。
- 4層 暗褐色土 (10YR3/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。  
強粘性。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/4) 砂。強粘性。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/2) 粒子密。黄褐色土。  
強粘性。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/3) 黄褐色土と暗褐色土の混ざり土。  
強粘性。

第99図 F 6・7号掘立柱建物址実測図

F 8 号掘立柱建物址

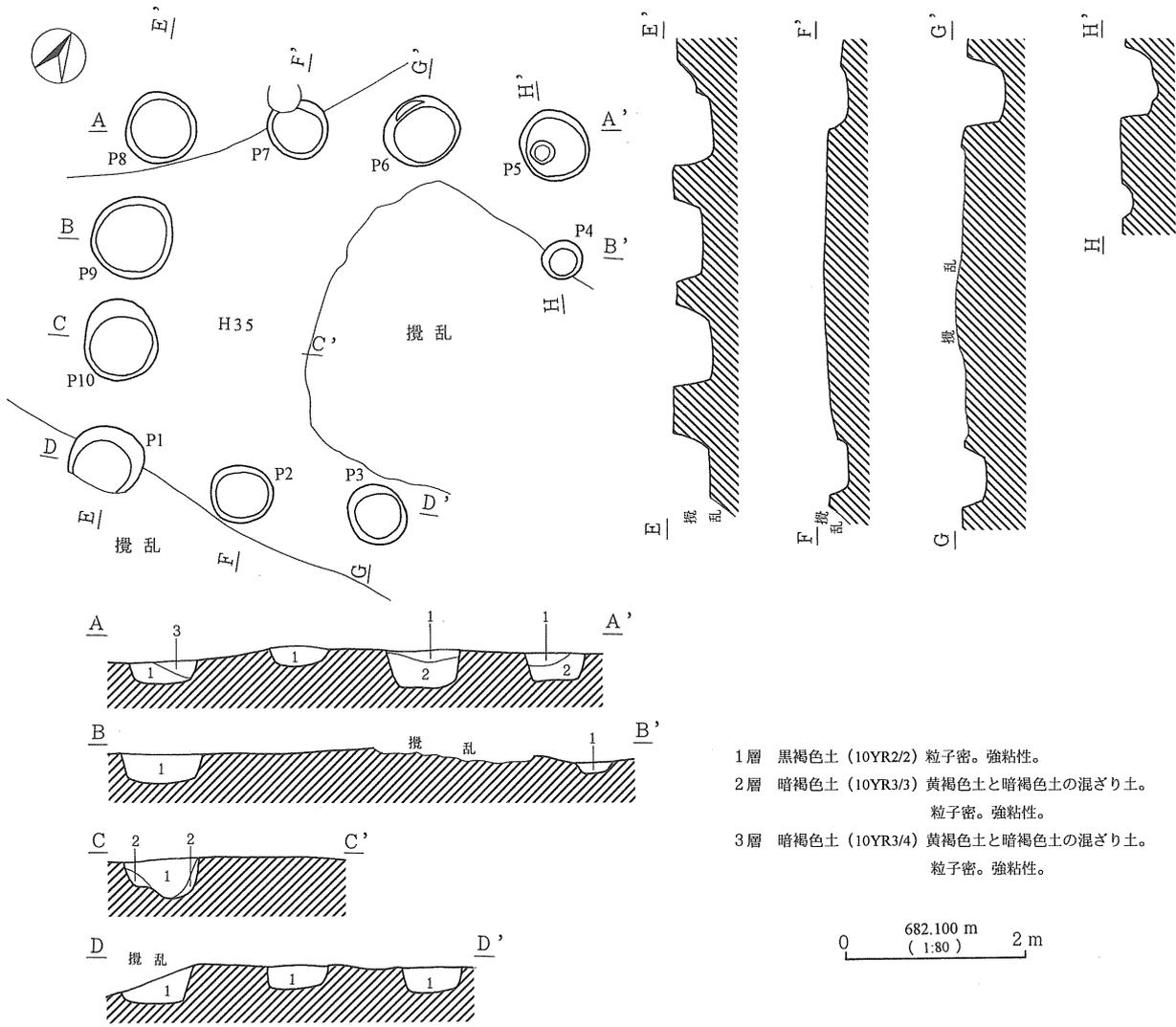


F 9 号掘立柱建物址

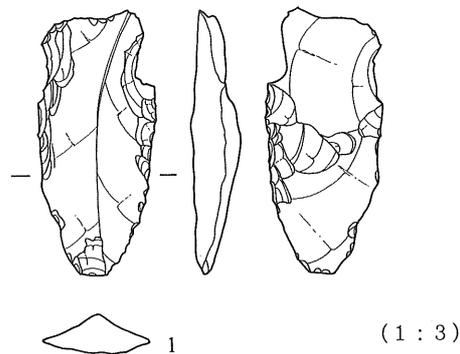


第100图 F 8 · F 9号掘立柱建物址実測図

F 10号掘立柱建物址



第101図 F 10号掘立柱建物址実測図



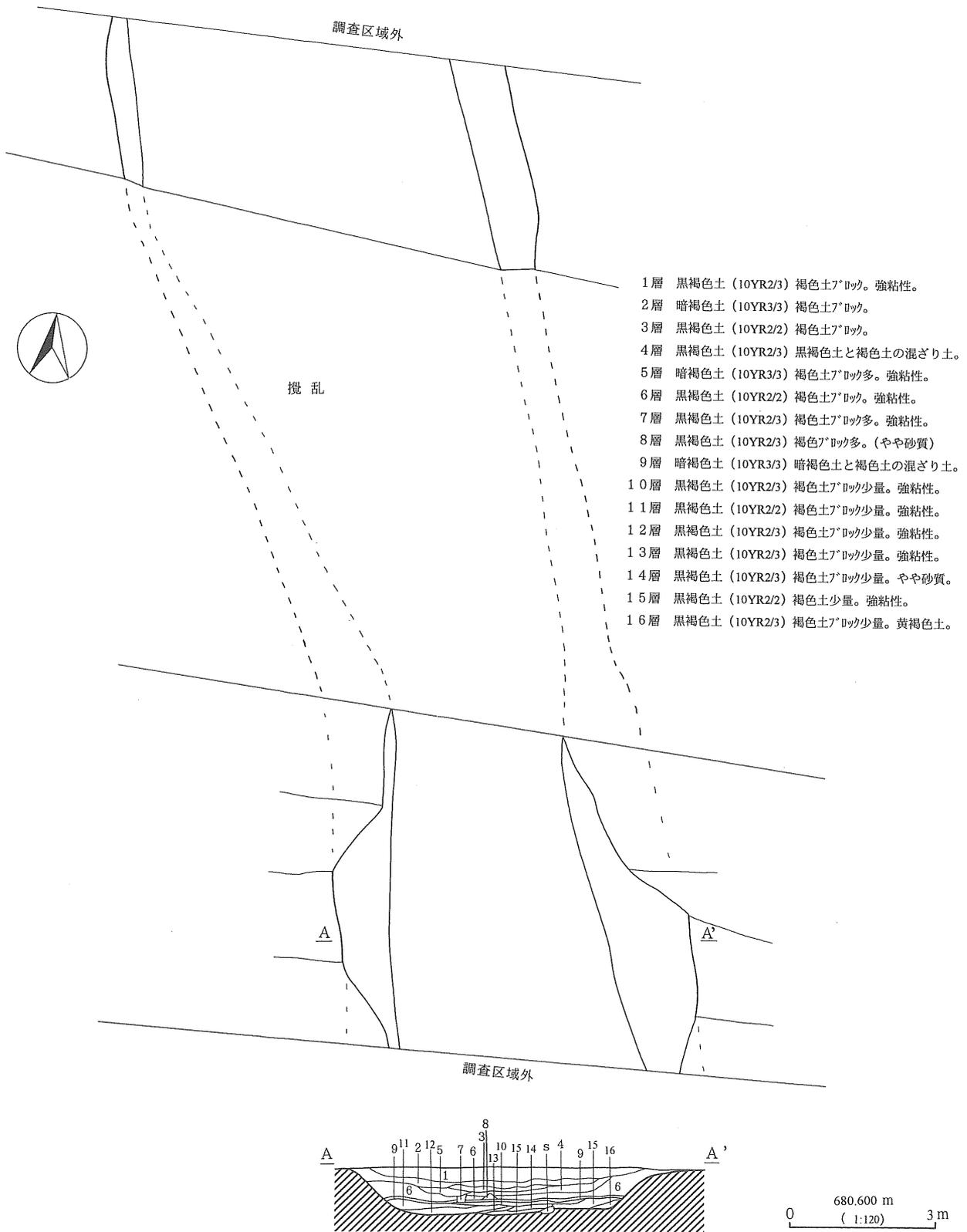
第102図 F 10号掘立柱建物址石器実測図

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
1	P2	石匙	輝石安山岩	10.4	4.7	1.9	63.41

第50表 F 10号掘立柱建物址石器観察表

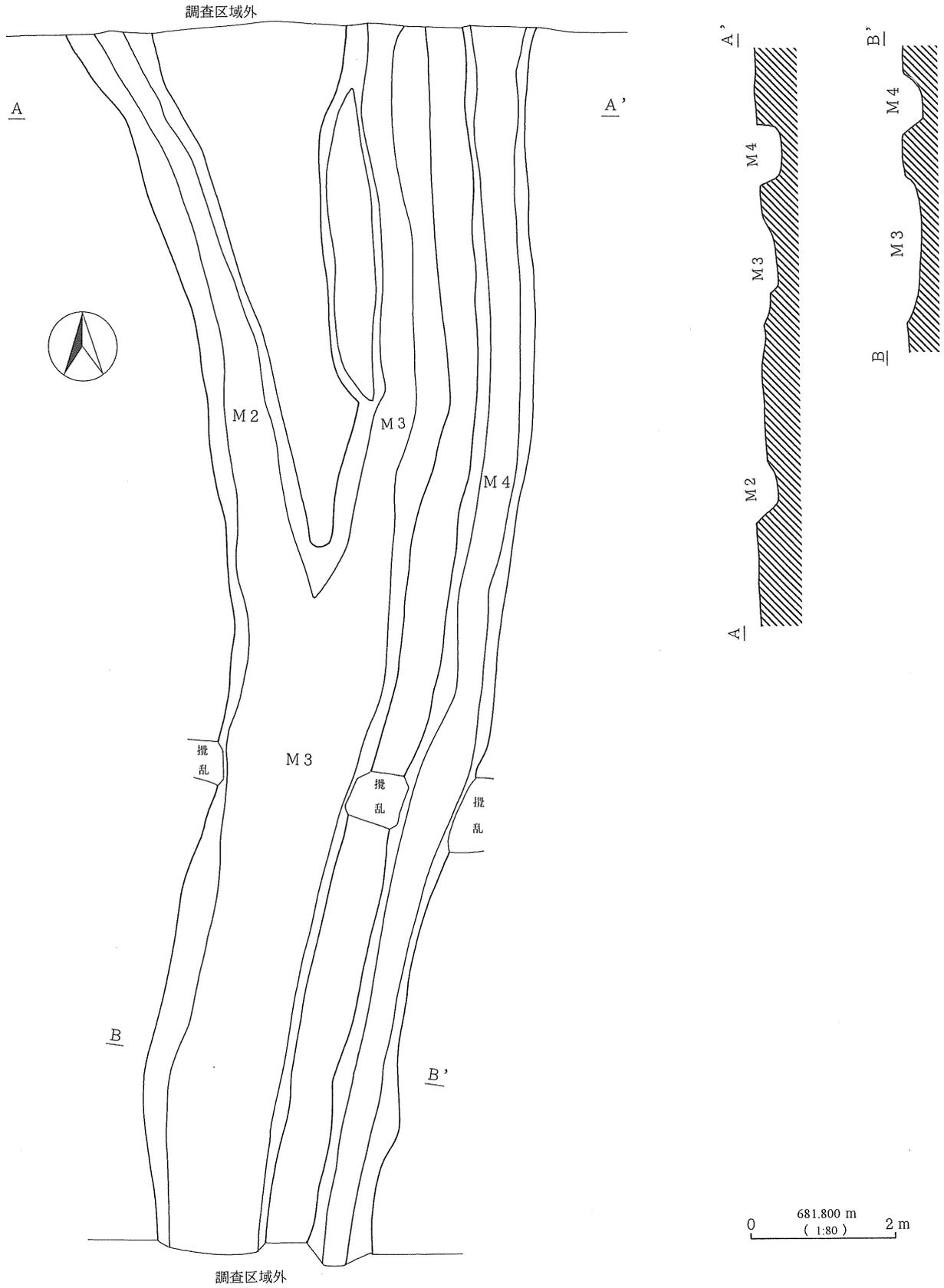
### 第3節 溝状遺構

#### M1号溝状遺構

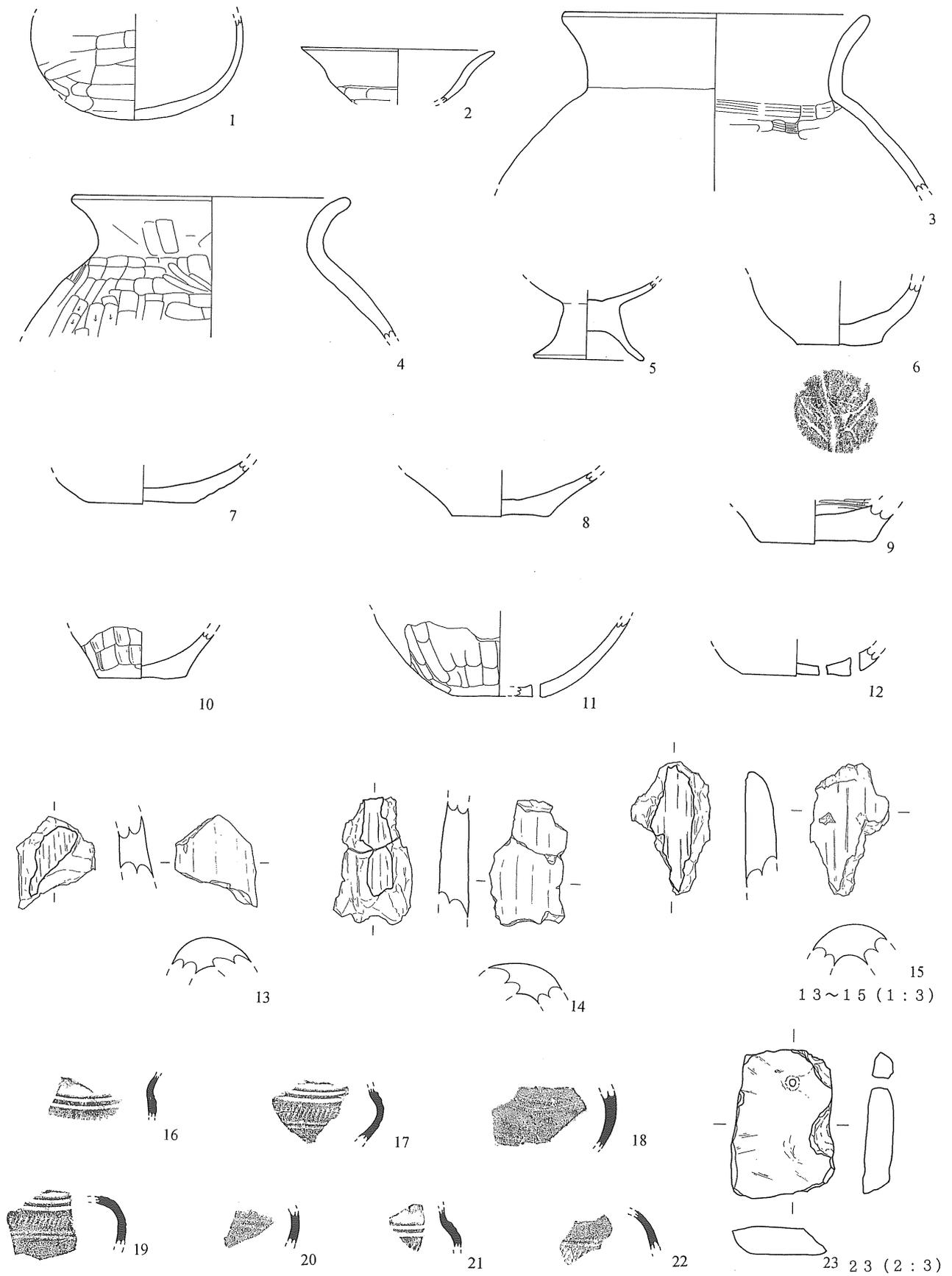


第103図 M1号溝状遺構実測図

M2・3・4号溝状遺構



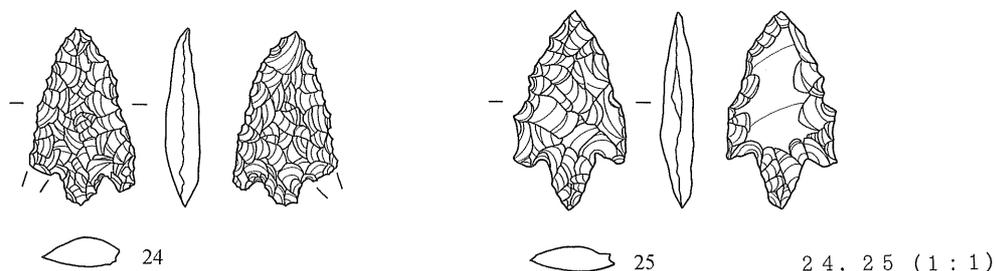
第104図 M2・3・4号溝状遺構実測図



第105图 M2号沟状遗物实测图

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	鉢	—	丸底	—	外面へら削り 内面へらナデ	30	良	10R6/4 鈍い赤橙色
2	土師器	高坏	[14]	—	—	口縁横ナデ 外面へら削り 内面ミガキ	口縁破片	良	5YR6/4 鈍い橙色
3	土師器	甕	[22.3]	—	—	口縁横ナデ 外面へら削り 内面へらナデ	口縁破片	良	5YR7/6 橙色
4	土師器	甕	[21.0]	—	—	口縁横ナデ・縦へら削り 外面へら削り 内面へらナデ	口縁破片	良	7.5YR8/6 浅黄橙色
5	土師器	高坏	—	8	—	脚部外面へら削り	脚部90	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
6	土師器	甕	—	6	—	外面へら削り 内面へらナデ 底部木葉痕	底部100	良	2.5YR7/6 橙色
7	土師器	甕	—	8.2	—	外面へら削り 内面へらナデ	底部100	良	2.5YR6/6 橙色
8	土師器	甕	—	7	—	外面・底部へら削り 内面へらナデ	底部60	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
9	土師器	甕	—	8.2	—	外面・底部へら削り 内面へらナデ	底部50	良	5YR6/6 橙色
10	土師器	甕	—	[6.2]	—	外面縦へら削り 内面へらナデ	底部40	良	2.5YR5/6 明赤褐色
11	土師器	甕	—	[7.5]	—	外面縦へら削り 内面へらナデ・黒色	底部～体部破片	良	7.5YR7/4 鈍い橙色
12	土師器	甕	—	[7.5]	—	外面縦へら削り 内面へらナデ・黒色 No11と同一?	底部破片	良	7.5YR7/6 橙色
13	羽口	—	—	—	—	外面へら削り 送風口径1.8cm	先端付近破片	10YR7/4 鈍い黄橙色 先端付近 N7/0 灰白色	
14	羽口	—	—	—	—	外面へら削り 送風口径1.8cm	先端付近破片	10YR6/4 鈍い橙色 先端付近 N7/0 灰白色	
15	羽口	—	—	—	—	外面へら削り 送風口径1.8cm	先端破片	10YR7/6 橙色 先端 N7/0 灰白色	
16	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	5YR4/1 褐灰色
17	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	5YR4/1 褐灰色
18	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	10YR7/1 灰白色
19	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	10YR4/1 褐灰色
20	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	10YR6/1 褐灰色
21	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	10YR5/1 褐灰色
22	須恵器	—	—	—	—	横沈線 16～22は同一個体の可能性あり	破片	良	10YR7/1 灰白色
23	石製模造品	重さg 14.4	幅cm 2.3～1.7	厚みcm 0.4～0.7	高さcm 3.4～3.7	特 徴 上部中央付近に2mmの孔	残存率% 90	色 調	2.5Y8/1 灰白色

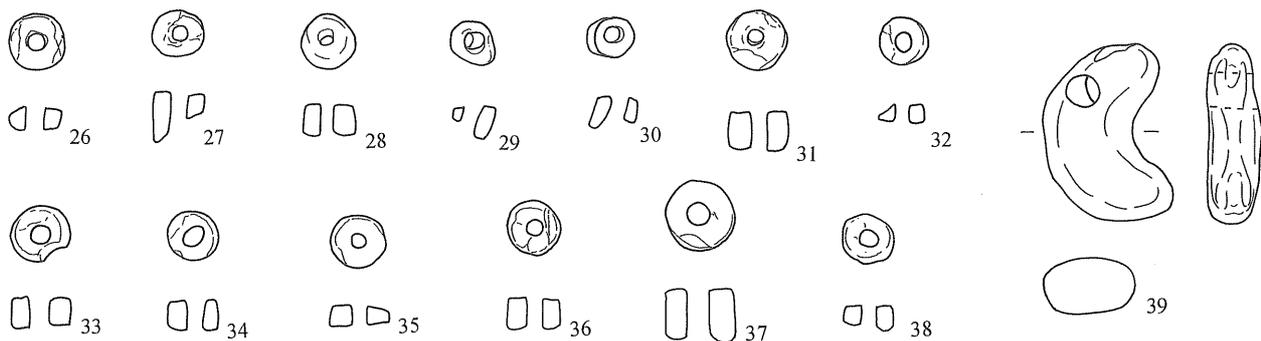
第51表 M2号溝状遺構遺物観察表



第106図 M2号溝状遺構石器実測図

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
24	覆土	石鏃	黒曜石	2.3	1.1	0.5	1.03
25	覆土	石鏃	黒曜石	2.6	1.6	0.5	1.08

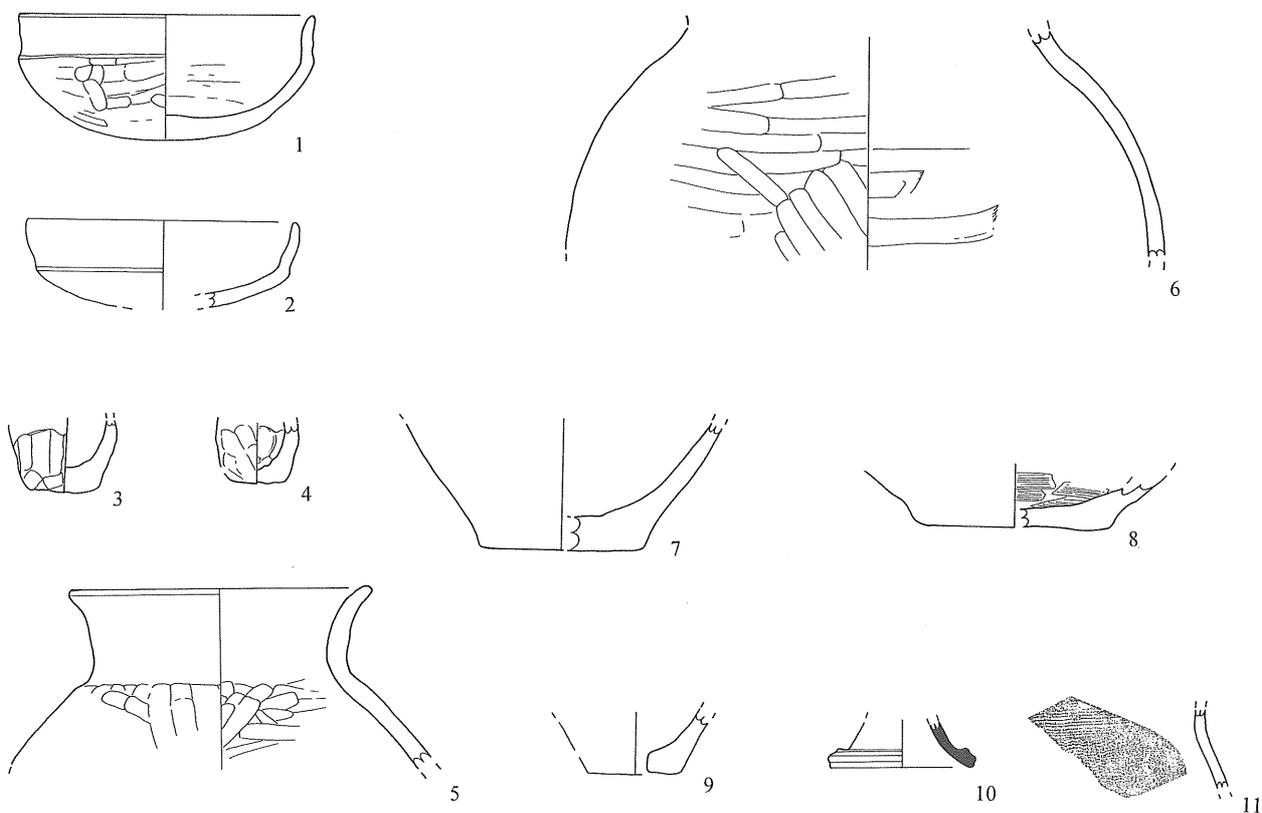
第52表 M2号溝状遺構石器観察表



第107図 M2号溝状遺構白玉・勾玉実測図

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
26	覆土	白玉	2.95	7.35	2.2	0.27	滑石	黄褐色
27	覆土	白玉	6.5	6.9	2.5	0.35	滑石	灰黄色
28	覆土	白玉	4.1	7.1	1.7	0.34	滑石	灰オリーブ色
29	覆土	白玉	4.6	6	2.5	0.18	滑石	黒色
30	覆土	白玉	4.15	6.1	2.55	0.17	滑石	オリーブ黒色
31	覆土	白玉	4.5	8	2.1	0.5	滑石	灰オリーブ色
32	覆土	白玉	1.9	6.2	2.45	0.11	滑石	灰白色
33	覆土	白玉	4	7.95	2.15	0.39	滑石	暗灰黄色
34	覆土	白玉	4.3	6.6	2.8	0.27	滑石	灰白色
35	覆土	白玉	2.1	7.2	2.1	0.15	滑石	黒褐色
36	覆土	白玉	4.2	7.2	2.15	0.34	滑石	浅黄橙色
37	覆土	白玉	6.6	9.05	2.7	0.96	滑石	浅黄橙色
38	覆土	白玉	3.1	6.6	2.3	0.2	滑石	灰黄色
39	覆土	勾玉	24	9.8	6	3.92	滑石	灰オリーブ色

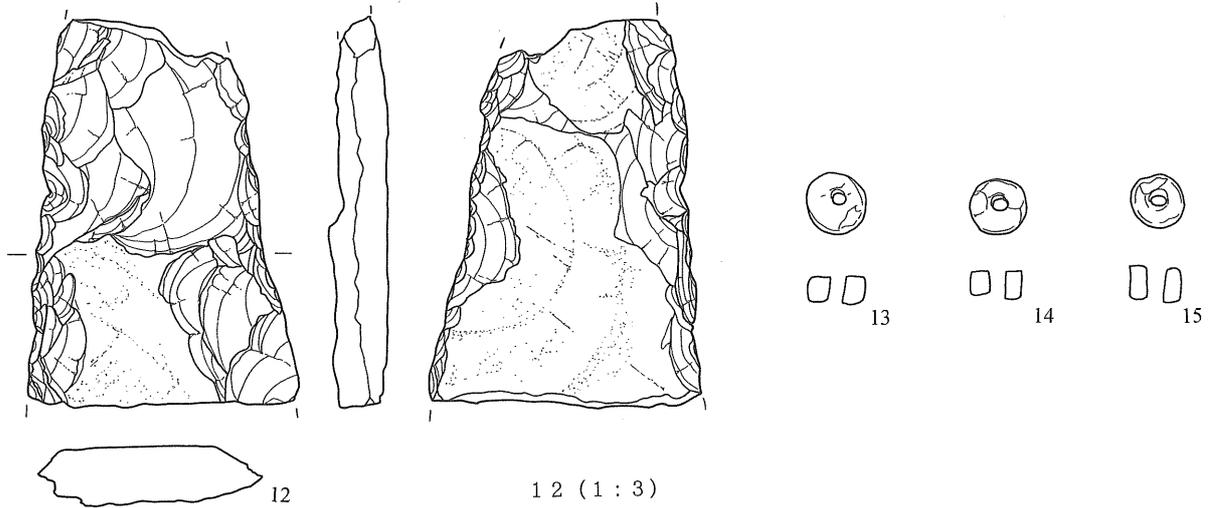
第53表 M2号溝状遺構白玉・勾玉観察表



第108図 M3号溝状遺構遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[15.6]	丸底	6.6	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	30	良	10YR5/2 灰黄褐色
2	土師器	坏	[14.4]	丸底	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り	口縁～胸部	良	5YR6/6 橙色
3	手づくね	鉢形	—	3.4	—	外面底部ヘラ削り ヘラナデ	50	良	10YR7/3 鈍い黄褐色
4	手づくね	鉢形	—	2.8~4.2	—	外面底部ヘラ削り 内面指ナデ	50	良	10YR8/2 灰白色
5	土師器	甕	[16]	—	—	口縁横ナデ 外面縦ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	10YR8/3 浅黄褐色
6	土師器	甕	—	—	—	外面横ヘラ削り・ヘラナデ 内面ヘラナデ	体部破片	良	7.5YR8/3 浅黄褐色
7	土師器	甕	—	8.6	—	外面横ヘラ削り 内面ヘラナデ	底部50	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
8	土師器	甕	—	10.2	—	外面ヘラ削り 内面ハケ目	底部50	良	10YR8/4 浅黄褐色
9	土師器	甕	—	5	—	外面ヘラ削り	底部100	良	7.5YR8/4 浅黄褐色
10	須恵器	高坏	—	[7.6]	—	口ク口成形	脚部破片	良好	5PB7/1 明 青灰色
11	弥生式土器	甕	—	—	—	外面簾状文・櫛描波状文 内面ヘラナデ	頸部破片	良	10YR5/4 鈍い黄褐色

第54表 M3号溝状遺構遺物観察表



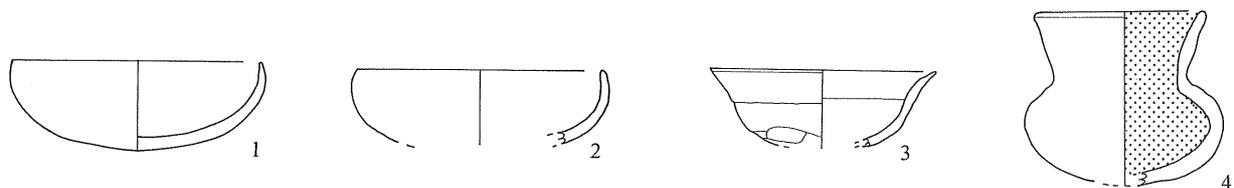
第109図 M3号溝状遺構石器・白玉実測図

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
12	覆土	打製石斧	輝石安山岩	15.4	10.7	2.4	499.86

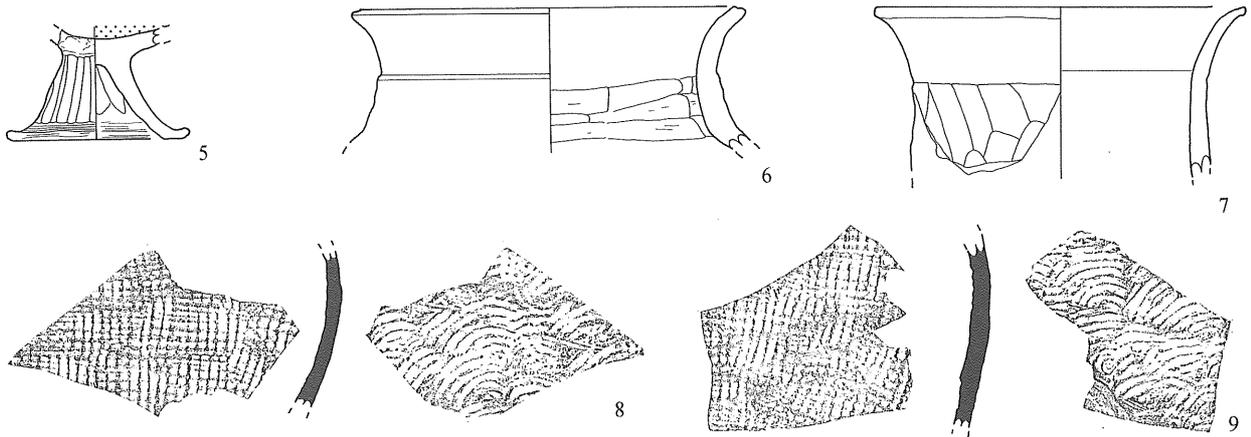
第55表 M3号溝状遺構石器観察表

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	材質	色調
13	覆土	白玉	3.6	7.45	1.75	0.34	滑石	灰黄色
14	覆土	白玉	3.8	7.45	2	0.32	滑石	鈍い黄色
15	覆土	白玉	4.2	6.75	2.2	0.3	滑石	灰黄色

第56表 M3号溝状遺構白玉観察表



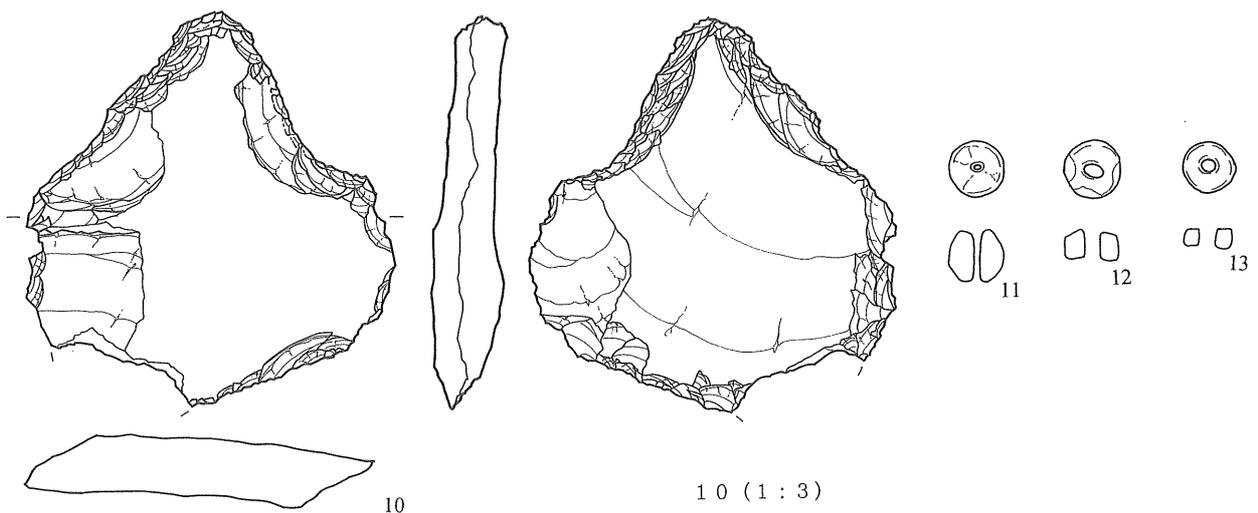
第110図 M4号溝状遺構遺物実測図(1)



第111図 M4号溝状遺構遺物実測図(2)

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[13.2]	丸底	4.8	外面ヘラ削り	45	良	7.5YR7/3 鈍い橙色
2	土師器	坏	[13]	—	—	外面ヘラ削り	口縁~胴部破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
3	土師器	坏	[11.9]	—	—	外面ヘラ削り	35	良	2.5YR6/6 橙色
4	土師器	小型丸底壺	9.1	丸底	[9.2]	外面ヘラ削り 頸部外面縦ミガキ 口縁外面ミガキ 内面黒色	70	良	10YR8/2 灰白色
5	土師器	高坏	—	9.6	—	脚部外面縦ヘラナデ 裾部内外面横ナデ 脚部内面ヘラナデ 坏部内面黒色処理	50	良	2.5Y8/3 淡黄色
6	土師器	甕	[20.8]	—	—	外面摩耗 内面ヘラナデ	口縁破片	良	7.5YR6/6 橙色
7	土師器	甕	[19.5]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	口縁破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
8	須恵器	甕	—	—	—	外面格子タタキ 内面同心円当て具痕	体部破片	良好	2.5Y8/1 灰白色
9	須恵器	甕	—	—	—	外面格子タタキ 内面同心円当て具痕	体部破片	良好	2.5Y8/1 灰白色

第57表 M4号溝状遺構遺物観察表



第112図 M4号溝状遺構石器・丸玉・白玉実測図

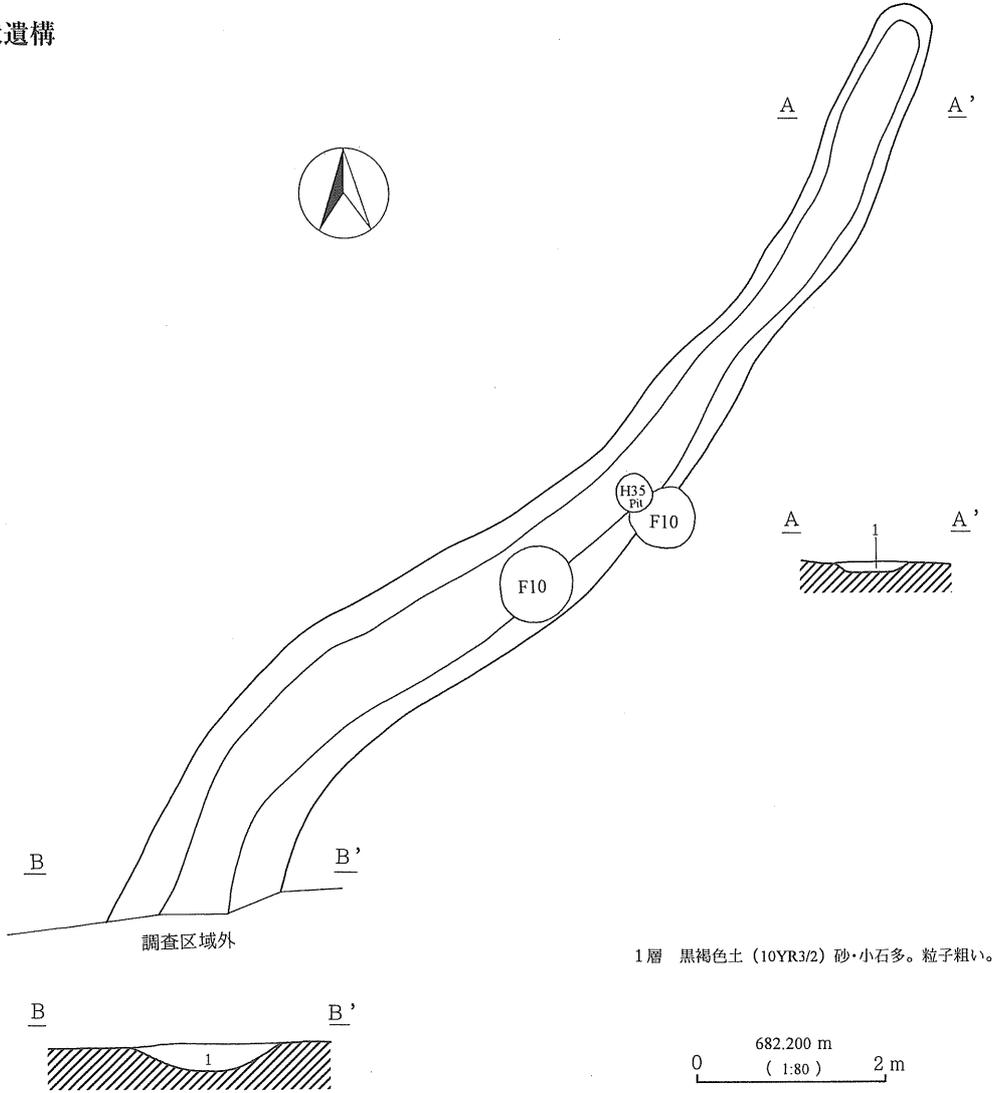
番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	覆土	打製石斧	安山岩	15.5	14.4	2.9	580.51

第58表 M4号溝状遺構石器観察表

番号	出土位置	種別	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	材質	色調
11	覆土	丸玉	6.9	7.25	0.7	0.4	土製	黒色
12	覆土	白玉	3	7.3	2.3	0.24	滑石	褐色
13	覆土	白玉	2.3	6.75	2	0.17	滑石	灰黄褐色

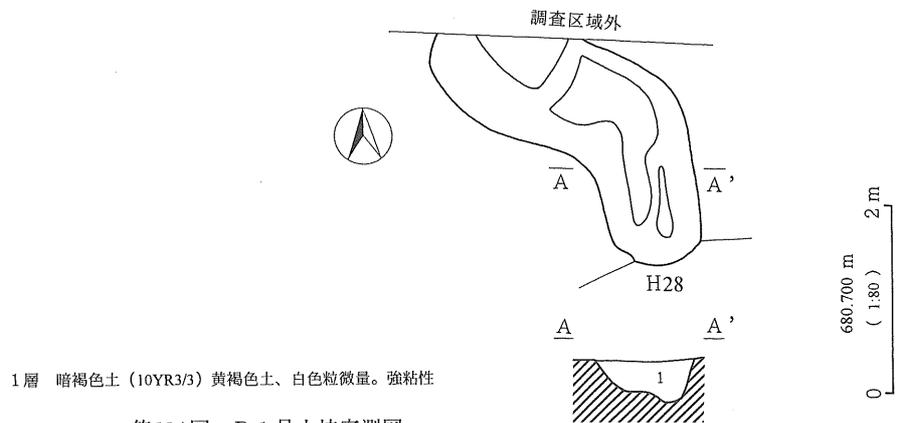
第59表 M4号溝状遺構丸玉・白玉観察表

M5号溝状遺構



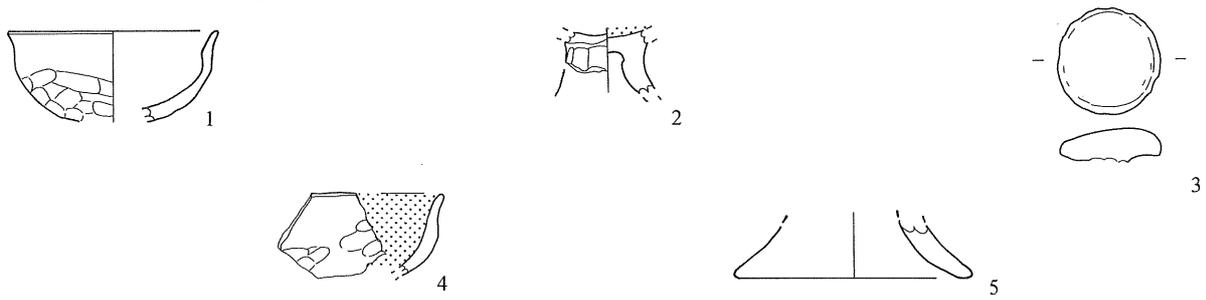
第113図 M5号溝状遺構実測図

第4節 土坑



第114図 D1号土坑実測図

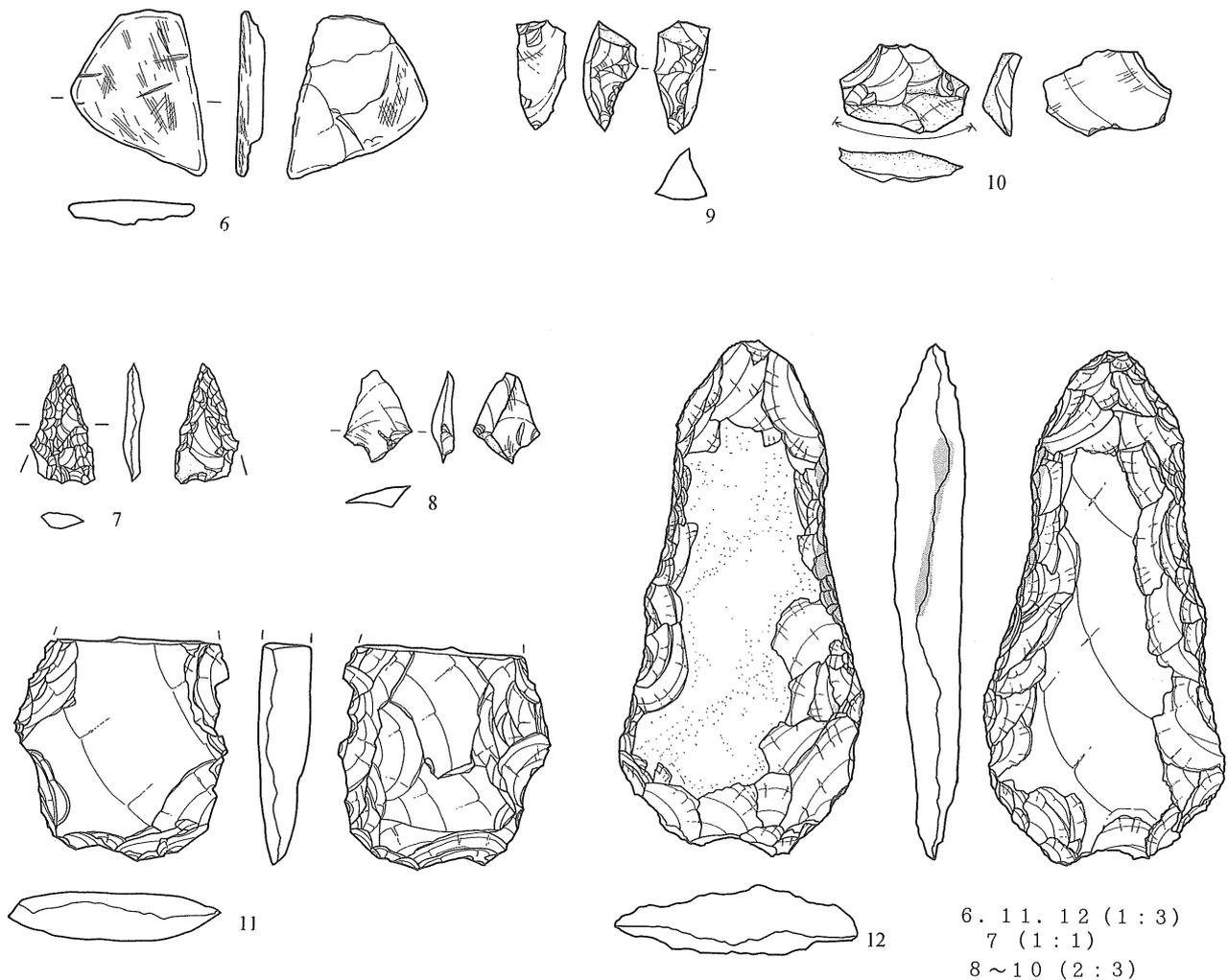
## 第5節 遺構外遺物



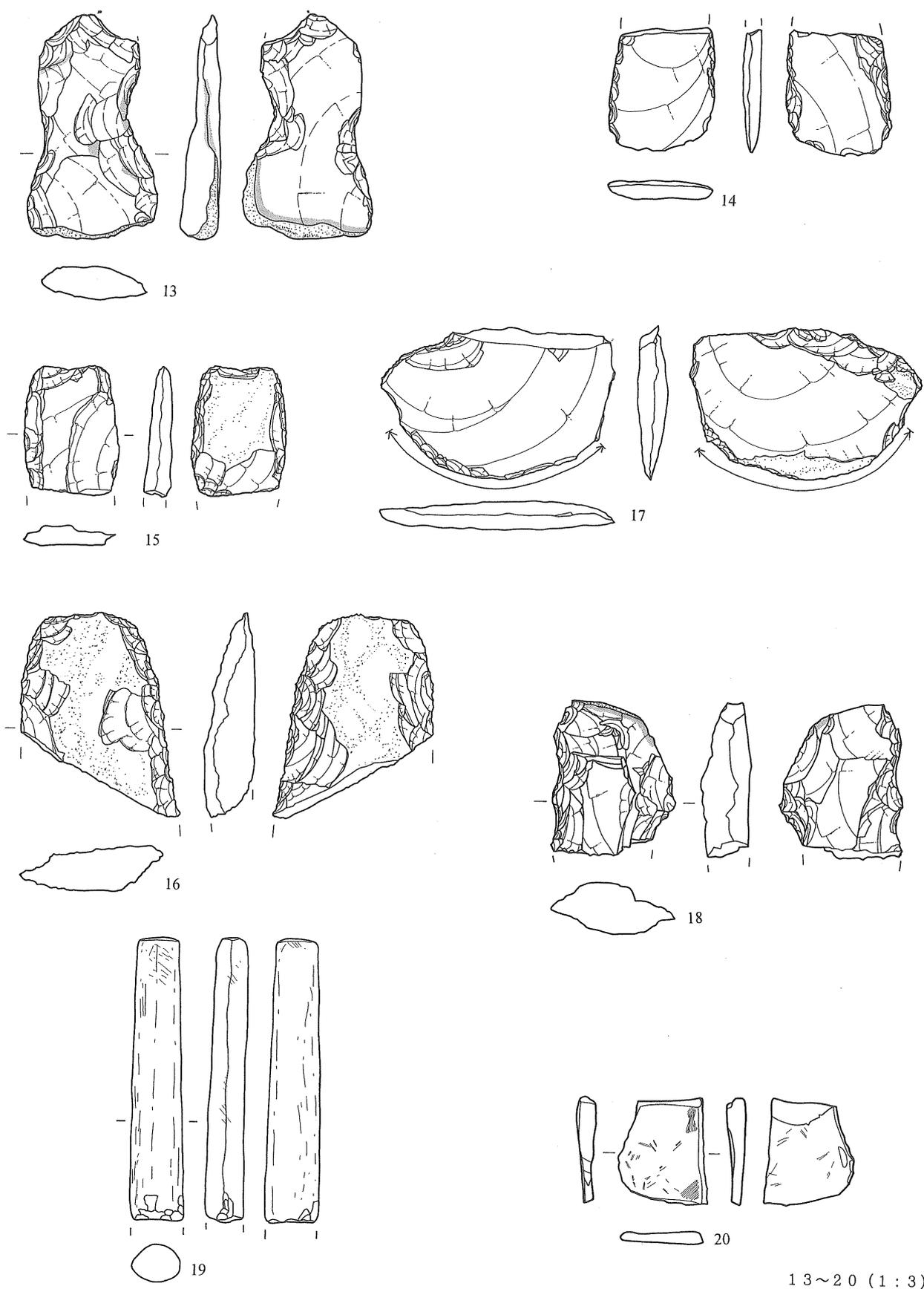
第115図 遺構外遺物実測図

番号	器種	器形	口径cm	底径cm	器高cm	調整・文様	残存率・部位	焼成	色調(外面)
1	土師器	坏	[11.2]	—	—	口縁横ナデ 外面ヘラ削リ	口縁～体部破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
2	土師器	高坏	—	—	—	坏部内面黒色処理	頸部破片	良	7.5YR8/4 浅黄橙色
3	土師器	蓋	—	—	—		つまみ部	良	7.5YR6/4 鈍い橙色
4	土師器	坏	—	—	—	外面ヘラ削リ 内面黒色処理	口縁破片	良	7.5YR8/3 浅黄橙色
5	土師器	高坏	—	[12.6]	—	脚部外面ヘラ削リ 内面ヘラナデ	脚部裾破片	良	7.5YR8/1 灰白色

第60表 遺構外遺物観察表



第116図 遺構外石器実測図(1)



13~20 (1:3)

第117图 遺構外石器実測図(2)

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)
6	9-こ-J	砥石	安山岩	6.8	5.7	1	37.64
7	10-む-C	石鏃	黒曜石	1.7	1	0.4	0.26
8	検出	未製品	黒曜石	1.85	1.4	0.5	0.6
9	検出	未製品	黒曜石	2.3	10	1.1	1.8
10	検出	未製品	黒曜石	1.65	2.6	0.7	2
11	検出	打製石斧	輝石安山岩	9.2	8.7	2.2	223.04
12	8-け-C	打製石斧	輝石安山岩	21.2	10	2.9	601.29
13	検出	打製石斧	輝石安山岩	11.9	6.9	2.4	161.53
14	10-あ-A	打製石斧	輝石安山岩	6.6	5.7	1	46.82
15	検出	打製石斧	安山岩	6.9	5.1	1.6	58.75
16	検出	打製石斧	輝石安山岩	10.9	8.5	2.8	220.97
17	10-う-C	剥片	輝石安山岩	8.1	12.5	1.6	179.32
18	9-お-J	打製石斧	輝石安山岩	8.3	6.6	2.7	145.21
19	12-こ-C	石棒	輝緑凝灰岩	15	2.9	2.2	149.98
20	10-こ-C	砥石	輝石安山岩	5.7	4.4	1	28.6

第61表 遺構外石器観察表

まとめ

遺 構

今回道路建設に伴う樋村遺跡Ⅱの発掘調査によって、本遺跡からは6世紀代を中心とする古墳時代中期終末から後期の堅穴住居址32軒、時期不明3軒が確認された。調査区に制約及び調査区内の攪乱が激しかったこともあり、全体が認められる遺構はほとんど存在しなかったが、出土遺物からおおよその時期を推測することはできた。この樋村遺跡内では昭和57、58年に周辺の圃場整備に伴い40000㎡に及ぶ広い範囲の発掘調査が行われ弥生時代から平安時代に至る住居址310軒が調査されている。この樋村遺跡の調査によって310軒中273軒が古墳時代後期の住居址であることが確認されており、現在の平賀地籍一帯には古墳時代後期に当時としてはかなり大規模な集落が形成されていたことを伺わせる調査結果であった。今回の樋村遺跡Ⅱの調査はこれを更に裏付ける内容であり、調査した住居址のうち時期確定ができたものの大半が古墳時代後期であった。(一部中期終末になる可能性の住居址が存在する)

また、樋村遺跡東側の丘陵地帯のやや小高い縁辺部には、多数の円墳が所在しており、これらに葬られた人々と樋村遺跡に集落を形成していた人々との関係も興味深い問題である。

樋村遺跡における古墳時代後期の集落の広がり、以前の調査をふまえて見るとかなり詳細な状況が把握できる。遺跡内には滑津川の所在する西方向からのびる溝状遺構が存在し(樋村遺跡報告書では沈殿池として)、調査区内にてその方向を南にかえ、西から弧を描くように集落を分断し、遺構はこれをさけるように配置されている。遺構の広がり、今回、樋村遺跡Ⅱの調査結果だけを見ると、調査区中央から東西両方向に向かって遺構が減少する傾向が認められた。実際、樋村遺跡Ⅱの南において調査が行われた樋村遺跡の調査でも隣接する東は遺構が減少し始め、西側は溝状遺構による遺構の空白地域が存在する。全体の遺構配置状況から、樋村遺跡Ⅱの南側に位置する樋村遺跡周辺は多くの遺構が認められ、重複も極めて激しいことから古墳時代後期という時代における遺跡の中心的地域であったと考えられる。これに対し、西側は地形的に一段下がった滑津川の氾濫源であり、古墳時代の住居址が激減し奈良、平安時代の住居址が若干認められるようになる。北側は古墳時代後期の住居址が認められるが南ほどではないようであり、東は丘陵地が迫り、この縁辺部は一定の距離をおいて遺構の存在が認められない地域が存在している。

また、樋村遺跡の調査では古墳時代後期の住居址273軒を大きくⅢ期に分けⅠ期(初源期)、Ⅱ期(最盛期)、Ⅲ期(終末期、7C代)に位置付けている。そして、Ⅰ期は調査地域の東西地域が若干減るもののほぼ全域に存在し、37軒を数え、全体的に大型の住居址が多く、Ⅱ期になると住居址は91軒と前代に比して

増加する。住居址の広がり、やや広がるもののⅠ期とさほど変化はなく、Ⅱ期同士の切り合いも多いことから、更に前・中・後の3期に細分可能とされ、8m内外の大型住居及び4～5m規模の住居址が大半を占め、この時代、人口も増え安定した集落が形成された最盛期であったと考えられている。Ⅲ期になると住居は再び減少し、その数は33軒を数えるにとどまり、住居址の規模も最大で7m前後で、3m内外の小型住居址も目立つようになることから、やや小型化の傾向が認められるとしている。

今回、樋村遺跡Ⅱの調査では出土遺物から6世紀代を中心とする竪穴住居址が認められ、時期細分可能なものについては5世紀末～6世紀初頭のⅠ期・6世紀前葉のⅡ期・6世紀中葉のⅢa期・6世紀中葉から7世紀初頭のⅢb期に細分し（Ⅲa、Ⅲb期については、坏から見る限りやや時期差が有ると考えられるが、Ⅲb期には甕が欠落することから今後、更なる検討が必要と考えられる。）、Ⅰ期3軒、Ⅱ期6軒、Ⅲa期4軒、Ⅲb期4軒となった。樋村遺跡と対比すると樋村遺跡Ⅰ期が樋村遺跡ⅡのⅠ期、樋村遺跡Ⅱ期が樋村遺跡ⅡのⅡ期～Ⅲ期におよそ対比すると考えられる。

遺構の状況を見るとⅠ期の住居址は調査区の住居址密集地域に広く点在し、一辺3.4mの小型から8.4mの大型住居が存在する。カマドは北または東に構築されている。Ⅱ期の住居址は調査区中央付近に点在し、規模は1辺3.4mの小型から4.5m内外の中型が存在し、大型住居は認められない。カマドは北または東に構築されているが、北カマドの比率が高い。Ⅲa期の住居址は住居址密集地域東側にかたよる傾向が見られ、規模は5m内外の中型と8m弱の大型住居が存在する。カマドはすべて北に構築されている。Ⅲb期の住居址は住居址密集地域西側に集中する傾向が見られ、規模は4m～6m弱の中型が存在し、カマドは構築位置としては珍しい西カマドが1軒存在する他は調査区外などにより未確認である。

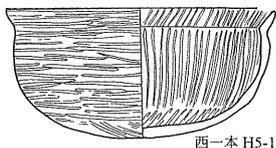
以上、樋村遺跡の集落について以前の樋村遺跡の調査を交え述べてみた。古墳時代という限られた時代の集落がこれほど密集している遺跡も珍しく、佐久地域における古墳時代の生活形態を考える上で非常に貴重な調査であった。今後、樋村遺跡の未報告である出土遺物の検討及び周辺地域の調査の積み重ねによって、樋村遺跡の集落の全体像が今以上に解明できることに期待したい。

Ⅰ期	5世紀末～6世紀初頭	H 5. 11. 23
Ⅱ期	6世紀前葉	H 2. 3. 4. 10. 17. 29
Ⅲa期	6世紀中葉	H 1. 20. 31. 32
Ⅲb期	6世紀中葉～7世紀初頭	H 8. 13. 15. 19
古墳時代後期		H 7. 9. 12. 14. 16. 18. 21. 22. 24. 25. 27. 28. 30. 34
		(資料不足のため細分できない住居址)

不明 H 6. 26. 33. 35

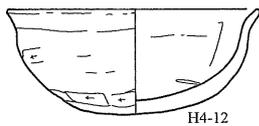
## 遺物

樋村遺跡Ⅱの調査によって、古墳時代中期終末から後期に位置付けられる遺物が多数出土した。土器の状態は周辺の地質が強粘性の粘土質であることから、特に土師器の器面は摩耗している状態であった。本遺跡内では以前、樋村遺跡の調査が行われ、今回の調査をはるかに超える遺物が出土しているが、残念ながら遺物については整理報告に至っていない。従って、今回は『佐久市埋蔵文化財調査報告書 第73集西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ』の土器分類を参考とし、土師器を大きくA～K類に分類し、可能なものはさらに細分した。

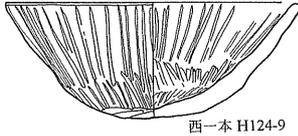


A 1 - 丸底の底部から体部が内彎しながら立ち上がり、短い口縁部が強く外反する。

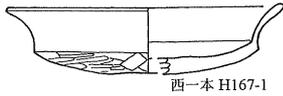
該当なし



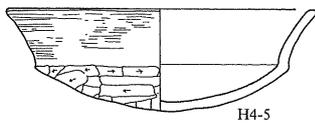
A 2 - A 1 の口縁部がやや長く、緩やかに外反する。  
H4-12、H31-5



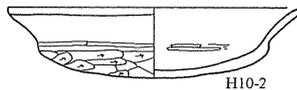
B - A 1 に共伴する高杯の脚部が省略された形態。  
該当なし



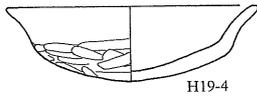
C - A 2 の口縁部が長くなり、口縁部と体部の境に稜を形成し外反するもの。  
該当なし



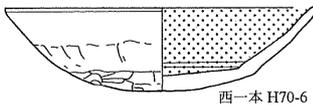
D 1 - C の底部が半球状に丸く、深くなったもの。口縁部と体部の境の稜は調整による段や、凹に変化する  
H3-3.4、H4-2.3.4.5



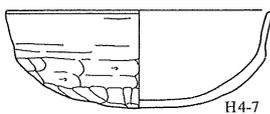
D 2 - D 1 の体部下が浅いもの。  
H4-9、H8-4、H10-2、H28-2、H 31-7



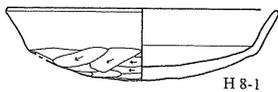
D 3 - D 2 の口縁部と体部の境の段や凹が省略されたもの。  
H19-4.5.6.7、H20-2



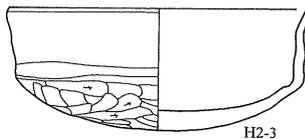
D 4 - D 3 において僅かに名残を止めていた、口縁部と体部の屈曲がなくなり、浅い半球状を呈するもの。内面の底部と体部の境に段を有する。  
該当なし



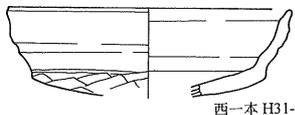
E 1 - 須恵器杯蓋の模倣、あるいは模倣を原型とするもの。  
H2-2.4.5、H4-7.8.10、H8-3、H17-2、H19-2、H25-1



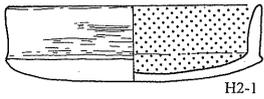
E 2 - 須恵器杯蓋の模倣を原型とするものの内、体部と口縁部の境の段を有さず、稜を有するもの。  
H4-2、H8-1、H9-1、H20-1、H29-1.2.4、H31-6



E 3 - 所謂有段口縁杯。  
H1-3、H2-3、H7-1

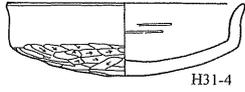


E 4 - E 1 同様の形態を呈し、橙色で陶質と表現できるような焼成が施されたもの。概して、小型で、器壁が薄い特徴を有する。  
該当なし



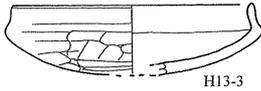
F 1 - 須恵器坏身の模倣、あるいは坏身の模倣を原型とするもので口縁部と体部の境に段を有するもので、口縁が直立するもの。

H2-1、H19-3、H25-2、H31-1、



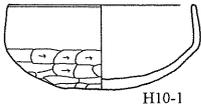
F 2 - 須恵器坏の模倣を原型とするものの内、体部と口縁部との境に段を有さず、稜を有するもので、口縁部が直立又はやや外反するもの。

H19-1、H31-2.3.4.8



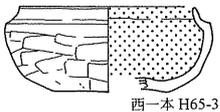
F 3 - F 1 の口縁部が内傾するもの。

H13-2.3、H15-3



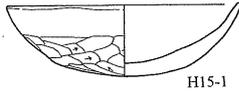
F 4 - F 2 の口縁部が内傾するもの。

H3-2、H10-1、H32-2



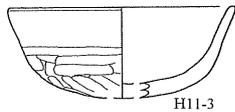
F 5 - F 1 の体部が平底から内彎する形態のもの。

該当なし



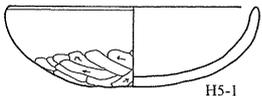
G 1 - 半球状で、口縁部が素直に開くもの。

H4-11、H13-6、H15-1



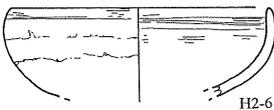
G 2 - 半球状で、口縁部が外反するもの。

H11-3



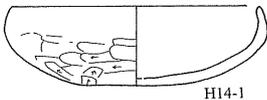
G 3 - 半球状で、口縁部が直立するもの。

H5-1.2、H11-2



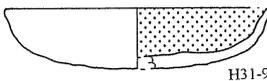
G 4 - 半球状で、口縁部が内彎するもの。

H2-6、H11-1



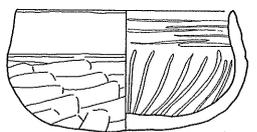
G 5 - 半球状で、口縁部が弱く内傾するもので、口縁部と体部の境が明瞭なもの。

H14-1、H18-2



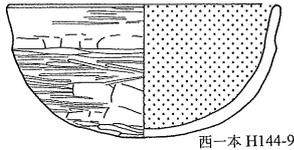
H - 丸みを帯びた平底から口縁部が直立ぎみのもの。

H31-9

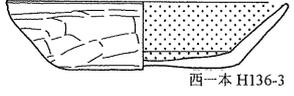


I - 平底から体部が内彎して立ち上がり、口縁部に至るもの。

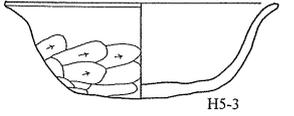
該当なし



J - 深い丸底の底部から、内彎気味に立ち上がり、口縁部が緩やかに外反するもの。体部と口縁部の境に稜を有する。  
該当なし



K 1 - 平底から口縁部が外傾して開くもの。  
該当なし

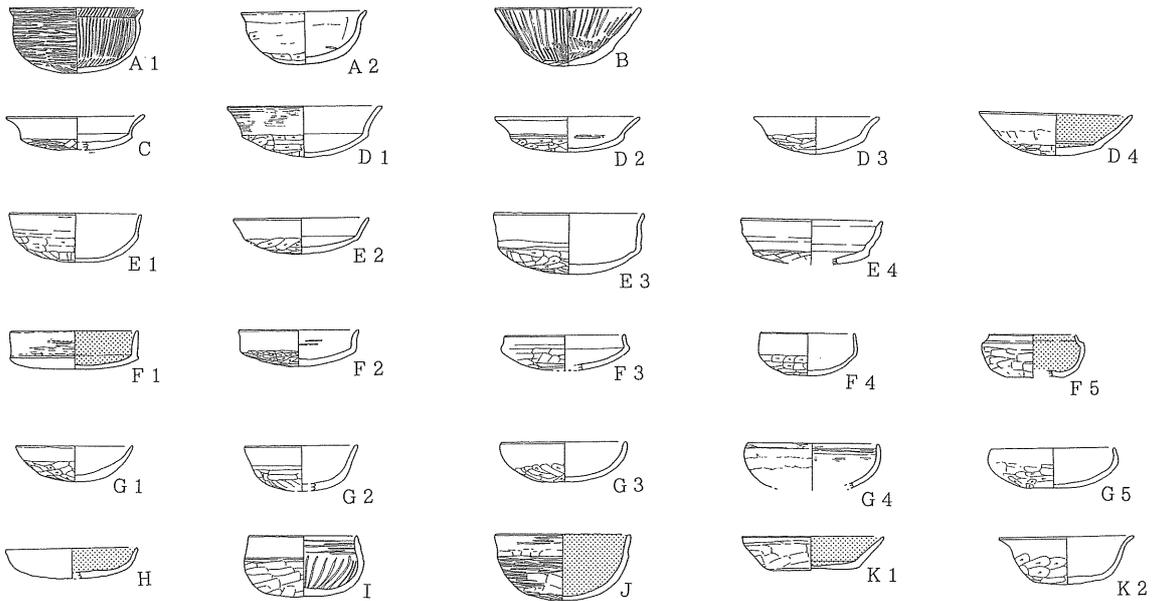


K 2 - 平底で口縁部が大きく外反するもの。  
H5-3

第118図 土師器坏形態別分類図(1)

I 期 (5c ~ 6c 初頭)		II 期 (6c 前葉)		III a 期 (6c 中葉)		III b 期 (6c 中葉 ~ 7c 初頭)	
A 2		A 2	○	A 2	○	A 2	
D 1		D 1	○○○○○	D 1		D 1	
D 2		D 2	○○	D 2	○	D 2	○
D 3		D 3		D 3	○	D 3	○○○○○
E 1		E 1	○○○○○○○	E 1		E 1	○○
E 2		E 2	○○○○	E 2	○○	E 2	○
E 3		E 3	○	E 3	○	E 3	
F 1		F 1	○	F 1	○	F 1	○
F 2		F 2		F 2	○○○○	F 2	○
F 3		F 3		F 3		F 3	○○○
F 4		F 4	○○	F 4	○	F 4	
G 1		G 1	○	G 1		G 1	○○
G 2	○	G 2		G 2		G 2	
G 3	○○	G 3		G 3		G 3	
G 4		G 4	○○	G 4		G 4	
H		H		H	○	H	
K 2	○	K 2		K 2		K 2	

第62表 樋村遺跡 II 土器形態別出土状況表



第119図 土師器坏形態別分類図(2)

### I 期（5世紀末～6世紀初頭）

坏は丸底の底部からやや内彎気味に立ち上がるG3タイプと口縁が外反し立ち上がるG2、K2タイプが認められる。

甕は胴中央のやや下部付近に最大径を持つ長胴甕と広口のもが認められ、小型甕は口縁が僅かに外反しやや胴の長いものが存在する他、台を有するものも認められる。

甗はいずれも底部単孔で底部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁付近で外反するもの、また取っ手を有するものが認められる。

### II 期（6世紀前葉）

坏は半球上の底部から明瞭な稜を持った後大きく外反するD形態（D1、D2）及び体部に明瞭な稜を有する須恵器の模倣あるいは模倣を原型とするE形態（E1、E2、E3）が主流を占め、他に須恵器の模倣を原型とするF4形態、半球状のG形態（G1、G4）が僅かに認められる。

長胴甕はI期に多く認められた胴中央下部に最大径がくる甕の最大径がやや上部に移行し、中央付近にくるものと胴部のふくらみがやや下部にあるがヘラケズリが幅広く、上下方向に長く調整するものが認められる。小型甕は底部から開き気味に立ち上がった後内彎し頸部に至り、大きく外反する。

甗はやや小型で単口の底部からやや高台気味に立ち上がった後、彎曲気味に頸部にいたり僅かに外反する。

### III a 期（6世紀中葉）

坏は須恵器坏の模倣を原型としたD、E、Fの各形態がII期に引き続き認められるが、体部半球状を呈し深みのある体部と口縁の境から長く大きく外反するD1形態は姿を消す。E形態もII期において主流だったE1形態は認められなくなる。

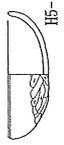
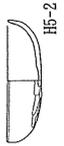
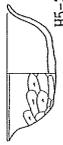
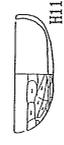
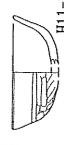
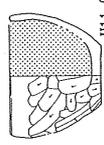
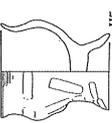
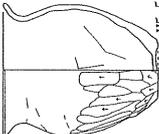
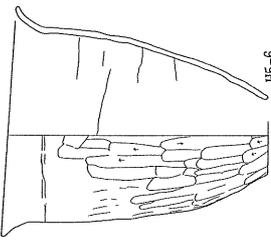
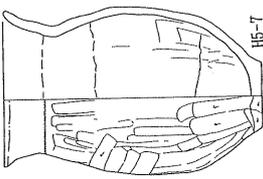
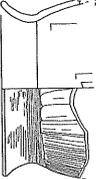
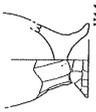
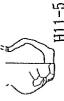
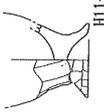
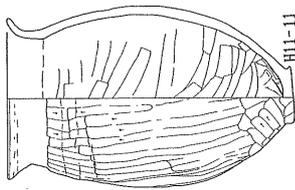
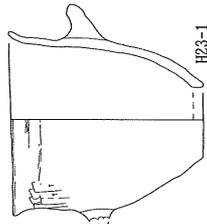
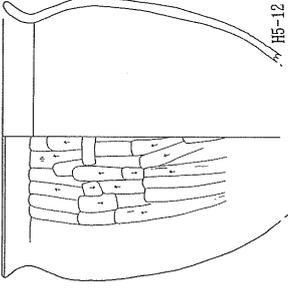
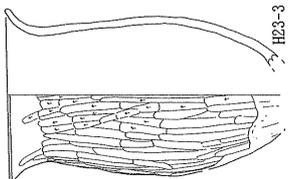
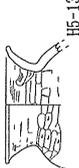
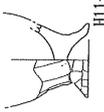
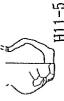
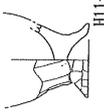
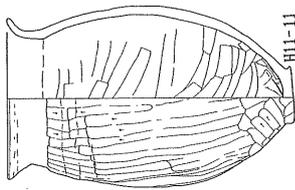
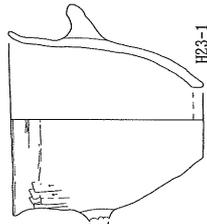
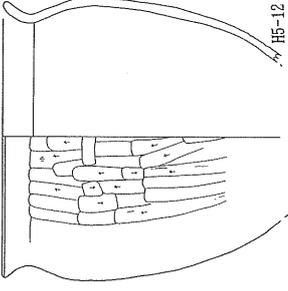
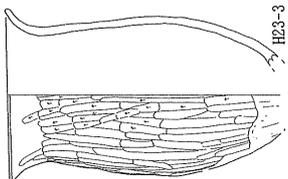
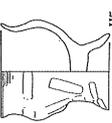
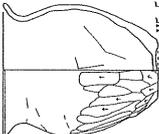
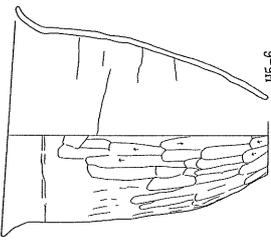
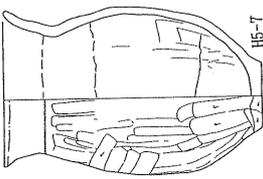
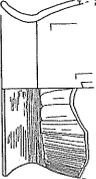
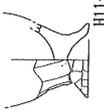
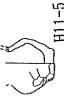
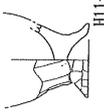
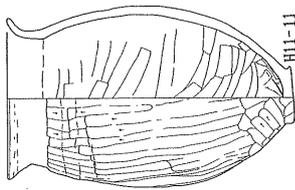
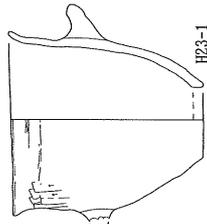
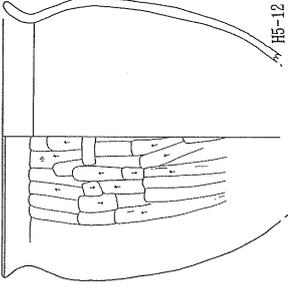
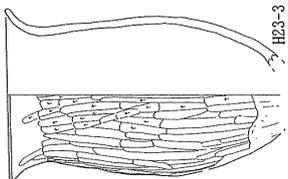
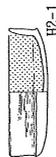
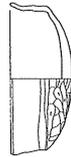
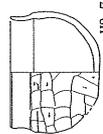
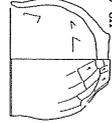
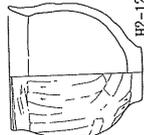
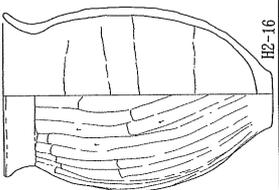
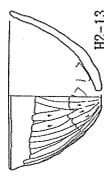
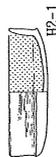
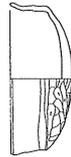
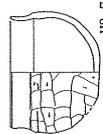
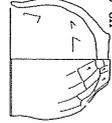
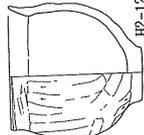
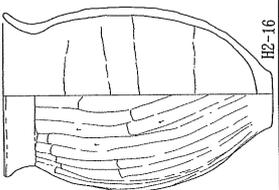
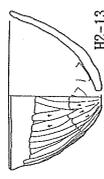
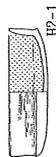
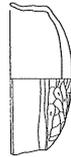
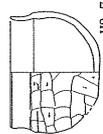
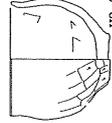
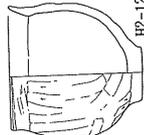
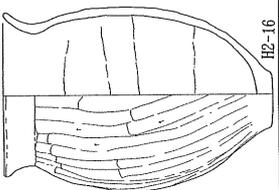
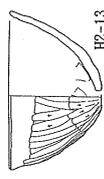
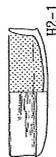
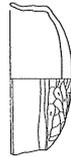
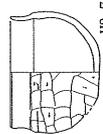
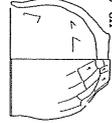
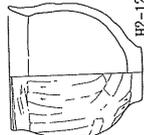
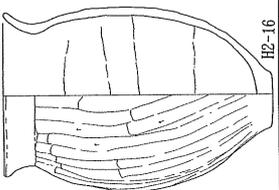
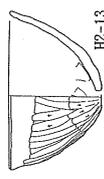
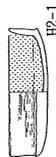
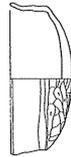
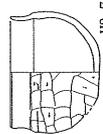
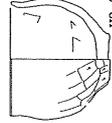
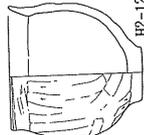
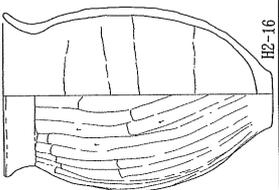
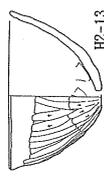
甕はII期では胴中央のやや下部に最大径があったものが胴中央付近へと移行す他、内外面にハケ目調整を残すものが存在する。

須恵器は蓋、坏が出土している。

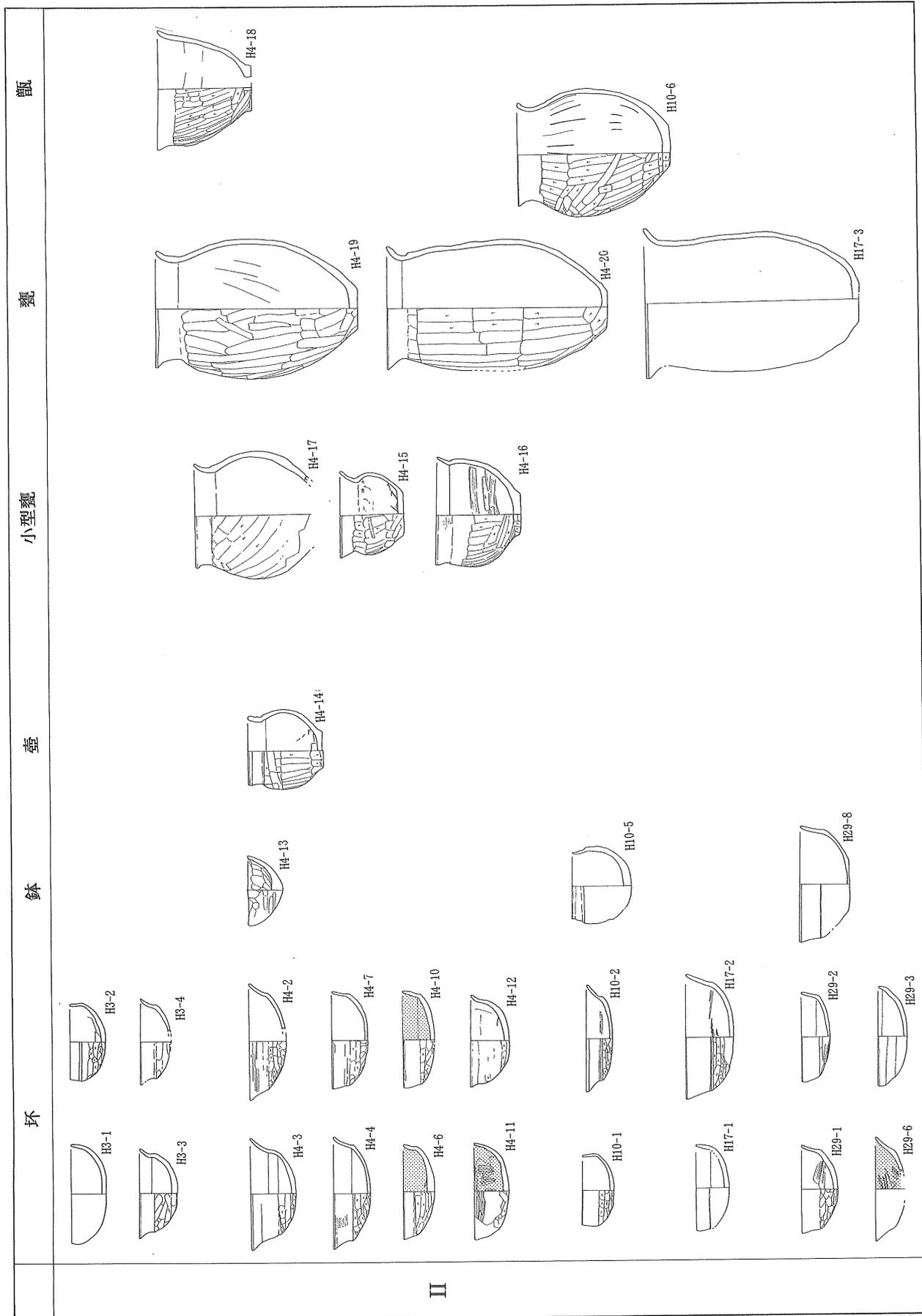
### III b 期（6世紀中葉～7世紀初頭）

坏はIII a 期同様須恵器の模倣または模倣を原型とするD、E、F形態が主流である。この他、僅かだが半球状で口縁の開くG1形態が認められる。

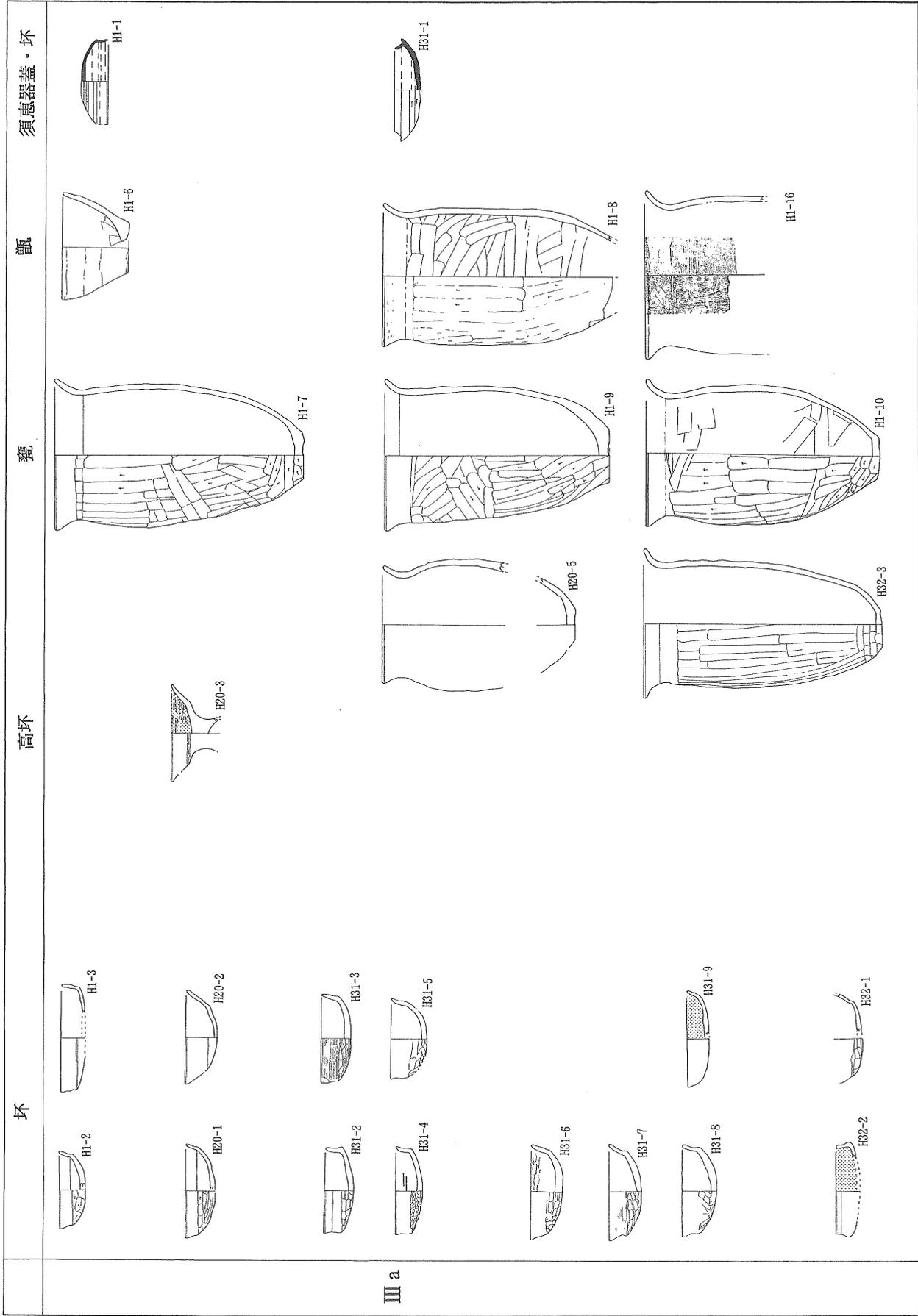
甕は底部から丸みを持って立ち上がり頸部から僅かに外反し口縁部に至る小型の甕が若干出土し、全体像を伺える長胴甕は認められなかった。

	环	鉢	壺	手づくね	台付甕	小型甕	甕	甕
I	 H5-1  H5-2  H5-3  H11-1  H11-2  H11-3  H11-9	 H5-4  H5-5  H5-6  H5-7  H5-9  H11-4  H11-5  H11-6  H11-11  H23-1  H5-12  H23-3	 H5-13  H5-16  H11-16  H11-6  H11-4  H11-5  H11-6  H11-11  H23-1  H5-12  H23-3	 H5-4  H5-5  H5-6  H5-7  H5-9  H11-4  H11-5  H11-6  H11-11  H23-1  H5-12  H23-3	 H2-1  H2-3  H2-7  H2-5  H2-6  H2-9  H2-12  H2-16  H2-13			
II	 H2-1  H2-3  H2-7  H2-5  H2-6  H2-9  H2-12  H2-16  H2-13	 H2-1  H2-3  H2-7  H2-5  H2-6  H2-9  H2-12  H2-16  H2-13	 H2-1  H2-3  H2-7  H2-5  H2-6  H2-9  H2-12  H2-16  H2-13	 H2-1  H2-3  H2-7  H2-5  H2-6  H2-9  H2-12  H2-16  H2-13				

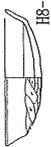
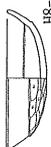
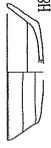
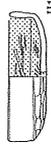
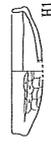
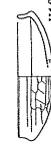
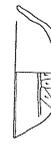
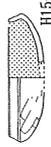
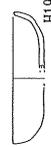
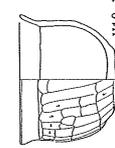
第120图 樋村遺跡Ⅱ土器編年表(1)



第121图 樋村遺跡II土器編年表(2)



第122図 樋村遺跡Ⅱ土器編年表(3)

	环	鉢	高环	小型甕
III b				
				
				
				
				
				
				
				
				
				

第123図 樋村遺跡II土器編年表(4)



樋村遺跡Ⅱ全景（平成11年度調査区）



樋村遺跡Ⅱ全景（平成12年度調査区）



遺構確認作業（手前）及び廃土除去作業（奥） 南から



調査風景・西から（平成11年度調査区）



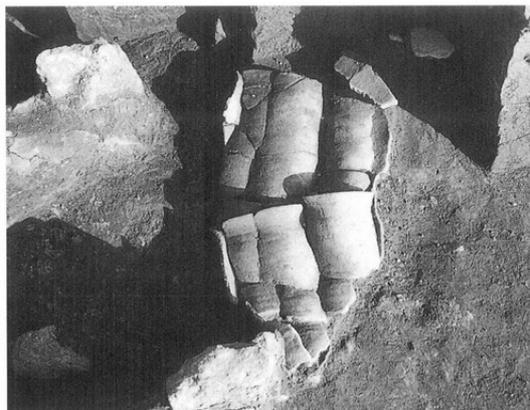
H 1 号住居址全景（西から）



H 1 号住居址カマド（西から）



H 1 号住居址カマド東側遺物出土状況



H 1 号住居址カマド焼き口部遺物出土状況



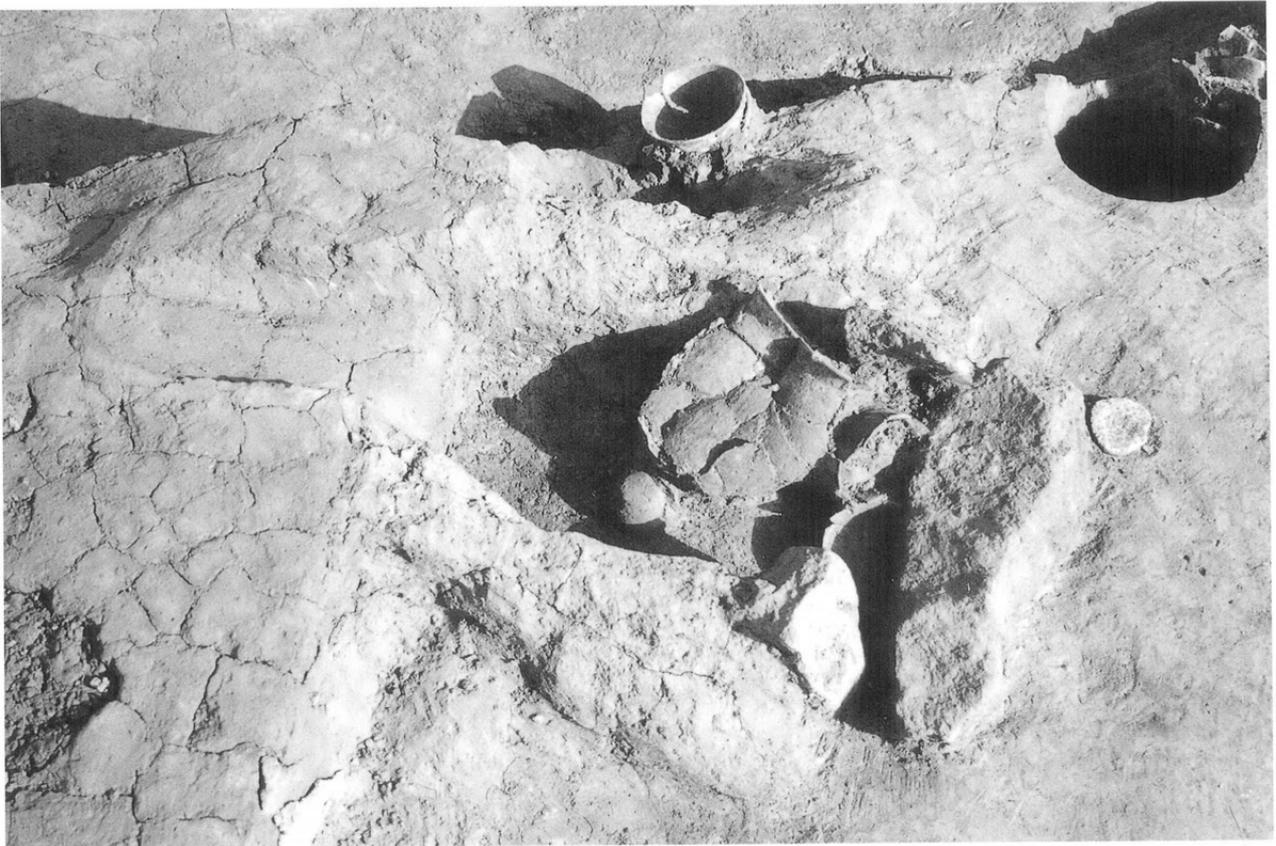
H 1 号住居址カマド掘方（西から）



H 1 号住居址掘方（西から）



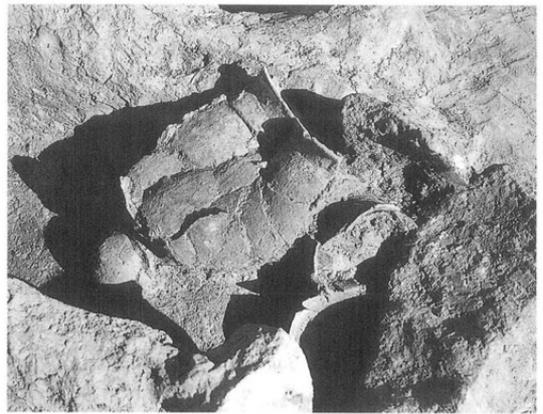
H 2 号住居址全景 (西から)



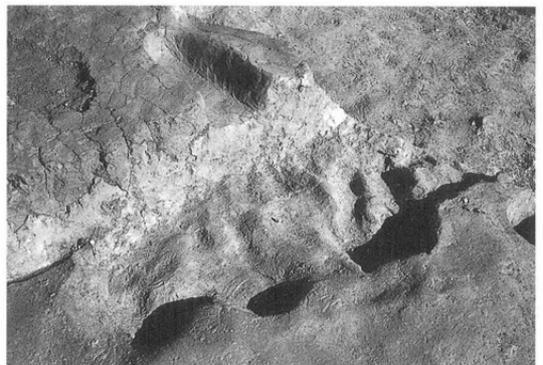
H 2 号住居址カマド遺物出土状況 (西から)



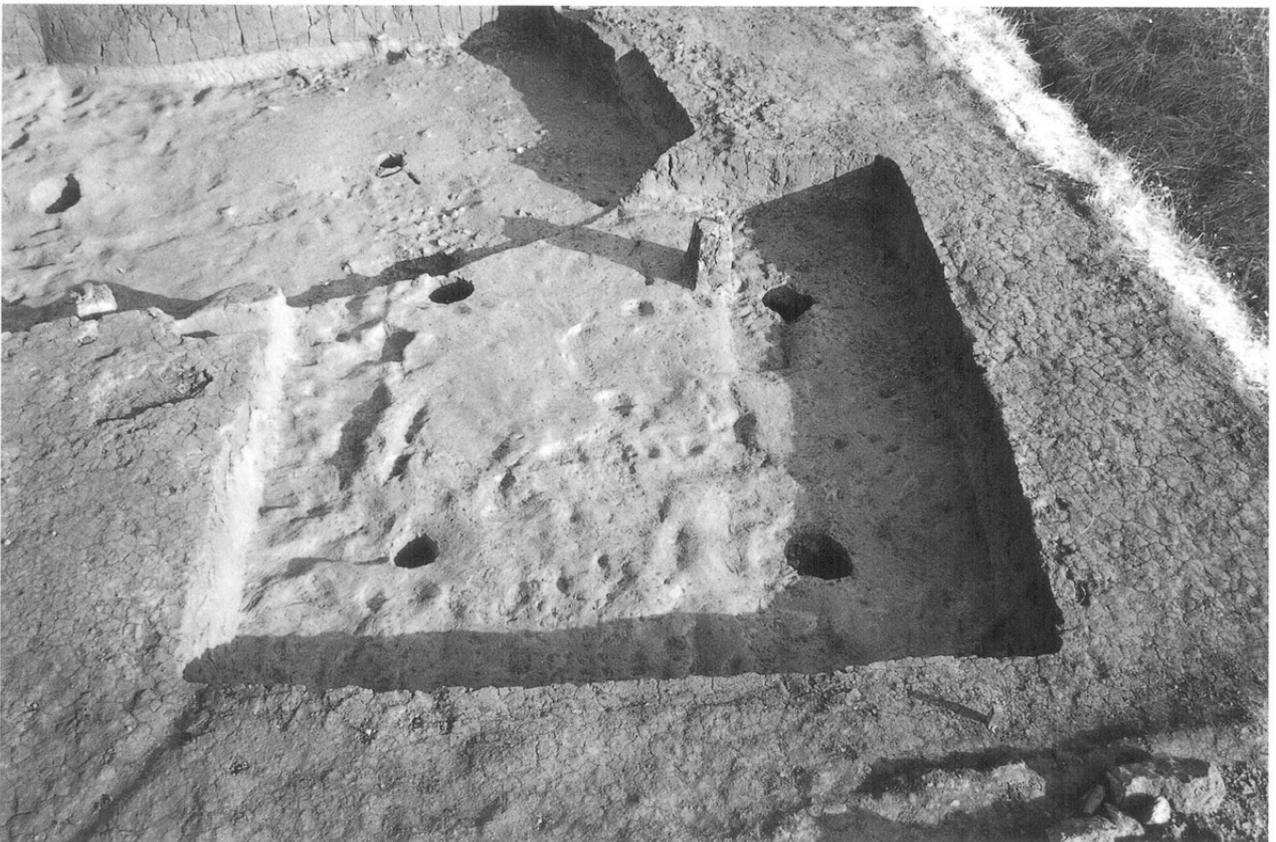
H 2 号住居址カマド遺物除去状況（南から）



H 2 号住居址カマド遺物出土状況



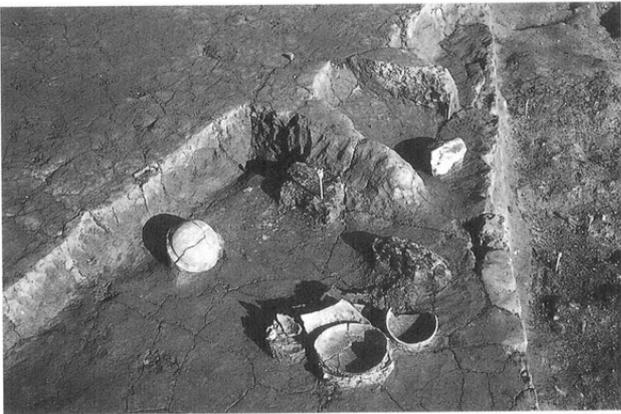
H 2 号住居址カマド掘方（南西から）



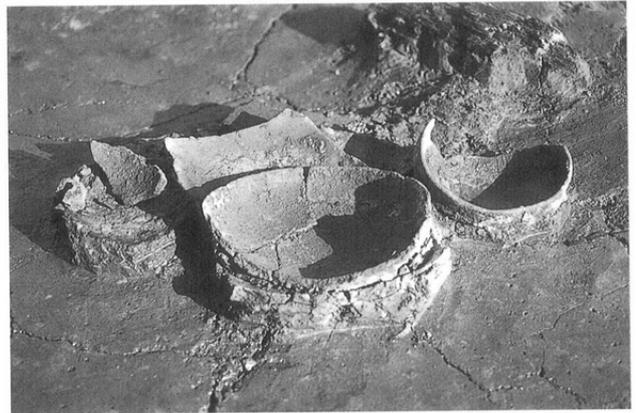
H 2 号住居址掘方（西から）



H 3 号住居址全景（東から）



H 3 号住居址カマド（南西から）



H 3 号住居址遺物出土状況



H 3 号住居址カマド掘方（南から）



H 3 号住居址掘方（南西から）



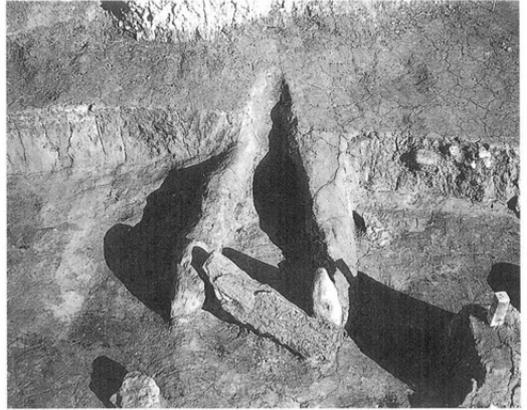
H 4 号住居址全景 (南から)



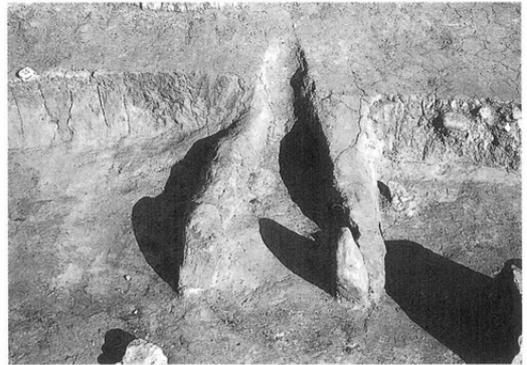
H 4 号住居址カマド (南西から)



H 4 号住居址カマド (南から)



H 4 号住居址カマド遺物除去後 (南から)



H 4 号住居址カマド焼き口天井石除去後



H 4 号住居址カマド西側遺物出土状況



H 4 号住居址カマド掘方（東から）



H 4 号住居址掘方（東から）



旧H 4 号住居址全景（西から）



旧H 4 号住居址カマド（南から）



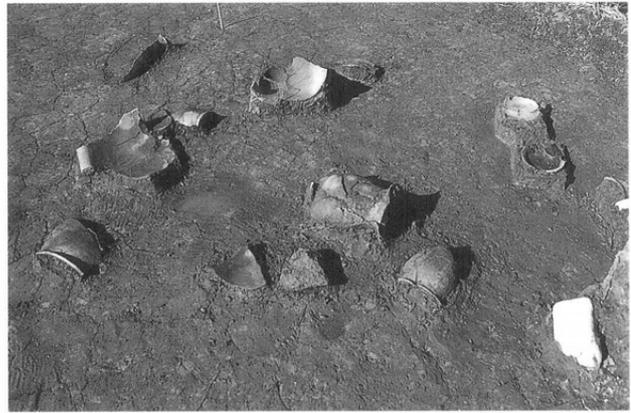
旧H 4 号住居址掘方（南から）



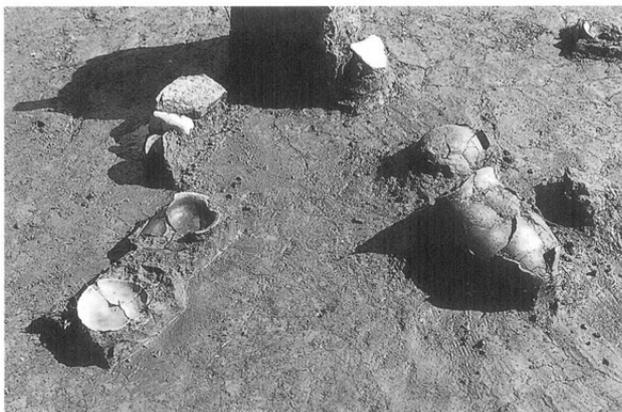
H 5 号住居址全景（南から）



H 5 号住居址遺物出土状況（1）



H 5 号住居址遺物出土状況（2）



H 5 号住居址遺物出土状況（3）



H 5 号住居址遺物出土状況（4）



H 5号住居址カマド (南西から)



H 5号住居址カマド (西から)



H 5号住居址支脚



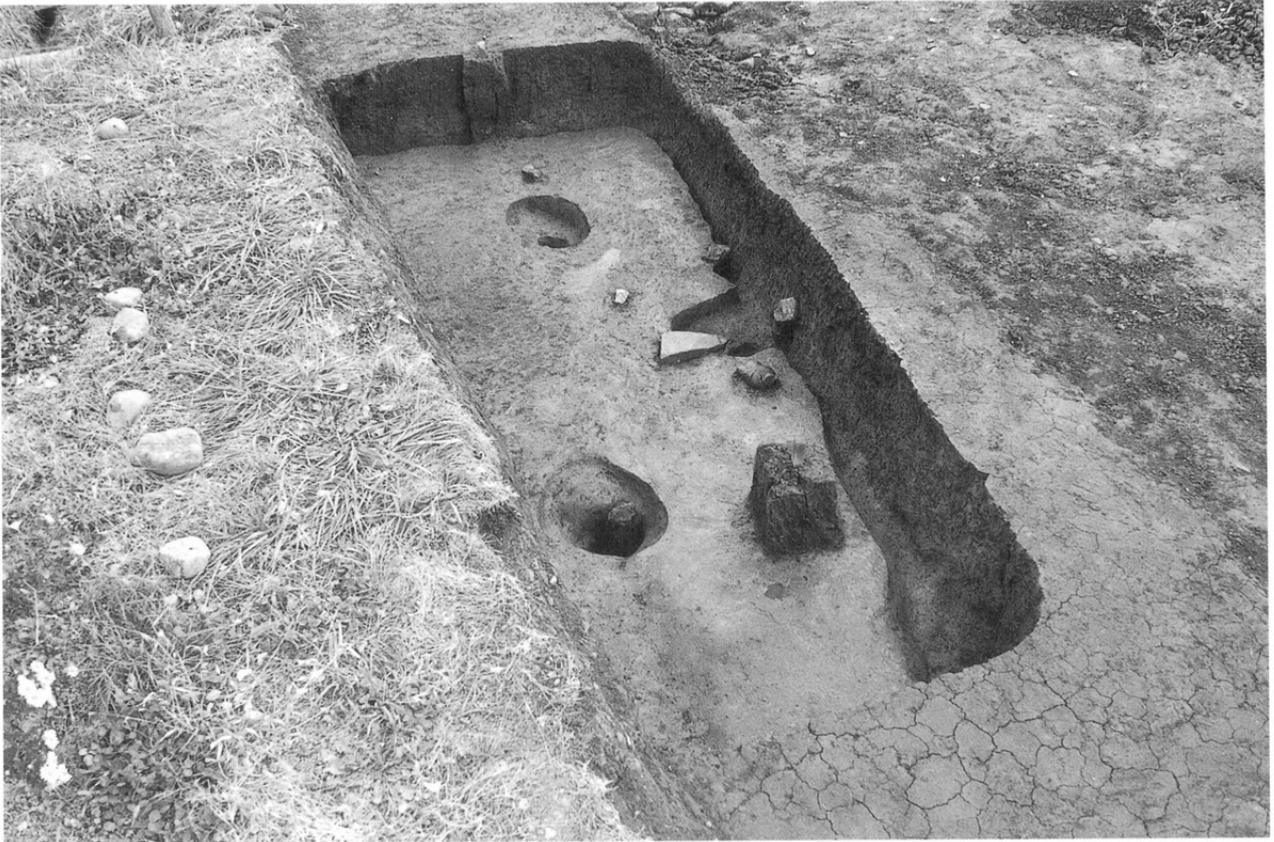
H 5号住居址カマド掘方 (西から)



H 5号住居址掘方 (南から)



H 6 号住居址全景（南から）



H 7 号住居址全景（西から）



H 7 号住居址遺物出土状況 (1)



H 7 号住居址遺物出土状況 (2)



H 7 号住居址遺物出土状況 (3)



H 7 号住居址掘方 (西から)



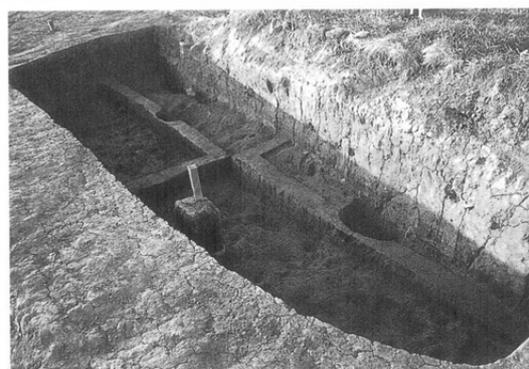
H 8 号住居址全景（西から）



H 8 号住居址遺物出土状況（1）



H 8 号住居址遺物出土状況（2）



H 8 号住居址掘方（南東から）



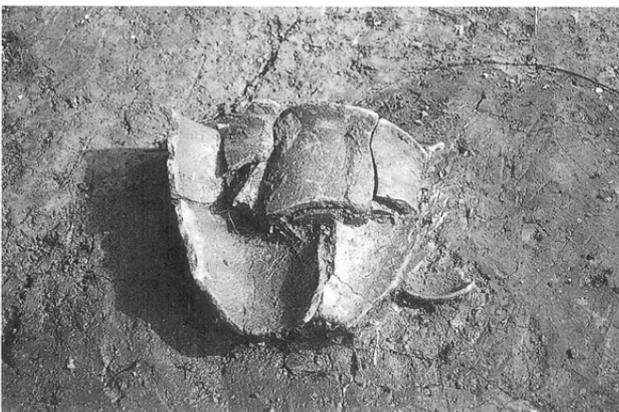
H 9 号住居址全景 (西から)



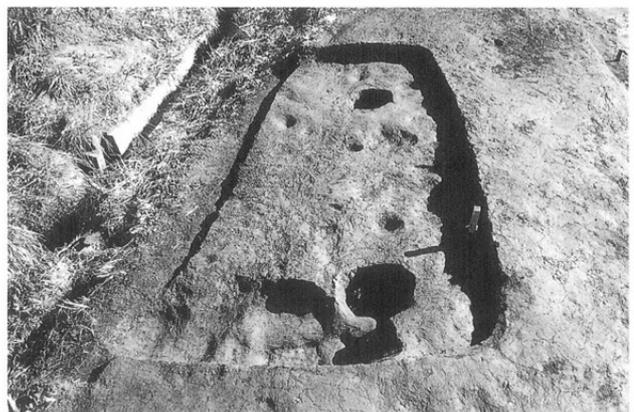
H 9 号住居址遺物出土状況 (西から)



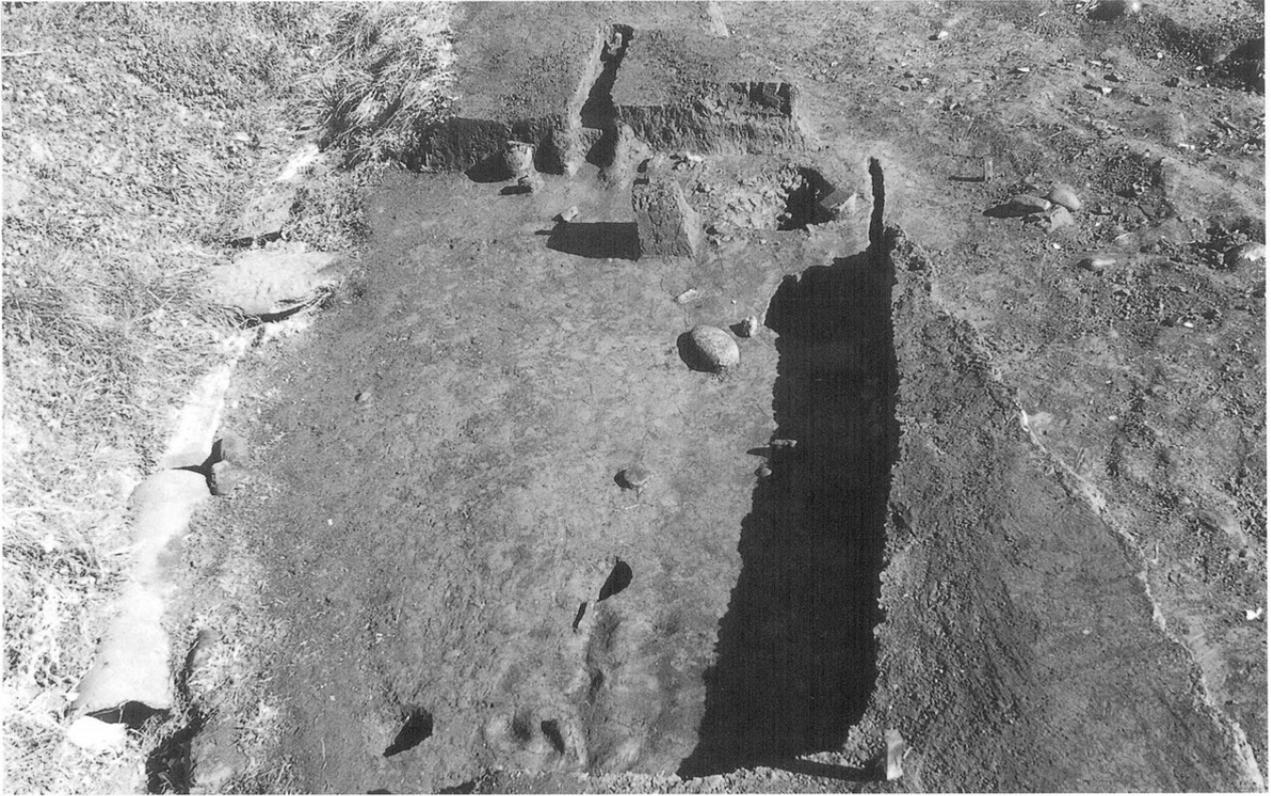
H 9 号住居址調査状況 (南西から)



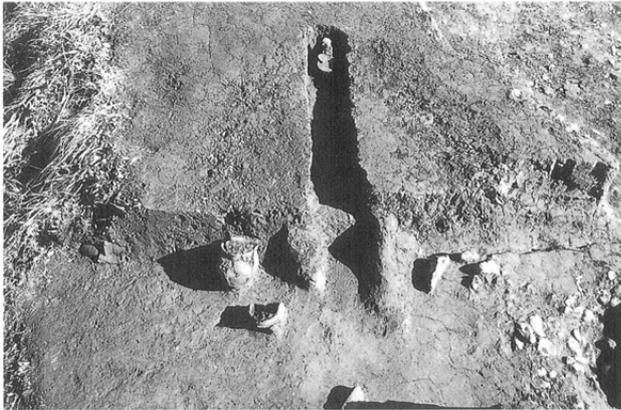
H 9 号住居址遺物出土状況



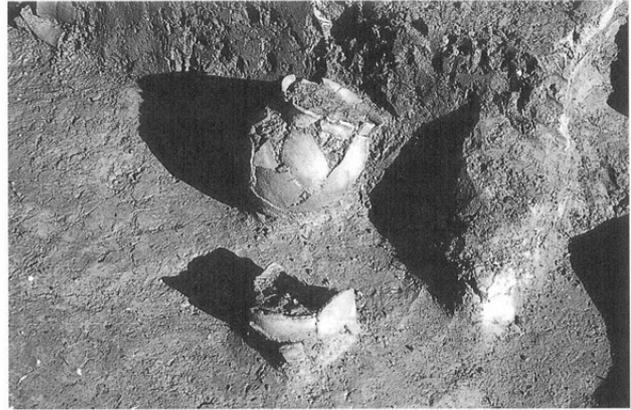
H 9 号住居址掘方 (西から)



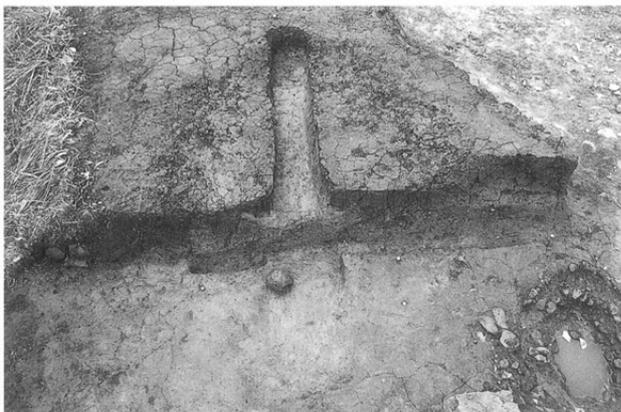
H10号住居址全景（西から）



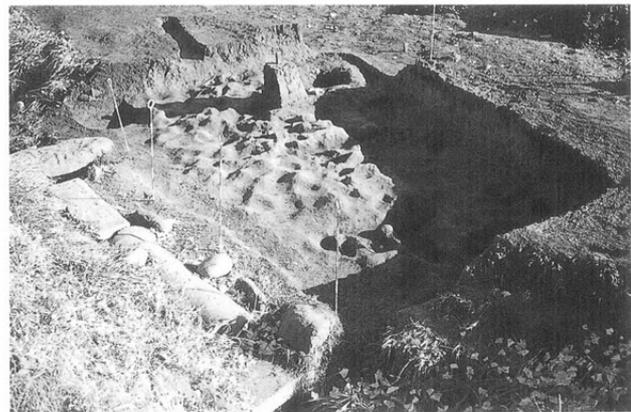
H10号住居址カマド（西から）



H10号住居址遺物出土状況



H10号住居址カマド掘方（西から）



H10号住居址掘方（北西から）



H11号住居址全景（南東から）



H11号住居址カマド（南から）